





十七日 霜降、昼過より雨模様相成、氷解る方、

曉八ツ半分分起、湯ニ參、伊太郎召列候、夜明迄三篇、六ツ過嘉兵衛・覺洲被来、夫より又三篇入、四ツ時分満足寺之様參、飯共給、御文書・縁記・法印所持掛物・宝物等一見、弘法大師自筆經文等一見、至而見事、夫より又々覺洲同伴湯ニ參候而六兵衛迄參、蒸湯ニ一篇、出湯ニ一篇入候、蒸湯至而心持宜候、六兵衛湯昨日參候湯之所より五六丁上之山中ニ而候、途中坂道難澁有之、六兵衛より少シ上之方神火已前之御宮跡・石垣礎坏残り居候、六兵衛之下之方岩間ニ沸返り稠敷所あり、湯ほけ雲を貫きし此所を地獄と云、夫より又少シ右之方泥沸出る所あり、是を泥地獄と云、誠ニ奇体之所ニ而候、八ツ時分満足寺江參、又七ツ時分より湯ニ參三篇入候而、暮満足寺江參り又焼酎共出、四ツ過比臥候事、今晚ハ寒氣少々薄し、又伊太郎を起し大鐘比湯ニ參一篇入候而、六ツ前満足寺江參候、

十八日 終日霧雨、

曉大鐘比起、湯ニ參候而、六ツ前満足寺江參り、六ツ半過打立歸候、拙者二者馬ニ而候故四ツ時分小林飯屋江歸着、所役々追々来候、九ツ時分神徳院住持代り之由ニ而見舞有之候、八ツ過より伊東次郎右衛門殿入来、加久藤表締方ニ而被来候而見舞ニ而候、昨日より貴島勇之助殿所も被来居候由、夕方被歸候、夜入伊太郎招呼四ツ前迄相嘶臥候事、

十九日 晴、風烈シ、

朝六ツ起、十郎左衛門・嘉兵衛・弥兵衛出勤、今早朝織兵衛招呼、櫃式ツ為塗方之儀相頼候処、四ツ時分より塗師来塗候、四ツ過より観音寺覺洲被来、八ツ時分被歸候、上原源助と申者家来ニ召抱具候様被申候、別而仕合二者存候得共、即答ハいたしかたく候付、三日中返答いたすべく旨申置候、当年三十八才之由候、八ツ過須木役々年寄上野太郎左衛門・与頭山元六郎左衛門・地頭横目築瀬次右衛門寒中祝義并拙者近々歸府・歳暮為祝儀来候、表ニ而改服ニ而面会、今日者寒氣も強遠路可被寒存候付、又内証ニ

而焼酎共為吞候而返し候、暮より伊太郎招呼相嘶候、

五ツ過臥候処、九ツ前平左衛門鹿兒島より来候、今

日者刀も大七本・小五本拭方いたし候、

十二月

左源太

師員

横山伴之進

赤木仲藏

横山丹碩

押川愛次郎

横山織兵衛

井上嘉兵衛

野本権斎

二十日 霜氷、晴、

朝六ツ起、諸書付共いたし、十郎左衛門・宇兵衛・

嘉兵衛・庄助出勤、四ツ半時分より貴島勇之助殿・

伊東次郎右衛門殿入来、七ツ前被帰、夫より馬二鞍

乗候、夫より風呂二入、昼面高与蔵殿茂入来候、暮

より平左衛門招呼、五ツ過迄相嘶、四ツ時分臥候事、

二十一日 霜降、晴、風アリ、

朝六ツ起、時任宇兵衛・井上嘉兵衛、九ツ時横山龍

見・横山伴之進御用ニ付罷出候ニ付左之通申付候、

右者赤木仲太左衛門江所中学問引進方精々相励候様

被仰付候ニ付、横山龍見ニも同様致引進方候様申付

候間、右之通申付候付右兩人江引合、当務以手透学

問所致出席、初生進立相励候様精々可致引進方候、

十二月

左源太

横山龍見

右者赤木仲太左衛門江所中学問引進方精々相励候様

被仰付候ニ付、相談役是迄之通ニ而同様致引進方候

様申付候間、何篇仲太左衛門江引合精々可相励候、

八ツ後伊福十郎太来馬ニ乗候、引続観音寺覚洲法印

被来候、此節召抱候家来召列被来候、右之者者無程

帰り、観音寺者夜入五ツ時分被帰候、夫より家来共

招呼、五ツ半時分隊候事、

今日者終日在宿二而候、町田民部殿・川上勘解由殿（久成）
入来候、其外来客不記候、

二十二日 快晴、霜氷、

朝六ツ起、則より明日帰り仕廻、今日者小林役々寒

二十六日 小雨、

中・歳暮御祝義罷出候、横目以上不残出候、貴島勇

今日初而出 殿、御届申上候事、

之助殿・観音寺一刻ツ、被来候、明早朝より帰府二
付取集方等いたし、今晚者夜起同前、

二十八日 雨、

二十三日 間々小雨、

暁八ツ半時小林出立、高原之様通行二而今日国府浜

之市迄参泊、雪げ二而途中寒風厳敷候、浜之市江暮

前着、拙者二而馬上三而候、荷馬三疋為牽候、

二十四日 間々小雨、

五ツ半時分国府出立二而、加治木・帖佐・重富・吉

野・たんとふ筋帰り、七ツ過二野やしき迄参候而

夕方帰宅候事、

二十五日 晴、

名越時敏日史

元治二年乙丑
正月ヨリ
七月ニ至ル

元治二年乙丑正月ヨリ七月ニ至ル

日史第四十三

元治二年乙丑正月

名越時敏 (花押)

元日 快晴、

朝六ツ起、五ツ時分上下共着し扇子を開は、
之絵なれ者愚詠一首、
(豊葦原カ)



朝日かけ出てのとけく見えにけり
とよあし原のとしのはしめに

昨日被仰出候御ケ条御答書共いたし候、客人数多有
之、埒明かす候、

二日 夕雨、

今日も在宿ニ而昨日同断之事、

三日 雨、

朝六ツ起、五ツ時出 殿、持参太刀ニ而於敷舞台御
礼申上、夫より少々礼廻りともいたし、八ツ時分帰
宅、又々御答書認之事、

四日 小雨、

朝六ツ起、御答書尚又取調、八ツ時分より清書、夜
入過相済候、暮より伊藤彦助殿・木尾彦左衛門殿父
子被来、四ツ過被帰候、

五日 小雨、

朝六ツ前起、六ツ半時分より桂右衛門殿江参候而、
（久慈）

（志戸本家本より補）
夫より佐志梅田家・町田家登殿へ参、△四ツ時出

殿、九ツ過退出、夫より上方少々礼廻いたし、八ツ

前退出、八ツ半時分より小林其外都合五ヶ所地頭所

来、盃一通りいたし候而帰り、小林之儀ハ段々御用

之儀有之候間召留置、夜入四ツ時分帰候、美代藤兵

衛殿・丸田竹翠殿亭主振、

六日 雨、

今日者九ツ時分より戸柱町田家江一刻、夫より下方

礼廻りいたし、夕帰宅之事、夜入宮里氏入来、四ツ

過被帰候、

七日 晴、

朝六ツ起、七ツ時分島津仲殿へ参候而暫咄、夫より

加藤家稽古初二而参り、大鐘過帰候、

八日 曇、

朝六ツ起、九ツ過より梅田家稽古初二而出席いたし、

尤、演武館・宅両所共帰りニ島津壬生殿江一刻参、

手助一掛貫ひ、暮帰宅ニ而候事、

九日 雨、

朝六ツ起、馬乗いたし候、貴島勇之助殿入来、町田

藤八殿同断、町田内膳殿同断、八ツ後より宮里氏入

来、暮被帰候、夜おむら様御出、四ツ御帰、無程臥

候事、

十日 雨、

朝六ツ起、宮里氏四ツ後より入来、大島書状認方相

頼候、町田藤八殿ニも八ツ後より入来ニ而同断相頼

候、八ツ後平馬帰り、明日者御差図御用之段中途ニ

而北郷数馬殿より承候段申候、夫より内膳殿・猪之

助殿其外段々客人有之、夜入四ツ半時分臥候事、

十一日 晴、

暁大鐘過起、平馬事、今日五ツ時右衛門殿より小森

新藏御取次を以御用承知ニ付、六ツ半時出候、拙者
ニも五ツ前出勤、四ツ時御用承知、平日学文武芸致
出精心掛宜段被 聞召上詰衆被仰付候、誠ニ難有次
第二而両御側江御内証御礼申上、直ニ帰宅、追々客
来有之、平馬大鐘前帰り、夫より祝初り、各四ツ半
時分被帰候、夫より段々残り之人々も有之、客来共
杯弥賑々敷事候、今日者為年礼家来関之市来留置候
而、久々三味為引候、

十二日 雨風雷鳴発シ、(草カ)園牟田江落及雷火ニ而木屋焼失、

朝六ツ起、六ツ半より岩崎折田平八殿江参候、新照
院江越園牟田相良家江参、関山、夫より桂家・二階
堂源(行光)大夫殿・川上(久美)式部殿江参り候、町田(久成)民部へも
参候、昨日おいわほん宮参り(空白)申来候得共、△平馬
御役替故不参候ニ付一刻参候、夫より出 殿、八ツ
時帰掛安田助左衛門殿へも一刻参帰宅、夕より内膳
殿・葉丸猪之介殿被来、お村さま・おふて昼より来、
夜入四ツ時分帰候、九ツ時分臥候事、

十三日 雨、

朝六ツ起、五ツ過より戸柱町田家江参り、伊藤万次
郎殿ニも昨日下り候付、夫より河俣氏へ一刻参候而
四ツ時出 殿、九ツ過退出、直ニ帰宅、夕より森喜
右衛門殿入来、戸柱町田家江参候、伊藤正兵衛殿父
子・貴鳥新左衛門殿被来居候、九ツ過帰候而、八ツ
時臥候事、

十四日 雨強、雷鳴発シ、

朝六ツ起、終日在宿、丸田氏・宮里氏・美代氏入来
候、おみつとの夜前より入来被泊候、

十五日 雨、

朝六ツ起、五ツ過枡形登殿江筑前菅屋より着之祝儀
ニ参候而、二之丸江明日出立之御届申上出 殿、
御側表江明日出立御届申上、其外用向之儀段々有之、
九ツ過御暇いたし、直ニ帰宅、宮里氏・東郷氏・美
代氏被来候、おむらさまニも御出、夕より新納太郎
左衛門殿・大島喜恵富来候而四ツ時分帰候、

十六日 曇、

朝六ツ野屋しき江参候、五ツ時分帰リ掛町田藤八殿・伊藤万次郎殿・内膳殿へ、河俣氏へ一刻ツ、参候而、五ツ半時分帰宅、四ツ後よりお藤来、薬丸猪之介殿・美代氏・丸田氏・平田平六殿一刻ツ、被来候、夜入伊藤万次郎殿入来、五ツ過被帰候、四ツ時分臥候事、

○(頭注)「御製薬方掛一条」
諸郷々郷士年寄其外所役之内等被仰付置候御薬園掛・(合併カ)

御製薬方掛之儀、此節合并御勝手方御支配被仰付候付而者、代役被申付候節者いまた区々ニ而御用向混雜いたし候二付、以来双方共混一之御用取扱可被仰付候間、以後代合等之節者是迄御製薬方掛被仰付候振合通、地頭方より御勝手方御用人江被申出候様御心得給度此段致順達候、以上、

但、留ヨリ御返納可成給候、

丑正月九日

御製薬方
能勢龍右衛門
相良助太夫

高岡 穆佐 倉岡 綾 野尻 高原 小林

高崎 須木 飯野 加久藤 馬関田 諸県郡
吉田
吉松 居地頭衆

十七日 快晴、

朝六ツ起、四ツ後東郷藤十郎殿・木村善兵衛殿入来、別れニ鎗術稽古いたし度被来、稽古いたすべくと申候処江内膳殿にも入来、伊勢平右衛門殿入来ニ而致稽古候、跡ニ而酒共給、各八ツ時分被帰、(頭注)「徳之島代官」
近藤七郎
左衛門殿代官ニ而近々徳之島江渡海、暇乞ニ被来同酒吞共いたし、新納源左衛門殿・丸田幸八殿・美代藤兵衛殿入来、夜入東郷藤十郎殿・町田藤八殿・美代藤兵衛殿・森喜次郎殿入来、各四ツ過被帰、九ツ時分臥候事、

十八日 晴、

暁七ツ時起、入付共いたし、五ツ半時分前内記様一刻罷出、直ニ船之様参候而四ツ時出帆、此節者家内中皆共参、平馬独り之留守番ニ而候、荒田おみつと

の二も列參候、国府浜之市江夕着、〔志戸本家本より補〕浜之市江一宿、

四ツ過隊候事、△

一昨日晝時計相求候而持越、別而重宝相成候、塩田政次郎持来求候、

十九日 曇、

夜八ツ半起、六ツ時浜之市打立、曾於郡大久保二而中飯給、あらしへ暫休、暮前高原稜川江一宿いたし〔稜川カ〕候、

廿日 快晴、

朝六ツ起、四ツ時稜川出立、高原飯屋江一刻立寄、八ツ前小林江着、家内・子共二者七ツ前着、〔頭注二旗預用達兼〕旗預用達兼丸田竹翠殿二者家内同刻七ツ着、旅亭江被帰候、暮より酒共給候而、四ツ時隊候事、

廿一日 霜降水、

朝六ツ起、吉次郎江書物教、論語習居候分爲読候、丸田竹翠殿被来候、雛守社守野尻郷士年寄満留民左

衛門・与頭海老原藤九郎・地頭横目寺田庄次郎、拙

者着之爲祝儀来候、当所伊福十郎左衛門・鈴木龍之助同断来候、各面会いたし候、年寄高野瀬庄助・与頭富満武右衛門・地頭横目横山織兵衛出勤、大鐘比暇いたし候、暫庄助・武右衛門留置御用之儀相達置候処、夜入郷士年寄大脇七左衛門・同高野瀬庄助、与頭押川愛次郎・富満武右衛門来返答承候、序二並松植付并窮士取調・旗預宿所修甫・所役々日勤所作り之儀相達置候、四ツ時分隊候事、

廿二日 細雨、

朝六ツ起、吉次郎江素読いたさせ、屋中取集方いたし、丸田氏入来、庄助・武右衛門・織兵衛出勤、各七ツ半時分暇いたし候、重年寄郡方吟味付兼候段今日庄助江達置、昨日九ツ時分より心影流剣・示現流剣術致見分候、留後候二付爰ニ留置、吉次郎・徳熊二も列參候、夜入四ツ時分隊候事、

廿三日 晴、

朝五ツ起、五ツ過迄吉次郎江素読いたさせ、夫より

飯・月代共いたし吉次郎習候（反放カ）反具とち方いたし、四

ツ後竹翠殿被来候、庄助・武右衛門・織兵衛出勤、

八ツ後拙者此節着之為祝儀高原郷士年寄山口新十

郎・与頭黒木助左衛門・横目竹之下庄五・地頭横目

黒木莊一郎来候、右同人共此節

（患義）太守様御刀御拝領之御祝儀も申上候、七ツ時分伊福

十郎太馬乗二来候、拙者二も乗候、赤木七郎左衛門

二も来、馬乘方濟候而十郎太・七郎左衛門招呼酒共

出候、今日詰合之高野瀬庄助・富満武右衛門・井上

軍兵衛二も招呼候、暮各帰候、四ツ過臥、九ツ時起

書見いたし、八ツ過臥候事、

廿四日 霜降、風烈し、

朝六ツ起、吉次郎江五ツ過素読いたさせ、岩次郎同

断、四ツ後吉次郎・徳熊召列熊野権現より麓馬場一

通り廻り候而九ツ時分帰り、竹翠殿入来、高野瀬庄

助・富満武右衛門・横山織兵衛出勤、昼締方横目檢

見崎吉左衛門との被来候、御用内談之儀有之被来具

候様伝言いたし置候而被来、八ツ後御用之儀二付、

大脇七左衛門・伊福十郎左衛門・高野瀬庄助・赤木

仲蔵来候、同刻過より拙者乘馬不快候有之、近々世

話いたし候馬医杯来致療治候、夕方少々快候、

廿五日 霜降、晴、

朝六ツ起、吉次郎江五ツ過迄素読いたさせ、岩次郎

へも書物教候、丸田竹翠殿被来、庄助・武右衛門・

織兵衛出勤、伊福十郎太一刻来候、伊福徳之進遊二

来候、当年十三才二而候、昨日も来候、夕須木より

郷士年寄上野太郎左衛門・与頭緒方覺太・横目肥田

木弥七郎・地頭横目蘭牟田五右衛門、此節御刀御拝

領之御祝儀且拙者着并平馬当番頭被仰付候祝儀も承

候、夫より暫緩々相嘶候、丸田竹翠殿二も被来候、

明日大山二被差越候由嘶二而候、夜四ツ時分臥候事、

廿六日 快晴、

朝六ツ起、時任宇兵衛・富満武右衛門・横山織兵衛

出勤、九ツ時より八王寺権現江參詣、白銀壱両進納

吉次郎・徳熊ニも列參候、武右衛門・織兵衛付來候、

八ツ前歸宅、今朝六ツ時より五ツ半時分迄吉次郎江

(志戸本家本より補)
素読いたさせ、岩次郎ニも教候、又吉次郎へ△書物

為読候、夜入五ツ半時分隊候事、

廿七日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過迄吉次郎江素読いたさせ、岩次郎

江も教候、宇兵衛・武兵衛・織兵衛出勤、竹翠殿被

來候、昼時分高原法蓮寺被來、鬼塚原御種人參方詰

見聞役加治木十郎殿ニも被來候、夜五ツ半時分隊候

事、

廿八日 晴、夕より曇、

朝六ツ起、吉次郎江五ツ過迄書物為読候、岩次郎江

も教候、四ツ後円岳寺学文所江吉次郎・徳熊召列參

候、九ツ前歸宿、宇兵衛・武右衛門・織兵衛出勤、

暮過郷士年寄高野瀬庄助・(押川カ)「ア」愛次郎、(与頭カ)「イ」横山六

郎右衛門御用之儀有之來候、無程歸り四ツ前隊候事、

廿九日 朝五ツ前より雨、

曉六ツ前起、六ツ時より須木之様打立參候、小林よ

り無役郷士兩人須木境迄參候、須木より同断此所迄

來居候、地頭横目(空白)も來居候、須木飯屋江五

ツ半時着いたし候、然れとも雨降り出し候故武術見

分不出来、讀書見分共いたし候、書物読候者平野源

五左衛門・園田莊左衛門、右兩人実語経類之者三四

冊ツ、読候、斎藤七郎右衛門席書いたし、其外ハ河

野半次郎・児玉新次郎・小藤田甚太郎・須崎勇二

郎・里岡貞二郎・岩下甚藤・肱岡熊市・曾木弥之

助・瀬之口梅太郎・肥田木仲太郎・深瀬助太郎・上

野彦右衛門・上野弥助・奈崎居住岩崎林次郎・苺野

宗二郎清書差出候、奈崎江者是迄字を書候者不罷居

候処、拙者支配相成候而より讀書致沙汰候得者、夫

より致手習候而今日迄二百日計之字書ニ而候由、立

派ニ出來候、習候へハ書候者も有之処ニ而為有之と

所之者晰いたし候、師匠なしにて書候由、出來れハ

出來る者ニ而候、此一ヶ村ニ郷士も数多致居住候得

共、公私之用向至三于今二口達ニ而相弁、至而不自由

いたし居候由、追々者書通も出来候半と申事候、夜入五ツ時分臥候事、

二月十三日
蒲生一陣

右郷々同十二日限可相揃候、
同廿日
一高岡一陣

右同断同十九日限可相揃候、
同廿四日
一小林一陣

右同断同廿三日限可相揃候、
同廿八日
一大口一陣

右同断同廿七日限可相揃候、

右者此節一陣調練之儀、農隙を見合日賦可被申出旨被仰渡置候得共、御吟味之訳有之、此節者右之通日賦被相究、我々共二も来月十日鹿兒島郡吉田差入二而被差越賦二候付、調練場所等之儀者惣物主御見計を以、一陣中之物主江巨細御達被成度此段早々申上越候、以上、

但、郷々并掛物主江者別段調練日限申渡置候、此段者為御心得候、

丑正月廿六日申刻 御軍役奉行

蒲生居地頭

高岡居地頭

小林居地頭

大口居地頭

右早々次渡、我々共差入之上留より御返納可被成候、

宿次

文箱志通

但、蒲生居地頭江御軍役奉行より、

右就御急用差越候条、不嫌夜白早々可持届候也、

丑正月廿六日

御軍役方
御家老座□

御兵具所

重富
諸所
郷士年寄

役人

晦日 漸々晴、

朝六ツ起、五ツ半時須木打立帰候、九ツ半時小林仮

屋江帰着候得八堀之内半五右衛門・赤木仲藏・井上嘉兵衛来居候、夕丸田竹翠殿ニも被来候、今日者飯野へ被参候而只今被帰候由、昼野尻年寄満留兵左衛門・与頭海老原藤九郎御刀御拝領之為御祝儀来候、暫留候而酒為吞帰候、夜入四ツ時分隊候事、伊福十郎左衛門ニも野尻之者共亭主振いたさせ候、

日史第四十四

元治二年乙丑二月中

名越時敏（花押）

朔日 晴、夜入雨、

朝六ツ起、御用書付ニ取掛候、四ツ時分丸田竹翠殿入来、堀之内半五右衛門・伊福十郎左衛門・時任宇兵衛・赤木仲藏・横山伴之進・高野瀬庄助・富満武右衛門来候ニ付、此節調練之儀ニ付九ツ時分迄御用談いたし候、夫より赤木仲太左衛門・井上嘉兵衛・赤木七郎右衛門・横山莊右衛門来候、七ツ時分より伊福十郎太并伊福十郎左衛門妻娘兩人・赤木七郎左衛門妻暫相嘶酒共出候、夫より御用書付夜九ツ過迄

いたし隊候事、

二日 間々小雨、

朝六ツ起、今日者早朝より御用書付いたし、七ツ前安田助左衛門殿・新納太郎左衛門殿・島津矢柄殿・大野多宮殿・志岐小左衛門殿江御用書付差出候、大番頭方・与方へも同断、夜入五ツ半時分隊候事、

志岐小左衛門殿より書状之写

一筆啓上仕候、残寒去兼申候得共、弥以御勇健御勤務可被為成恐悦御儀奉存候、然者私事、昨廿八日別紙之通物主被仰付難有仕合奉存候、先者右御吹聴且時季御窺申上度如斯御座候、恐惶謹言、

丑正月廿九日

志岐小左衛門

名越左源太様

追啓、本文被仰付候付而者旁奉伺度事而已御座候間、不遠調練為見分方被差越候付、其折拝顔可奉伺候、

写

一加久藤

一高原

合一組

物主

志岐小左衛門

右之通被仰付、

御出馬之節者可被召列候、依時機者何方ニ而も御先
手ニ而急速可被差出候条、御備向等之儀何篇惣物主

名越左源太江可得差図候、

右御格之通可申渡候、

二月

(川上久美)
式部

三日 晴、

朝六ツ起、吉次郎江素読、岩次郎同断、四ツ過丸田
竹翠殿入来、半五左衛門・仲蔵・織兵衛・荘右衛門
出勤、時任宇兵衛江御用之儀有之候間申遣来候、お
ミつとの先日より声枯居候間、横山龍見申遣早々来
見貰ひ候、夜入五ツ過臥候事、

四日 曇、

朝六ツ起、半五左衛門・仲蔵・荘右衛門出勤、竹翠
殿入来、四ツ後観音寺和尚入来、家来源助来牛房時・
ねき杯植付具候、大久保之家来も来候、伊福十郎太・
赤木七郎左衛門来馬乗いたし候、拙者ニも三鞍乗候、
七ツ過観音寺不動明王江参詣、吉次郎・徳熊召列参
候而無程帰候、夜入五ツ過臥候事、

五日 朝細雨、後晴、

朝六ツ起、六ツ半過面高氏へ之御用封相認差出候、
御軍役方より郷々所役々方江小林一陣調練来廿四日
之筈候処、廿六日ニ相成候段只今申来候段申出候、
且伊地知壯之丞より御用來、(撰注)真幸酒脇元不相成是真幸表酒薬用たり共
脇壳一切不相成段、真幸表郷士年寄江可相達旨申来
候、右調練ニ付今日者郷々談合役・旗預・普請方杯
招呼、調練場所江差越木屋打方・調練之次第等取究
賦候処、朝小雨降候歟、飯野・須木迄来外郷々不来
見分者延引相成、飯野・須木之者共空敷滞在相成候
付、夕方より招呼相嘶候、各五ツ半時分帰、四ツ過
臥候事、

六日 雨、雷鳴、

朝六ツ起、丸田竹翠殿入来、半五左衛門・宇兵衛・仲藏・莊右衛門・大脇七左衛門出勤、今日も大雨降故調練場見分不出来、飯野・須木之者共二も滞在いたし居候様相達置候、今日者些無気分故七ツ時分より臥夕方起、夜四ツ時分臥候事、

七日 雨、雷鳴、

朝六ツ起、吉次郎江素読いたさせ、四ツ過より小林・飯野・須木・野尻之役々召列調練場所為見分差越候、彼是いたし候処夕方帰宅候事、竹翠殿朝夕入来候、

八日 曇、

朝六ツ起、四ツ過より学校所へ参、九ツ過帰掛当所締方旅宿検見崎氏江見廻二而帰宿、八ツ前二而候、年寄大脇七左衛門被参并竹翠殿入来、仲藏・莊右衛門出勤、暮より銀助招呼候、五ツ半時分臥候事、

九日 八ツより雨、須木八朝より降候由、

曉七ツ前より起、鹿兎鳥書状并栄之尾湯治場葉丸猪兵衛殿へ書状認候、六ツ時より五ツ過迄吉次郎江書物読いたさせ、徳熊二も大学読候、又朝飯後四ツ過迄読ませ候、八ツ過竹翠殿・所役々七左衛門・仲藏・莊右衛門出勤、四ツ過永吉家来堤之与頭宮之原千兵衛・同小川官弥来候、四ツ後郷士・町人等招呼左之通褒美遣候、

一 芭蕉布 一端

当年三拾六才
伊福十郎左衛門

右者地頭飯屋内江劍術稽古所致造立有之候処相損、此節自分失脚を以調替候二付、心入宜段褒置右之通遣候、

右家者六敷五間半二而候、

一金子百疋

十日町名頭
本名伝兵衛
上田周助
年六十九

右者小林之儀他領境目ニ而足輕代相勤事候処、一統
体術心掛薄御用之者捕方等差支候付、師範人頼入、

稽古所等自分取仕立ニ而町人年若之者共為致修練、

指南人諸失脚等も相働本ノマ、(價カ)其上諸上納不相調者共江者

及度々錢差出呉、又者無利足貸付候儀も有之、御奉

公人江も懇切致会釈、殊更亡父事も奇特之儀有之、

御褒美為被仰付者候処、引続右次第旁別而心入宜段

相聞得候ニ付右之通褒美遣候、

一金子百疋

十日町名頭

町元彦兵衛
年五十才

一右同断

当分旅行

五日町名頭
森山勇助
年四十五

旅行より帰候付、丑三月五日右同様相達褒美遣候事、

右者此節所郷士之者共江学問引勧、何れ学校所無之

候而不相叶折柄ニ候処、右兩人之者共家屋敷一ヶ所

相求、且外廻り石垣迄も調替、家も致修甫差出、格

別之奉公いたし心入宜候付為褒美右之通遣候、

一金子百疋

五日町名頭

池井彦太郎
年四十九

一味噌樽式提

一葉昆布拾斤

一呉座式束

一苧繩式房

一百田紙壹束

一半切紙五卷

一白木硯箱壹ツ

但、硯石并墨筆人付、

一刻煙草八拾卷

一飯貝式拾

一杓子拾

右者急変も致到来若於野陣者不如意之品も難計、右

ヶ条之品々兼而用意仕置候付、相中江差出度趣前以

内意申出置候処、亥七月英夷軍艦御城下前之浜江渡

来候付、俄ニ御手当人数小林繰出候節、自分失脚を

以陣場迄右品物差廻、尤、其身も付添差越居、相当之御用相勤度旨申出趣有之、加治木迄差越候処、異船退帆ニ付同所より戦兵俱々引返相成、右品物其儘差出、且又前文之節及人数寄方候砌、自己之考を以惣勢相中江米飯等差出候段相聞得、心入宜候ニ付褒美として右之通遣候、

右外ニ兩人褒置者有之候得共旅行ニ而不相調、

右相濟、八ツ半時分より打立、須木之様參候、明日調練見分之賦候、然る処打立之時分より雨降出し、しばしも不止、至而世話敷(志戸本家本より補)川も少々出、六ツ半時須木江着いたし△候、則困炉裏之脇ニ寄衣裳あぶりいたし、四ツ時分臥候事、

十日 曇、夜雨、

朝六ツ起、五ツ過須木人数調練見分、四ツ後武術見分、夜五ツ過候(臥脱カ)処、七ツ時分平馬より左之通、

御用之儀候間 二丸御用部屋へ可被罷出候、以上、

二月九日

蓑田伝兵衛

名越平馬殿

今四ツ後造士館江出席仕候処、○此通御用ふれ来、直ニ 二之丸御用部屋へ罷出候処、蓑田氏より極々内談之趣有之、其訳此段(町田久成)民部殿初皆々島方渡海被仰付、あの通私も只今思切次第可被仰付段伝兵衛殿より致承知候、誠ニ〳〵難有事ニ者候得共、父母上様へ一口も不申して民部殿通差越候而者不孝之至と奉存候ニ付、父上様方思切次第私者早々可差越(含御座)候間、何分御返答早々可被下候、以上、

二月九日

名越平馬

父上様

右之通申来候ニ付、蓑田氏へ内意書状相添、平馬尤ニ被考候ハ、右書状蓑田氏江持参ニ而右通親より申来尤ニ存申候間、此節迄ハ外ニ御工夫相付候得ハ別而難有段可申出候、夫共御請申上度存慮ニ候ハ、伊藤彦介殿杯相談之上之事ニいたさるへく旨申遣候、

糞田氏江之書状も全御断と者不申越、末年若こも有

之、文武出精仕候様精々相勤申候処、随分相心得日

比精々相励候向見受申候間、只今夫形召置候而者修

行之比合も打過、是而已心痛仕次第二而、何分御工

夫被下度儀を細々相頼候、式拾壹式才相成居候ハ、

則御受可為仕段申越候、乍併平馬壹人二限り其任二

相当り居候儀ニ御座候ハ、別而難有事二而否可申

上候儀ニ而者無御座候付、何様共奉畏可申候段者申

越候、右返答十一日暁天差出候、

十一日 快晴、

夜前書状来候より臥候儀不相成夜起いたし候、今日

者犬山いたさす哉之上役々より承候付、五ツ過より

山江登り焼ケ山と申候狩倉狩り候処、拙者二者池之

本頭江まぶし立いたし、鹿壹疋川向より走下り川を

渡り候ニ付、渡り上りを射候半と見合居候処、川下

之方江游き行候ニ付、無是非三拾間計之水中江首迄

出候を打留候、外二四丸捕れ今晚ハ拙者初矢祝ひい

たし、須木役々来候而賑々敷事候、四ツ半時分臥候

事、

一 今日狩二

一 疋 左源太

一 疋 井上軍兵衛

一 疋 川添次郎助

一 疋 (成カ) 鳴見弥右衛門
梁瀬次右衛門

一 疋 上野弥助其外人々

一 今夜九ツ時分名越戸十郎殿より書状来左之通、

名越平馬

右甌島其外大島諸所江 御手許御用之儀有之、渡海

被仰付候条可申渡候、

二月 数馬

平馬様御事、明十二日別紙之通御書付ニ而被遊御出

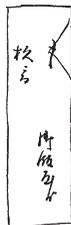
立筈御座候処、私今日七ツ半時分御飯屋へ^{本マ}烈仕候

品々御志らせ奉申上候、以上、^(列カ)

二月十一日 名越戸十郎

名越左源太様

上封
裏



右之通申来、能不通甚込り候得共委細者不記候、

十二日 晴、

未明打立、坂外者乗切ニ而小林之様帰り候処、おたね二者夜前早加籠ニ而被帰候由、戸十郎来居候、夕より小林役々招呼拙者矢開き且ハ平馬立祝ひいたし候、久々ニ賑々敷候、

一拙者金銀之打鮫則光之刀出立前平馬尋候段承候ニ付、拙宅第一之讓物ニ而大秘藏ニ候得共、外国へ迄被差越候程之儀ニ而立派ニいたし度者尤ニ存、身の守りニ茂相成候半敷と所郷士態々相頼極々急キニ而遣候事、

十三日 晴、

晚七ツ半より飯焚かせ、六ツ時より飯野江参り調練・武術見分いたし、七ツ時分帰宅候得者高野瀬庄助妻・大脇七左衛門妻娘召列来居候、おみつとの亭主

振ニ而候、無程帰候、

十四日 晴、

昼时分葉丸猪兵衛殿夫婦并養母およしとの・嫡子猪一郎殿被来候、泊ニ而候、

十五日 曇、

猪兵衛殿其外滞在之事、

十六日 雨、

猪兵衛殿其外滞在之事、

十七日 晴、

拙者朝六ツ時分より高原調練見分いたし、武術同断、夕帰宅之事、

十八日 雪嶽々ニ積る、

今日猪兵衛殿其外帰り、今夕抜米取締横目伊地知休藏殿・締方検見崎吉左衛門殿・上山孫七殿被来、竹

翠殿亭主振二而四ツ時分被帰候、

十九日 雪、晴、

晝六ツ前起、五ツ時分小林一隊調練見分いたし候、

廿日 大雪、氷、

晝七ツ半より飯共為焚、六ツ時より野尻江參一隊調

練見分・武術見分いたし、夕帰宅候得者竹翠殿入来、

夜入四ツ時分被帰候事、

廿一日 昼小雨、

朝六ツ起、昼面高与蔵殿入来、昨日差入之由二而昨

日も被来候由候得共、野尻調練留守二而為有之由承

候、竹翠殿二も入来、夜入又面高氏江用事之儀有之、

申遣候処被来、四ツ前被帰候、夫より伊太郎呼出酒

為吞候、四ツ過臥候事、

一飯屋剣術稽古所普請有之、殊之外埒も明候二付、け

んずいとして大工共江金子百疋遣候、

廿二日 快晴、

朝六ツ起、四ツ後伊地知休蔵殿入来、八ツ過当所掛

物主新納太郎左衛門殿飯野の方より差入之段承候付

馬より參候、吉次郎二も赤木七郎左衛門馬貫入候而

為乗參候得ハ、中途二而行逢、七ツ過帰宅、無程新

納氏入来候而夜四ツ時分被帰候、無程臥候事、

廿三日 快晴、

朝六ツ起、四ツ後新納氏入来、今日者高原の方より

須木物主島津矢柄殿被差入候段承候二付、七ツ過よ

り參候、新納太郎左衛門殿二も被參、堤村二而相待

居候処、無程着有之候、夕帰宅、四ツ時分臥候事、

一高原・加久藤両郷一組物主志岐小左衛門殿二も昨日

加久藤江着調練見分、今日高原江被差越中途二而逢

候事、

廿四日 晴、

今朝島津矢柄殿入来、四ツ過矢柄殿・新納太郎左衛

門殿旅宿へ一刻ツ、見廻候、無程太郎左衛門殿被来、

八ツ時分御軍賦役田中治右衛門殿・御軍役方御家老座書役野村仲左衛門殿入来、直ニ稽古所江同伴ニ而武術見分有之、段々嘶申承度儀も有之候間、緩々被来呉候様申入候処夕方より入来、物主島津矢柄殿・新納太郎左衛門殿ニも被来、尤、談合役面高与蔵殿・御旗預丸田竹翠殿被来候、各四ツ時分被帰、無程臥候事、昼大野多宮殿見廻候、

廿五日 晴、

暁七ツ時起、六ツ半時分調練場之様參候、明日調練ニ付一陣中打寄度談合ニ而稽古有之候、七ツ過帰候、暮より新納太郎左衛門殿入来、四ツ過被帰候、

廿六日 快晴、

暁七ツ時起、七ツ半過より調練場之様參候、四ツ時分調練有之、随分調練者能出来候得共、新納太郎左衛門組温水怨兵衛大砲ニ而致怪我、是而己心掛り之事候、乍併命ニ相掛り候程之事ニ者無之先ハ仕合ニ而候、為養生料乍微少金子壹両遣候事、九ツ半時分

帰宅、新納氏ニも直ニ被来、七ツ時分被帰候、面高氏・丸田氏同断、

廿七日 昼時分より雨、

暁七ツ半起、六ツ時より打立、あらせ通りニ而栄之尾 御湯治場江為伺

御機嫌參上、馬ニ而參候処硫黄谷迄七ツ前着、馬者硫黄谷江召置候而直ニ栄之尾江罷出、御側役島津求馬御役宅江參候而彼是相伺候処、進上物持參之玉子百進上被仰付、適々從遠方為来事候間

御目見可被 仰付段致承知候、只今 御針被為召候間相控居候様致承知控居候処、夕方相成明朝急キさへいたさず候へハ明朝可罷出段又々承知ニ而硫黄谷之様帰候、川上十郎左衛門殿・入江稲尾殿入来、馬乘来候由、はミハ用意いたし候ニ不及、糖菓共ニ有之、遣すへく段承厚一札申述候、今夜湯守り所江一宿候事、今日者あらせニ而中飯給候迄外ニ者不休候、

廿八日 雨、

朝六ツ起、昨夕硫黄谷湯場ニ而足爪少々起し候ニ付、

爰元湯者切疵ニも相応いたし候哉之旨湯守江承候処、

上之方江塩湯有之、切疵ニ余程能相応いたし候由承、

一篇入候処、直ニ能キ塩梅ニ而痛ミも和キ候、五ツ

半柴之尾江罷出、御座之間ニ而

御目見被 仰付難有事候、相済硫黄谷之様参候而又

右之塩湯へ足迄漬候而、四ツ半時分打立帰候、今日

者瀬田尾越いたし神徳院江一刻立寄候得者、時計其

時八ツ半ニ而候、飯給直ニ打立、七ツ半帰宿、あら

そ通りより式里計之近道ニ而候、あらそ通り者九里

半余、瀬田尾越ハ七里半計ニ而候、道も格別不悪候、

夜五ツ時分臥候事、

廿九日 朝雨後止、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、岩次郎江も素

問教候、半五左衛門・武兵衛・荘右衛門出勤、夕又

吉次郎・徳熊江書物為読候、余り淋しく候ニ付観音

寺江申遣、暮より被来、四ツ時分被帰、無程臥候事、

日史第四拾五

元治二年乙丑三月中

名越時敏(花押)

朔日 曇、嶽々雪、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、半五左衛門・

武兵衛・荘右衛門出勤、夕方又吉次郎・徳熊へ書物

為読候、今朝ハ役々段々見廻人有之、悉く名前不記、

赤木七郎左衛門・同仲太左衛門・伊福十郎太ニも来

候、十郎太者何度来候、

二日 大霜、晴、嶽々雪不消、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江素読、半五左衛門・武兵

衛・荘右衛門出勤、夕又吉次郎・徳熊江書物為読、

夜入五ツ時分臥候事、昼馬三鞍乗、自馬并赤木・伊

福、

三日 大霜、晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊書物為読、出勤庄助・武右

衛門・荘右衛門、節句ニ付役々見廻、名前記ニ不暇、

無役祝儀承候人数川野喜次郎・富永源右衛門・有馬

幸左衛門・片之坂助左衛門・森岡猪兵衛・堀善太左衛門・竹之下勇吉・鳥集万之助・川原源次郎・永山

次兵衛・向井宗市・大迫藤五郎・野辺市助・上野喜

七郎・柗崎八郎右衛門・坂元清左衛門・中山藤右衛

門・永山平八郎・押領司喜之助・坂元七郎右衛門・

温水次兵衛・野辺嘉之助・青山直次郎・里岡庄之

助・壹岐彦左衛門・園田四郎助・西田与次郎・斎藤

喜兵衛・本田仲兵衛・植村四郎左衛門・溝口伝兵

衛・井上市郎・川添榮之助・中山伝次郎・斎藤多

宮・森岡万之助・山口仁藤太・大川平仲太・大牟田

藤之助・大坪源之丞・深瀬彦太郎・中山仁之助・山

本弥五左衛門・山下庄次郎・中山善五郎・園田常右

衛門・高岩福次郎・山口平太郎・押川小太郎・梯孫

左衛門・植村岩右衛門・永野莊太郎・坂元金之助・

西田清太郎・赤木清右衛門・大脇早四郎・永山庄之

助・井之口万太郎・中山金次郎・川畑助左衛門・片

之坂四郎左衛門・宮原莊之助・温水与助・壹岐宗之

助・出水藏助・永野為次郎・脇元清一郎・黒木郷

助・柳川伝四郎・斎藤宗之助都合七拾人、暮より觀

音寺和尚被來、四ツ時分迄被語候、野辺源右衛門二も來候、

四日 曇、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為讀、斎藤武兵衛・

高野瀬庄助・横山莊右衛門・伊福十郎左衛門出勤、

伊福十郎太兩度來馬二乗、觀音寺和尚一刻被來候、

夜入斎藤八郎左衛門來相嘶候、五ツ半時分帰、無程

臥候事、

五日 雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江素讀いたさせ候、堀之内

半五左衛門・横山伴之進・横山莊右衛門出勤、今日

者森山勇助・前田平兵衛・上田周造召出為褒美金子

百疋ツ、遣候、左之通口達込候、

森山勇助

右者先達而相達答候処、旅行ニ而今日相達候、前二

委敷留置候間略ス、先月九日可見合、

加治木町人

小林
爰許五日町居住

金子百疋

前田平兵衛

年四十四

右者当所之儀一昨年塩硝別而払底相成候処、何方も無他事容易ニ難得、砲術稽古方等相不調兼候儀者勿論、御軍役方格護用茂不持合者共有之、込入候折柄

平兵衛兼而相求貯置候由ニ而相中江差出、調練も相調、異船来着驗働ニ付而も別而都合相成、殊ニ体術・

劍術致出精、町中年若之者共引働メ毎朝出席いたし、

其外何そ用事申付他郷等江差越候儀も多々有之候処、

何篇懸心頭致世話用弁いたし候段聞通、右通為褒美

遣候、且又先日も調練之節温水怒兵衛大砲ニ而風と

致怪我候処、則驕付深切ニ致介抱候段相聞得、旁心

得宜候段褒美置候、

周助男子

金子百疋

上田周造

三十一才

右者去々亥七月在坂之砌御国許江異国渡来、終ニ者

及砲発血戰致退帆候風聞承り、就而鉛要用之具と心

付、鉛拾貫目買下所江差出度申出、格別之備相成、

誠ニ同人兼而体術・劍術心掛致出精、町中年若之者

共引働別而心入宜、且又此節稽古所一軒自分失脚ニ

而開修甫いたし候段相聞得、旁兼而心入宜候ニ付右

之通遣候、

夕須木与頭・横目両人来、奈崎之一向宗本孫持居致

怪我候郷士今日相果候届承候、其身不調法有之致怪

我候者ニ而、別段御届ニ不及段締方より承候段申候

付、何そ差障候廉も有之間敷存候ニ付夫形承置候、

今晚ハ仮屋番人三人萩原伸左衛門・永山八郎右衛

門・内藤弥太郎招呼盃共いたし緩々酒共為呑候、四

ツ時分隊候事、

六日 曇、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊書物為読、伴之進・荘右衛

門出勤、四ツ後赤木仲太左衛門来暫嘶候、七ツ時分

伊福十郎太来馬乗いたし候、拙者ニも自馬并伊福・

赤木馬迄三鞍乗候馬、五ツ過隊候事、

七日 曇、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江素読いたさせ候、四ツ時より堀之内半五右衛門・横山伴之進・横山莊右衛門出勤、伊福十郎太二も来候、今日者何も無事書見共いたし、夜五ツ時分臥候事、

八日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、岩次郎江素問教いたし、役々来、伊福十郎太来馬乗、拙者二も三鞍乗候、終日書状認二而候、夜ハ早く臥候事、

九日 快晴、

朝六ツ起、六ツ過書状仕出候、伊福十郎太一刻来、役々同断、夜五ツ半時分臥候事、

十日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊書物為読、手習同断、岩次郎素問教、伊福来馬乗、拙者二も同断三鞍乗候、七ツ時分より飯屋前之赤木所江来、桜を見呉候様申候

二付参候、十郎太・宇兵衛・伴之進参候、夕方帰宅、夜五ツ時分臥候事、

十一日 曇、

朝六ツ起、今日者武術見分として稽古所江参、直心影流致見分、飯屋庭ニ而示現流致見分候、七ツ時より伊福ば、来、伊福十郎太・横山伴之進・赤木七郎左衛門・横山莊右衛門招呼、庭花も盛り二付酒為吞候、各夕帰候、夜四ツ時分臥候事、

十二日 晴、

朝六ツ起、四ツ半過伊福十郎太来馬乗いたし、拙者二も同断馬乗いたし候、

十三日 夕方より雨、夜雷雨甚、

朝六ツ起、書状認、八ツ時分伊福ば、来、観音寺同断、夕絵図取として飯屋下辺出候処、雨降出取止帰候、

十四日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊召列横山伴之進ニも付来、
村内為絵図取出候、八ツ時分帰飯給、又同断出候、
此節者子共者不召列候事、

十五日 雨、

暁七ツ時起、飯共為焚、六ツ時より高原江武術為見
分差越、序ニ中途すから絵図も取賦候処、雨降出し
高原稽古所も無之候ニ付見分取止候、又小降と相成、
村内ニ而も絵図取いたし度玄喚迄出候得ハ、又雨降
出し候ニ付、役々詰所へ参四ツ前迄相嘶帰候、追々
役々見廻有之、十郎太・龍見ニも来候、

十六日 朝雨晴、夕より雨、暁晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、岩次郎江素問
教候、四ツ後学文所へ参、九ツ過帰宅、八ツ後より
吉次郎・徳熊ニも列絵図取ニ出候、夕帰宅、五ツ半
時分臥候事、

十七日 朝雨後晴、

暁七ツ時起、飯共為焚候、今日者飯野江武術見分と
して差越候筈ニ而、中途すから絵図取もいたし候含
ニ而候間、吉次郎・徳熊ニも列可申夜中より起髪共
結呉、丁度六ツ前相成候処又々雨模様相成候ニ付、
又列可参候間今日者留守番いたし候様申聞候、六ツ
半打立候処、無程雨止候而後者快晴と相成候、飯野
へ四ツ前着、四ツ半過見分相濟、夫より御城跡拜見
として参、又仮屋江九ツ時帰、直ニ打立、八ツ半ニ
不相成内小林仮屋へ帰着いたし候得者、伊福十郎太
馬ニ乗候ニ付拙者ニも一鞍乗候、夫より所役々之役
所造候処、脇之木枝下シいたし候を見、夫より風呂
ニ入、夜四ツ前臥候事、

十八日

朝六ツ起、今日観音寺出府ニ付吉次郎・徳熊ニも列
参宿許書状相頼候、直ニ帰宅、吉次郎・徳熊江書物
為読方いたし候、岩次郎同断、八ツ半時分田尻務殿
入来、久々ニ面会候間、是非ニと留候而一宿いたさ
(種賢)

れ候、

小林郷士
温水恕兵衛

十九日 晴、

朝六ツ起、五ツ過より田尻家同伴馬ニ而陰陽石并永吉領分人參植付場等見物として致案内、九ツ半時分飯屋之様返り、八ツ過田尻家帰りニ而候、夫より又吉次郎・徳熊江書物為読候、四ツ五ツ過臥候事、

丑三月十九日
喜入撰津

名越左源太殿

廿日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物よませ、岩次郎江も素問教候、八ツ後鬼塚原人參植付場見物いたし、夫より左衛門殿・又六郎殿・田尻務殿(種賢)白鳥湯治より狩ニ而今晩近辺家来所江一宿之段承候付見廻ニ參候而、中途すから絵図も取候、夕方迄近辺江宿いたし相待候得共、着無之候ニ付伝言共いたし置空敷帰候、暮過飯屋江着候得者、温水恕兵衛江為養生料御金五兩被成下、撰津殿より御用封到来候間、親類麻袴着用ニ而只今御用申渡、無程弟温水祐之丞罷出候、御書付并御金頂戴いたさせ候、四ツ時分ニ臥候事、

金五兩

小林郷士
温水恕兵衛

右者兼而心掛宜者之由候処、今般御備組一陣調練之節、大砲玉竿役相勤不慮之怪我いたし候段相聞得候ニ付、為養生料右之通被成下候事、

一筆啓上仕候、暖氣相催候処御勇健相成御座珍重御儀奉存候、然者私共事、去ル十三日帰郷仕申候、御地廻勤之砌者彼是御叮嚀ニ成上深々御礼申上候、調練之節不慮之怪我いたし候温水恕兵衛儀ニ付而者、御配慮為被遊筈ニ御座候、飯野迄役々御遣御書付并

御伝言之趣委細承知仕候、成行御家老衆江申上候処、

当分無役 大久保利右衛門

今日便撰津殿より別封御問合被仰越通二候、右惣兵衛事、兼而心掛も宜敷者之由候付金五両頂戴被仰付候、貴公様并新納太郎左衛門より当座之為養生料金子被成下、旁御行届之段も御届申上置候事二御座候、快氣之向二御座候得ハ嘸御仕合之至二御座候、私共

右之通代り申出候二付、次書いたし申出相成候様、今日丸田氏へ遣候、

二も快氣候処折角奉祈事二候、将又須木組合替之儀、能程入組たる事二而不容易儀二候得共、御頭様方御

一岩元新左衛門・黒木助左衛門・高妻助左衛門・宮田助右衛門・丸山儀一郎・馬場次郎右衛門、

聞通相成、当分御伺二も相成居候間、追而何と敷表

分出府二而候間致次書被差出候様差遣候、都合六通二而候、

通可被仰渡候間、左様御納得置可被下候、先者乍恐

廿一日 雨後晴、

三月十九日

野村仲左衛門

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、岩次郎素問教

覚

野尻

廿二日 晴、

普請見廻

田丸円右衛門代り

朝六ツ起、暁より岩次郎・太郎蔵折二遣候、今日者

当分地頭横目 本田庄次郎

善兵衛一人罷居候間家来之源助招呼置候、夕帰る、蔵折人数者夜入帰候、吉次郎・徳熊江者毎之通書物

教候、夜四ツ前臥候事、

江武術并読書不時為見分參候、八ツ半帰宅、七ツ時
分より吉次郎・徳熊江書物為読、夜四ツ時分臥候事、

廿三日 快晴、

廿六日 晴、

朝六ツ起、五ツ過より高原江武術為見分差越候、四

ツ時着、示現流・水野流・天真流見分、読書同断二

而九ツ半打立帰、八ツ過小林江着いたし候、七ツ時

分又六郎殿・独遊殿より使者来候、刻煙草一箱、田

尻務殿より飴一箱来、厚御礼申上候、尤、使者居間

江召呼候、夜四ツ時分臥候事、今晚者善兵衛・岩次

郎召出腕押なといたし賑々敷候、

廿七日 曇、

朝六ツ起、(志戸本家本より補)四ツ過より役々毎々通出勤、△吉次

郎・徳熊江書物為読并手習、四ツ後十郎太来馬乗、

拙者二も三鞍乗候、鹿府江之書状仕出、安田氏江も

同断、夕方福留七兵衛来、羽島一左右承、夜四ツ半

時分臥候事、

廿四日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、岩次郎江も素

問教候、庄助・武右衛門・荘右衛門出勤、四ツ後十

郎太も来暫嘶候、高原地頭横目丸山儀一郎来候、夜

五ツ時分臥候事、

廿八日 雨、

朝六ツ起、七兵衛召呼相嘶、四ツ過より今日者不塩

梅有之、手薬共給候而臥候、八ツ時起候処観音寺被

来、大鐘比被帰候、夫より七兵衛召呼色々咄共いた

廿五日 雨

朝六ツ起、吉次郎江書物為読、五ツ半時分より高原

し、夜四ツ過臥候事、

廿九日 曇、

朝六ツ起、直二七兵衛招呼相嘶、五ツ半時分七兵衛
打立帰る、吉次郎・徳熊江書物為読候、夜四ツ時分
臥候事、四ツ後者文行堂江參候、当所締方横目上山
孫七殿江も一刻見廻、時任宇兵衛所養蚕見分として
一刻立寄、八ツ前帰宅也、

日史第四十六

元治二年乙丑四月中

名越時敏（花押）

朔日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過赤木七郎左衛門来候、四ツ時分時
任宇兵衛・伊福十郎太・伊福十郎左衛門・押川愛次
郎・大脇七左衛門・堀之内半五左衛門・横山龍見・
高野瀬庄助・横山丹碩・横山六郎右衛門・井上嘉兵
衛・横山織兵衛・山口浅右衛門・井上軍兵衛・赤木
仲太左衛門其外段々来候得共記二不暇、野尻年寄満

留民左衛門江御用申渡置候処右同刻来候、当所年寄
共江者猶木以下之者共取扱振存慮之趣申聞候処、何
れも尤二而存寄無之段承届候、明後三日御用出置候
様相達候、九ツ過より武術見分、直心影流・示現流
二而候、七ツ過より馬に乗る、三鞍二而候、伊福十
郎太同断、赤木七郎左衛門ニも出候、夜入十郎太来、
四ツ時分帰候、無程臥候事、

二日 曇、

朝六ツ起、書見いたし候、高野瀬庄助・押川愛次
郎・斎藤武兵衛・横織（山脱之）之助出勤、夫より鹿兒島丸田
氏（江脱之）之書状認差出候、又書見終日二而候、吉次郎・徳
熊江書物為読候、岩次郎江素問教授候、暮より観音寺
入来、四ツ時分被帰候、斎藤八郎左衛門ニも暮より
来候而五ツ半時分迄相嘶候、四ツ過臥候事、

三日

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、五ツ前伊福十
郎太来、先日十郎太求候疲馬門前二而差シ方いたし

候由申候ニ付見候、夫より書見、

○一無役郷士拾壹人・百姓九人科可申付者共、罷居所法様之科取調申出候様年寄共江申付置候処、先日左之通申出候、受持郡奉行面高氏拙者談合役ニも有之、談合之上取扱可申含ニ候処、鹿府勤場別而差支候由申来、野尻より直ニ出府いたし候間、右取扱者拙者存慮を以何様共いたし呉候様承候得共、多人数之事ニも有之、別而渡工夫候、

所役調左之通、

郷士四人

右日数百日寺入

郷士三人

右日数六十日寺入

郷士四人

右日数三十日寺入

百姓三人

右式尺方之真石四拾ツ、

百姓六人

右式尺方之真石三拾ツ、

右之通候処、拙者存慮を以今日郷士拾壹人者麻袴着用ニ而飯屋江御用申渡、拾壹人広間江呼出、郷士年寄・同与頭惣而席詰ニ而広間頭之間拙者出席、直達左之通、

其方共各今日召出候者、去夏比より真崎平八・右木十五郎私意を以諸人相欺地面混雜之儀有之、右ニ組シ候段糺方之上事明白相分、猶木二者依願遠島いたし、真崎ニも同罪之者候処、致欠落候付其段及披露候、就而者右ニ準シ其方共并百姓共ニも罪之軽重者可有之候得共、何れ相当之科可申付者共候処、真崎・猶木諸人相欺候次第も相分り、各後悔者可有之事、依而者拙者此節地頭職近郷迄も所々兼相勤候様格別難有被仰付、前件悪事者去夏比より事起、拙者差入比迄之事ニ而拙者不差入已前之事候間、本人及取扱候付格別寛宥之取扱ニ而則赦免申付候、以来右様之悪事いたし候者者夫々無用捨相当之咎可申付候、曾而以例相成候取扱トハ存含申間敷候、且又真崎・猶木共ニ兼而身持不

正者二而、真崎二（博奕カ）者博易迄茂いたしたる段糺方之

上申出、別而不埒之者共二候、各者其儀者無之筈

候得共、右悪事組シ候二付而者金無之共不被申、

以来右様之不埒筋無之、風俗宜様可相嗜候、

在之者共江直達者不相当二存候間、郷士江之達

振耳二入候庭上江出置、引入後百姓共江者尚又

同様年寄共より演達赦免為申渡候、

一七ツ時分十郎太来馬乗打立、拙者二も一鞍乗、又自

馬乗候処雨降出取止候、不雨止、

一前件取扱二付賢言取調左之通、

一赦小過大者於事或有所害、不得懲、小者赦、則刑不濫而人心悦矣。

一省刑罰、

一子曰、不教而殺謂之虐、不戒視レ成謂之暴、慢

令致レ期謂之賊、猶キ之与ルカ人也、

一夫施厚者報美、怨大者禍深慎レ之慎レ之、

一考ルトキハ二功罪于成敗之後二群下無レ所逃二其誅賞二矣、

四日 朝暫小雨、

朝六ツ起、昨日之日史共留、夫より書見、四ツ時高

野瀬庄助・押川愛次郎・横山莊右衛門出勤、吉次

郎・德熊江書物為読、相濟直二觀音寺江不働明王參

詣、吉次郎・德熊召列候、直二帰宅、夫より書見、

七ツ時分須来（木カ）より年寄中山宇平太・地頭横目蘭牟田

五右衛門来候、焼酎為吞候、当所役々高野瀬庄助・

押川愛次郎・横山六郎右衛門・横山莊右衛門二も同

断、各日入比歸候、夜四ツ時分臥候事、

五日 快晴、

朝六ツ起、書見、四ツ時より吉次郎・德熊江書物為

読候、岩次郎二も素問教授、夫より書見、今日役々

二ハ庄助・愛次郎・六郎右衛門・莊右衛門出候、七

ツ過居間夕日二堪兼庭江一刻步行、夫より書院之間

二而書見、夕方馬乗、夫より伊福角より町之様乘廻

し暮前帰宅、

六日 快晴、

朝六ツ起、書見、吉次郎・徳熊江暫書物為読、四ツ時より野尻境迄絵図取ニ參候、吉次郎・徳熊も召列候、堀之内半五右衛門・横山莊右衛門付來候、八ツ過帰宅候得者家來源助一刻來候、暮迄書見、片手ニ吉次郎・徳熊江暫書物為読候、五ツ過臥候事、

一夜八ツ半時分野尻より御用封來、左之通、

覺

野尻

爰許麓村西門

名子万助弟

札名甚五

当年四拾貳歲

甚左衛門

右者一向宗本尊持ニ而、門徒引勸致執行者御座候處、宗門御改役川上万之助殿より本尊取揚之上門徒共申出候得者、未殘人数有之候ハ、相糺可申出旨被仰渡趣承知仕、去月廿九日宗門方掛役々真光寺出役所右甚左衛門召呼門徒人数不殘申出候様論方いたし、猶又細々相考可申出旨申聞末之間江召下置候處、透を計逃出候を町役共追付相捕、右ニ付而者旁不審等敷

相見得候ニ付、呼出問掛候上門徒申出候得共夜深ニ

相及、昨四日又々問糺候處追々申出候、然共夕方ニ

相成尤逃出候故、為念所調格護所江召入置候處、其

夜明方右格護所内ニ而自分着居候衣類襟を解離し致

縊死居候を見当り候段親類共より申出、締方横目種

子島宇左衛門殿并高原横目黒木庄右衛門・所横目私

共立会見分仕候處、自縊相違無御座形ニ相見得申候、

尤、親類共相糺候處、一向宗門徒人数最初申出候外

一切無御座段申置、此節執行人共より多人数申出候

ニ付而者、是迄深く押隠居無申訊次第と存詰、右通

致自縊候儀共ニ而者有御座間敷哉と申出趣承届申候

間、此等之趣を以御披露被仰上被下度奉存候、以上、

但、死体之儀、番付ニ而召置申候間、何分ニも

早々片付方被仰渡度奉存候、

丑四月六日

郷士年寄

滿留民左衛門

右同

滿留兵左衛門

右同

寺田半左衛門

御地頭所

御取次衆中

右之通候二付、則左之通申越置候、

野尻麓村西門名子

万助弟札名甚五

甚左衛門

三日迄私共罷登見分仕候処、何ぞ相違無御座候付
此段御届申上候、以上、

丑三月廿四日

田代ケ八重御番人

園田平之進

萩原休兵衛

右同

園田太郎

川添金左衛門

右同

曾木平太左衛門

右同

富永林左衛門

行司

宗方喜右衛門

右同

鳴海矢右衛門

横目

肥田木弥七郎

右同

岩下莊玄院

与頭

鬼塚仲左衛門

右同

緒方覺太

郷士年寄

上野太郎左衛門

右者一向宗本尊持二而、門徒致執行者候処、度々札方相成候上追々申出、格護所江召入置候処致縊死、役々見分之上自縊無相違形相見得、尤、親類共よりも門徒人数最初申出候外一切無之段申出、執行人数よりも多人数同様申出候二付而者、宗門改役へも引合之上其段早々御届申上候様可申越候間、死体之儀者親類共江可引渡置候、

丑四月六日

左源太

(尻力)

野野

郷士年寄中

覚

須木

御地頭所

一 小川内掃部嶽、米良・綾・須木三方境より

一 郷士屋峠、米良・求摩・須木三方境より咄合迄

右者例年之通大境見分として当月十七日より同廿

七日 晴、間々陰、

朝六ツ時起、右日史共留、夫より暫書見、吉次郎・

德熊江書物為読候、岩次郎へも素問教候、堀之内半

五右衛門・押川愛次郎・横山莊右衛門出勤候、昼一

刻畠江出家来・下人畠打いたし候を見候、八ツ半時

分より七ツ半時分迄吉次郎江書物為読候、間々二者

今日者暮迄終日書見、四ツ後美代氏江御用封も差出

候、夜入炉ニ而六之汁共いたし子共と寄合候、

覚

高原

広原村末永門名子

市太郎叔父欠落

清兵衛男子

清次郎

後川内村入来門名頭

次郎親

与作

右同村同門名子

甚助親

三五郎

覚

野尻

爰許三ヶ野山村

本佐土瀬門名子

銀太郎

当年七拾五歳

右三人安政四年^(巳之)九月御披露申上置候、

広原村真方門名頭

万左衛門

右万左衛門

妻

右者去ル戌年一向宗執行不審有之、捕方として所役々

被差越候砌、宿許を廻シ不罷帰者御座候付、其段御

披露申上置候处、此節親類共より列歸候段申出趣承

届候間、此等之形行を以被仰上被下度奉存候、以上、

丑四月三日

郷士年寄
寺田半左衛門
右同
満留民左衛門

御地頭所

御取次衆中

右式人文久二年戌四月御披露申上置候、

右五人事、一向宗書役又者門徒致執行候不審御座候

者共二而、宗門方御詮儀央宿許相廻申候二付、近郷

迄茂尋方為仕候得共行衛相知不申候二付、形行を以
右書之通御披露申上候処、此節無調法存当帰参仕御
断申出候間何分御沙汰、以下欠

八日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、年寄高野瀬
庄助・与頭押川愛次郎・地頭横目横山莊右衛門出勤、
四ツ後刀拭いたし候、拙者刀六本・脇差五本、吉次
郎・徳熊刀大小六本二而候、九ツ時伊福十郎太来馬
二乗、拙者二も乗候、夫より又書見、七ツ時より暮
迄吉次郎江書物為読候、徳熊も読候、夜五ツ過臥候
事、

九日

朝六ツ起則書見、吉次郎・徳熊江書物為読、夫より
当所学文所何と歟堂号二而も見立、額・掛物杯書具
候様承居候付認候、額者横唐紙一枚二文行堂、掛物
二者子以四教文行忠信と書候而直二学文所為持参候、
八ツ前帰宅、夫より書見、堀之内半五右衛門・高野

瀬庄助・横山六郎右衛門・押川愛次郎・横山莊右衛
門出勤、八ツ後野尻より郷士年寄横山弥次右衛門御
用有之来候、今日も暮迄書見、夜五ツ時分臥候事、

十日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、夫より書見、
高野瀬庄助・横山六郎右衛門・堀之内半五右衛門・
押川愛次郎・横山莊右衛門出勤、岩次郎へも素問教
候、八ツ過磯永弥九郎殿入来馬乗共いたし候、十郎
太・七郎左衛門二も来、銘々馬率来、日入前被帰候、
夜入五ツ過臥候事、八ツ前赤木仲太左衛門二も来候、
(十一日カ)
十日 快晴、

朝六ツ起則書見、伊福七郎左衛門・押川愛次郎・横
山莊右衛門・高野瀬庄助・横山六郎右衛門出勤、横
山織兵衛・井上嘉兵衛二も同断、今日者右役々共よ
り唐紙二字を望候二付認候、夫より書見、九ツ過吉
井藤兵衛殿入来、今日者武術見分日故吉井氏二も同
伴いたし稽古所江参候、八ツ半時分引入、又吉井氏

八飯屋へ同伴いたし、七ツ時分被帰、夫より又々書見いたし、夜入四ツ時分臥候事、

十二日 晴、

朝六ツ起、書見、五ツ半時分より吉次郎・徳熊江書物為読候、四ツ後野尻より横目園田次郎九郎変死届書来、右首尾書付いたし、野尻普請見廻代り等申出書付御用封仕立取次美代氏遣ス、九ツ前磯永弥九郎殿馬乗来られ飯屋馬場ニ而乗方いたし候、十郎太・七郎左衛門ニも申遣来候、川上万之助殿ニも一刻見廻有之候、今日役々出勤、高野瀬庄助・横山六郎右衛門・井上嘉兵衛・伊福十郎左衛門・押川愛次郎ニ而候、岩次郎へ書物も教候、夜入四ツ前臥候事、夜九ツ半起、七ツ時迄書見いたし又臥候事、

覚

野尻

普請方見廻

田丸右衛門代り

当分地頭横目 寺田庄次郎

当分無役 大保利右衛門

右者普請方見廻田丸右衛門事、疝積差発り役儀断申出候ニ付、跡代り役相しらへ申候処、右兩人宛之内江被仰付候ハ、相応ニ相勤人柄と見及申候、尤、右兩人共ニ一向宗致執行候者共ニ御座候得共、庄次郎儀者天保六未年胸替誓詞被仰付候、利右衛門儀者安政六未年胸替誓詞被仰付候、其外何ぞ御咎目等為被仰付者共ニ無御座候、且又爰許之儀者人少之場所故役儀相勤者も相少候間、御取訳を以右通被仰付候ハ、仕合ニ奉存候間、是等之趣を以被仰上被下度奉存候、以上、

丑三月十七日

郷士年寄

満留兵左衛門 印

其外連名略ス、

小林

御居地頭所

御用達衆

覚

野尻

爰許普請方見廻田丸右衛門代り原田仲助江被仰付候旨御証文を以被仰渡候処、同人等、此節一向宗執

行仕自訴御断申出候者御座候付、役儀被仰付段申渡方控置申候、右二付而者近比恐多奉存候得共、爰許之儀人少之場所御座候付、御取訳を以別紙私共しらべ之通被仰付被下候ハ、至而仕合ニ奉存候間、何卒是等之趣を以御免被仰付候様被仰上被下度奉存候、以上、

丑四月十日

郷士年寄

満留民左衛門 印

其外同役連名略ス、

御居地頭所

御取次衆中

十三日 朝曇、九ツ過より小雨、

朝六ツ起自此内時計見候儀今朝通ニ候、柱時計・懐中時計見候、五ツ時より飯野江劍術為見分參候、四ツ彼方江着、九ツ時稽古相濟、人数三拾六人跡ニ而仕望

候、左之通(堀佐次兵衛 奈須隆介 朝稲英之丞 老岐甚五左衛門 楠元李左衛門 秋丸仲太左衛門)

衛門、九ツ過打立、八ツ過帰宅、直二中飯・風呂と

いたし、夫より書見、夜入五ツ半隊候事、夜九ツ過夢覚、風邪気分故八ツ時起薬調合、風邪ニ痰ヲ兼候

故小青龍湯(貼方)三帖調合相煎シ、七ツ時過迄二三帖共ニ吞、煎候間ハ書見、一息臥少々発汗有之、翌朝気分宜候、

○一飯野郷士野田佐太夫所江

(義也)惟新公御子様万代丸様御召物其外段々拝領物有之

由、今日致拜見、右先祖佐太夫御守役ニ而為有之由、

万千代丸様二者御七才ニ而御早世也、

(宗江方)宗功様と申上候、

御手遊道具
程拾好
図之通

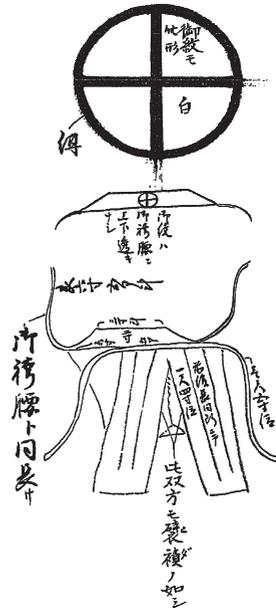


右之外唐渡リ之物ト見得唐紙二花鳥山水等之絵切抜タル数十枚于今格護コレアル、

一短冊段々コレアル、其内一枚 家久公御詠歌御幼少之 御筆ト相見候、其外 御筆ト見得候モ段々有之、

尤、御筆ニテ取持、

水色御上下・御袴迄所持、地晒、地合中位ヨリ下、御袴腰十文字御紋、襠高ナリ、



十四日 快晴、

朝六ツ起、両時計見候、夫より書見、四ツ時より吉次郎・徳熊江書物教候、伊福十郎左衛門・押川愛次郎・井上嘉兵衛出勤、高野瀬庄助・横山六郎右衛門ニも役所普請方ニ相掛り出勤、先日より同断、八ツ後伊福十郎太・赤木七郎左衛門来馬乗、拙者ニも三鞍乗候、夫より暮迄書見、夜入五ツ半隊候事、

十五日 快晴、

朝六ツ起、両時計見候、直ニ髪結び書見いたし、五ツ時分高原江武術為見分差越候、水野流・示現流・川上天真流人数稽古有之、素読又字茂見候、九ツ前高原打立、九ツ半過帰宅、夫より書見、夜入五ツ半時分隊候事、

十六日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、高庄助・横六郎右衛門・押愛次郎・井嘉兵衛出勤、夕方馬ニ乗候、暮より観音寺和尚被来、四ツ時分被帰候、無程隊候事、

十七日

朝六ツ起、稽古所江参心影流不時致見分候、五ツ帰る、夫より吉次郎・徳熊江書物為読、高野瀬庄助・横山六郎右衛門・井上嘉兵衛出勤、今日者終日手習いたし候、今日者古刀段々相見得、其内長脇差式本相求候、其内一本ハ忠(中心カ)ニ作と申候字迄相残、目釘穴式ツ有之の二候、一本ハ右之刀より少し短ク丁子乱(中心カ)ニ而見事成物ニ候、二本共ニ忠(中心カ)者生れニ而候、夜入

四ツ時分隊候事、

十八日 四ツ過より雨、

朝六ツ起、居間掃除、夫より五ツ時分迄書見、夫より手習いたし候、斎藤武兵衛・井上嘉兵衛出勤、高野瀬庄助同断、赤木七郎左衛門ニも来候、終日手習・書見等ニ而日暮、夕より観音寺和尚被来、夜入五ツ時分被帰、伊福十郎太暮より来、四ツ時分帰候、無程隊候事、

○一今和泉家より此節高原広原村江新田開有之、右ニ付

而出張之家来何某歟名前不承来候ニ付致面会候、内意有之段承候趣、此節主家新田開有之、御物御計ニ而諸人目者今和泉家より被聞候由、折角当年より植付之處ニ而為相働候得共、夫及不足頓と込り之段、高原差入郡奉行葛原源助殿江申出候處、小林江參候（黒腕カ）而拙者江及相談候ハ、僅計之事随分出来候半と被申候由、当所郡奉行面高与蔵殿ニも昨日小林細野村へ被差入候ニ付相伺候處、ケ様之儀者互ニ有之事情間、随分出来可申事と被申候由、就而拙者より郷士

年寄江致沙汰呉候儀者相叶間敷哉、尤、代払ニ而上夫五百文位又者四百文、又請負者壹貫ニも及候儀も有之候半と承候ニ付、随分出来候儀ニ而可有之、明日より一日十人位ツ、十日計差出呉候得ハ宜由、大抵夫百人と申事ニ而、何分ニも明日可及返答申置候而右之家来者返候、則郷士年寄時任宇兵衛申遣直ニ出候ニ付相晰候處、僅計之事ニ而随分易キ事、明日より則差出候様可仕、一日二十人ニ而無之候共十四五人差出候而も不苦筈と之事ニ而、夫ハ尚更仕合ニ而候半と申聞置候、

十九日 朝雨後霽、

朝六ツ起、手習いたし候、高野瀬庄助・横山六郎右衛門・横山丹碩・井上嘉兵衛・横山莊右衛門出勤、今日者おたね被来候賦ニ而、丸田竹翠殿ニも同断、先状相見得候付中途まで参る之由ニ而、伊福十郎左衛門・横山織兵衛来候、九ツ時分面高与蔵との一昨日差入之由ニ而被来候、今朝者観音寺覚洲法印ニも被来、下人太郎筈欠ニ被列越候、八ツ後町田（久成）民部殿

家来之由谷口矢太郎と申者雉子鳥一羽・笥持来致
面会候、七ツ過おたね着、丸田氏ニも着之由候得共
不被来候、夕より堀之内半五左衛門・高野瀬庄助・
横山六郎右衛門・斎藤武兵衛・横山莊右衛門・横山
織兵衛・井上嘉兵衛召呼酒共給候、観音寺法印ニも
被来候、各四ツ時分帰ニ而、九ツ時分隊候事、

廿日 雨、

朝六ツ起、四ツ時伊福十郎太・横山龍見・高野瀬庄
助・横山伴之進・横山織兵衛・斎藤武兵衛・井上嘉
兵衛・押川愛次郎・横山莊右衛門来候、丸田竹翠殿
ニも同断、井上軍兵衛・堀之内半五左衛門・赤木仲
太左衛門・同嫡子仲藏・観音寺和尚被来候、時任宇
兵衛ニも同断、拙者二者客之間ニ手習いたし候、夕
福留平左衛門荷物宰領ニ而着、馬五疋、下人十助ニ
も来、暮より平左衛門招呼酒為給候、夜四ツ過隊候
事、

廿一日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、大脇七左衛
門・横山六郎右衛門・横山織兵衛出勤、赤木七郎左
衛門一刻来候、九ツ半時分より直心影流・示現流見
分、八ツ半過相濟、七ツ過弓拾四五建射候得者矢筈
射割取止候、暮より伊福十郎太・赤木七郎左衛門召
呼候、大脇七左衛門ニも留置候、観音寺ニも暮過よ
り被来、各四ツ過被帰候、九ツ前隊候事、丸田竹翠
殿ニも被来候、

廿二日 曇、

朝六ツ起、無程稽古所江劍術為見分參候、五ツ時分
帰る、今日者広間江巻藁居付候、高野瀬庄助・大脇
七左衛門・横山織兵衛出勤、丸田氏ニも被来候、四
ツ後吉次郎・徳熊江書物為読候、横山六郎右衛門ニ
も出勤、七ツ過弓拾五建射候、夫より伊福十郎太・
赤木七郎左衛門来候而馬乘いたし、拙者ニも二鞍乘
候、夜入五ツ過隊候事、

廿三日

朝六ツ起、暫庭步行、夫より書見、丸田氏入来、高

野瀬庄助・大脇七左衛門・横山六郎右衛門・横山織

兵衛出勤、八ツ前より伊福十郎太母・妻并赤木七郎

左衛門妻来候、暫相噺、観音寺和尚同断、七ツ過卷

藁拾四五筋射候、夫より伊福十郎太来馬乗いたし、

拙者ニも二鞍乗候、夜入家来平左衛門・岩次郎・善

兵衛・伊太郎招呼酒為給候、四ツ時分臥候事、

○ 覚

高原

一茶之実植付本七百七拾式株

麓郷士方

一同式百四拾五株

花堂郷士方

一同式百五拾株

福原郷士方

一同四百八拾株

入木郷士方

一同四百六拾六株

越并鹿兎山郷士方

一同三百六拾五株

広原郷士方

一同八百五拾株

野村郷士方

一同六百三株

麓村

一同千四百拾株

蒲牟田村

一同千七百式株

後川内村

一同九百株

水流村

一同千八百九拾式株

広原村

一同九百五拾株

(蔵川カ)
稗川

一同千五百株

狭野

惣合植付本壹万式千百拾五株

右者当春茶之実植付方被仰渡趣承知仕、村毎ニ役々

手分を以廻村仕植付方仕申候処、右之通御座候間此

段御届申上候、以上、

丑四月十八日

郡見廻
押領司箭八郎

組頭
黒木清左衛門

郷士年寄
竹之下庄助

廿四日 快晴、

朝六ツ起、五ツ前大脇七左衛門・横山六郎右衛門・

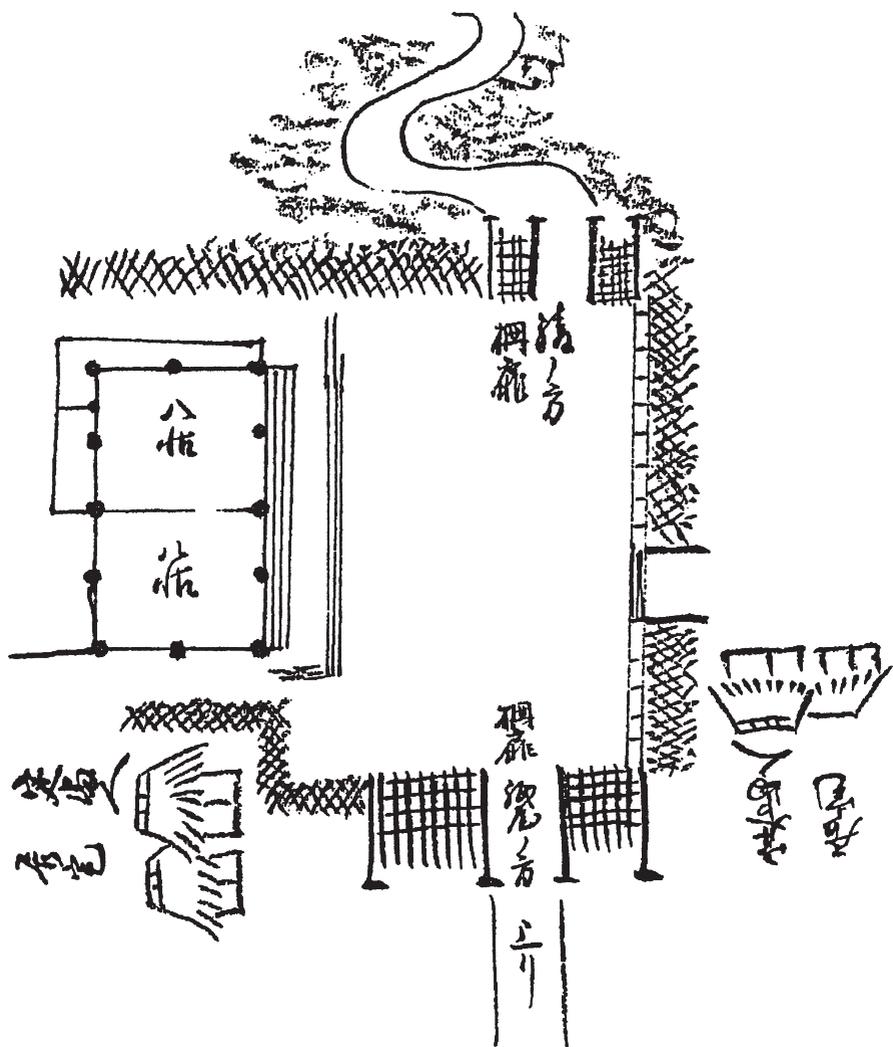
横山織兵衛出勤、五ツ半時分より野尻紙屋御番所見

分并紙屋郷士武術為見分打立、四ツ半過野尻麓飯屋

江着、暫茶共給同刻打立、八ツ前紙屋西田仲太夫所

江着、七ツ時分より御番所為見分差越、市之瀬辺路

番所迄も差越、夕又々西田仲太夫所江參一宿、仲太



夫所江者

宰相様・（齊惣）順聖院様ニ茂御一宿被為 在、四帖半之

御座之間有之、御成御門も有之候、仲太夫親之利左

衛門と申候、

一 紙屋御番所御入付左之通、

一 弓四張 一 鉄砲七挺 一 鐘七本

一 差俣壱本 一 小取壱本 一 いら棒式本

一 桐之頭御幕片間 一 のませ御幕一頭

一 大丸一張 一 高張一張

一 うつぼら式ツ 一 矢之根四拾八本

一 合塩硝一斤余 些輕少ニ存候、今少シ余計ニ申出候

合、

平日定番人年寄名代兩人・平郷士無役四人ツ、相勤

居、公役人抔通行之節者現年寄相勤、無役郷士も相

望メ候由、尤、鐘其外飾付候由、

一定番年寄名代兩人ハ八ヶ年代リ、

一 平郷士者無役より繰廻シ、

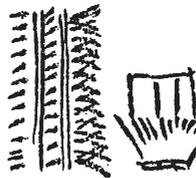
一定番兩人者三石六斗ツ、

今朝紙屋之西田仲太夫所ニ而薙刀一振一見、左之通
古谷山之由、

長式尺寸位



市之瀬
辺路
番所



廿五日 曇、

朝六ツ起、六ツ過より(空白)と申候寺江参武術見分

いたし候、人数式拾六人、示現流剣術・月山流薙刀
致見分、六ツ半時分相濟、又々西田仲太夫所へ参候
而、五ツ過打立須木之様参候、中途すから絵図取纏
引いたし候、紙屋分れ道より須木之内内山川俣石右
衛門所迄四千五百六拾間、右石右衛門所より須木之
内奈崎真形伸之丞所迄三千七百八十間、右真形所二
千越二而須木地頭飯屋迄式千百七十間有之候、所々
緩々といいたし候ニ付夕方須木地頭飯屋江着、夜入五
ツ時分臥候事、

廿六日

朝六ツ起、昨日之絵図尚又取調いたし候、四ツ武術
致見分、四ツ半須木打立婦、些雨模様ニ相成候間乘
切候処、九ツ半婦宿、八ツ後卷藁両度射候、丸田氏
旅宿へも一刻参候、暮より源助来、五ツ時分迄相嘶
候、五ツ半時分臥候事、

廿七日 雨、

朝六ツ起、書見共いたし候、吉次郎・徳熊江書物為
読、丸田氏・高野瀬庄助・横山六郎右衛門・横山織
兵衛出勤、卷藁射三度、間々二者読書等いたし候、
夜五ツ過臥候事、

廿八日 晴、

朝六ツ起、丸田氏度々被来、堀之内半五右衛門・横
山六郎右衛門・横山織兵衛出勤、観音寺和尚ニも被
来候、家来之源助も来候、明日精進こむくずしつけ
かた相頼候、今日茂卷藁両度射候、九ツ時分御用封
も来、馬関田地頭安田助左衛門殿江御用封も差出候、
今日も間々者読書ニ而日暮、竹翠殿所へ一度一刻参
候、夜入五ツ過臥候事、

廿九日 晴、

朝六ツ起、卷藁射、吉次郎・徳熊江書物為読、夫よ
り書見、又卷藁射、八ツ前より観音寺・昌寿寺・伊
福十郎太申遣入来、こむく飯寄合候、七ツ時被婦、
夫より又卷藁射いたし、夜入五ツ過臥候事、

晦日 晴、

朝六ツ起、卷藁射いたし、四ツ後伊福十郎太・赤木七郎左衛門来馬乗いたし、拙者二も二鞍乗候、夫より馬関田居地頭安田氏より御用封来致返答相濟、伊福徳之進來、絵書呉候様申候付致絵書候、相濟又卷藁射、鎗一廻り一人にて形いたし候、又暮前卷藁射いたし、夜入四ツ前臥候事、今日者伊福十郎左衛門・堀之内半五右衛門・横山六郎右衛門・横山織兵衛出勤、

日史第四十七

元治二年乙丑五月中

名越時敏 (花押)

朔日 晴、

朝六ツ起、卷藁射いたし、夫より屋敷内廻り、吉次郎・徳熊江書物為読候、四ツ前伊福十郎太来候、伊福十郎左衛門・押川愛次郎・井上嘉兵衛・横山莊右衛門・横山伴之進・富満武右衛門・赤木仲蔵・斎藤武兵衛・時任宇兵衛・高野瀬庄助・横山六郎右衛

門・横山龍見・弓削次右衛門・赤木七郎左衛門来ル、八ツ過卷藁射候、同刻丸田氏被来、七ツ過射場二而弓拾四五建射候而卷藁も又射候、鎗も表一廻り一人二而いたし候、夜五ツ時分臥候事、

二日 雨後霽、

朝六ツ起、劍術稽古所江出候、五ツ時帰り卷藁拾四五筋射候、夫より吉次郎・徳熊江書物為読候、富満武右衛門・横山莊右衛門出勤、八ツ後卷藁射又射場式拾建計又卷藁射候、七ツ前須木郷士年寄上野太郎左衛門(空白)来候、七ツ過帰、夫より書見、夕卷藁射候、夜入五ツ時分臥候事、

三日 間々小雨、

朝六ツ起、卷藁射候、丸田氏被来候、四ツ時より富満武右衛門・横山莊右衛門出勤并同刻より書状認、安田氏へ御用封差出、又鹿兒島へ美代氏・名越戸十郎・福留江書状差出、吉次郎江一刻書物為読、おたね之吞候葉調合、七ツ過卷藁射、夫より竹翠殿鞍作

見ニ参候、無程帰、夜五ツ時分隊候事、

四日 晴、

朝六ツ起、卷藁射いたし引続書見、夫より吉次郎・
徳熊江書物教、五ツ過竹翠殿被来、四ツ後学校所江
参、夫より昌寿寺江参暫晰、夫より観音寺不動明王
参詣、八ツ時分帰宅、書見、夕卷藁射いたし、夜五
ツ半時分隊候事、

五日 晴、

朝六ツ起、卷藁射いたし、夫より劍術稽古所江為見
分参候、五ツ時分引入改服ニ而氏神様・御先祖様江
拜礼、丸田竹翠殿其外所役々追々来候、外ニ家来仙
太郎・源助・利左衛門来候、高原郷士年寄田口伊兵
衛・組頭丸山十郎左衛門・野尻年寄満留兵左衛門・
組頭長九郎右衛門・地頭横目園田清之丞来候、須木
権茸山之岩右衛門ニも同断、観音寺法印・赤木七郎
右衛門・伊福十郎太来候、当年者徳熊七才ニ而昇立
取ニ而候間、家内中打寄酒給度話合之役々横山龍見・

横山伴之進・富満武右衛門・斎藤武兵衛・赤木仲蔵・

横山荘右衛門・横山織兵衛・井上嘉兵衛招呼酒共為
吞候、鈴木龍之助ニも来同断留候、八ツ前より招呼

七ツ半時分各帰、同刻伊福十郎左衛門馬ニ乘来、乘
候様申候ニ付乘候、夜入五ツ時分隊候事、

六日 晴後雨、

朝六ツ起、卷藁射候、六ツ半時分十郎太馬乘来候而
乗候ニ付出一見いたし候、四ツ時分丸田氏被来候、
伊福十郎左衛門・富満武右衛門・井上嘉兵衛出勤、
昼卷藁射いたし候、八ツ前より伊福十郎太母来、夕
方迄相晰候、十郎太ニも一刻来候、夜入四ツ時分隊
候事、

七日 間々小雨、

oooooooooooooooo

朝六ツ起、卷藁射いたし候、伊福十郎左衛門・富満
武右衛門・横山織兵衛出勤、今日者当所締方入佐五
次右衛門殿企之由ニ而鉄砲有之、拙者出不申哉之旨
承候ニ付九ツ前より出候、伊福十郎太ニも来、是も

鉄砲二而候、外二右名前三人并横山龍見・同伴之進・弓削次右衛門・羽島榮之丞・脇元嘉八郎・大脇七左衛門二而候、夕帰宅、夜四ツ時分臥候事、

八日 朝小雨、後霽、

朝六ツ起、卷藁射いたし、夫より稽古所江為見分差越候、五ツ時帰、吉次郎・徳熊江書物為読、八ツ過赤木七郎左衛門所へ蚕之糸繰見二一刻参候、七ツ過伊福十郎太・赤木七郎左衛門馬乗ニ参候而拙者ニも三鞍乗候、今日出勤伊福十郎左衛門・富満十郎太・横山莊右衛門二而候、今日高岡より直心影流市来善助門人吉富源八・市来百太郎・今井文右衛門・徳丸宇助・堀一弥太為稽古参候、明日八ツ後稽古いたし候答承候ニ付、拙者ニも出候而可見と相達置候、野尻よりも海老原伴助・荒武政右衛門・志和知某来候由、夜五ツ時分臥候事、

九日 雨、

朝六ツ起、卷藁射いたし候、吉次郎江書物為読候、

十郎左衛門・武右衛門・莊右衛門出勤、嘉兵衛にも出候、九ツ半時分十郎太来、八ツ後より昨日来候高岡之修行者当所之者共と稽古いたし候ニ付見候、夕相済引入候、遠方より来りたる事候ニ付、鶏汁二而もいたし差出具候様金子百疋織兵衛江渡シ候、夜入四ツ時分臥候事、

十日 終日雨、

朝六ツ起、卷藁射いたし、吉次郎江書物為読候、終日書物共取扱候、夕赤木七郎左衛門来馬こねつミ呉候、暫相嘶候、夜入岩次郎・伊太郎招呼焼酎為呑候、

十一日 雨、

朝六ツ山之口居地頭大野清左衛門殿・馬関田居地頭安田助右衛門殿江御用封差出、五ツ半より飯野江参四ツ半着、一昨日高岡より来候修行者今日飯野ニ而致稽古候ニ付見ニ参候、最早初り居九ツ半相済候、弁当給直ニ打立、八ツ半帰宅、丸田氏被来、高野瀬庄助・富満武右衛門・井上嘉兵衛出候、嘉兵衛二者

飯野へも差越候、夜入又丸田氏一刻入来、五ツ半時
分隊候事、

十二日 晴、

朝六ツ起、卷藁射、夫より稽古所江出劍術見分いた
し、夫より今日者終日湯治仕廻、夕平馬香湊(香港カ)より之
書状相届、羽島出船後始而之左右也、暮より観音寺
被来、五ツ過被帰、無程隊候事、

十三日 快晴、

朝六ツ前起、五ツ半より湯治打立、おたね并吉次郎・
徳熊ニも參候、下女式人・岩次郎・伊太郎・太郎供
いたし候、拙者二者馬より吉次郎江半分ハ為乗候、
白鳥湯治場江八ツ過着、満足寺江一刻參、直ニ湯治
場へ參候而入湯、久々ニ晴れく、暮より酒共少々
給、隊候事、

一湯治場江昨日飯野年寄朝稻佐多右衛門・組頭(空白)
・地頭横目并尻彦七郎来居候、地頭横目残し置、年
寄・組頭二者今日歸候段申候二付、何れも歸候而宜

候段相達候処、地頭横目二者些不快ニも有之候間、
湯治いたし度段申出候間夫形召置候、夫一人薪取ニ
而も可被為列来居候間召仕候様申候二付、夫二者不
及其為人召列来居候間斷之段相達置候、

十四日 快晴、

朝六ツ前起、入湯、明方ニも入候、四ツ時分白鳥御
社江參詣、夫より又々入湯、蒸湯ニも入候、夕より
飯野地頭横目并尻彦七郎・湯守栄助招呼、暮過各帰
候、夫より家来鮫島善兵衛・岩次郎・伊太郎招呼焼
酎共為吞候、五ツ過隊候事、夜度々湯入いたし候、

十五日 晴、

朝六ツ前起、入湯、五ツ半時分より湯守栄助案内ニ
而六観音參詣いたし、夫より不働池(空白)・濁り
池・もへの元并湯治場・大黒池見物いたし夕方帰、
入湯共いたし候得者、満足寺より為酒迎重一組・焼
酎一徳利被呉候、并尻彦七郎・湯守之栄助招呼相聞
候、五ツ過隊候事、

十六日 快晴、

晝より湯入いたし、四ツ過より平馬差越居候英国江之書状相認、お筆・福留七左衛門へ之相認候、間々二度々入湯、五ツ過臥候事、

十七日 快晴、

晝より入湯、四ツ過丸田竹翠殿・伊福十郎左衛門・横山織兵衛為見舞被来候、八ツ半時分被帰、無程又高原より丸山儀一郎来無程帰候、今朝六ツ過岩次郎鹿兒島へ帰シ候、飯野地頭横目も今朝御軍役方并馬関田居地頭安田氏江之御用封相渡帰シ候、夜入五ツ時分臥候事、

十八日 快晴、

朝六ツ起、入湯、四ツ過満足寺江先日より段々贈物之一礼ニ参候而無程帰、八ツ時分より飯野秋丸仲左衛門為見廻来候、無程帰、夜五ツ時分臥候事、

十九日 快晴、

朝六ツ起、四ツ時分より観音寺・伊福十郎太同伴ニ而来、四ツ過より締方横目入佐五次右衛門殿ニも被来、各八ツ過被帰候、七ツ前より上之湯江家内中皆々打列参候、夕帰宿、五ツ時分臥候事、

廿日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、四ツより椎茸山為見物家内中打列参、帰ニ満足寺江一刻立寄、四ツ半帰、九ツ過より上之湯江参度々入湯いたし、八ツ半帰宿之事、

一先日小林・飯野等江高岡より之劍術修行者名前

市来善助門人

吉富源八 市来百太郎 今井文右衛門

徳丸宇助 堀一弥太

廿一日 快晴、

朝六ツ起、入湯、夫より吉次郎・徳熊江書物為読、夫より上之湯江参、九ツ過帰、八ツ時安田喜十郎殿・福島何某殿・米良半之丞殿・馬関田年寄并地頭横目

被來候、各無程被帰、又飯野地頭横目并尻彦七郎來候、今日より締方横目入佐氏并染川（空色）殿被來、暮より五ツ半時分被帰候、昼も夕方も上之湯へ參三三篇ツ、入候、岩次郎も今日鹿兒島より帰來候、五ツ半過臥候事、

廿二日 快晴、

朝六ツ前起、上之湯へ參二篇、蒸湯へも同断入、六ツ半時分帰候、四ツ前入佐氏一刻被來、吉次郎・徳熊江書物為読、夫より又上之湯へ參三篇入、蒸湯同断二而九ツ過帰、八ツ過より又上之湯江參三篇、蒸湯同二而帰候、夜入五ツ時分臥候事、

○一御城下近比之御役替名前

御船奉行添役 郡奉行
税所五右衛門 大島清太夫
町奉行格是迄之通 当番頭是迄之通
福島半次郎 向井新兵衛
御兵具奉行席 御側役格御勝手方掛集成館
桂空右衛門 江日勤いたし候様
当御役二而御軍賦役見習 森川孫太夫
園田与藤次 上同
右松十郎太

右同
川南東右衛門 右同
御軍賦役見習 野元助八
松田健四郎 上同
御馬預 淵辺吉右衛門
相良弥兵衛 高田隼太
谷山居地頭 川辺居地頭
三原伝左衛門 高崎兵部
御馬預り 御馬預り
弟子丸弥平左衛門 関山新兵衛
御小納戸格 御兵具奉行席
二之丸御子様方御書物御相手 組方吟味役
兒玉五兵衛 大山格之助
御使番是迄之通
黒田嘉右衛門

大番頭

勤方は迄之通 西郷吉之助（隆盛）
御役料高百八拾石
右者未年功者無之候得共、兼而懸心頭致精勤、殊二昨年長賊犯闕之砌より引続長賊御征伐二付而も參謀致紛骨、直様解兵相成候儀共別而
御満足被 思召候、依之右之通御役替被仰付、御役料高被下置候、左候而旁別段 思召之訳被為 在候付、御家老中吟味之儀も都而承候様被仰付候条、諸帳面等如例可被申渡候、

五月

（桂久武）
右衛門

廿三日 快晴、夕より大雨、

朝六ツ時より吉次郎召列上之湯江參候、式篇入、蒸湯同断ニ而、五ツ時分帰、食後又湯ニ式篇入、七ツ後又上之湯ニ入、帰ニ足小指爪蹴起し候ニ付立帰り、湯もりより塩を貰ひ夫を手拭ニ包ミ当候而暫漬帰候、帰り而も又下之湯ニ同断ニ而漬候、痛ミ茂無之候、当所之湯切疵ニ者余程印シ有之候ニ付、無程平癒可相成と存候、夕より五次右衛門殿入来、五ツ過被帰候、無程臥候事、

廿四日 雨、霽、

朝六ツ起、入湯、四ツ時分雨晴打立帰る、伊太郎独り残し諸道具も残し置帰之含ニ而候処、中途ニ而人馬引逢、拙者ニ者七ツ前小林着、吉次郎ニも馬ニ而同断、家内諸道具等者夕方着、竹翠殿・十郎左衛門・織兵衛来候、五ツ半時分臥候事、

一拙者今日帰ニ付、諸道具荷付馬牽飯野之者自分馬より中途ニ而式度抱倒され、脊式度共ニ喰きれ面部大二摺敷無理成目ニ逢居候間、賃銭外ニ為養生料金子

百疋遣候、白鳥ニ而も右之馬外馬牽をはね候由、腰ニ当り候得共なたを差居、夫故強くハ当らす何とも無之由、嚴敷馬ニ而候、

廿五日 終日雨、

朝六ツ起、赤木七郎左衛門・伊福十郎太来候、観音寺同断、其外役々・竹翠殿等追々被来候、明日伊太郎鹿兒島之様遣候ニ付書状段々可遣と認掛候得共、八ツ後より漸く相認候、夕相濟、町田郷十郎・町田藤八殿・伊藤彦介殿・宮里喜次郎殿・右松十郎太殿・七左衛門江書状認候、今日平馬英国ロントン着之日賦ニ候間、心祝ニ家内中吸物壺ツにて酒共給候、岩次郎・伊太郎も招呼候、善兵衛者昼観音寺江為參由候処、焼酎被為吞醉居候由、真之下戸ニ而猪口ニツ三ツ位ニ而大酔いたし候者ニ候、四ツ時分臥候事、

廿六日 終日雨、

朝六ツ起、四ツ後家内取集、九ツ時分吉次郎・徳熊江書物為読、時任宇兵衛・押川愛次郎・横山莊右衛

門・横山織兵衛出勤、八ツ後巻藁射いたし候、今朝
伊太郎鹿兎島之様遣候、夜入五ツ前隊候事、

論候様被仰付候条可相達事、

五月 式部

○一慶応

右之通被相改候旨先月十八日於江戸被仰渡候段申来
候間、奉得其意先月十八日より諸書付等慶応と可相

廿七日 雨、

改候、此旨諸所地頭江可申渡候、

朝六ツ過起、書見、吉次郎・徳熊江書物為読、巻藁

五月 (川上久美)
式部

射いたし、宇兵衛・愛次郎・織兵衛出勤、今日者終

右之通五月十一日表御用人座より取次御用ニ而被仰
渡候、

日書見いたし、夜六ツ半時分隊候事、

廿八日 朝自齋、

○

寄合以上之面々往々重職をも被仰付、国家之大事委
任可被仰付身柄ニ而、一涯志を勵し文武致修行、往々
御用立候様可心掛と之趣者 御先代様より度々被仰
渡置候通ニ而、何れ幼少より勸善之友無之候而者文
武修行も難整訳合ニ而、当分寄合以上之嫡子・末子
其方限諸士交候向も有之由付、以来右家柄之面々者、
一統右同様諸士共ニ親敷可相交内稽古所等江致出席、
文武之修行者勿論、時世至当之正論互ニ講習被致討

朝六ツ起、吉次郎江書物為読候、夫より巻藁射いた
し、宇兵衛・愛次郎・織兵衛出勤、丸田氏入来、八
ツ時分より年寄・組頭・地頭横目招呼、豕汁ニ飯振
舞、飯前酒共いだし取看者何も無、生玉子・塩辛・
瓜のなら漬ニ而候、相談役横山龍見、年寄時任宇兵
衛・伊福十郎左衛門・高野瀬庄助、与頭井上軍兵
衛・押川愛次郎・横山六郎右衛門、地頭横目赤木仲
藏・横山織兵衛、本年寄相勤候伊福十郎太・赤木七

郎左衛門二茂来候、竹翠殿同断、各七ツ半時分帰る、夫より卷藁射、射場も射候、夜入四ツ時分隊候事、

廿九日 雨、

朝六ツ起、書見、吉次郎江書物為読候、夫より又書見、宮之原喜兵衛赦免ニ而沖永良部島より先日帰候由ニ而、其後茶買円方被仰付来候由ニ而九ツ前来、八ツ過帰候、今日八ツ時より堀之内半五左衛門・栗屋仙右衛門・堀喜右衛門・斎藤八郎左衛門・時任宇兵衛・赤木仲藏・横山丹碩・横山織兵衛招呼、昨日同様家飯寄合候、野尻より寺田半左衛門・海老原伴助来候、各七ツ過帰、夜四ツ時分隊候事、

日史第四十八

慶応元年乙丑閏五月中

名越時敏（花押）

朔日 雨、

朝六ツ起、書見、吉次郎江書物為読、五ツ時分伊福十郎太・赤木七郎左衛門来、四ツ時分赤木仲太左衛

門同断、大脇七左衛門・斎藤武兵衛・横山織兵衛出勤、堀之内半五左衛門・高野瀬庄助来候、八ツ過より観音寺法印被来、夕方被帰、平馬（空白）旅為精願子待ニ而家内中九ツ時迄起居候而同刻隊候事、四ツ時分迄者善兵衛・岩次郎も来居候、

二日 雨、雷鳴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、大脇七左衛門・斎藤武兵衛・横山莊右衛門出勤、伊福十郎左衛門・堀之内半五左衛門も出候、竹翠殿同断、終日書見ニ而候事、

三日 雨、

朝六ツ起、吉次郎江書物為読、七左衛門・武兵衛・莊右衛門出勤、高野瀬庄助も来候、四ツ後洪水ニ付川見として吉次郎・徳熊列出候、横山莊右衛門も相付候、帰ニ観音寺不働明王江参詣、直ニ帰宅、夕より竹翠殿入来、暮被帰候、四ツ時分隊候事、

四日 間々小雨、

朝六ツ過起、吉次郎・徳熊江書物為読候、竹翠殿被
来、大脇七左衛門・斎藤武兵衛・横山荘右衛門出候、
夕卷藁射いたし、終日書見ともいたし候事、

五日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎江書物為読候、高野瀬庄助・斎藤
武兵衛・横山荘右衛門出候、今日牡丹餅いたさせ右
之者共并竹翠殿・横山六郎右衛門・井上嘉兵衛江も
申遣候而寄合候、夕方観音寺申遣兩人ニ而弓射いた
し候、暫被相咄、今晚ハ平馬為精願(巳カ)已待いたし夜起
いたし候、

六日 雨、

夜前夜起いたし、六ツ過より五ツ時迄臥候、夫より
書見いたし候、夜前夜起之故動眠り存外出来兼候、
終日同断ニ而候、庄助・武兵衛・荘右衛門出勤、夕
方竹翠殿入来、暮過迄被相咄、五ツ過臥候事、

七日 雨、

朝六ツ起、今日者終日書見いたし、夕方乘廻しより
鈴木龍之助所稽古所見ニ參候、暮前帰宅、夜入五ツ
過臥候事、今日者庄助・武兵衛・荘右衛門出勤、

八日 雨雷鳴、

朝六ツ起、吉次郎江書物為読、庄助・武兵衛・荘右
衛門出勤、徳熊へも又書物為読候、終日書見、夕方
卷藁射共いたし候、今朝者稽古所江も出席、劍術致
見分候、昼十郎太・竹翠殿被来候、

九日 雨、

朝六ツ起、書見、庄助・武右衛門・荘右衛門出勤、
今日者終日書見・字書共いたし候、夕方稽古所ニ而
劍術いたし候ニ付參見候、夜入五ツ時分臥候事、
一今日者須木地方檢者佐々木伊兵衛殿被来候、此節始
而須木江差入之由、七月廿日比迄滞在之含之由晰ニ
而候、明日より參るとの事候、居所荒田郷原家前之
由候、

十日 間々雨、

朝六ツ過起、吉次郎江書物為読候、四ツ過締方入佐
五次右衛門殿へ一刻參、夫より文行堂江參、吉次
郎・徳熊ニも召列候、九ツ過帰、卷藁射いたし、夫
より暮迄唐紙二字書共いたし候、武兵衛・庄助墨摺
二来候、夜五ツ半時分臥候事、

十一日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、四ツ後手習・
墨摺共いたし、九ツ過より劍術為見分稽古所江參候、
直心影流・示現流致見分候、八ツ過帰る、郡奉行談
合役面高与蔵殿ニも稽古所江被參居候、相濟仮屋江
被来候、無程被帰、明日よりハ野尻江被參候と承候、
無程観音寺被来候得共、無構唐紙ニ大書書いたし候、
四ツ時分より宇兵衛・武兵衛・嘉兵衛出勤、軍兵衛、
夕方七郎左衛門来候、夕観音寺と兩人ニ而弓射いた
し候、相濟暫被相嘶被帰、夜四ツ時分臥候事、

十二日 雨、

朝六ツ過起、吉次郎江書物為読、宇兵衛・武右衛門・
嘉兵衛出勤、今日終日書見・手習等いたし候、夜五
ツ時分臥候事、

十三日 間々小雨、

朝六ツ起、今日者四ツ前より飯野江武術為見分差越、
八ツ前より飯野大河平孫八郎殿へ帰掛見廻候、夕帰
夜入五ツ前小林仮屋へ帰着候得者、鹿兒島より町田
藤八殿・宮里喜次郎殿・伊藤彦介殿・七左衛門より
書状来居候ニ付則一見いたし、何歟といたし候間ハ
九ツ過相成、九ツ半時分臥候事、

十四日 間々小雨、

○ 朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、仮屋庭イチ
之大木枯候ニ付今日者切方いたし、五ツ半時分より
山師四人来候而切方いたし、七ツ過ニ倒れ候、木之
両縁ニ綱付として仮屋番(空白)「新五左衛門登り誠ニ
達者、見るに四足より汗出候、実ニ命之掛替之事、
首尾能相濟綱付下り候ニ付致安心、為褒美金子百疋

遣候、外綱引人数多来候二付、相濟皆々江焼酎共為
呑候処、又々右木之枝江皆々取掛薪用二切りこぼめ、
夕方各帰候、廻り式丈余、長十七間有之候木二而珍
敷大木二而候、去春之比二而も候哉、仮屋内氣不揃
之者居候而根之皮を惣而削り廻り候由、拙者差入之
時分迄ハ未生実も多く付居、生居候事不時機ニ存候
処、無余枯捨り候事、半五左衛門・武兵衛・嘉兵衛・
観音寺・七郎左衛門・十郎太来候、竹翠殿ニも夕方
より被来酒共寄合給候、五ツ半時分队候事、今日伊
太郎来、平馬左右有之候事、

十五日 小雨、

朝六ツ過より剣術為見分稽古所へ参候、半五左衛門・
武兵衛・嘉兵衛出勤、今日者家来之喜兵衛外ニ壹人
須木茶買入より帰り之由ニ而来候、茶一斤壹貫文余
ツ、ニ買入候由、加治木筋須木迄之間右之手ニ買入
候分過分之斤高二候由、今日者平馬其外島津久鑿登殿・猪之
助殿・美代氏・兵左衛門へ之書状相認候、四ツ時分
臥候事、

十六日 間々雨降、

朝六ツ起、今朝伊太郎打立帰候、吉次郎・徳熊江書
物為読候、十郎左衛門・伴之進・嘉兵衛出勤、終日
手習共いたし候、立木式本家来之鮫島善兵衛江為立
候、壹本者吉次郎打用二候事、

十七日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、十郎左衛門・
伴之進・嘉兵衛出勤、御用封相認鹿兒島江仕出候、
十郎太・七郎左衛門夕より来、馬差にも来候而仮屋
馬場ニ而馬乗いたし候、田布施之太郎と申者ニ而弟
子壹人列来候、夜四ツ時分队候事、

十八日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過より竹翠殿被来、十郎左衛門・伴
之進・嘉兵衛出勤、馬差・十郎太・十郎左衛門・七
郎左衛門来馬乗いたし候、四ツ過より御用封相認、
御用人宛竹封箱并安田氏外物主連名之御用封差出候、
七ツ時分より十郎太・七郎左衛門・十郎左衛門・伴

之進・馬差来馬乗、暮相濟、十郎太招呼酒為呑候、馬差兩人外二而同断、十郎太二者無程帰、四ツ時分臥候事、

十九日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、四ツ前より馬差来馬乗、十郎左衛門・十郎太・七郎左衛門来候、十郎左衛門・伴之進・嘉兵衛出勤、七ツ前より馬差来、七郎左衛門・十郎左衛門・十郎太・伴之進・観音寺法印来馬乗、高岡より来居候土師尚斎と申候医師来候、夜入四ツ時分臥候事、

廿日 雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、十郎左衛門・伴之進・嘉兵衛出勤、今日者終日読書二而候、夜入五ツ過臥候事、

廿一日 雨後晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、伴之進・織兵

衛出勤、十郎太来、九ツ時分より七ツ時分迄武術見分、間々二者朝より書見・字書、夕方吉次郎江立木打いたさせ、国府より相勤居候譜代之家来江も劍術いたさせ度存候而立木為打候、夜入四ツ時分臥候事、

廿二日 晴、夕より雨、

朝六ツ過より稽古所江參候而武術見分、夫より書見四ツ時分当所締方兩人被来候、締方入佐五次右衛門殿より竹細工之吸筒弁当并弁当持參二而絵書呉候様被申候間、九ツ時分被帰、無程打立吸筒二者飲中八仙顯、弁当二者梅之絵書調候而為持遣候、今朝馬乗いたし候由二候得共不出候、夜入四ツ時分臥候事、

廿三日 間々雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、七左衛門・伴之進・織兵衛出勤、宿許書状差出候、書見いたし、夜入五ツ半時分臥候事、

廿四日 間々小雨、夜中雷風烈、

朝六ツ起、四ツ過馬差来、仮屋馬場ニ而差方乗方いたし候、七郎左衛門来、七左衛門・伴之進・織兵衛来、八ツ時馬洗江出張自身ニも洗候、七ツ時分より七郎左衛門・観音寺・馬差来、馬乗差方いたし候、夕方赤木仲太左衛門・伊福十郎太来、暮前帰、夜入五ツ半時分臥候事、

廿五日 曇、

○ 朝六ツ起、明日馬改として今日より御厩人数野尻差入有之候候(行カ)ニ付、当年より居地頭并談合役ニも立合見分いたし候様被仰付、拙者ニも今日より差越之賦候処、岩瀬川夜前之雨ニ渡リ無之、何れ今日より不差越候而者間ニ逢兼候ニ付、太鼓橋之方廻り通行いたすべくと存候得とも、是も馬通融者無之由ニ而、然れ者歩行ニ而可差越と申候得者、高原之川者難守辺より打出し候川ニ而、雨止候得ハ早く水も引候ニ付、高原より野尻之様參候得ハ、高原・野尻境之猿瀬川者兼而船渡しニ而、大抵之出川迄ハ渡し候由、彼方通行可然候半と役々より承候ニ付其方ニ相決居

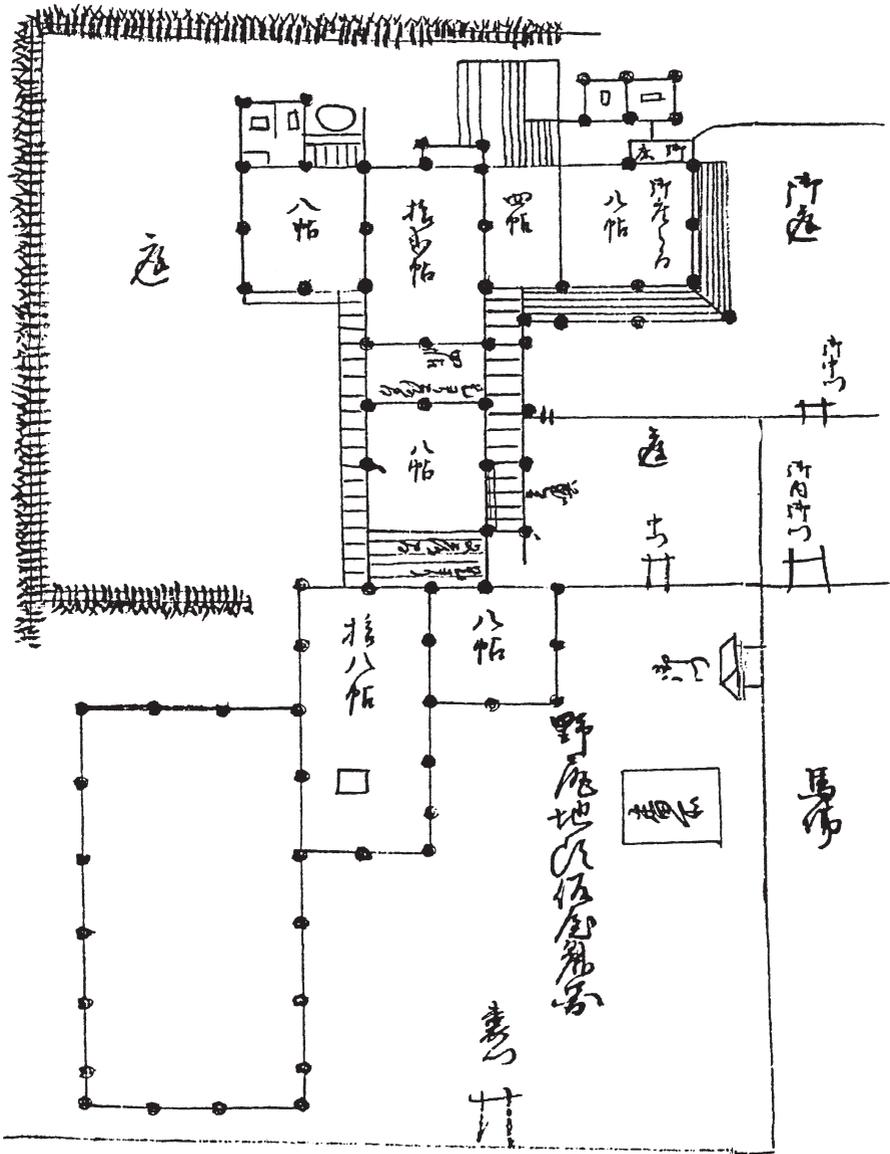
候処、四ツ時分野尻より案内兩人来候而太鼓橋を通り候処、太鼓橋少し川下之方草切馬渡り候を見候由、就而者乗馬ニ而右之処馬之分ハ渡し、拙者ニ者太鼓橋之様通行候而渡り可然候半、右川馬者兼而引渡り馴候者罷居候間、夫ニ為乗可申段承候而其通相決、四ツ時打立候処随分馬率渡り候得共脇之上ニ懸り候由、夫ニ暫者隙取候訳も有之、其上大廻り道故、漸々八ツ前野尻仮屋着、無程面高与蔵殿被来、又無程御馬預野村太左衛門殿ニも被来、各夕方被帰候、夜入五ツ半時分臥候事、

廿六日 快晴、

朝六ツ起、兎横山武吉外ニ忝人紙四五拾枚持參字を書呉候様申候間、四ツ時より九ツ過まで書方いたし候、八ツ半時分より馬改として御馬預其外町江致出会、夕方仮屋へ帰、夜入五ツ時分臥候事、

廿七日 九ツ半雨降出す、

朝六ツ起、五ツ時分一刻面高氏入来被帰、又無程被



来候、五ツ過より武術致見分候、四ツ時野尻打立、岩瀬川江行掛り人之涉り候を見候得者、腰ニ掛り荷馬一疋川中ニ而転ひ返り候ニ付、須木道方へ廻り帰り九ツ半時分帰宅、七ツ時より小林衆中并中宿者之持馬改方有之、御馬預其外立会候、夕帰宅、先日より大工召呼定器膳いれこにて六ツ、夜食膳式十人前為作候ニ付、暮より召呼候而焼酎為呑候、暮過一刻押川愛次郎来候、明日より肥後江人參種買入として差越候段申出候、

廿八日 雨、未之刻過より甚雨烈風、

朝六ツ起、書見、吉次郎・徳熊へ素読いたさせ、庄助・伴之進・織兵衛出勤、八ツ過十郎太来、昼過御用書付いたし、夕竹翠殿入来候、今日者須木馬改有之筈候処大雨ニ而出水故不相調、夫故御馬預野村氏嘶ニ被来候様申遣置候得共、余り大雨故大儀と存候間、天氣宜日被来候様又々申遣候、夜五ツ過臥候事、

廿九日 間々小雨、

朝六ツ起、庄助・伴之進・織兵衛出勤、今日町ニ而小林牛馬改ニ付八ツ過出張、吉次郎・徳熊ニも召列候、夕帰宅、今日須木牛馬改東方ニ而御厩組ニも手分ニ而改方有之候故、彼方江者丸田氏遣候、暮被帰候ニ付遠方大儀ニ存候間、酒迎ともいたし相待被来、五ツ時分被帰候、四ツ時分臥候事、

晦日 曇、夜入大雨、

朝六ツ過起、五ツ時分十郎太来候、四ツ時分より庄助・伴之進・織兵衛出勤、十郎左衛門・観音寺・七郎左衛門ニも飯野秋丸仲左衛門馬来居候間乗方いたし見候、七ツ半時分より御馬預野村太左衛門殿・談合役面高与蔵殿・旗預拙者用達兼務丸田竹翠殿入来、夜四ツ時分被帰候、

日史第四十九

慶応元年乙丑六月中

名越時敏（花押）

朔日 晴、

朝六ツ起、伊福十郎左衛門・横山六郎右衛門・横山

閏五月廿五日 御通達

莊右衛門出勤、昼時分稽古所へ参、心影流・示現流致見分候、伊福十郎太・赤木七郎左衛門・赤木仲太左衛門・赤木仲藏・横山織兵衛・井上嘉兵衛・堀之内半五右衛門・横山伴之進来候、郡奉行面高与藏殿・黒葛原源助殿昼時分被来候、暮より大工招呼酒共為吞候、四ツ時分臥候事、今日夜食膳式十人前成就来檜木、

○一銅錢他邦江差出候儀不相成、米穀類其外御領内不足之品他領より買入として銅錢引渡候分者其通可取計旨、去年三月訳而申渡置候趣有之候処、此比二いたり肥前表并日州表銅錢過当之相場を以致通融候哉二相聞得、自然姦商共不正筋之致取扱、無免許他邦江拔出候而者不相濟候間、猶又心得違之儀無之様支配頭・主人等より屹と可被申付候、就而者御当地之儀者蒸氣船生産掛・御徒目付并廻方横目・津畑横目、諸郷之儀者居地頭又者請持掛・郡奉行者勿論、締方横目・津口番所詰其外見聞役より一涯嚴重可致取縮候、左候而、無免許銅錢拔出候ハ、見当次第石品々取揚届可申出候、左候而、其者江被成下拔^{致歟}錢等者者屹と罪科可申付候、此旨町中江可申渡旨町奉行江申渡、家来末々迄主人等より可申聞旨奥・表・御勝手方江致通達、居地頭之面々江可申渡候、

二日 霽、

朝六ツ起、稽古所江参致見分候、四ツ時堀之内半五右衛門・六郎右衛門・莊右衛門出勤、十郎左衛門今日者詰前二而候得共一刻出勤、須木江馬求として参度存候二付、半五右衛門江相頼候段申出候、十郎太来候、竹翠殿同断二而候、大久保之袈裟市二も来、高原二才駒取入度申出、役目之者江申入呉候様承候得共、当年より拙者二も立合改方いたし候様被仰付候二付而者、所用分馬者残し置、其余を脇方売払候様申付候間、夫二而宜候ハ、随分取入出来候様可相計と返答いたし置候、

閏五月

右衛門

(喜入久高)

撰津

(小松清庵)

帶刀

三日 昼より大雨、

朝六ツ起、五ツ半時分より高原抜川江為馬改立合参

候、四ツ半過着、八ツ過より御馬預野村太左衛門殿

旅舎江参候、七ツ時分迄相嘶、夫より暮馬改出合、

夫より旅亭江帰候得者錫杖院より焼酎一徳利・重一

組被呉候付、地頭横目丸山儀一郎寄合相開候、帰候

跡二而宿亭主并家来之源助・袈裟市・岩次郎も召呼

為吞候、五ツ過臥候事、

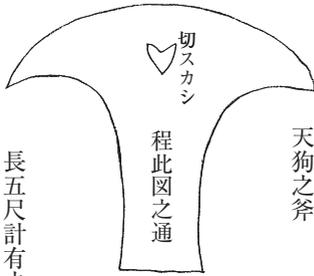
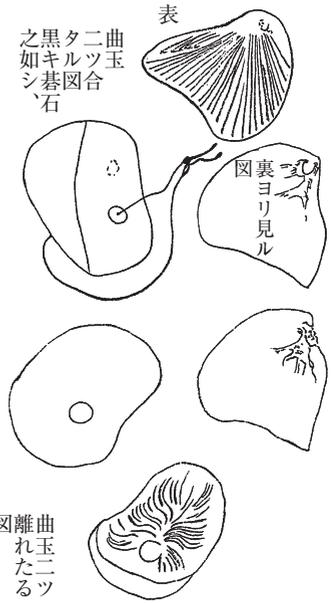
四日 雨、

朝六ツ起、五ツ半時錫杖院参詣、御宝物・曲玉・龍

之鱗・天狗斧・天狗之杖・性空上人珠数(数珠カ)・积杖(錫杖カ)・卜

ククワウなど致一覽候、左二写、

○ 龍之鱗



長五尺計有之、天狗之杖と言伝鉄棒有之也、

神徳院

御社江高原二才

相中ヨリ寄進

之額之絵面白

図二而、殊二見事

二候間写置者也、



六日 雨、

朝六ツ起、御用書付等いたし候、十郎左衛門・六郎

右衛門・莊右衛門出勤、都之城より来居候医師志摩

柳園致面会度承候二付一刻面会、家来源助ニも来候、

七日 間々小雨、

朝六ツ起、役々出勤昨日同断、暑中ニ付役々相揃改

服ニ而来致面会候、吉次郎・徳熊江書物為読候、当

分大工江輪廻刀庫為作候二付、度々細々木屋へ参候、

暮より大工招呼焼酎為吞候、五ツ過臥候事、

八日 朝間々小雨、後霽、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、庄助・六郎

右衛門・莊右衛門来候、今日者昼時分輪廻刀庫出来

候、七ツ過十郎太来、馬差来乗方有之見候、夜入五

ツ過臥候事、

九日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、庄助・六郎右

四ツ時秋川（被川カ）旅宿江帰り、四ツ過打立小林之様帰る、
八ツ過帰宿、暮より大工招呼焼酎為吞候、五ツ過帰
り、四ツ時分臥候事、

五日 間々雨、

朝六ツ過起、稽古所へ参剣術致見分候、五ツ時引入、

吉次郎・徳熊江書物為読候、莊右衛門出候、十郎左

衛門・六郎右衛門二者七ツ前出候、夕竹翠殿・観音

寺被来、夜入五ツ時分被帰候、四ツ前臥候事、

衛門・莊右衛門・軍兵衛・嘉兵衛出候、書見・馬乗
共いたし、夕方十郎太・七郎左衛門・観音寺・馬差
来候、夜四ツ前臥候事、

十日 快晴、

朝六ツ過起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、庄助・六
郎右衛門・嘉兵衛出勤、時任宇兵衛飯屋囲炉裏之間
作り之儀何様作り可申哉之旨申候ニ付致下知置候、
夜入五ツ半時分臥候事、今日飯野大河平清太夫其外
役々暑中見廻として来、

十一日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、庄助・六郎
右衛門・嘉兵衛出勤、昼ハ武術致見分候、夜入五ツ
時分臥候事、

十二日 快晴、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候事、諸事昨日同
断之事、

十三日 快晴、

暁七ツ半起、六ツ過より吉次郎召列、歩行ニ而飯野
武術為見分參候、帰り二者馬式疋かし候ニ付夫より
乗帰候、夜入四ツ時分臥候事、

一飯野ニ而富満正次郎殿当所締方ニ而被来、七左衛門
よりウスヤウ紙相頼相届、尤、面会之事、

十四日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、庄助・六郎右
衛門・嘉兵衛出勤、八ツ過観音寺不働參詣、七ツ半
帰、須木暖上野太郎左衛門其外役々暑中為見廻来候、
夜入五ツ半時分臥候事、七左衛門より書状并油竹筒
三ツ来、

十五日 快晴、夜九ツ時分より雨、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、吉次郎・徳熊
江書物為読、庄助・六郎右衛門・嘉兵衛出勤、昼過
より鉄砲七挺洗、夕十郎太来馬乗いたし候、紙屋よ
り国府家来銀助兄之由ニ而来候、夜入吉国孝之助来

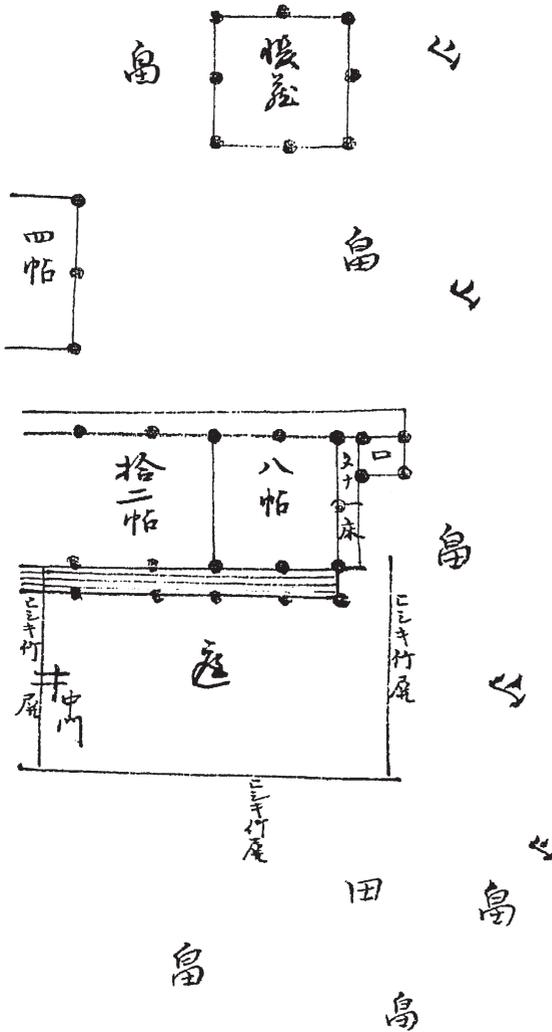
泊候、七左衛門書状来、四ツ過臥候事、

十六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、庄助・時任
 弥兵衛・嘉兵衛出勤、八ツ後玉子ニ而馬洗いたし、
 自身ニも大肌拔ニ而洗候、夜入五ツ半時分臥候事、

十七日 快晴、

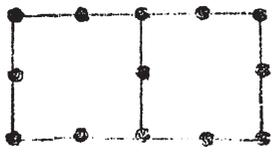
朝六ツ起、馬屋へ參、夫より畠杯見、庭江廻り軒端
 大蜂之巢見居候処、一疋之赤蜂肩先ニ飛来、(刺カ)指候而
 甚痛候、か、らん蜂ハ不差と申候世の顔も有之候得
(刺カ)
(兼腹カ)
 共、か、らん蜂にさ、れ甚迷惑強服ニ候、肩先俄ニ
 はれ出、則砂糖を付候得共痛ミ不止、一寸存付八ツ
 時分梅干を付候得者痛和き、八ツ半時分より余程快



島

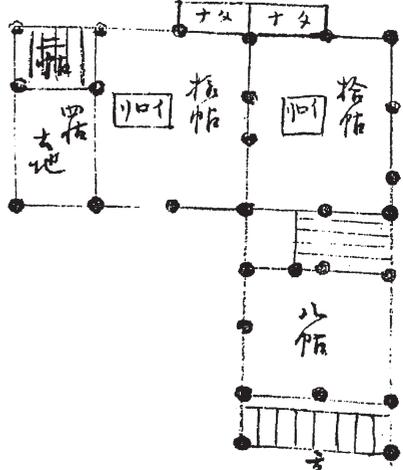
島

3)



与佐屋

修築
地
新
園
屋

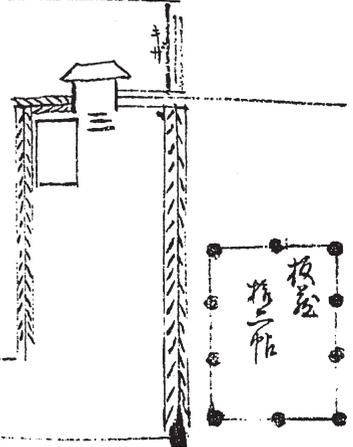
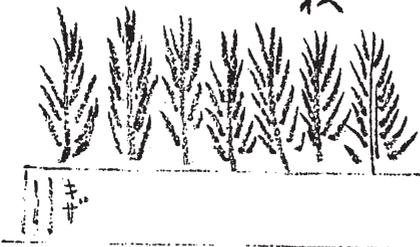


屋

土台

島

之
板



相成候、吉次郎・徳熊江書物為読、庄助・弥兵衛・嘉兵衛出勤、今日野元藤大江横目勤申付盃共いたし候、昼竹翠殿被来、夜入五ツ半時分隊候事、

十八日 快晴、夕暫小雨、遠雷鳴あり、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、吉次郎・徳熊へ書物為読候、庄助・弥兵衛・嘉兵衛出勤、赤木仲太左衛門・伊福十郎太一刻ツ、来、昼も間々ニ写本いたし候、夜入五ツ半時分隊候事、

十九日 小雨、昨夕二時計須木者別而之大雨にて為有之よし、
暁起、六ツ過より打立、須木江武術為見分參候、五ツ半時分着いたし候、武術致見分候、五ツ時分隊候事、

廿日 小雨、

朝六ツ起、五ツ過須木打立、九ツ前小林地頭飯屋江帰宅候得者、今日者時任宇兵衛・同弥兵衛・井上嘉兵衛出勤いたし居候、竹翠殿ニも被来候、夕方竹翠

殿被来、四ツ前被帰、四ツ過隊候事、

廿一日 昼暫雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、宇兵衛・弥兵衛・織兵衛出勤、四ツ時分より書物虫干いたし候、自身之写本式百九拾冊余之分ニ而候、八ツ時分より稽古所江出示現流・直心影流致見分候、夜入暮過より観音寺・十郎太同道ニ而来儀、四ツ前隊候事、

廿二日 晴、

朝六ツ起、諸書付見合、吉次郎・徳熊江書物為読候、宇兵衛・弥兵衛・織兵衛出勤也、四ツ半時分より文行堂江參候、帰宅、五ツ半時分隊候事、

廿三日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、今日昌寿寺(貴久)大中様御日柄六月堂ニ付夕方致參詣候、宇兵衛・弥兵衛・織兵衛ニも付来候、無程帰候、昼赤木七郎左衛門・源助来、夜入馬差之(幸白)「」来候、国府之小林間

屋浜之市之山本伊助ニも来盃共いたし候、五ツ過帰、
四ツ時分队候事、

太来候、夜入四ツ時分队候事、今日者書物其外土用
干共いたし候也、

廿四日 快晴、

廿七日 快晴、夜入雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、宇兵衛・弥兵
衛・織兵衛出勤、十郎太一刻来、当所町人上田周道
劍術面道具九揃持来、其内吉次郎稽古用として一揃
相求候、七ツ過昌寿寺被来、駿台雑話五冊借用ニ而
被帰、夫より門前江出馬乗見候、夜五ツ半時分队候
事、

廿五日 昼過より間々雨、

候様申候ニ付立寄候処、飯杯馳走之向相見得候得共
茶一ツニ而帰候、名前承候得者市之助と申者ニ而候、
七ツ時分小林仮屋江帰着、書籍土用干いたし候、夕
馬差見物いたし、夜入四ツ時分队候事、

朝六ツ起、宇兵衛出勤、昼錫杖院より使僧来致面会
候、書状も来候、吉次郎・徳熊江書物両度為読候、

廿八日 晴、

四ツ過当所締方富満正二郎殿被来暫被相啣候、夜入
四ツ時分队候事、

廿六日 晴、

朝六ツ起、吉次郎召列稽古所へ参候、今日より吉次
郎江拭合引立鈴木龍之助江相頼候、帰之上者天真流
稽古いたし候賦、一統江も宜様相頼候、宇兵衛・弥
兵衛・織兵衛出勤、今日より拭合初而いたし候ニ付
龍之助招呼盃共いたし度、夕方より招呼夜入五ツ時

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読、観音寺・十郎

龍之助招呼盃共いたし度、夕方より招呼夜入五ツ時

分歸候、宇兵衛・弥兵衛・織兵衛・十郎左衛門来候、竹翠殿へも申遣候得共、故障有之不被来候、夜入五ツ半時分臥候事、

廿九日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊江書物為読候、宇兵衛・弥兵衛・織兵衛出候、七ツ前より馬差方致見物候、夜入五ツ半時分臥候事、

日史第五十

慶応元年乙丑七月中

名越時敏

朔日 夕雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、八ツ時より武術見分、吉次郎二も稽古いたし候、七ツ過馬差見二出候、暮より十郎太・竹翠殿・馬差兩人来候、八ツ前より伊福ば、・七郎左衛門妻同道にて来、緩々相嘶、おたね亭主振、夜四ツ時より家来伊太郎・善兵衛・岩次郎招呼焼酎共為呑候、伊太郎者鹿兒島よ

り今日来、善兵衛者先達而より国府宿元江暇二而今日歸候、四ツ半過臥候事、

二日 快晴、

朝六ツ稽古所へ出武術見分、吉次郎二も出候而致稽古候、半五左衛門・軍兵衛・荘右衛門出勤、明日よりおたね鹿府江暫歸り二付役々出候、町田久慈内膳殿・町田藤八殿・町田家お筆・七左衛門江之書状認候、此節召抱候家来兄弟四人之親伝右衛門、明日おたね歸二付為見廻来候二付焼酎共為呑候、同家来源助・伝右衛門相中より焼酎・とふふ杯持来候、源助足相痛候由二而不来候、四ツ時分臥候事、

三日 快晴、

晝七ツ時分おたね・徳熊今日鹿府宿元江帰二付起出候二付、拙者二も起候、六ツ前竹翠殿被来、同人二も今日出府之筈候、同刻各出立、吉次郎二も起出候、六ツ時より吉次郎鈴木籠之進所為稽古參候、五ツ時歸る、半五左衛門・軍兵衛・荘右衛門出勤二而出候、

六ツ前役々段々来候、四ツ時分より家之内取集共い
たし候、八ツ半時分馬差見ニ出候、十郎太夕方来候、
夜入五ツ半時分隊候事、

四日 快晴、今日者宿元へ書状差出候、

朝六ツ起、吉次郎龍之助所劍術為稽古遣候、五ツ時
分帰る、吉次郎為読、九ツ前より富満正八郎殿被来、
麦飯共寄合候而七ツ時分被帰、夫より馬差見ニ出候、
暮より富満氏江昼より之約束ニ而被来、四ツ時分被
帰候、

一先月廿七日野尻江參候節讀書之童子左之通、

四書惣而素読済
孟子四読

神宮司弥九郎十三才

大学・中庸済

横山武八十一

論語読

小学一より済
小学四

園田佐次右衛門十二

大学・論語一済
論語二

荒武平助十一

五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ前より吉次郎召列高原江武術為見分
參候、四ツ時分着、參二者本道之川深く候間、武術

見分相済、九ツ時分より上手通温水より街道江出帰
候、八ツ半時分小林飯屋へ着、七ツ時分藤崎兵左衛
門殿此節廻米一件ニ而旅行之由、右ニ付而御用向承
候、夜入観音寺被来、四ツ時分被帰、無程隊候事、

六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎龍之助所へ遣候、五ツ時分帰、四
ツ後書物為読候、半五左衛門・軍兵衛・荘右衛門出
勤、九ツ時分上山孫七殿為締方昨日被来候由、入来
暫被相啣候、竹翠殿・美代氏連名ニ而御用封申刻差
出、宿許書状封込相頼候、今夜已待ニ而夜起者鮫島
善兵衛并当所家来之源助・拙者三人ニて候、

七日 快晴、

朝六ツ時已待相済、五ツ前迄隊候、夫より髪月代い
たし改服ニ而床ニ向拝礼、吉次郎も同様いたさせ
候、嘸・与頭・地頭横目共相揃、改服当日之祝儀出
候、鍋物・焼酎持来、四ツ時分被帰候、無程隊候事、

八日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎者稽古所為稽古出候、半五左衛門・軍兵衛・莊右衛門出勤、昼時分吉次郎江書物為読候、手習同断、終日書見、夜も同断ニ而四ツ過臥候事、

九日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎鈴木所江稽古ニ遣候、半五左衛門・軍兵衛・莊右衛門出勤、観音寺一刻被来候、今朝古障泥ニ而候得共進シ候処一礼ニ而候、夜入又飯野之中宿御小姓与是枝隆庵殿同道ニ而被来、四ツ時分被帰候、昼吉次郎江書物・手習いたさせ、拙者二者終日書状其外書付類取調ニ而候、四ツ半臥候事、

十日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎鈴木へ為稽古遣候、五ツ時分帰候而飯共給候と直ニ書物為読、夫より拙者ニ書付取調、九ツ前相濟銘々袋作入分候、袋数五ツ也、七ツ前馬差方見ニ出候、引入又吉次郎江書物為読、手習もいたさせ候、今日出勤半五左衛門・軍兵衛・莊右衛門

ニ而候、夕十郎太来候、夜五ツ半時分臥候事、

十一日 快晴、五ツ時分雨と成、

朝六ツ起、吉次郎江書物為読、半五左衛門・軍兵衛・嘉兵衛出勤、八ツ時分より稽古所江参候而武術致見分候、七ツ過引入、夜入四ツ時分迄書見ニ而臥候事、

十二日 雨、

朝六ツ起、稽古所江出武術致見分候、吉次郎江書物・手習いたさせ候、半五左衛門・軍兵衛・嘉兵衛出勤、終日書見、暮より細野之家来千太郎来招呼、五ツ過帰候、四ツ時分臥候事、

十三日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎鈴木所江為劍術遣候、五ツ過帰、四ツ時分書物為読候、半五左衛門・庄助・嘉兵衛出勤、噺者庄助今日より相勤候由承候、暮 御志やうろう様御前旅先之事ニ而何事も不出来、御灯明・御香・御茶共上ケ上酒をあけ候、暮より岩次郎・善兵

衛召呼候、四ツ時分臥候事、

十四日 朝雨後霽、

朝六ツ起、今日者旧例之弔踊有之、是迄者年寄共地頭名代ニ城山ニ相勤来候、当年者拙者自身出候哉之旨暖堀之内半五左衛門より承候間、弔者伊東氏之弔之心持ニ而者無之哉、城山と申者伊東氏之幕下之籠居候城ニ而ハ無之哉、左候得者当所為押被召置候地頭ニ候得者敵方之弔踊可參訳無之、殊ニ古城之跡ニ改服ニ而詰候様成儀者いやニ候、始城山ニ而踊り、夫より昌寿寺・観音寺江踊候由、是も敵之弔踊いたし候跡ニ而

(貴心)
大中様被為入候昌寿寺江踊候訳無之、昌寿寺より当年ハ踊り可然候、左候而、城山之方茂旧例之事ニ候ハ、踊之分者不苦候、然れ共是迄城山より先ニ踊付候事ニ而、踊りいたし候者共中飯抔仕ひ候ニ不都合之儀も候ハ、城山ニ而弔踊りと不名付昌寿寺踊ならし之心ニ而城山者能踊場所ニも候間、踊り候而も不苦と相達候而、役々吟味ニ而昌寿寺より先ニ踊り

可申旨承候、左候ハ、役々之儀も是迄城山江相詰候様昌寿寺江相詰可申旨相達、四ツ半時分より昌寿寺江參候、九ツ時踊り始り、八ツ過相濟、直ニ帰宿、吉次郎も召列參候、吉次郎者帰り、又観音寺江見物として參候、夜六ツ半時分観音寺被来、四ツ時分被帰、無程臥候事、

十五日 晴、今日者暑氣薄シ、

朝六ツ起、伴之進・嘉兵衛来候、軍兵衛ニも出勤、今日者御先祖様方素麵・西瓜共差上候、半五左衛門ニも出勤、吉次郎江書物為読候、夜岩次郎も眠く可有之と存候付、盆中軽キ備物ながら四ツ時分御土産ニ川江為流、夫より諸祝ニ焼酎共給候、善兵衛・岩次郎ニも召呼候事、

十六日 間々雨、

朝六ツ起、門前ニ而馬差候ニ付五ツ過迄出見候、夫より飯共給候而又々出見候、(町田久憲)内膳殿・藤兵衛殿・おたね・七左衛門・藤八殿江之書状差出候、夕また馬

差見ニ出候、夜四ツ時分臥候事、

十七日 間々雨、夜中一度馬を飼、

朝六ツ起、四ツ時分より富満正八郎殿入来、九ツ過被帰候、九ツ前飯野秋丸仲太左衛門武術為修行方暇願出候ニ付、直ニ仲太左衛門持参ニ而美代氏江次書相頼申出相成候様いたすべく旨申聞候、尤、美代氏江も書状差遣候、高岡より飯野江来居候鈴木辰弥ニも来ル廿一日蒸気船より上京之由同船之含之由申出候、十郎左衛門・愛次郎・嘉兵衛出勤、夕又馬差為見一刻出、雨降出し十郎太来候ニ付留置候、馬差之太郎も末席ニ招呼焼酎為呑候、昼赤木七郎左衛門江申遣暫来相嘶候、七郎左衛門珍敷早キ栗貫候ニ付、栗粉出来候ニ付打寄給候、栗粉にいたしたるハ七郎左衛門ハ初而給候由、珍敷結構之菓子当所ニ而此いたし様誰も存候者有之間敷と申候、夜入四ツ時分臥候事、

十八日 快晴、夜中兩度馬を飼、今夜竹翠殿夫婦郷有之

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、吉次郎出候而致稽古候、五ツ時帰、直ニ飯給髮結、又馬差見ニ出候、四ツ半引入写本、九ツ時分締方上山孫七殿入来、八ツ前被帰候、夫より吉次郎江読書いたさせ候、夜四ツ前臥候事、

○一夜前珍敷夢見候故書留置事左之通、

誰人共不知一人之老翁と一座候、其人我に云、国之政事者大船之碇を麻苧之強き大綱を以て釣たる如くなるへし、碇之四方の爪めを土農工商と見るへし、心ニ立所御上へなるへし、心の大綱一ツにて上るも下るも自由なるへし、土農而已富貴にて工商貧なるも悪敷、農工商富貴にて土商貧なるも悪敷、其余何れも片譲り者悪敷、何れも貧福者土農工商共二国中者難義之なきを第一なるへし、土農工商之内士之爪欠折れたるハ士之なきが如く、農の爪欠たるハ農なき国之如し、工商茂夫に同し、いづれも欠べからざるもの也、頭立人其心得を以政事尤然るへき事也と、聞終而夢覚、扱尤之金言哉、今予に解聞せし老翁者誰そやと思へどく誰となく、異形の老翁者去て風

の如し、

右教諭翌朝二成て弥高篤、夫国家に干戈起るの時者、士先に進んで干戈を治め、君を守護し民を安んず、国に農有て諸民を飢餓に落さず、工有て家屋・器物を調、諸民常住座臥を安んず、商有て国家之過財を他邦へ出し自国の不足を補ふ而已ならず平日諸用を弁す、士農工商有て一国立一家脩る、何れも凸凹なく衣食住之苦ミなくば、一国太平之沢に恩義深く、君者一言の下知に及ばず、士農工商共自恩愛を報するの志あるへきなれハ、国中の四民一統天性の直心に帰し、日新に四民善行を起し悪事退散すへからんや、

十九日 晴、夜雨、

朝六ツ起、吉次郎読書いたさせ候、十郎左衛門・愛次郎・嘉兵衛出勤、昌寿寺和尚被来、先日駿台雑話五冊遣置候処今日持来、又今日大久保武藏鑑三冊・翁問答三冊遣候、拙者今日者間々二者終日書見、夜入吉次郎江読書共いたさせ候、四ツ時分臥候事、

廿日 雨、夜中一度馬を飼、

朝六ツ起、吉次郎江読書いたさせ、十郎左衛門・愛次郎・嘉兵衛出勤、四ツ過より昌寿寺江參暫相嘶候、吉次郎も召列參候処、帰り二中途鍛冶之音する所あり、何之音歟と未鍛冶を不見之由申候間列參為見候、八ツ過婦宅、飯共給候得者伊福德之進絵を書具候様申候間、下手絵ながら書候、下手見苦敷候間、数枚之紙二而半分ハ字を書候、暮帰る、夜入五ツ半時分臥候事、

廿一日 雨、夜中一度馬を飼、

朝六ツ起、吉次郎江読書いたさせ候、十郎太来候、半五左衛門・愛次郎・織兵衛出勤、八ツ時分より武術為見分稽古所江參、七ツ過引入候、吉次郎同出候、帰候得者当所郷士野田源右衛門来居候間招呼、暮帰候、夜入五ツ過臥候事、

○一昨日昌寿寺より嘶承候、備後小野道(尾道カ)と申所江陰陽石有之、右二一休和尚之詠歌有之、石二割付小キ祠堂候由、

逢やいつわかるやいつといさしらす

石の契りのことわの世に

一休和尚者臨濟派之由候、

廿二日 雨、夕より霽、夜八ツ時馬を飼、

朝六ツ起、稽古所江出武術致見分候、吉次郎二も出致稽古候、半五左衛門・愛次郎・織兵衛出勤、八ツ

過迄書見いたし、八ツ後徳之進絵書ニ来致稽古候、

吉次郎二者書物為読候、夕方帰る、夜入四ツ過臥候

事、

廿三日 霽如くなりしが、九ツ時より又雨、

朝六ツ起、馬屋へ参、夫より竹翠殿江用事有之参候、

引入飯共給候而馬差見二出候、四ツ時帰掛又竹翠殿

江一刻立寄候、夫より吉次郎江書物為読候、夫より

書見、又夕迄兩度吉次郎江書物為読、夜者字を為書

候、夜五ツ過臥候事、

廿四日 雨、

朝六ツ起、吉次郎江書物為読候、九ツ時十郎太来暫

相噺候、高原与頭（空白）高帳引合として竹翠殿所

迄来居候付、明日調練之儀も有之候間一刻召呼候、

高崎より組頭田口九十郎来候二付致面会候、明日調

練且月山流薙刀致一覽度儀共相噺候、十郎左衛門・

愛次郎・織兵衛出勤、井上嘉兵衛二も出候、夜五ツ

半時分臥候事、

廿五日 朝雨、四ツ時霽、

夜八ツ半起、飯共為焚、六ツ時より高原江調練・武

術為見分参候、高原之者小筒手都合志岐小左衛門殿

より習候而能いたし候二付、拙者支配中ハ惣而彼之

手都合いたし候様いたし度存候間、今日者小林什長

一組一手之人数九人召列参候而稽古いたさせ候、四

ツ過調練場江出張、九ツ前高崎・高原合而一組之調

練致見分候、夫より高崎月山流薙刀稽古致一覽、人

数式拾式人にて候、夫より高原剣術示現流三拾四

人・天真流拾四人・水野流居相剣術十八人致見分、

中途より夜入本街道者川未水太ク候間、五日町之方

○ 江往来共通候、六ツ半時分帰宅、四ツ時分隊候事、

晝飯屋を出、円岳寺のほとりへ行か、りければ、

高千穂の峯に白雲の班にか、りたるを、

降積る雪と見えけり白雲の

かゝる高ねの明かたのそら

中途すから女郎花の盛りなるを見て、

花の齢いまを盛りの女郎花

手折もおしと見てややみなむ

折とらはしほれやせまし女郎花

はなの齢をたゝてこそミレ

調練のさまいといさましくて、

戦は、かたてはおかぬものゝふの

いくさならしにいさむうれしき

このもかのもの田面を見待りて、

豊年をまねきいる、と見へにけり

小田のいな穂の風になひくは

かへり路にて、

夕つく日よわるにつけて虫の音の

しけきハ露にたよるなるらん

夕つく日さ、すなりぬる小山田の

いなはにのほる露ぞ涼しき

廿六日

朝六ツ起、五ツ時分竹翠殿被来、昨夕出軍之節御制

度被召立候、二冊之字美代藤兵衛より写被遣候由二

而持来候、一篇通一覽之上写方共いたし候、伊福十

郎左衛門・愛次郎・織兵衛出勤、役所ニ而ハ昨日高

原江参什長共小銃手都合ニ而候、夕方平馬英国ロン

ドンより之書状国府之家来田中袈裟助持来、国府迄

福留七兵衛持越候由、書状文面者要書類聚之内江留

置候、夜入五ツ時分二隊候而九ツ過起、美代氏・お

たね・七左衛門江之書状段々用向有之、委敷相認候

二付、晝迄二書仕廻候、則袈裟助返ス、

廿七日 快晴、

昨夜九ツ過起、書状認晝相済、暫者可隊といたし候

得共、夜明候も無程隊候儀不出来、六ツ過起出候、

夫より日史留共いたし、四ツ過より北西方諏訪社江

参詣いたし、今日祭礼二而候、神楽上り、立宿二而
飯出候ニ付給、直ニ帰る、吉次郎召列、暖堀之内半
五左衛門・与頭押川愛次郎・地頭横目横山莊右衛門
付参候、夜入五ツ過臥候事、

○

けふ道すから、
かるかやのかる人もなくなつたつへのは

千種の花の数もまされり

蝉の声いまはたえ／＼聞ゆなり

あきのとりになりて来ぬらん

おのつから茂るをミレハ草も木も

夏をうれしとおもふものは

廿八日 朝暫細雨、

朝六ツ起、今朝者武術式日ニ而吉次郎出候、拙者ニ
も出候筈候得共些用向有之、横山織兵衛来候様申遣
候間不出候、無程織兵衛来用向相達、織兵衛高原江
参、黒木佐平太江面会承参事有之候、十郎左衛門・
愛次郎出勤、暫書見、四ツ半時分より八ツ時分迄吉
次郎江素読いたさせ、伊福が八ツ時分より嘶二来、

七ツ半帰候、七ツ時分吉次郎江手習いたさせ、夜入
又小字ニ而手習いたさせ候、五ツ半時分臥候事、

廿九日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎鈴木所へ為劍術稽古遣候、拙者ニ

者庭処々暫徘徊、五ツ過吉次郎帰り、夫より読書い
たさせ候、伊福十郎左衛門持来之短冊十枚ニ自詠相

認候、

○

遠夕立

鳴神の音もかすかに遠方の

かさなる山をすくる夕立

飛立て後にこそしれ道のへの

草のわつかに鶉すむとは

折とらはしほれやせまし女郎花

はなの齢をたゝてこそミレ

豊年をまねきいるゝと見えにけり

小田の稲穂の風になひくハ

夕つく日よわるにつけて虫の音の

しけきハ露にたよるなるらん

夕つく日さ、すなりぬる小山田の

いなはにのほる露ぞ涼しき

かるかやのかる人もなくたつのへハ

千種の花の数もまされり

蝉の声いまハたえく聞ゆ也

あきのとなりになりて来ぬらん

おのつから茂るをミレハ草も木も

夏をうれしとおもふものかは

た、かはハかたてハおかぬ武士の

軍ならしにいさむうれしさ

夫より書見共いたし候、七ツ時分より島津又七郎殿・

倉山民五郎殿入来、夕方被帰候、夫より竹翠殿被来、

馬差之太郎召呼候、夜入五ツ過臥候事、

晦日 快晴、

暁起、月代共いたし、茶漬一ツ給候而、六ツ時より

温水之又七郎殿旅宿江一刻見廻候、今日者四ツ時分

境廻り之由候間直二帰、五ツ過二小林之飯屋江帰着、

飯共給、直に馬差見二出候而四ツ時分引入、十郎左

衛門・愛次郎・織兵衛出勤、吉次郎へ読書いたさせ、

夫より書見、馬差見二一刻出候而引入、田中氏・野

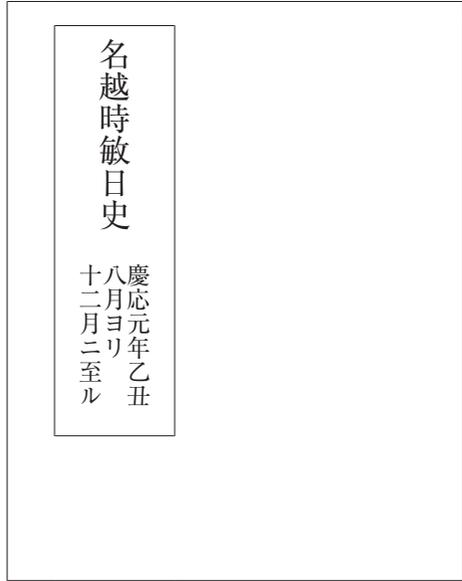
村氏江之書状相認、暮過より善兵衛・岩次郎召呼相

嘶候、五ツ時分観音寺用向キニ而一刻被来候、五ツ

半時分臥候事、

七月晦日迄

（表紙）



慶応元年乙丑八月ヨリ十二月ニ至ル

糺合済

日史第五十一

名越時敏（花押）

慶応元年乙丑八月中

朔日 晴、夕暫細雨、

朝六ツ起、須木当日之為御祝儀従昨夜来居候由ニテ、

四ツ時分出候、

暖

上野太郎左衛門

与頭

上野笹右衛門

地頭横目

梁瀬次右衛門

出、盃取替シ候、一篇イタシ候、夫ヨリ小林役々、

暖

伊福十郎左衛門

与頭

横山伴之進

押川愛次郎

赤木仲蔵

富満武右衛門

横山六郎右衛門

横目

堀喜右衛門

野本藤太

羽島栄之丞

弓削次右衛門

郡見廻

高岩十右衛門

牛馬役

柚木彦十郎

楮掛

富満市二

竹木見廻

押領司半左衛門

庄屋

前田徳左衛門

触役

上井休蔵

右之通出候、赤木仲太左衛門ニモ同断ニテ一役一人

ツ、盃イタシ候、

無役出仕

宮原助四郎

永野宗之丞

押領司佐門太

文田鮒右衛門

山下華右衛門

柗崎八郎右衛門

中山仁之介

西平右衛門

小田弥太郎

植村岩右衛門

永野伊八郎

堀次郎太

永山平八郎

松元源太郎

中山喜右衛門

永井助五郎

植村四郎左衛門

深瀬彦太郎

坂元清右衛門

大牟田藤之助

富満甚次郎

押領司万之進

永野莊太郎

柳川伝四郎

片之坂権左衛門

時任藤吉

川野万之助

高岩幸右衛門

野辺市助

齐藤伊太郎

坂元七郎右衛門

竹之下与一郎

温水源二郎

時任清太夫

水間藤助

里岡正之助

中山伝次郎

西田清太郎

大脇彦左衛門

温水次兵衛

溝口伝兵衛

川原源次郎

赤木清右衛門

榎木登七郎

片之坂助左衛門

松元喜兵衛

押領喜之助

山口仁藤太

片之坂勇吉

富永源右衛門

青山直二郎

永山次兵衛

壺岐彦左衛門

西田与次郎

富満矢九郎

脇元清一郎

山口孫七

有馬孝左衛門

川野嘉多治

森岡伊兵衛

田畑新蔵

押川彦助

森岡矢九郎

本野宗五郎

寺師十五郎

斎藤尋之助

井上市助

赤木徳右衛門

堀善太左衛門

肥後甚太郎

夫ヨリ飯野、

嘜

朝稲佐太右衛門

組頭

壱岐市郎右衛門

井尻彦左衛門

盃取替シイタシ候、夫ヨリ高原、

嘜

田口伊兵衛

組頭

村田仲兵衛

横目

宮田庄次郎

地頭横目

丸山儀一郎

出候テ盃同断、夫ヨリ野尻、

嘜

横山弥次右衛門

組頭

海老原藤九郎

地頭横目

海老原伴介

出候、盃右同断、終テ無程赤木七郎左衛門・伊福十

郎太来り、緩々相嘶、夜入五ツ過歸り候、夫ヨリ細

野之家来兩人昼ヨリ来り居り候ニ付招呼酒トモ為吞

候、四ツ時分歸ル、夫ヨリ善兵衛・岩次郎招呼候テ、

相嘶候テ臥候事、

本書朱書

一今日ハ永田平之園ニテ所中之角力有之候、毎年取候事之由、吉次郎見物ニ遣シ候、十郎左衛門・（空白）兵衛付参候、

二日 間々雨、

朝六ツ起、稽古所へ出候テ武術致見分候、吉次郎出候テ致稽古候、吉次郎へ書物為読候、十郎左衛門・武右衛門・莊右衛門出勤、十郎太四ツ後一刻来候、夫ヨリ書見、八ツ後吉次郎へ読書イタサセ候、御用之儀ニ付海老原伴助一刻出候、夕方ヨリ観音寺申遣候テ被来、又竹翠殿モ明日ヨリ湯治トシテ白鳥へ被参候由被申候、各五ツ時分被帰、観音寺ハ今晚ハ馬差へ鞍置祝ヒニ焼酎トモ被為吞約束之由ニテ被帰候、二才駒差初テ鞍ヲ置乗候時、チント祝ヒニ馬差へ皆焼酎トモ為吞候由、夫ヨリ善兵衛招呼四ツ前迄相断隊候事、竹翠殿今晚野尻之高帳モ被持出候、是ニテ支配五ヶ郷何レモ差出相済候、

三日 雨、

朝六ツ起、吉次郎へ書物為読候、十郎左衛門・武兵衛・莊右衛門出勤、昼一刻観音寺被来、終日書見、夜入四ツ時分臥候事、

四日 雨後霽、

朝六ツ起、吉次郎へ書物為読、十郎左衛門・武右衛門・莊右衛門出勤、高原詰地方検者隈元敬一郎殿外迄見舞有之候、当春ハ小林へ締方横目ニテ被来候、九ツ時分ヨリ川上七次郎殿被来、榎原御種人参方へ掛ニテ被相詰居候方ニテ候、八ツ過被帰、今日ハ霧島勸請之岡ニテ牛馬祈願角力有之由ニテ、吉次郎召列レ七ツ時分ヨリ参り候、十郎左衛門・莊右衛門_{（志）}付参候_△、七ツ半時分ヨリ角力相初り、夕方未相済_{（戸本家本より補）}内帰り候、昼見廻有之候、川上氏并ニ当所締方横目上山孫七殿・富満正八郎殿ニモ被来居候、今晚ハ緩々相断度帰リ掛被来具候様申置候处、帰り風呂ニ入り候テ被来候由ニテ六ツ過被来候、四ツ過被帰、夫ヨリ岩次郎・善兵衛呼出シ、九ツ前臥候事、

五日 間々雨、

朝六ツ起、稽古所へ出候テ武術致見分候、吉次郎ニ
モ出候テ致稽古候、五ツ過引入リ暫書見、夫ヨリ座
中惣テフキ方イタサセ候、夫ヨリ日史留トモイタシ
居候処、安田喜惣太殿・同喜次郎殿・海江田彦之丞
殿被来、当月朔日鹿府へ出立ニテ、国府八幡ヨリ霧
島參詣杯被致候テ入来、今晚ハ一宿イタサレ候様留
置候テ、町杯見物ニ被出候而、吉次郎ニモ同道ニテ
夕方仮屋へ被帰、夫ヨリ風呂入共相濟酒共打寄給候
テ、九ツ時分臥シ候事、

六日 晴、

朝六ツ起、今日ハ帰りニ馬借用之儀被申候ニ付、暖
堀之内半五左衛門へ急事方馬ヨリニテモ差出呉候様
申遣候、当所八ツ時被打立候テ馬閑田之様被差越候、
夫ヨリ美代氏江之内用向書状相認、夕方馬差見、夫
ヨリ畠杯見ニ參り候、今日大根・フダン草・センモ
ト・センギク杯蒔候、暮前ヨリ観音寺被来、四ツ時
分被帰、直ニ臥候事、

(頭注) 順聖院様御忍御巡見歟と申話

一順聖院様当方ニモ御巡見被為

在、其前ニモ一度御忍ニテ御光越被為

在候半ト申事有之由、夫ハ御三人列レニテ野尻之方
ヨリ御越候テ、東方村市右衛門ト申者所へ御立寄、
飯ヲ為御焚候由、汁ハ何ニテモ味噌コユクシテ呉候
様被仰候テ、御三人之内御一人ハ床之方下リ向被成
御座候テ、兩人ハ別テ被敬候由、決テ
殿様ニテ為被為 在ト為申事之由、其夜右人々ハ小
林町へ一宿、御一人ハ頭之間ニ被為 入候テ、兩人
ハ御次ニテ御嘶モ被申上候由、奇妙之人ニテ、決シ
テ

殿様ニテ為被為 御座在ニテ候半ト于今皆人不審之
由、今晚観音寺ヨリ承り、于今東方ノ市右衛門夫婦
元氣ニテ候由、七拾才計之者共之由、右之妻彼是ト
御膳事モ為致者ニテ、能取覚居可申ト承り候間、不
遠差越候テ尚又委細可相記候、

七日 快晴、

朝六ツ起、馬屋へ参見候テ、直ニ引入居間掃除、右昨日之日史留トモイタシ、夫ヨリ馬差見トシテ一刻出候、夫ヨリ此節小林仮屋造次之所絵図面取仕立候、夫ヨリ吉次郎へ手習指南相濟、夫ヨリ生垣摘杯見候イダガキテ引入リ、吉次郎へ書物為読候、相濟馬差見ニテ引入、又吉次郎江書物為読、暮ヨリ観音寺被来、四ツ

半時分迄被相嘶候事、

〔頭注〕順聖院様御忍ニテ華林寺へモ御参リト申ス事
一 観音寺嘶、昨夜

順聖院様御忍ニテ当所御光越被為 在候半ト相嘶申候、当所 御巡見遙後

御逝去之御年、霧島花林寺へモ御忍ヒニテ御社参被為 在候半ト申事候、花林寺御祭り之節、其時モ三人列之人坊中へ致一宿候由、彼所祭りニハ参詣之人錢ヲ蒔候へハ途中ニ子トモ集リ拾ヒ候ヨシ、右三人列之人通り掛リ候時、子共集リ居一人鳴キ候立カニ付、如何シテ鳴候哉ト三人列之人問候得ハ、皆錢ヲ拾候ニ此忝人不拾得候テ鳴候ト申候へハ、懐中ヨリ金子百疋ヲ取出シ、其者へ呉レ候テ跡モ不見被行、其子ハ直ニ親所へ金子持来候ニ付、何方ヨリ持来リ候哉

ト申候得ハ、貫ヒ申候ト申シ候得共、不審ニ存委敷責問候得ハ、向フニ被行候三人列之内忝人ヨリ被呉候ト申候由、又御参錢箱ニハ金子三百疋包性名モ不記シテ入居候由、志戸本家本より補▽その如くいたし候人終ニ無之事之由、△常人ノ御参錢ハ式朱忝ツカ百疋位ヒガ上リニテ、夫丈ニテモ上候人ハ皆坊主へ取次ニテ上、又ハ姓名書記有之者之由、常人ノセザル事ニテ于今不審ニ申事之由候、

八日 快晴、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、吉次郎ニモ出候テ致稽古候、五ツ時分引入、亦馬差見ニ一刻出、夫ヨリ吉次郎へ書物為読候、夫ヨリ書見イタシ、些勞レ候ニ付九ツ時分ヨリ八ツ前迄臥候、七ツ時分迄衣裳ホコレ縫共イタシ、十郎太来暫嘶、志戸本家本より補▽夫より夕迄馬差見ニ参候、△夫ヨリ又書見、夜入四ツ時分迄候事、

九日 快晴、今朝冷氣アリ、須木白鳥辺霜降ランカ、

朝六ツ起、吉次郎今朝ヨリ些風邪氣ニテ咳氣有之候
故、小青龍湯調合イタシ、粥共為喰候、菜抔致下知
菓ハ拙者炉ニテ煎シ候、拙者モ少々風邪見掛、少々
發熱惡寒有之故、夕方ヨリ藥用、善兵衛へ粟粉抔イ
タサセ一覽候、吉次郎ニモ余リ深敷事ニテモ無之、
度々少々ツ、發汗有之、漸々快方ニテ床之内手遊ニ
筆共取候、六ツ半時分ヨリ齊藤八郎左衛門來り、四
ツ時分歸、直ニ臥候事、

十日 曇、

朝六ツ前目覺候へトモ、風邪氣分故暫見合起出候、
然処岩次郎出候テ、今日ハおたね・德熊抔昨夜秋川^(藏川カ)
泊ニテ歸リ之先状夜分ニ來候由、番屋之者共致咄候
ト申候、夫ヨリ風呂立旁申付候処、召仕共大働ニテ
候、秋川ヨリ打立候得ハ、遅クテモ七ツ前後ニハ着
有之候半ト存候トコロ、暮迄モ着無之候ニ付、決シ
テ明日ニテモ着ニ候半ト存候処、六ツ半時分着有之、
夜前ハ花林寺泊ニテ、今朝ハ彼所ヨリ打立申候由ニ
テ、此節ハ千石馬場町田家へ參り居候お筆・お岩ニ

モ列立來り候、町田家へ參り居候次男郷十郎ニモ來
り候、暮過キ横山莊右衛門ニモ中途迄參り相待居候
得共、何之音歸リ之模様不相分候ニ付、只今罷歸リ
候段出候^{本ノマ}、宇兵衛・織兵衛ニモ出候、武右衛門同斷
留置候テ酒共給候、觀音寺ニモ被來候、夜九ツ前臥
候事、

十一日 晴、

朝六ツ起、今日ハ役々追々出候テ、終日彼是取紛^マ
何ラスルトモシレス、未風邪不致本腹藥用イタシ候、
昼過紙屋ニ罷居候国分家來之銀助兄弟來致一宿候、
夕方ヨリ町田家役人辻元新兵衛招呼、夜九ツ時分迄
相嘶シ候、

一今日ハ八ツ時分ヨリ七ツ過迄テハ毎之通式日ニテ武
術致見分候、郷十郎・吉次郎・德熊ニモ出候、今日
吉次郎相手横山織兵衛・井之上嘉兵衛・横山友次郎
ニテ候、今日吉国莊吉ニモ來候、

十二日 快晴、

朝六ツ起、郷十郎・吉次郎稽古所へ出候、今朝吉次郎（試カ）拭合相手横山伴之進・井上嘉兵衛・鈴木龍之助ニテ候、今日出勤時任宇兵衛・富満武兵衛・井上嘉兵衛ニテ候、吉国莊吉来暫相噺候、今日ハ高崎之様参り候由、今日モ役々追々見廻二来、夫ニテ終日相暮シ、郷十郎当所之者共ト拭合イタシ候含ニテ、シナへ削ニテ候、夕方ニ新兵衛ニハ善兵衛同伴ニテ見物ニ出候、夜入新兵衛呼出シ相咄、九ツ時分隊候事、

十三日 快晴、

朝六ツ起、未風邪全快イタサズ、四ツ時分ヨリ取切致養生度存、薬用共攻付相用臥居候処、島津登殿先（久巻）達テヨリ栄之尾湯治為差越居、夫ヨリ霧島参詣ヨリ此辺処々見物、夜前ハ温水之コノ所本書欠ク所へ一宿、彼所ヨリ今日ハ陰陽石見物ニテ八ツ時分拙者所へ入来、相良助太夫殿同伴ニテ候由、中飯後伊東塚抔見物之為被出候、郷十郎・吉次郎・徳熊ニモ同列ニテ出候、夕刻飯屋之様被帰候、昼川上半右衛門殿拔米締之由ニテ一刻昨日当所差入之由被申候、依テ申遣

候処夜来、四ツ過比被帰候、登殿ニモ泊り、相良氏ニハ町へ宿所有之由ニテ彼処へ被差越、明早朝来ルトノ事候、九ツ前隊候事、
一今夜五ツ時分相応之地震イタシ、皆トモ庭へ飛出候、おたねニハ徳熊抱キ縁頼ヨリ被落候、親子トモ少シモ怪我ハ無之故、地震止候テ後ハ物笑ヒニテ候、徳熊当年七歳ニテ候、

十四日 快晴、

朝六ツ過起、六ツ半過相良氏ヨリ被来馬差トモ見候、登殿・相良氏同断、四ツ時分ヨリ今日ハ井手之山シ、ミ貝堀并鮎網打相企、登殿・相良氏ハ勿論、おたね・お筆千石馬場町田家へ参り候娘・郷十郎拙者二男、戸柱町田家へ為養子参り候・吉次郎拙者三男・徳熊拙者四男其外供人トモ多人数差越有之候、拙者ニハ風邪氣ニテ長髪罷在候ニ付、留主番イタスヘクト申候テ伊太郎ト兩人相残り候処、別テ淋敷事ニテ責付薬用トモイタシ、為養生昼寝トモイタシ候ヘトモ隊候事不出来、七ツ前ニハ各井手山ヨリ被帰候、登殿・相良氏ニモ温水之様被帰候、夕方ヨリ新

兵衛呼出相嘶、五ツ過比隊候事、

十五日

朝六ツ起、郷十郎・吉次郎稽古所へ出候、拙者二ハ先日ヨリ風邪氣ニテ未快候ニ付不出候、吉次郎二ハ龍之助ト一度、野辺嘉之介ト一度致稽古候由、郷十郎二ハ加世田之者・田布施之者・龍之助トモイタシ候由、宇兵衛・武右衛門・嘉兵衛出勤、赤木仲太左衛門・高野瀬庄助・横山伴之進・横山龍見・赤木仲藏・赤木七郎左衛門・押川愛次郎・横山織兵衛来候、昼時分川上半右衛門殿一刻被来候、七ツ時分ヨリ伊福十郎太母来、夕帰候、夫ヨリ新兵衛呼出相嘶、四ツ過比隊候事、夜八ツ過比起候テ見候へハ、宵之間同様快晴ニテ月至テ清ク候故、平馬英国ロンドンヨリモ此月ヲ見ントテ、

異国もことならてミむ終夜

くまなく照らす望月の空

十六日 曇、

朝六ツ過起、庄助・仲藏・嘉兵衛出勤、七ツ時分観音寺不動參詣、無程又観音寺法師一刻被来候、夕ヨリ新兵衛招呼相嘶シ候、夜四ツ半時隊候事、

十七日 晴、

朝六ツ前起、五ツ前ヨリ野尻へ武術為見分参り候、郷十郎ニモ召列レ参り候、直心影流・水野流致稽古、兩人素読モイタシ候、抜米取締川上半右衛門殿ニモ昨日ヨリ野尻へ被差入、今日半伴ニテ帰り、七ツ時小林飯屋へ着、赤木七郎左衛門一刻来り候、夜入丸田竹翠殿白鳥湯治ヨリ被帰候テ被来候、右妻トノニモ同断被帰被来候、四ツ時分隊シ候事、

十八日 朝雨後晴、

朝六ツ起、高岡地頭へ之廻文仕出候、当秋一隊調練御軍役方ヨリ郷々廻勤之事ニテ候、夫ヨリ稽古所へ出候テ武術致見分候、郷十郎ニモ出候テ横山伴之進・鈴木龍之助・野辺嘉之介ト稽古イタシ候、高野瀬庄助・赤木仲藏・井上嘉兵衛出勤、伊福十郎太来り候、

暮ヨリ新兵衛招呼相嘶、四ツ過臥候事、

十九日 快晴、

朝六ツ起、郷十郎・吉次郎、鈴木龍之助所へ稽古ニ

参り候、五ツ時分伊福十郎太

下ニ図シ候鳥持来、矢張ヒス

イ之類ト相見得候、十郎太所

之池ニ来リ魚ヲ取り候由、四

ツ時分竹翠殿被来、庄助・武

兵衛・嘉兵へ出勤、今日ハ家

内中皆々八王寺へ参詣イタシ、

椎之実杯拾ヒ之管候、九ツ過出立有之候テ夕方被帰、

拙者ニハ七ツ時分暫馬差共見候、暮ヨリ新兵衛招呼

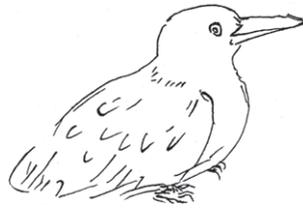
四ツ時迄相嘶、直ニ臥候事、

二十日 快晴、

朝六ツ過起、郷十郎・吉次郎、鈴木龍之助所へ参り、

五ツ半時分帰候、九ツ半時ヨリ飯野へ参り、八ツ半

時分飯野飯屋へ着イタシ、郷十郎・吉次郎ニハ



惟新公御在城跡拜見ニ参候、拙者ニハ先度拜見イタ

シ候ニ付、長善寺杯見物ニ参り候、木崎原御合戦敵

味方戦亡板式枚有之候ニ付、後日書写為見候様秋丸

仲左衛門へ相達シ置候、

彼之寺之開山明窓(抄光カ)道光ハ入唐イタシタル僧也ケルカ、

帰唐之節持帰リノ釣鐘壹ツアリ、左ニ図、

飯野

長善寺

釣鐘

龍図



長善寺者二度出火有之、
兩度共ニ此鐘焼タル由
ニテ鳴悪キト承リ、然
レトモ叩キ聞クニ音少
シ響キ悪キマテナリ、

夜入五ツ半時分臥候事、

二十一日 快晴、夕方ヨリ小雨、

朝六ツ起、五ツ時分ヨリ飯野武術致見分候、郷十

郎・吉次郎ニモ致稽古候、兄弟トモ(試カ)拭合三ツツ、致

候、四ツ時相濟、四ツ半時分ヨリ調練場へ参り飯野

二組之調練致見分、八ツ過飯野飯屋打立、夕立小林
飯屋へ帰着、中途川之辺ヨリ少々小雨ニ逢候、暮ヨ
リ新兵衛招呼相嘶、四ツ前隊候事、

二十二日 曇、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、郷十郎・吉次
郎ニモ出、郷十郎ニハ横山友次郎・横山織兵衛トイ
タシ、吉次郎ニモ同断、外ニ井上嘉兵衛トイタシ候、
五ツ半引入、四ツ後面高与蔵下ノ・野村善太夫殿被
来候、御買入米所中へ拝借被仰付、当秋新粳ニテ返
納被仰付候ニ付、御蔵切封解御米出方有之候、夕方
ヨリ右兩人被来候様申遣入来、四ツ時分被帰候、夫
ヨリ家来共招呼酒共為吞、九ツ時分隊候事、

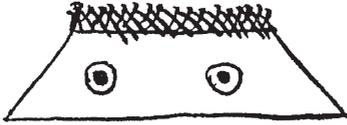
二十三日 快晴、

朝六ツ過起、四ツ後面高氏・野村氏一刻ツ、被来候、
今日モ昨日同断米出方有之候、八ツ後新納喜右衛門
殿被来候、(頭注)「養蚕所取立ノコト」養蚕所取仕立方ニ付差入ニテ候、右同見
聞役川畑宗之丞殿・右同書役広瀬喜兵衛殿玄喚迄見

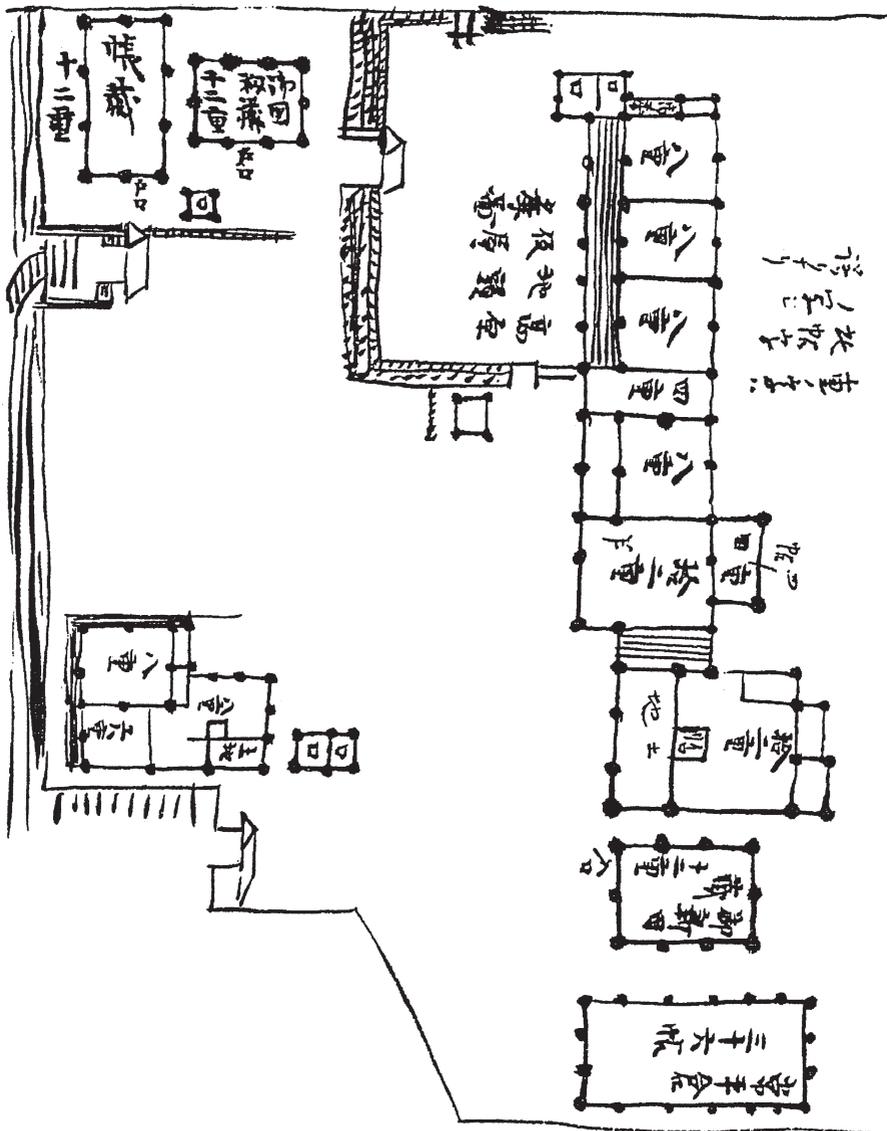
廻ニテ候、今日ハ馬頭観音へ牛馬祈念角力取企候由
ニテ、七ツ前ヨリ新納氏同道ニテ參候、暮前帰宅、
郷十郎・吉次郎ニモ召列、面高氏・野村氏ニモ被差
越各同所ヨリ見物、おたね・お筆・おいわニモ參り
候テ、是ハ外場所ヨリ致一見、是モ暮前帰来候、夫
ヨリ新兵衛招呼候テ四ツ時分迄相嘶隊候事、
一当月九日以来之肌持別テ寒冷アリ、未霜不見得候得
トモ、夜々夜着ふとん、昼モ綿入羽織ニテ候、世間
へ出候モ羽織着用セザル人ハ無之候、

二十四日 晴、

朝六ツ起、四ツ時文行堂へ參り、夫ヨリ帰掛上山孫
七殿旅宿へ參り候へハ川上七二郎殿被參居候、今日
ヨリ須木へ被差越出、尤、兩人同道之由候、九ツ過
帰、門前ニテ馬差兩人へ馬ニ為乘、引続拙者乗方イ
タシ候処、新納喜右衛門殿・川畑宗之丞殿・広瀬喜
兵衛殿被通候ニ付、致下馬暫相嘶候、今日養蚕所取
仕立場所見分之由候、面高氏ニモ被差越候、夫ヨリ
帰宅、今日モ今朝ヨリ先日ヨリ之米出シ有之、役所



高原地
頭及屋内
射場地



へ野村氏被来居候間、八ツ半時分ヨリ参リ候テ暫相
噺、帰宅イタシ居候得ハ七ツ前洪谷^{本ノマ}殿先日ヨ

リ高原へ示現流致指南被来居、又須木之様今日ヨリ
被差越之由ニテ、通掛ニ一刻被来候、今日出勤高野
瀬庄助・横山六郎右衛門・井上嘉兵衛ニテ候、

二十五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半ヨリ高原へ武術為見分参、川上天
真流・示現流・水野流致見分、読書モ見候テ七ツ時
分小林仮屋へ帰宅、夕方ヨリ竹翠殿被来、四ツ時分
被帰候、夫ヨリ召仕之休左衛門神舞并セ、ん物語イ
タシ候ト承リ候テイタサセ、大物笑ヒニテ候、九ツ
時分臥候事、

二十六日 快晴、

朝六ツ起、今日ハ四ツ時分ヨリ家内中皆々陰陽石見
トシテ東方村へ参候テ留守番ニテ、七ツ時分赤木七
郎左衛門来、馬コネ摘呉候間、内へ来噺候様申候テ
相噺候内、夕方皆々被帰候、昼時分観音寺モ一刻被

来候、夕方ヨリ新兵衛招呼相噺シ、四ツ時分臥シ候
事、

二十七日 快晴、

朝六ツ起、十郎左衛門・武兵衛・織兵衛出勤、夕方
十郎太来、兩人ニテ馬乗、暮引入新兵衛召出相噺候、
竹翠トノ昼兩度被来候、四ツ時分臥候事、

一今朝仮屋門柱へ左之通り之文言書付封シ候テ張付有
之候由差出候ニ付、則聞合手ヲ付候事、

二十八日 晴、

朝六ツ起、十郎左衛門・武兵衛・織兵衛出勤、五ツ
半時ヨリ高原ハ^{蓮太郎也}スタ口湯へ参り候、跡ヨリお筆・郷
十郎・吉次郎・徳熊来候、おたねニハ風邪氣ニテ不
被参、シカシナカラ臥候程之儀ニテハ無之、押テハ
不召参丈ニハ無之候得トモ用向モ有之、其上馬関田
ヨリ客来有之ソウニテ残り被居候、昨日ヨリ竹翠ト
ノ観音寺湯治ニ被参居候、右之通馬関田ヨリ客来有
之カモ難計候故、八ツ時分ニハ小林仮屋之様帰候、

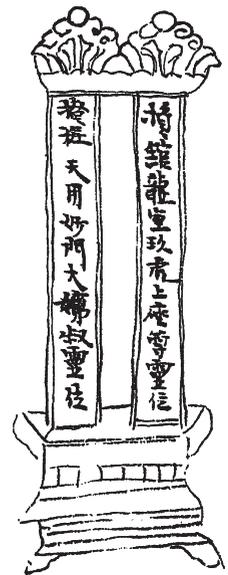
おふで其外ニモ七ツ過ニハ帰り来候、夕ヨリ新兵衛
招呼ヒ候テ相嘶、四ツ時分隊候事、

二十九日 七ツ時分ヨリ雨今日八山中、
雪降タル由

朝六ツ起、五ツ時分ヨリ須木へ武術為見分參候、郷
十郎ニモ參り候、出席人数三十九人、外ニ四人高原
ヨリ參居候、致稽古候、藤田本介・高妻熊太郎・黒
木孝之助・丸山宗五郎ニテ候、月山流長刀四人・鞍
馬流劍術二人須木之内内山之者共ニテ候、右見分相
濟、八ツ過ヨリ滝致見物、郷十郎召列參候、役々ト
モ付添来候、当分鹿兒島ヨリ示現流為指南被来居候
渋谷彦一殿ニモ拙者所へ見廻有之候、

晦日 快晴、

曉七ツ時分ヨリ起、新兵衛起出候ニ付囲炉裏之脇へ
寄茶トモ入給候、五ツ過打立、一林寺へ一刻立寄、
米良筑後守(頭注)米良筑後守事首桶并墓所位牌等ヲ郷十郎へ為見候、首
桶ハ別テ念之入タルモノニ候、位牌左之通、



八ツ後時分歸着、十郎左衛門・武兵衛・織兵衛出候、
宇兵衛ニモ一昨日鹿府ヨリ歸候由ニテ出候、暮ヨリ
新兵衛招呼相嘶、九ツ時分隊候事、

日史第五十二

名越時敏(花押)

慶応元年乙丑九月

朔日 晴、夕陰、

朝六ツ前起、六ツ過ヨリ永吉領分堤村調練致見分呉
候様承候テ參候、勢揃有之、銘々鉄炮要具相添、
か、リニ松明三丁ツ、入付、小銃処々へ打立、貝ヲ
吹相図イタシ、無程弓射場地へ相集、調練相濟、宮

之原仙兵衛所ニテ劍術致見分呉候様承候テ参リ、相濟、八ツ前小林飯屋へ帰着、夜入新兵衛招呼、九ツ時分隊候事、

二日 快晴、

朝六ツ起、四ツ過ヨリおたね・おふで・郷十郎・吉次郎・徳熊白鳥湯治場為見物参リ候、供人辻元新兵衛・伊太郎・十助、召仕女三人、町田家ヨリ召列候女一人付来候、拙者ニモ早目ヨリ差越咎候処、難迦用向有之相残候、四ツ半時分時任宇兵衛来リ、九ツ半時分面高与蔵殿被来、先ハ用向相片付候ニ付八ツ時ヨリ打立差越候処、白鳥湯之元へ暮致着候、今日出勤十郎左衛門・武兵衛・荘右衛門ニテ候、大脇七左衛門ニモ出候、暮過雨、湯ニ入候テ臥、夜中両度入湯イタシ候事、

一今日夜ニ掛候テ四度入湯候事、

三日 快晴、

朝六ツ起、直ニ入湯、五ツ半時分白鳥山法印見廻有

之候事、四ツ過比赤木仲太左衛門見廻暫相噺候、上之湯へ一昨日ヨリ来居候トノ事ニ候、昨日拙者小林出立前永吉領分温水之与頭宮之原雉右衛門相談イタシ、久留春右衛門一昨日之調練見分之為一礼来リ候、一刻致面会候、今日昼飯給候テ皆々打列上之湯へ参候テ両度入湯、蒸湯へモ両度入候、赤木仲太左衛門宿へモ一刻立寄候、拙者共衣服抜候処へ湯守ヨリ押卷式枚持来、仲太左衛門所ヨリ茶ヲ入、菓子トモ添遣呉レ候、七ツ過下之宿へ帰候、無程仲太左衛門妻塩肴・豆腐杯持来、盃トモイタシ暫相噺候テ帰候、今朝小林町人上田周八昨日ヨリ為湯治来候由ニテ、夫婦ニ六才ニ相成候娘召列来候、周八婦モ来居候由夕方新兵衛招呼酒トモ給候、夜入五ツ半時分迄困炉裏之大火ニテ腹脊杯アブリ候テ直ニ臥候事、

一今日ハ上之湯二度、下之湯へ五度入り候事、

四日 晴、

朝六ツ起、入湯、四ツ時ヨリ上之湯へ参、式度入候テ八ツ前帰ル、参ル中途ニテ赤木仲太左衛門へ行逢、

拙者宿へ参ル処ニテ空敷引返シ、同道ニテ上之湯之

様帰候、入湯之節ハ仲太左衛門宿へ衣服トモ抜候テ

入候、八ツ時分帰り、夫ヨリ又々入湯、今日ハ都合

六度入湯、夜入五ツ時分臥候事、

五日 昼過ヨリ雨、

曉七ツ時分一度、又臥候テ六ツ時起又入湯、四ツ時

分仲太左衛門来暫相嘶候、九ツ時分中之湯へ入、蒸

湯へモ入候、昼過ヨリ雨天相成別テ世話敷候、夕方

下宿之辻元新兵衛へ愚詠一首遣ハシ候、

雨降はいか、くらさむ奥山の

しはの庵りはとふ人もなし

シカアレハ無程シテ新兵衛来、夜入四ツ時分迄相嘶

臥候事、

六日 快晴、

曉七ツ過入湯又臥、六ツ過起直ニ入湯、仲太左衛門

妻一刻入来、四ツ半時分上之湯へ参入湯、蒸湯へモ

入候、九ツ半時分帰り候、又々度々入湯イタシ候、

夜入四ツ時分臥候事、

七日 雨、夕雷鳴、

曉七ツ時分入湯、直ニ臥、又大鐘比起入湯、五ツ半

時分湯之打立、本ノマ、(元脱カ)帰掛白鳥山御社へ参詣、夫ヨリ法印

へモ見廻致面会、直ニ小林之様帰り、飯屋へ八ツ前

致着候、おたね・子共皆々無程打立帰候へトモ、子

共列ニテ、殊ニ雨天故道モ悪候間、漸暮皆々帰着ニ

テ候、右様雨天道モ悪候間、子共之難儀嘸哉ト存候

間、拙者帰着直ニ駕籠為釣遣シ候処、小林之内川之

少シ飯野ノ方ニテ行逢候由ニテ、おたね・徳熊乗婦

候、夫ヨリ役々出、竹翠トノニモ被来、七郎左衛門

同断、竹翠殿ニハ先日ヨリ須木へ聞合之儀有之被差

越、序ニ被致狩候処、鹿一疋手柄有之候由ニテ一枝

土産有之、今晚相開候、七郎左衛門・宇兵衛・庄

助・莊右衛門又々来、五ツ半時分各帰り、夫ヨリ新

兵衛招呼四ツ半時分迄相嘶シ臥候事、

八日 晴、烈風、

朝六ツ過起、四ツ過宇兵衛其外役々出候、十郎太・
観音寺来候、昼巻藁共射候、夜入五ツ過臥、又四ツ
過起、九ツ過臥候事、

九日

朝六ツ起、四ツ前横山龍見来候、夫ヨリ引続追々嘸
其外諸役々出候、赤木七郎左衛門・伊福十郎太ニモ
来候、竹翠殿同断、今日ハ八王寺祭礼ニ付甘酒トモ
為作候テ相備所、祭礼ニ新兵衛其外家来共招呼候テ
夕方ヨリ相嘶候、細野村ニ居候家来兩人モ夕ヨリ来
候、夜九ツ時分臥候事、

十日 夕ヨリ雨、

朝六ツ過起、宇兵衛・荘右衛門出勤、昼時分渋谷彦
市殿入来、高原之藤田新之丞馬乘来、乘見候様被申
候ニ付乗候、栗毛馬ニテ相応走ル馬ニテ候、七ツ時
分上山孫七殿一刻入来候、明日狩ニ参候筈ニテ色々
道具トモ取揃候得共、雨降出シ取止ニイタシ候、夜
入五ツ時分臥候事、

十一日 朝雨後晴、

朝六ツ過起、吉次郎・徳熊へ書物教候、宇兵衛・織
兵衛出勤、是迄与頭モ飯屋方へ毎勤イタシ候得共、
文行堂之方へ致日勤候ハ、一統之励ニモ可相成申
出趣尤ニ候間、其通申付、三日跡ヨリ与頭ハ彼方へ
致日勤、嘸卜地頭横目飯屋へ致日勤候、八ツ後式日
ニテ稽古所へ出、直心影之流致見分候、示現流ハ当
分渋谷彦市殿被来、受指南候ニ付不出候段承届候、
夜入四ツ時分臥候事、

十二日 霜、小林飯屋之辺当年初降、

朝六ツ起、稽古所へ出劍術致見分候、五ツ過ヨリ観
音寺不働参詣イタシ、夫ヨリ寺上之間借候テ、鹿見
島へ遣シ候書状相認、九ツ半時分帰候、今日ハ半五
左衛門・嘉兵衛出勤、十郎太七ツ時分来候テ馬乗イ
タシ、拙者ニモ乘リ候、夜入新兵衛出テ候テ、九ツ
半時分臥候事、

十三日 晴、夕曇、

朝六ツ起、五ツ前ヨリ飯野へ武術為見分参候テ、七ツ時分歸候、暮ヨリ新兵衛来リ、四ツ時隊候事、

十四日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、夜入福留兵左衛門来候、新兵衛・兵左衛門招呼九ツ時分迄相嘶、
隊候事、

十五日 快晴、

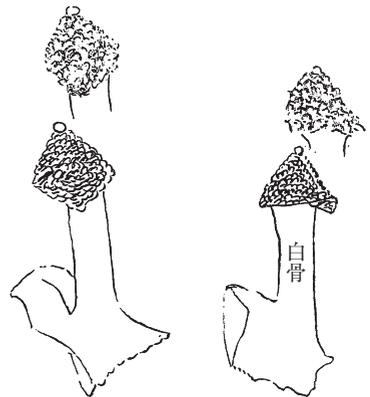
朝六ツ前起、五ツ時ヨリ高原藤田新之丞所へ武術為見分候、(參脱カ)從此内渋谷彦一殿被来、小林・高原・須木示現流指南方トシテ被来居候、今日ハ右三ヶ郷之者一緒ニ藤田一所ニテ致見分呉候様承リ候間参リ候、
小林・須木・高原ト順々致稽古、九ツ時分相済ミ、夫ヨリ新之丞所之後之山へ社中へ馬之角納メ居見候、
月毛馬ニテ為有之由ニテ、社之辺へ小キ祠アリ、角ハ左ニ図ス、

本書ニヨリ写シ候「是ヨリ上生出タル物ニ見ユ

高原藤田新之丞所後之社へ

納リ有之候馬

角左右之図



薄墨ニシテ鹿角ノ根之方ニ似タリ

九ツ半時分右新之丞所ヨリ帰懸温水之永吉領分へ行掛り候処、旧例之士踊有之、何方ニテ候哉相尋候処、菩提所コノ所本ノマ、竜雲地カ寺ニテ有之由候ニ付則差越候処、小林表締方横目上山孫七殿へ人參御仕立掛り川上氏杯被来居候、無程相初リ、八ツ過比打立、七ツ時分小林へ帰着イタシ候、明日ハお筆・郷十郎帰リニ付段々見廻人等有之、酒トモ取ハヤシ、九ツ時分隊候事、

十六日 霜降、晴、

お筆・郷十郎今日帰ニ付キテ、暁八ツ時ヨリ飯トモ
為焚、同七ツ時ヨリオ筆其外起シ仕廻方トモ有之、
鹿兒島之大鐘比打立有之候、夫ヨリ此方モ皆々起通
シ、今日ハ終日兵左衛門召呼候テ、諸事用向旁申承
リ候、夜四ツ時分臥候事、

十七日 雨、

夜前遅方ニ丸田孝八殿被来候テ、朝一刻被来候、
朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、八ツ過ヨリ
渋谷彦一殿入来候、今日ヨリ稽古所ニテ示現流稽古
イタサセ、取直シ方イタシ候ニ付、拙者ニモ出張見
候得ハ、却テ仕合之段承リ候ニ付、七ツ時分ヨリ参
り暮引取、渋谷氏ニモ被来、酒トモ出候テ五ツ時分
被引取候、尤、門人共旅宿へ可致案内皆々相待居候、
夫ヨリ兵左衛門其外家来トモ召呼相断、四ツ時分臥
候事、

十八日 雨、

朝六ツ時起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、朝孝八殿
一刻被来候、昼時分大河平彦六殿御用之儀有之、暫
被相断候、四ツ過ヨリ文行堂へ参リ候テ、八ツ前引
取、帰り掛上山孫七殿旅宿へ一刻立寄、先日被来候
当表締方永井斎藏殿被来居、始テ致面会候、八ツ半
時分飯屋へ帰り、夫ヨリ稽古所へ示現流有之候ニ付、
出候テ致一覽夕引入、今日ハ渋谷氏出席無之、暮ヨ
リ渋谷氏一刻入来、今日ハ誓紙イタサレ候由、其上
些不快ニモ為有之段承候、明日ヨリ拙者須木へ参答
候段被聞候ニ付、暇乞トシテ為来トノ事ニ候間、左
様二候ハ、貴様ニモ三日之内御帰ニ候哉之旨申シ候
処、明朝ヨリ帰リ之賦リ候段被申候、依時機今晚ヨ
リ帰シ候段被申候、夫ヨリ兵左衛門召呼候得ハ何方
へカ出不罷居由、今晚ハ早ク四ツ前臥候事、

十九日 快晴、

暁六ツ前ヨリ起、早天十郎左衛門・井上嘉兵衛来候、
孝八殿同断、五ツ過ヨリ打立、須木へ訓練為見分参
候、横山織兵衛付参候、着無程訓練致見分参候、今

日ハ武術式日ニ付、示現流・鞍馬流劍術、月山流長

刀致見分候、夕方相濟、夜五ツ半時分隊候事、今日

武術相濟候跡ニテ、小藤田甚太郎中庸十枚計素読、

須木ニテ〔頭注〕須木ニテ經書読、候モノハ初テナリ經書読候者ハ初テニテ候、右甚太郎祖父當

年七十三才ニテ甚左衛門卜申者、先年噯役ヲモ為相

勤者ニテ、此者一人少々經學モ有之由、當分未元氣

ニテ、七八人ツ、ハ每朝致指南、武術モ人々へ折角

相進勵シ候由、心掛宜老人ニテ候、今夜須木一宿ニ

テ候事、

二十日 大霜、小林飯屋ニモ水候由、

朝六ツ前起、五ツ時分須木飯屋打立、木浦木辺路為

見分差越候、參り掛須木・木浦木境山ニテ両所立會

犬山イタシ度承り候ニ付、其通イタシ候処突不出候、

木浦木着モ早ク候ニ付、又木浦山同断ニテ取レス、

今夜同所ニ八重尻右衛門所へ一宿、噯時任強太左衛

門、与頭井上軍兵衛・横山六郎右衛門、地頭横目大

脇織兵衛來候、織兵衛ニハ須木ニモ差越候テ彼方ヨ

り付來候、

二十一日 霜降、快晴、

朝六ツ起、六ツ半時分ヨリ木浦木山犬山イタシ候処、

二才鹿壺丸取レ候、八ツ過木浦木築右衛門所打立、

歸り掛同断狩り候テ、鉄炮一筒鳴候得共不取候、山

ヨリ夜入四ツ時分小林飯屋へ歸着、強太左衛門・織

兵衛一刻出候ニ付酒共為給候、引歸シ候、夫ヨリ家

來共召出、九ツ時分隊候、岩次郎事、先日お筆・郷

十郎歸之節致供鹿兒島へ參り居候処、今日暮當所へ

歸着イタシ候事、

二十二日 霜降、快晴、

朝六ツ起、十郎左衛門・織兵衛出動、四ツ後締方上

山孫七殿被來候、暫被相咄候テ被歸、今日ハ昨日持

歸候鹿開イタスベク候間、右孫七殿并竹翠殿・強太

左衛門・十郎左衛門・軍兵衛・六郎右衛門・織兵

衛・鈴木龍之助來候様申候処、何レモ八ツ時分ヨリ

被來酒トモ出候テ、飯之約束故七ツ半時分飯差出候、

伊福カバ、并ニ赤木仲太左衛門妻ニモ内証へ來候テ

開キイタシ候、則客歸之前ニ何レモ歸候、夕ヨリ家

来トモ召呼候テ残リモノトモ為給、四ツ時分臥候事、

二十三日 霜降、快晴、

暁七ツ半時分起、今日ハ喜入撰津御廻勤先ヨリ飯野（久高）

武術御見分之哉ニ申来候二付、拙者ニモ打立参り候、
中途ニテ別紙之通申来候、

〔頭注〕吉松転住者場所見分

撰津殿其外御役々衆、此節吉松転住者場所御見分ト

シテ御廻勤之段者先日御届申上置候処、昨廿二日諸
県郡吉田へ御差入有之、同所へ今日ヨリ明日迄御滞
在相成、明廿四日宍狩へ御登山之由、依時宜ハ爰元

へ今日御差入ニテ武芸御見分可有之、受持掛郡奉
行衆ヨリ致承知居、其段モ御届申上置候得共、此節

ハ爰元御廻勤無之段致承知候二付、此段早々御届申
上候間、被仰上可被下儀奉頼候、以上、

丑九月廿三日 飯野野 朝稻佐多右衛門

御地頭所

御取次衆中

右之通申来候得共、今日ハ武術式日ニモ有之候ニ付

差越候テ致見分候、相済未時刻モ早ク、何レモ用向
モ無之候ニ付村内緩歩イタシ、青山織兵衛付来、小

林地頭横目横山莊右衛門ニモ付来候テ付添廻候、源（義弘）

昌寺へ参候処、彼寺へハ惟新公御子鶴寿丸様御位牌
有之候、夫ヨリ保寿院へ参候処、此所へハ 惟新様

〔頭注〕保寿院惟新様御前様御影有之

之御前様之御影像様被為入御堂ニ有之候ニ付、坊主

へ奉拝度段申候得ハ、已前ヨリ誰モ奉拝候儀不相成
由承候付、夫レナラハト申候テ仮屋之様帰候、昼当
所地方検者内山喜七郎殿被来候ニ付、右之旅宿へモ
一刻立寄候、夫ヨリ種々書付共イタシ候、

二十四日 曇、夜入雨、

朝六ツ起、六ツ半飯野打立小林之様帰り、五ツ半時

分仮屋へ着イタシ候、当夏大島ヨリ取寄植付置候コ
ウシヤイモ、霜ノ不打殺内ニテ堀方イタシ候処、黒

赤共思ヒ之外大ク、種ハ十分ニ出来候、余リ珍敷候
故、白之一番ニ大キノヲ前之赤木七郎左衛門へ為持

遣シ候、夕方来暫相話シ候、今朝十郎左衛門・強太

左衛門・莊右衛門・織兵衛・七左衛門來候、夜入四ツ時分隊候事、

二十五日 雨、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、吉次郎モ出致稽古候、相手井上嘉兵衛・大脇織兵衛・中野宗之助ニ而候、夕方町之者共劍術致見分候、相濟横山六郎右衛門・鈴木龍之助・伊福徳之進招呼、落シ入寄合給候、夜入御用書付等イタシ候、四ツ時分隊候事、

二十六日 曇、

朝六ツ起、時任強太左衛門・大脇織兵衛出勤、此節住居所少々仕出シ出來候ニ付、今日ヨリ生垣之ユヌ木堀除地引イタシ候、拙者ニハ終日公私書付イタシ候、又当分蠅別テ多ク、中々世話敷ニ付、塩焔ニテ焼打四五度イタシ、蠅七八百トモハ取り候半ト存候、夫ニテモ未多ク、今日モ山餅相尋候得共無之、又致沙汰候、明日ハ有之ソフノ模様、夕方宮原山水トノ・浜田平右衛門列立被來候、先日ヨリ田代何某ト

申候飯野酒屋へ被來居、先日モ飯野飯屋へ見廻之由候得共、最早出立後ニテ空敷被引返候由、今夜ハ当飯屋へ一宿ニテ、四ツ半時分隊候事、

二十七日 曇、

暁七ツ時分起、日史留共イタシ、又臥候テ六ツ時起、宮里氏・浜田八ツ過比飯野之様被帰候、今日住居所家立候、大工共へ為祝金子貳百疋遣シ候、七ツ時分吉国孝之助來、夜入四ツ時分迄相嘶一宿イタシ、伊太郎ニモ近々鹿兒島之様帰シ候間、今晚ハ來候テ酒共給候様招呼候、夜四ツ半時分隊候事、

二十八日 雨、

暁七ツ時起、お筆・藤八殿・七左衛門へ書状相認候、六ツ過孝之助出候テ暫相嘶、五ツ半時分打立帰候、今日(坂川カ)穧川迄參一宿之由、今朝相認候書状相頼候、小林之内細野村ニ居住之山口源左衛門ト申者、何方カ之家來之由ニテ、此節拙者家來ニ相成度申出、此節右孝之助歸之上ハ役人方へ申出呉候様頼候由候間、

人物モ慥成者之由候間召抱可申返答イタスベク旨申
越候、織兵衛出勤、今日者終日御用状書付イタシ、
今夕町田藤八殿ヨリ書状到来、（頭注「真幸札」真幸札一件御通達来、
則竹翠殿郷々被致廻達候様相達候、昼時分観音寺和
尚来候、夜入四ツ時分臥候事、

二十九日、嶽々雪、寒風烈シ、麓モ少々雪降、

朝六ツ起、四ツ時分ヨリ川勘解由殿・町郷十郎・町

（上脱カ）
（田脱カ）

田藤八殿・七左衛門へ之書状認メ候、今朝竹翠殿へ

モ一刻参り候、竹翠茂一刻被来候、夜入伊福十郎太

来、四ツ時帰り、家来トモ三人招呼酒トモ為給候、

四ツ半臥候事、

日史第五拾三

名越時敏（花押）

慶応元年乙丑十月

朔日 大霜、寒風烈シ、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、四ツ時分ヨ

リ七左衛門・十郎太・七郎左衛門・仲太左衛門・龍
見其外役々来候、昼中竹翠殿被来麦飯寄合候、夫ヨ
リ武術為見分出候、今日ハ締方永井斎藏殿来被見、
丸田孝八殿ニモ同断、直心影流・示現流致見分候、
引続町足輕劍術モ見候、七ツ時分引入候得ハ内小野
寺被来、酒共出シ候テ暫被嘶、夕須木役々来候テ御
用向相達候、寒氣モ嚴敷遠方ヨリ来候ニ付、酒共出
シ少々給候テ夕帰り候、夜四ツ時分臥候事、

二日 大霜、今朝飯野筋霜柱式寸五分位有之、

暁七ツ時分起、暁ヨリ馬関田地頭安田助左衛門殿所

へ差越候処、昨日彼方ヨリ御用封モ被差出候由候得

共不相届、今早朝出立後相届候半、右御用封之儀ハ、

（頭注）求摩人吉へ上意打アリタルトノ聞へアリ

先月二十五日求摩人吉へ多人数上意打有之候段相聞

得候テ、求摩へ聞合差出、鹿尾島へモ御届被申上候

趣之由承候、八ツ過比馬関田打立帰り候テ、飯野飯屋

へ一刻立寄、暖大河平清太夫相詰居候ニ付呼出、飯

野ヨリモ求摩へ聞合之儀申付候、右清太夫外ニ横目

差越候筈、右異変之儀ハ粗相聞得、則昨日町之者両

人差遣置候由、何分慥ニ相分り候上、拙者へモ届申出候賦ニテ為有之由、暮過小林飯屋へ帰着イタシ候得ハ大口之虎頭次郎左衛門来り候、昨夕当所へ着ニテ一宿、今朝此方へ来り候由、夫ヨリ四ツ時分迄相嘶、無程臥候事、

三日 霜降、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、四ツ過当所締方横目南郷金太郎殿昨日差入之由ニテ被来候、斉藤武兵衛一刻出候、今日ヨリ大久保御蔵元詰トシテ差越候届申出候、一七日位之由、横山織兵衛ニモ一刻出候、時任強太左衛門ニモ出候、井上嘉兵衛同断、暖堀之内半五右衛門ヨリ左之通届申出候、

与頭

齐藤武兵衛

横目

弓削次右衛門

右、今日ヨリ大久保御蔵元詰トシテ差越シ申候、

竹木見廻

押領司半左衛門

郡見廻代

里岡清右衛門

右兩人、馬関田御取下方へ差越居候処、昨日帰郷仕候、

行司

竹之下善兵衛

右、一昨朝ヨリ同所御取下方へ差越候、

丑十月三日

夕飯野暖青山織兵衛来候テ当分欠跡并ニ病氣有之勤方御断申出候者モ有之、其上病氣等ニテ真幸転住者方旁ニテ御用多端、役々差支候ニ付与頭寄兩人申出候、行司ヨリ馬場八郎左衛門、横目ヨリ大河平清左衛門ニテ候、無程帰り、夜入四ツ時臥候事、

四日 大霜、快晴、

朝六ツ起、今日虎頭次郎左衛門大口之様帰候、半五

左衛門一刻出候、今日ハ病氣旁ニテ嘸差支候ニ付、

飯屋詰嘸ハ半五左衛門宿場ヨリ兼相勤候段申出候、

井上嘉兵衛出候、夜入四ツ時分臥候事、

五日 霜降、快晴、夜細雨暫降、

朝六ツ起、稽古所へ出候テ武術致見分候、五ツ過引

入井上嘉兵衛出勤、嘸ハ病キ等ニテ差支出勤ハ無之、

夜入り四ツ時分臥候事、

六日 雨、

朝六ツ起、小鳥駈イタシ候へトモ得物無之、吉次郎・

徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・嘉兵衛出勤、昼竹

翠との一刻、観音寺暫来候、今日ヨリ善兵衛国分へ

帰り候、夜入四ツ時分臥候事、

一此節求摩上意打之儀ニ付飯野ヨリ役々聞合とシテ差

出置候処、今夕中届有之候、格別巨細之儀モ無之候

ニ付、明早朝郷士直持ニテ御軍役方へ御届申出候賦、

聞合書等ハ御用万留ニ書留置候、

七日 快晴、

朝六ツ起、今早朝ヨリ向井宗一郎・深瀬伊左衛門直

持ニテ求摩駈御届書差出候、吉次郎・徳熊へ書物

為読候、昨夕ハ押川愛次郎出候、今日ヨリ大久保御

藏詰トシテ差越、斉藤武兵衛へ代り合之由候、今日

出勤十郎左衛門・嘉兵衛ニテ候、時任強太左衛門ニ

モ出候、四ツ過ヨリ伊福十郎太・赤木七郎左衛門来

候テ馬之毛焼イタシ呉レ候、相濟、酒共イダシ飯ト

モ為給候テ返シ候、一昨日ヨリ櫃造リ之大工三人

ツ、来リ、今日モ同断ニテ候、夜入四ツ時分臥候事、

八日 昼過小雨、夜入寒風烈シ、

朝六ツ起、稽古所へ出候テ武術致見分、吉次郎ニモ

出候、五ツ過引入候得ハ堀之内半五右衛門出候、町

ヨリ求摩異変聞合差出置候者共昨夜帰り候、聞合之

形行口上ニテ届申出候間、書付ニテ差出候様相達置

候、夫ヨリ吉次郎・徳熊へ書物為読候、井上嘉兵衛

ニモ一刻出候、今日ヨリ都之城へ堀喜右衛門病氣ニ

付医師頼ニ参り候由申出候、十郎左衛門・織兵衛出

勤、横山莊右衛門ニモ出候、八ツ後飯屋近辺小鳥駈トシテ出候処、伊福十郎太前頻雨降来候ニ付、一刻雨宿イタシ帰候得ハ大河平清太夫求摩ヨリ昨夜帰候由、聞合書差出候、当所締方横目永井斎藏殿ニモ右御届一件ニ付一刻被来候、右一件ニ付嘸伊福十郎左衛門夜入呼出、明早朝御届可申出候間、郷士持ニテ可遣兩人申付置候様相達置候、左候テ、堀之内ヨリ未当所町人ヨリ之聞合不差出候間、明早朝差出候様可申置段相達置候、夜入四ツ時分隊候事、

一 鈴木龍之助今朝嘶シ、吉次郎致劍術候ニ「シナヘ」

取落シ候処、手之内宜故シナヘ取落候、取落シ候程有之打モ宜ト申シ、先年龍之助致廻国候節、江戸ニテ三人ト申候無念流劍術者斎藤新太郎ト申候上手之劍術見候由、常之無念流トハ違ヒ、シナヘヲ片手ニ取上ケ、一打ツ、見事ニ一々打候由、余程上達之仕手ニテ為有ト嘶ニテ候、其者一度シナヘヲ取落シ候由、其節ハ私負テ御座リマスト申候テ少シモ不驕候由、右之者手之内ヲ第一ニイタシ致稽古候由、余リ握リ詰候得ハ働キ無之ヲ、ツヒ怪我ニテ取落シタル

ト申候、シナヘ握リ詰候得ハ上達六ヶ敷、吉次郎稽古モ手之内和ラカニ有之故取落シ候、アノ様ニアルカ第一ト申候、其弟斎藤甚五兵衛ト申者ハ大村侯御抱相成候得共、最早中風ニ弱リ候哉ニ承リ候候由、(符之)未存命ニテ候哉ト申シ候、甚五兵衛ハ龍之助ヨリモ遙年劣リニテ為有之由、兄之新太郎モ龍之助ヨリ少々劣リニテ為有之由、龍之助モ当年六拾歳ニハ未不足カト存候、

九日 嶽々雪、麓間々雪雨、

朝六ツ起、六ツ過半五左衛門出候、当町人共求摩異変聞合書差出候、右ニ付飯野ヨリ昨夕差出候聞合書取束、今朝衆中兩人持ニテ遣候、安田氏ヘモ御用封差出候、大炮分配所一件并右求摩聞合書共書写シ遣シ候、四ツ過野元藤太来、締方永井氏ヨリ之伝言承リ候、嘸大脇七左衛門・地頭横目横山織兵衛出勤、右兩人今日ヨリ之詰前ニ候由、夜入五ツ半時分隊候事、

十日 嶽々雪、

朝六ツ起、七左衛門・織兵衛出勤、吉次郎・徳熊書物為読候、斉藤武兵衛昨日大久保ヨリ帰候由ニテ出候、暖堀之内半五左衛門ニモ出候、夕方締方永井斉蔵殿被来候、親類へ病人有之、仕廻次第帰候様申来候由、暇乞ニ被来候、夜入五ツ半時分臥候処、夜中鹿兒島ヨリ書状来、藤八殿并七左衛門ヨリニテ候、^(忠義)太守様御上京一件御通達来候、御用万留ニ写置候、

十一日 大霜、水、快晴、

朝六ツ起、竹翠殿へ申遣夜前之御通達郷々へ廻達相成候様相達シ候、七左衛門・織兵衛出勤、六郎左衛門出候、五ツ時分七郎左衛門へ申遣シ候訳ハ、拙者軍馬些足弱ニ相成候ニ付、伊福十郎太馬貫請度存候、此節

御上京御供モ難計候ニ付テハ無覚束存候ニ付、トフゾ十郎太へ程能貫具候様相頼候、然処又々来、随分可遣ト之返答承り候、右ニ付用向取調、左之通り福留方へ申越シ候賦、

覚

一 御軍役用金之事

右ハ此節

御上京ニ付御供被召列候儀モ難計、其用意兼テ可有之事ニテ、先達テヨリ申越置候通之事候、就テハ出軍之節八拾両丈ハ可被成下ト之事、亦此方へモ用金格護モ有之候得共、別二百両丈ハ是非早々調達可有之事候、用金員数之儀、尚又藤八殿抔請ケ合ヒ可有之候、

一半朱ニ大錢取交三拾両丈

右ハ過分入目之様有之候得共、当所モ諸色高料ニテ存外及入価、当分大工雇入櫃造方イタシ、板モ余計ニ求得候ニ付四ツ作候、他所出張モ候ハ、諸物惣テ夫々格護之賦候、就テハ金物等モ及不足、此方ニテ相調且又軍馬足弱ニ相成、伊福方ヨリ相求度致相談候処、可遣ト之段承候、是モ当世態迷惑不相成様代料モ差遣シ候含ニ、是迄匱置候馬ハ野尻ヨリ七両ニ求置候馬ニ候間、先馬主ニ対シ余り高料ニ難扨、是ニモ相応入目可相成候ニ付、旁推量可有之候、

一馬桐油黃紋所

右ハ此方在合之桐油相損候ニ付、早々新規相調此方
ヘ可遣候、

一三尺繩

右ハ先日兵左衛門ヘ申付置候通りニテ、紋所等打込
金箔打候而、早々新出来ニテ可遣事、若不出来合儀
モ候ハ、不見苦能仕立候、紋所共無之の見当リモ候
ハ、夫ニテモ取入間ヲ合セ申度存候、

一股引之事

先日兵左衛門ヘ相嘶候通股引相損候ニ付、其方股引
可被取調候、紺股引六ツ・淺黃股引式ツニテ宜敷候、
淺黃余計ニ有之候ハ、仕立之儘紺ニ色上ケイタシ
候テモ可然ト存候、家來之内持合之人々モ候ハ、
六ツハ入り申間敷哉ト存候事、

一家來(打裂カ)鞭差羽織之事

右ハ先度新規ニ仕立方有之候得共、三ツ分ハ裏無之
候而未其儘此方ヘ有之候ニ付、当所ニテ裏取入急キ
仕立方ニテ候、シカレトモ持合モ有之、自分物致着
用度存候面々ハ夫ニテモ不苦、尤、染色等ハ此方の

ト違ヒ候テモ不苦候、黒色ハ遠慮之方可然ト存候、
且紋所モ不相成候、

一召列候家來足輕等之事

福留兵左衛門

白浜小兵衛

白浜熊太郎

鮫島善兵衛

沢田作右衛門

小宿岩次郎

花倉ヨリ一人

大久保ヨリ袈裟次郎一人ト存候、

右之通ニテ銘々其含ニ罷在候様内達モ可然存候、
一兩掛之旅掛相損候ニ付、小振之能キ藤シラベ一本可
遣候事、

一小柳ゴリ一ツ

右ハ先達テお筆どの被帰候節被持帰候ノニテ、右之
内ヘ其節被持帰候座ふとん・古衣裳杯入付、其外入
付候品モ有之候ハ、入付遣候テ宜候、

一呉座吹壺ツ

右壺行モ先日お筆との帰之節遣シ候ノニテ、此方へ可遣候、

一綿一斤

右取入有之候ハ、此便ヨリ可被遣候、

一鯉節

右羽島ヨリ取寄之筈候由、取寄有之候ハ、此節拾本計此方へ可被遣候、無左候ハ、四五本ニテモ可被遣候、

一せんじ小壺壺ツ

右求出シ候ハ、可被遣候、

一米櫃之上大瓢篋之内へほしいひ為有之由候間、其内

二三升計遣ハサルベク候事、

一其方へ此節申請相成候木綿四反、ぎん江サラシ置具

レ候様頼ニテ候事、

一わたこ二ツ

右市中相尋候テ求遣候様頼入候、

一合羽之事

但、

一士合羽五枚此方へ有之候得共、式枚ハ少々破レ

モ有之候ニ付、残り三枚随分宜候、シカレバ三枚ハ不足ニテ、此節早ク頼之事、

一足軽合羽三枚有之、一枚ハ過上ニテ候、

一加籠之者合四枚

一赤合羽四枚

右一行一枚不足敷藤八殿杯へ吟味之事、

右合羽其方取調候得ハ在合モ難計、取調之上不足ハ

可相頼候事、

一惣物主一人 従卒八人

馬二疋

夫五人

右夫五人ハ

内、一人 具足箱

二人 両掛

一人 要具箱

一人 合羽籠

右五人之夫へ赤合羽為着候事ニ候得ハ合羽一枚不足、

町田氏杯へ吟味之事、何レナクテハ叶フ間敷敷ト存

候、

一金箔八枚

此方へ有之候三尺繩取繕ヒ之賦候、取繕ヒ候テモ別テ古ヒ居、余リ宜シクモ相成リ間敷存候得共、若哉其方不出来儀モ候ハ、事ヲ欠キ候ニ付、塗直シ置候考へニ候、然レトモ是ハ其方新出来、是非出来候様可被相働候、

右品々何レモ急速入用之事ニ候間、此節当所与頭横山六郎右衛門歸之節、馬壹疋郡方ヨリ免受候テ品々取揃相頼可被遣候、若不出来品モ有之候ハ、差急キ相頼、可成早目ニ近日中遣候様可取計候、

十月十二日

十二日 大霜、

朝六ツ起、稽古所へ出候テ武術致見分候、七左衛門・嘉兵衛出勤、吉次郎・徳熊へ書物為読、織兵衛今朝一刻来、馬草履為作候儀承候、七郎左衛門来、五ツ半時分隊シ候事、

十三日 大霜、

朝六ツ過起、七左衛門・嘉兵衛出勤、六郎右衛門一刻出候、今日出府ニ付書状相頼候、藤八トノ・福七左衛門へ遣シ候、赤木七郎左衛門一刻来候、今日ハ櫃并ニ両掛諸道具一付取集トモイタシ候、夜五ツ半時分隊候事、

十四日 雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、大脇七左衛門・横山莊右衛門出勤、九ツ時分小鳥惣イタシ候得トモ矢放無之、八ツ時分赤木仲藏講義承リ、論語ニテ候、又町人ニ上田周藏ト申者書物相応ニ読メ候ニ付、同シク講義承候処、小学立教イタシ候、七ツ過細野村家来千太郎鹿兒島ヨリ帰便ヨリ書状并二品々来候、夕ヨリ竹翠トノ・赤木七郎左衛門来、夜入候テ五ツ過各被帰、四ツ時分隊候事、

十五日 雨後晴、

暁六ツ前起、今日ハ訓練見分申渡置候処雨頻リニ降出候得共、訓練之事候間、雨降ハ雨降ノ訓練ニモ可

相成候得共、此寒天衣薄キ窮士共中々難儀ニモ可有之、火繩保方等之稽古ハ外ニ可有之候間、今日ハ円兵寺^{岳カ}ニテ手都合迄致見分候、当所山所ニテ候ヘトモ、宍狩イタシ候者共至テ相少ク候間、御手当人数中ハ宍狩イタシ、尤、自分狩ニ候間、取得候節參候人数ニテ分円イタシ、当冬ヨリ来春ニ掛ケテ屯人三四度位ツ、ハ農隙ヲ見合參候ハ、第一山坂之稽古且ハ現事生物ニ向ケ致砲発、能訓練ニ相成候半、農業之障ニ不相成候様申談候テ差越、右差越候者共之名前拙者可承届旨相達置候、左候テ、今日ハ銘々持參之自筒惣テ致見分候、訓練罷出候人数左之通、

壹番一組

- 押川五之丞
- 伊福十郎太
- 齊藤武兵衛
- 大脇宗之助
- 時任弥兵衛
- 柚木彦十郎
- 森岡仲之丞

二番

- 齊藤伊太郎
- 大坪市之丞
- 富満清左衛門

三ツ余
榎並屋太兵衛惣筋

三番

- 押川愛次郎
- 堀伴之助
- 松田浅右衛門
- 富満市二
- 中山仁之助
- 上野喜七郎
- 本田仲兵衛
- 押川嘉吉
- 中山伝次郎
- 栗屋喜右衛門
- 時任宇次郎
- 三番
- 野辺清右衛門
- 弓削仁十郎
- 植村祐七

森岡万之助

大牟田藤之介

富永源右衛門

寺師十五郎

片之坂助左衛門

松元藤右衛門

野元藤太

四番

水間藤助

森岡伊助

野辺市助

竹下勇吉

溝口伝兵衛

玉目六匁位
榎並屋太兵衛スリ
スラシ
榎木藤七郎

竹下与一郎

柘崎庄次郎

永井助五郎

植村嘉右衛門

五番

大河平仲大夫

大坪源之丞

河原源二郎

相場利助

山波六郎

森岡弥九郎

立元伊左衛門

里岡源之丞

三匁余丁是アリ
須賀原新

深瀬彦太郎

宗方源助

六番

斉藤十太郎

上井休蔵

大河平和助

高野瀬彦七

本村十助

永井金五郎

押領司良助

伊福喜一郎

向井宗一郎

温水祐之丞

右見分等九ツ半時分相濟飯屋へ帰宿、無程赤木仲太

左衛門・同七郎左衛門・横山龍見来候、井上嘉兵衛

同断、夜入四ツ過臥候事、

織兵衛御用之儀有之、度々出候、夜入四ツ半時分臥候事、

十八日 霜、快晴、

朝六ツ起、町田藤八殿へ遣シ候書状認候、

十六日 曇、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、高野瀬庄

助・横山織兵衛出勤、今日ハ終日写本、竹翠殿夕暫

被来、夜入四ツ過臥候事、

小林細野村之内

水増門

高式拾四石九斗壹升四勺壹才

右ハ帖佐与御蔵入高ニテ候処、名越左源太地頭職分

地返高相成候間、其許所留帳支配相替置、当秋ヨリ

彼方致取納候様毎之通可申渡候、左候テ、相達候届

無延引当座御支配方へ可申出候、此段申渡候条、聊

大形有之間敷候、以上、

丑十月十日

御勘定方小頭

伊木七郎

十七日 霜、快晴、

今日野尻調練見分トシテ晝ヨリ差越候賦ニテ、七ツ

時分ヨリ家来・下人起シ飯共為焚候賦ニテ起シ候処、

時間違ニテ八ツ前ニテモ候半起シ、拙者ニモ其時ヨ

リ起居候テ、六ツ前打立、野尻之様参候テ紙屋人

数・示現流府元辺人数直心影流并東（家カ）水野流致見分、

夫ヨリ御手当調練致見分、暮前小林飯屋へ帰着、夫

ヨリ安田氏へ御用封相認遣シ候、高野瀬庄助・横山

小林

暖中

郡見廻中

土持肇

右之通所へ申来候由申出候、拙者ニモ別段為何儀モ不承、如何様御役料高練替ニテモ為被仰付事御座候哉ト存候、今日町田氏方へ問越候、

一 庄助・織兵衛・強太左衛門出勤、観音寺一刻被来候、拙者馬練替度存候ニ付、高原之藤田新之丞馬為牽為見候様申遣置候処、四ツ過新之丞乘来候、夫ヨリ伊福十郎太申遣致乘方候、拙者ニモ乘候、十郎左衛門ニモ来り乘候、相濟十郎太・新之丞召呼酒飯共出候、八ツ過帰、夫ヨリ亦宮原山水殿田代酒屋家内三人召列被来、夜入竹翠殿方へ被参候テ今夜被泊候、竹翠殿度々被来候、新之丞馬拙者氣ニ入候ハ、可遣旨申候由ニテ、拙者馬替候ハ、替可申段申候由承候ニ付、替候テ拙者馬ハ則今日新之丞乘帰、新之丞馬此方へ召置候、此節被仰渡候御貸上ケ一件ニ付直達之儀有之、支配郷々嘸・与頭兩人御用申渡置候所追々来候、高原ヨリ黒木佐平太・村田庄次、野尻ヨリ

此所本ノマ、

飯野ヨリ大河平清太夫・壹岐

市郎右衛門来候、飯野之儀ハ小林ト一組ニテ此節京師へ被差出儀モ可有之候間、人数揃其用意ニテ罷在

候様被仰渡候ニ付、其談合モ有之候、来ル二十五日調練見分之段モ申渡置候、須木ハ夜入黒木元右衛門ト上野彦助来り候、四ツ時分臥シ候事、

十九日 霜、快晴、

朝六ツ起、六ツ半宮原山水殿被来、又竹翠との方へ被来候、四ツ時分又帰之由ニテ一刻被来候、四ツ過ヨリ十郎太来馬乘イタシ候、拙者ニモ三鞍乘候、夫ヨリ七郎左衛門来暫相咄、八ツ過ヨリ夕方迄吉次郎へ書物為読候、徳熊モ読候、夜入四ツ時分臥候事、

(頭注)御貸上ケ金人数

一 此節御貸上金被仰付候人数之内左之通、

朱書三万両之由

壹万両

都之城

朱書三十両之由

壹千両

末川主水

貳千両

寺尾庄兵衛

貳千両

西田弥兵衛

同三千両之由

千両

北郷浪江

千五百両

坂元弥右衛門

同六千両差上候由

員数申出候様

重久佐次右衛門

八百両

川井田

千五百兩
田中七左衛門

貳千兩
藤井

千兩
種子島加次右衛門

五千兩
知覽

千兩
肥後八右衛門

右之外段々御座候得共、イマタ承り不申候、町田藤八殿ヨリ申来候、

二十日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、四ツ後七郎左衛門・十郎太来、馬毛焼イタシ候、七ツ時分相濟、飯トモ寄合候、夕観音寺被来、夜入四ツ時分被帰候、七ツ過竹翠殿一刻、半五左衛門・庄助・織兵衛出候、夜入四ツ半時分臥シ候事、

二十一日 雨後雪、

朝六ツ過起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、強太左衛門・織兵衛出勤、八ツ前六郎右衛門昨日鹿兒島ヨリ帰着イタシ候由ニテ来暫相咄候、八ツ後稽古所へ出候テ武術致見分候、示現流・直心影流ニテ候、七ツ

過帰り、鈴木龍之助来、京都ヨリ弟鈴木辰弥ヨリ書状来候由ニテ咄承候、夕方帰候、夜四ツ時分臥居候得ハ、八ツ時分安田助右衛門殿御用封并二町田藤八殿ヨリ書状来候事、

二十二日 快晴、

朝六ツ起、当所嘸時任強太左衛門・大脇七左衛門・伊福十郎左衛門・堀之内半五左衛門・高野瀬庄助只今御用申渡、六ツ時分（半脱力）皆々相揃候、此節御貸上ケ被仰付候儀ニ付テ可申渡一条有之、拙者支配五ヶ郷嘸与頭尚又相寄談合イタスベク事ニテ、今日則手分ニテ御用申遣、致熟談候様申付候、四ツ時分青山織兵衛飯野ヨリ来候テ、此節上京之人数名前差出候、八ツ半時分ヨリ馬二三鞍乗候、十郎太・七郎左衛門来候、夜入四ツ時分臥候事、

二十三日 霜降、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、四ツ後十郎太・七郎左衛門来馬乗イタシ候、町田藤八殿書状来

候、

筋ニテ小林中乗馬見分、吉次郎・徳熊召列候、左之
通馬牽出シ候、

二十四日 晴、夕曇、夜入少々細雨、無程止、

伊福七郎左衛門

夕乗廻シ、今夜中町田藤八との・馬関田地頭安田助

黒栗毛 三才

右衛門殿ヨリ自分状御用封等相届候、

伊福十郎左衛門

黒栗毛 二才

二十五日 晴、

時任弥兵衛

黒栗毛 二才

暁ヨリ起、町田藤八殿并稻留七左衛門へ書状遣シ候、

赤木七郎左衛門

鹿毛 三才

安田助右衛門殿へモ御用封差出、五ツ時分堀之内半

横山伴之進

栗毛 三才

五右衛門今日調練見分人数相揃ヒ候段申出候間、調

観音寺

栗毛 二才

練場之様（頭注）飯野・小林一組上京ノ善此節小林・飯野合一組上京被仰付候人

高野瀬庄助

尾花栗毛 二才

数調練見分イタシ、八ツ過帰宿、夕方観音寺不働参

昌寿寺

青毛 二才

詣、帰候得ハ大口ヨリ虎頭次郎左衛門来一宿イタシ

高岡
吐師昌斉

二十六日 快晴、

朝六ツ起、今日ハ御貸上銀員数・名前差出候ニ付、

添書イタシ町田藤八殿方へ遣、御勝手方掛御用人伊

地知壮之丞へ遣候様申越候、八ツヨリ野尻街道往還

鹿島毛 二才
園田平吉

前取 栗毛 二才

押川愛次郎

駟出ス 栗毛 二才

町
川野弥兵衛 黒鹿毛

黒鹿毛 二才

富満武右衛門 鹿毛 二才

鹿毛 二才

堀平左衛門

町
町元伊助 栗毛 二才

町元伊助 月毛 二才

町
町元彦兵衛 黒鹿毛

町元彦兵衛 黒鹿毛 四才

鞆師
松元袈裟太郎 黒鹿毛

町
丸見次兵衛 青毛 二才

町
丸見次兵衛 青毛 二才

青毛 二才

町
高橋仲助

飯野馬 栗毛 三才

赤木仲蔵

町
池井彦太郎 栗毛 二才

町
前田平兵衛 紅鹿毛 二才

町
前田平兵衛 栗毛 二才

町
押川五之丞 黒鹿毛 二才

町
井上軍兵衛 黒鹿毛 二才

町
横山半之進 鹿毛 二才

町
沖半左衛門 月毛 二才

町
堀源太左衛門 黒鹿毛 二才

町
渡辺金右衛門 栗毛 二才

暮前帰宅、夜四ツ時分隊候事、

栗毛 二才

時分隊候事、

二十七日 夕曇、

朝六ツ起、八ツ時分迄写本、夫ヨリ大脇七左衛門・横山織兵衛召列、吉次郎・徳熊ニモ列候テ鉄炮射ニ参候、吉次郎当年十歳ニテ当春之比之二筒射、其後今日初テニテ候処、初筒ニ中リ大悦ニテ候、夕方帰宅、四ツ時分隊候事、

二十八日 霜降、快晴、

朝六ツ起、六ツ半時分堀之内半五右衛門・横山織兵衛出候、今日モ又此節上京之小林・飯野之一組訓練有之、五ツ半時分ヨリ訓練之場之様参り候、斉藤武兵衛・横山織兵衛付来候、八ツ時小林飯屋へ帰宿、昨夕吉国孝之助来候得共、昨日ハ何歟トイタシ緩々ト無之、今日帰り後大鐘時分迄相嘶候、今晚ハ赤木仲太左衛門所へ参ル由、今朝右仲太左衛門モ一刻来候、暮ヨリ竹翠殿被来、五ツ時分迄被相嘶候、四ツ

二十九日 霜降、快晴、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ須木武術為見分参候、今朝出前伊福十郎左衛門来、御軍役方ヨリ小林・飯野合テ一組之人数両郷申合、右名前草々差出候様申来候由、飯野人数名書者拙者方へ差出有之候ハ、相下ケ呉候様申出候間差出候間、相下ケ濟次第又差出候様申聞候、井上軍兵衛大久保蔵詰見聞役ヨリ御用申来、今日ヨリ差越候届申出候、横目野元藤太ニモ右同断今日ヨリ詰ニ而差越由申出候、平兵衛モ御用濟之上詰候由承り候、横山織兵衛一刻出候、八ツ時分須木へ着、無程小藤田甚左衛門へ一刻参候訳ハ、当年七十二才相成至極之元氣ニテ、文武心掛宜ニ才共引勸文武相励シ候段相聞、老年ニ至リ須木ニハ珍敷人物ニテ、別テ嬉シク存候ニ付、扇子・巻煙草持参ニテ子供引勸候読書所ナト致見分、一刻相嘶飯屋之様帰宅、直ニ武術致見分候、夜入五ツ半時分隊候事、夕方小藤田甚左衛門一刻、昼拙者参候一礼承候事、

月山流薙刀由来

月山流鐘・長刀之由来ハ、元禄年中播州赤穂城主浅野内匠頭家臣大石内蔵助敵討企之節、小牧万左衛門（長矩）ト申人同志ニ候処、領地及離散身近者無之、七拾有余之老母介抱之人無之、無是非違誓約老母ヲ背負候テ日州高鍋御城ニテ致止宿、彼地ニ門人多有之、于今有之候、夫ヨリ佐土原致止宿候得共御抱ニモ不相成、御料本庄十日町ト申所へ老母召列止宿仕居候、此辺段々門人多シ、中ニモ綾郷士有馬番左衛門ト申者一廉之出精ニテ候処、其事及御聞暖役被仰付候、右番左衛門口入同道ニテ入門仕出精仕候処、亡祖父市兵衛拾八歳之時極々病氣為見舞差越候節、為記念元禄四年師ヨリ伝候一卷遣シ候間、日州佐土原致皆伝置候、於彼方稽古伝授等可致旨遺言ニテ相別申候、右一卷并ニ佐土原ヨリ伝書入御覽申候、右万左衛門事、井土川伊兵衛ト隱居名被罷居候、私雅名市五郎（雅力）甲之進ト名替仕、依御法度市兵衛ト改名仕候、右伝書五通去春御軍法役伊地知小十郎殿・野元源太左衛門殿へ入御覽申候、稽古之儀ハ須木・高崎・野尻・

綾四ヶ郷御見分被成下候、

示現流之事

一御流儀之儀之由来、亡祖父市兵衛医道為稽古森山長元老宅へ詰居節、本ノマ岡次郎左衛門様ト申人御肝煎被下、富山仲右衛門殿申人門人ニ相成伝授仕置、私迄三代相伝申候、伝書之儀ハ有川彦兵衛殿へ差上置申候、右河流、亡祖父代迄ハ高崎門人少々有之、所中計候処至私代須木六拾人余、高崎ニハ八十人計、野尻五拾人計、所中ハ三十人計相成申候、依之私ニハ組頭格被仰付、難有存入第仕居申候、今年八拾三歳相成申分茂仕申間敷候得トモ、任御尋自宅如斯御座候、以上、

亥二月十七日

中村市兵衛

晦日 曇

朝六ツ起、今日ハ犬山相企四ツ前須木飯屋出宅、参掛未早目之由ニテ緒方覚太所へ一刻立寄、焼ケ山狩倉之様参候テ、拙者ニハ池之元ト申候所へマブシ立

イタシ候、拙者所へ鹿二疋出候得共都合悪敷、矢放シモ一ツイタシ候へトモ不中候、乍併三才鹿一ツ取レ候テ、六ツ半時分飯屋之様帰候、四ツ過臥候事、一今日焼ケ山狩倉池之元へマブシ立イタシ居候処、拙者マブシヨリ右向フ川之上之山へ眺シバ鳥之様鶏鳴立、人村モ無之深山へ奇妙之事ニ存、川音高ク候ニ付如何様耳柄ニテ鶏鳴之様聞ナン候儀ニテモ有之候半カト存、能々念入聞ケハ聞程鶏鳴ニ相違無之、袂時計致所持居候ニ付取出シ見候得ハ、八ツ過ニテ半時余リニ右之通有之、鹿飛出聲モ無程絶へ候、先ハ余リニ奇事ニ付、書留置也、

丑十月迄

日史第五拾四

名越時敏（花押）

慶応元年乙丑霜月中

朔日 快晴、

朝六ツ起、五ツ時小藤田甚左衛門来、所持之伝書等

拜見候、四ツ前打立、八ツ時分小林飯屋へ帰着、直ニ又稽古所へ出候テ武術致見分候、七ツ半時分引入夫ヨリ伊福十郎左衛門ば、来、暮時分赤木七郎左衛門妻来、四ツ時分迄相断帰候、夫ヨリ吉国孝之進來暫相断、明日帰り候由、今晚ハ一宿ニテ候事、

一伊福がば、南林寺見物ニ參候節ハ能都合ニテ、本寺和尚加久藤之萩原參詣之由被聞付、萩原二候得者命之主也、早ク方丈へ可来、今晚ハ是非一宿イタシ候様被申由、命之主トハ何様之訊ニテ候哉ト尋候得ハ、右和尚ハ小僧之内飯野長善寺ニテ素立候処、師之僧毎日薪取ニ計遣候テ経文指南無之、当分通ニテハ行々出家遂候詮モ無之、鹿兒島へ出能師可頼ト拔出候テ、加久藤之出川可渡トイタシ帯ヲ解候ヲ、右ば、カ祖父萩原何某行懸、小キ小僧川ヲ渡リソフニテ、出川渡リ得候処六ヶ敷存、小僧ハ川ヲ渡ルヤ、此末ニ淺瀬有之、其所ヲ渡スヘクト申偽候テ萩原所へ列越、子細ヲ問候得ハ飯野長善寺之小僧ニテ其年九歳ナルガ、前件通之咄ニテ鹿兒島へ參師匠替イタシ候含之由申出候ニ付、萩原三日中鹿兒島へ出可申候間、其

節馬ニ乗セ可列越、其内ハ萩原所へ致止宿候様申聞、則長善寺へ人ヲ遣シ候処、小僧受取ニ参リ、右通ニ走出候段申出候へハ、以来薪取ニハ不遣、経文ヲ教可申帰候様承リ候テ、又々長善寺へ歸リ、右之御蔭ニテ危キ川ヲ不涉存命（志戸本家本より趣）只今はケ様之右寺へ致住職誠ニ命△之主ニテ候ト、別テ之取持ニ逢候由嘶ニテ候、九才ノ時ヨリ右通ニ心掛宜処ヨリ、右通南林寺へモ被相成候半、当年ヨリ六十年前之事ト、其僧之名前ハ不存、始終付届杯イタシタルヨシ、六十年前之年簡ニ相当住職之和尚取調候へハ名前モ相分リ可申、少キ時ヨリ南林寺へ僧職イタス程之気量為有之人ト存候テ珍敷嘶故書留置候、

二日 晴、

今日宗門方改役三原平兵衛殿・伊地知平次郎殿、外ニ宗門方横目カ一人被来候、

朝六ツ起、六ツ半過横山織兵衛来候、額一面持来、明日氏神三島大明神へ進納之用ニ候間、白鷺書具候様承リ候ニ付受合候、横山伴之進・横山莊右衛門出

勤、堀之内半五右衛門ニモ一刻出候テ、今日者無拋用向之儀有之候ニ付、詰候へトモ暇申出候、在宿イタシ居候間、用向モ有之候ハ、申遣候へ者則可罷出段モ承候、竹翠殿モ一刻被来、今日ヨリ面高氏狩ニ付木浦木へ差越候間、三日暇之儀承候、拙者ニハ四ツ後ハ鹿皮張、昼ヨリ今朝之額之絵書トモイタシ、夜入四ツ時分臥候事、

三日 大霜、快晴、

朝六ツ起、五ツ時分時任弥兵衛今日ヨリ大久保蔵詰ニ差越由ニテ一刻出候、横山伴之進ニモ一刻、堀之内半五右衛門一刻、斉藤武兵衛・横山莊右衛門出勤、昼観音寺一刻被来候、今日ハ終日字書ニテ候、絵モ二三枚書候、夜入四ツ時分臥候事、

四日 晴、夜入雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、伴之進・莊右衛門出勤、七ツ半時分迄書画、夫ヨリ馬乗、十郎太・七左衛門来、暮前堀之内半五右衛門来候、暮ヨ

り細野之千太郎外ニ身内ニ相成賦之源左衛門列來候、
五ツ半時分歸リ、四ツ時分隊候事、

五日 朝雨後霽、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、夫ヨリ手本
書并書画印判イタシ、竹翠殿今朝木浦木ヨリ歸ニテ
被出候、此度モ六ハトレス候由、九ツ半時分ヨリ熊
野權現祭ニ付參詣、徳熊列參、神舞杯モ有之、歸リ
ニ社守所立寄候様承候テ參、焼酎・飯迄モ出候、地
頭横目横山莊右衛門ニモ付參リ、家來ハ鮫島善兵
衛・小宿岩次郎供ニテ候、七ツ過歸宿、直ニ社守所
へ包物共岩次郎へ為持遣候、夜入四ツ時分隊候事、

六日 霜晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、伴之進・莊
右衛門出勤、七左衛門同断、八ツ後七郎左衛門來、
馬コネ摘イタシ呉候、六ツ十郎太一刻來、夜入五ツ
時分隊候事、

七日 快晴、大霜、

暁七ツ半時起、六ツ過野尻へ武術為見分差越候序、
伊福十郎太・同十郎・同徳之進・横山伴之進・觀音
寺・昌壽寺・押川五之丞・高野瀨彦七・吐師昌齊・
押川愛次郎遠馬相企差越、日入比小林飯屋へ帰宅、
昌齊・徳之丞飯屋門前迄付來候、其外暮前帰宅、各
飯屋へ出候、今晚平馬旅行ニ付已待ニテ夜起キ、外
ニおたね一人被起居候、

八日 大霜、嶽々雪、

朝六ツ過稽古所へ出武術致見分候、吉次郎・徳熊へ
書物為読候、七左衛門・莊右衛門出勤、七ツ過七郎
左衛門來、栗野鎧扨物一領相見得候由ニテ持來、別
テ氣ニ入候ニ付相求候、代金五拾五兩ニテ候、鉢桃
形・銀篠垂レ・金小実・緋威甲臙當・籠手ハ象眼ア
リ、右取入ニ付テ赤木七郎左衛門・大脇七左衛門別
テ致世話候ニ付、今晚ハ祝ヒニ酒共寄合候、五ツ半
時分歸リ、四ツ時分隊シ候事、

九日 霜降、晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、七左衛門・十郎太・伴之進・荘右衛門出勤、庄助・藤太出候、七郎左衛門・十郎太来馬乗、拙者ニモ三鞍乗候、夫ヨリ観音寺被来、暮過須木ヨリ中山宇平太・梁瀬次右衛門来候、暫相嘶帰、四ツ時分臥候事、

十日 霜降、晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、庄助・荘右衛門出勤、昼時分庄助・伴之進・六郎右衛門・藤太来、先日求候鎧一見イタシ度段申出候ニ付為見候、七ツ時分十郎太・七郎左衛門来馬乗、拙者ニモ三鞍乗候、夜入四ツ時分臥候事、今日ハ藤八殿ヨリ書状、此方ヨリモ遣ス、七左衛門門断、

十一日 夕小雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、五ツ過七郎左衛門馬乗イタシ候ニ付、拙者ニモ出候テ乗候、庄助・伴之進・荘右衛門出勤、七左衛門ニモ出候、十

郎太一刻来、横山織兵衛先日求候具足見トシテ来候、八ツ前稽古所へ出候テ武術致見分候、夕方庄助并横目堀喜右衛門・羽島栄之丞来候、高岡締方横目ヨリ噺・横目御用之儀有之可罷越旨申来候由ニテ、明朝ヨリ差越候段届申出候、竹翠殿度々被来、昨昼時分面高与蔵殿被来候ヘトモ留後レ候ニ付今日書留候、夜入四ツ時分臥候事、

一明後十三日本府為番兵出府之由ニテ、井上嘉兵衛・堀伴之助・押川五之丞・上井休造出候、

十二日 雨、嶽々雪、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、時任強太左衛門・大脇七左衛門・横山伴之進・横山荘右衛門出勤、竹翠殿御用之儀有之、数度被出候、観音寺和尚一刻被来、飯野モ番兵ハ明日ヨリ出候由、御貸上金上納ニ付明日ヨリ与頭齊藤武兵衛出府之段申出候、仍テ役人七左衛門方へ書状彗通相頼候、夜入五ツ時分臥候事、

十三日 小雨、

朝六ツ過起、吉次郎・徳熊へ書物為読、莊右衛門・

強太左衛門出勤、井上嘉兵衛・押川五之丞今日ヨリ

番兵出府之由ニテ出候、盃共イタシ、四ツ飯野壹岐

源五左衛門・青山七左衛門へ地頭横目申付、誓詞血

判イタシ、丸田竹翠殿右引進并ニ誓詞弘メ方ニテ候、

先日赤木仲太左衛門ヨリ致借用居候書付今日写仕廻

候、夜入四ツ時分隊候事、

井尻彦左衛門

柏木源右衛門

左候テ、御貸上金上納モ転住物方へ差出シ候様川崎

兵左衛門ヨリ承知之由、鹿兒島へ上納候トモ又々転

住物方へ差送相成候間、直ニ彼方へ可差出段モ承候

段申出候、常福院無程帰り、夜入四ツ過隊候事、

十五日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、強太左衛門・

莊右衛門・織兵衛出勤、七郎左衛門一刻來候、九ツ

過ヨリ難守社御祭ニ付參詣、地頭横目横山莊右衛門

付參候、七ツ時分帰宿、仲太左衛門、暮ヨリ大工喜

右衛門招呼酒トモ為吞、五ツ過帰り、四ツ時分隊候

事、

十六日 霜降、快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、朝四ツ時分

須木上野笹右衛門儀与頭ヨリ噺役、兒玉源七郎横目

ヨリ与頭、築瀬次右衛門地頭横目ヨリ横目、曾木平

十四日 間々小雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、強太左衛門・

伴之進・莊右衛門出勤、観音寺來、高原ヨリ丸山儀

一郎來、先日拙者書画応需書遣候一礼ニテ候、飯野

ヨリモ与頭谷口常福院來候、昨日ヨリ番兵出府之段

届申出候名前左之通、

黒木喜左衛門

押川左守

馬場勝八郎

黒木源吾

太左衛門竹木見廻ヨリ地頭横目、萩原築左衛門へ竹木見廻申付候、築瀬次右衛門儀右之通被仰付為御礼出候、四ツ過ヨリ八王子御社御祭りニテ参詣、地頭横目横山織兵衛付参候、七ツ時分飯屋へ帰着、夜入四ツ時分臥候事、此節不時代リ当所締方横目伊勢吉兵衛殿外迄見廻有之、

十七日 大霜、快晴、

朝六ツ起、今日ハ終日屋内取集ニテ候、昼過小林莊右衛門へ横目被仰付候御礼トシテ出致面会候、噺時任強太左衛門・普請見廻リ栗屋仙右衛門兩人今日モ終日普請方掛リニテ罷居候テ、今日ハ寒気モ強ク候、二付来リ酒給候様申聞来候テ、夜入五ツ半時分帰候、家来鮫島善兵衛先達テヨリ下人為見付国府へ参リ居候処、今晚帰候、下人モ来着居候由、不遠来筈、大久保ヨリ此節家来札ニ可相成市之助ト申者モ来候様約束イタシ置候由、十三歳之小二才ニ候間、三日之内親列来筈候由、

十八日 大霜、快晴、

朝六ツ起、九ツ半時分ヨリ須木へ参リ候、七ツ時分須木飯屋へ着、一宿候事、

十九日 大霜、快晴、

朝六ツ起、

竹下猪太郎

久木山嘉之助

椎原清一郎

楠元清左衛門

安藤与左衛門

中村幸之進

垂水莊次郎

右名前之者共綾ヨリ月山流為指南来居候ニ付、早天稽古見候、須木之月山流モ致見分候、右綾之者共飯屋ニテ面会、尚又指南方宜相頼段相達候テ、師匠中村幸之進へ包物并金子五十疋遣候、五ツ半時分ヨリ袖園番手為見分参候、別テ宍多キ狩倉山ニテ候間、序ニ犬引候テ宍モ取可申候ニ付、着見分之上直ニ一

狩倉板木之松塚ト申候ヲ狩候処、大鹿壹丸取得候、
今晚ハ此番手一宿、袖園番手下之川橋別テ危キ橋
漸々涉得候、老若之人又ハ女人抔涉得申間敷候、

一 袖園之山中袖木数多アリ、深山ニ奇妙、袖モ里ニ有
之候ヨリ皮給候テ別テ宜候、右袖之木有之故于今袖
園ト地名ヲイフナルベシ、

一 此山中薬師堂アリ、六帖敷ニシテ仏体式拾計アリ、
米良筑後守須木領地之時分ヨリ有之堂社ニ候半ト存
候、其後修甫ハ度々為有之筈、此辺屋敷跡三四ヶ所、
墓石抔処々アリトイフ、其内三ツハ見候、隠人之居
住跡ト見得候、

二十日 霜、快晴、夜入雨、

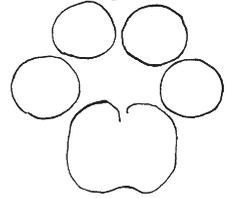
曉七ツ時起、今日ハ田代ガハへ番手為見分參候筈候
処、袖園ハ去多ク居候間、今一日ハ此所ニテ犬山イ
タシ差越可然哉ト申候間、其通可致迎ニタノコバ狩
倉ニテ犬山イタシ候処、五年ケリ大猪宍一疋犬付射
候、未拾八才之境田仲太郎ト申者ニテ候、別テ之高

名ニ付、右仲太郎へ則為褒美金子壹両・塩硝一斤・
鉛一竿目録認遣候、今晚モ袖園番手一宿、

二十一日 快晴、

曉七ツ時起、今日ハ田代ガハへ參筈候処、夜前雨
降り、至極之難路雨上リニハ通路別テ懸念有之、取
止ニイタシ可罷帰筋申出相咄候処、帰掛今一犬山イ
タシ度申出、其通イタシ候処、又大鹿一ツ・ニク獸
一疋取レ候、ニク皮之儀モ先達テ相求度申置候処、
何モ心之通り出来仕合之至リニ候、皮モ至テ上通大
皮ニテ候、拙者ニハ至テ獵安スニテ、拙者狩リニ不
取ト申事無之、奇妙ニ候ト申候、ケ様猪宍近年ニハ
取レ候事モ無之ト申事ニテ、寒氣モ薄ク天氣モ宜仕
合之至ニ候、(頭注)山犬之宍狩今晚七ツ時分山犬多声イタシ候、夜々
多集リ宍狩イタシ候由、拙者泊リ居候番手脇モ山犬
七疋今晚通り候、足跡有之、程恰好左之通、

山犬足形



里狩犬之足踏ヨリ遙ニ大ク有之、少々大小モ有之候へトモ、大形此程有之候、右狩相濟番手ヨリ八ツ前打立候テ、須木仮屋之様暮前帰着、夜入役々出候、此節ハ犬山モイタシ、殊ニ大穴モ取レ候ニ付、打寄焼酎トモ吞候様金子貳百疋料遣候、先日大穴射候者へ金子其外玉薬等為褒美遣置候処、彼者ヨリ又為祝焼酎共呉候間、役々へ皆々打寄候テ為吞候テ、四ツ時分臥候事、

霜月二十一日

今日帰路山犬之仕業ニテ鹿之毛処々食散ラシ有之、又山犬之穴狩候声モイタシ候、

二十二日 大霜、快晴、

朝六ツ起、今朝月山流薙刀見候、昨朝綾ヨリ之者帰候由、今朝稽古見候処師ヨリ分テ受指南候由ニテ、兩日之事ニ余程稽古モ相替候段褒置候、七拾余才相成候須木之師小藤田甚左衛門モ出候、四ツ前須木打立帰候処、九ツ過小林仮屋へ帰着、則境田へ褒美之金子壹両・塩燗一斤・鉛一竿為持遣候、暮ヨリ伊福十郎太并母申遣来候、強太左衛門今日モ相詰居候間、招呼穴開キトモイタシ候、ニク皮張モイタシ、各四ツ過帰、無程臥候事、

今日大久保ヨリ下人市之丞来候、

二十三日 朝小雨、終日曇、風、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、夫ヨリ鹿皮貳枚家来皮張イタシ候ニ付致手伝候、暮ヨリ観音寺被来候テ、五ツ半時分帰ニテ候、四ツ時分臥候事、

二十四日 大霜、嶽々雪、寒風烈シ、

朝六ツ過起、四ツ後文行堂へ参り、夫ヨリ宗門改役

三原平兵衛殿旅宿へ一刻見廻候得ハ、御用有之観音寺へ被參居候由ニテ八ツ前帰宅、夜入四ツ時分隊候事、

二十五日 小雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、時任強太左衛門・織兵衛出勤、斉藤武兵衛鹿兒島ヨリ帰之由ニテ出候、右便ヨリ書状品々相届候、八ツ過ヨリ三原平兵衛殿入来、夕被帰候、国府之家来前田銀藏・平馬ロンドンヨリ之書状持来、国府迄ハ伊太郎持来候由、夜入四ツ時分隊候事、

二十六日 霜降、快晴、嶽々雪、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、強太左衛門・仙右衛門・織兵衛、今日高野瀬彦七へ地頭横目寄申付候処出候、伊福十郎太・赤木七郎左衛門一刻ツ、来候、夕ヨリ七郎左衛門妻来、氷餅イタシ呉候、七郎左衛門ニモ来候テ四ツ時分帰、無程隊候事、

二十七日 霜晴、嶽雪不消、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、脇元嘉八郎取調首尾御届トシテ今日ヨリ出府之由ニテ出候、高野瀬庄助・同彦七出候、時任強太左衛門ニモ出候、夜入四ツ時隊候事、

二十八日 霜、昼暫雷雨、嶽雪不消、

暁七ツ半時起、飯トモ為焚候、今日ハ三度狩イタシ候、拙者ニモ登リ北山三狩倉狩候ヘトモ犬声モイタサス候、夕帰宅、往来トモニ強太左衛門・莊右衛門付来候、夜入四ツ時分隊候事、

廿九日 霜降、曇、

朝六ツ起、今日ハ調練、四ツ過ヨリ調練場へ出候、八ツ過帰宅、今日ハ強太左衛門・七左衛門・庄助・彦七度々出候、仙右衛門出候、大工今日七ツ重切溜ゾウキリ溜成就、今日ヨリ乗鞍之荒手取イタシ候、二ツ分荒手取イタシ、来月帰府之節持帰、鹿兒島ニテ作候賦、檜之木ニテ別テ能キ曲リニテ候、夜入四ツ時分隊候

事、

一今日国府ヨリ下人十右衛門来候事、

晦日 霜降、曇、

朝六ツ起、四ツ時ヨリ飯野へ参候、昨日ヨリ御軍役

奉行田尻務（種賢）・御軍賦役見習測辺直右衛門・御軍役方

御家老座書役田代孫九郎差入ニ付参候、昨日ヨリ差

越咎候処、昨夕先状参候故今日ヨリ差越候、飯野へ

着候へハ、今日ハ武術見分ニテ只今相済候由ニテ、

旅宿秋丸仲左衛門所へ被差越居候間、直ニ参り候テ

致面会候、今日ヨリ飯野大河平へ被差越武術并調練

見分、来月二日木浦木へ被差越、三日須木へ被差越

咎候ニ付、彼之方へ参候テ可相待段申置候テ直ニ帰、

小林仮屋八ツ半時分帰着候、四ツ前臥候事、

日史第五拾五

慶応元年乙丑十二月

名越時敏（花押）

朔日 霜降、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、半五左衛門・

愛次郎木浦木へ今日ヨリ参由ニテ来候、十郎左衛門・

伴之進・仙右衛門・織兵衛・彦七・荘右衛門・仲蔵・

龍見・竹翠殿被来候、夜入四ツ時分臥候事、

今日藤八殿ヨリ書状式通来候、先月廿三日・同月廿

六日仕出ニテ候、

二日 霜降、風吹、晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、夫ヨリ家来共

打寄鉄炮洗、須木ヨリ噺上野笹右衛門・与頭児玉源

七郎御用有之来候、袖園山中へ五拾才計之女彦人行

倒居候由、未何方ノ者トモ不相分段申出候、山元勇

右衛門隠居并二嫡子与頭山元六郎右衛門役儀御断申

出候、今日昼時分須木へ参り候、明日御軍役奉行田

尻務ツカサ・御軍賦役測辺直（右衛門之）・御軍役方御家老座書

役田代孫九郎被差入、調練・武術見分有之咎ニ付テ

也、七ツ過着、夜入四ツ時分臥候事、

三日 極々大霜、

昼七ツ過ヨリ氷ハ張り居候、

夜前四ツ前ヨリ手水鉢水厚ク、柄杓不取柄折レ候、

今朝風呂手洗之蓋漸取レ候、鬢手洗へ水入居候処水

計ニテ、湯ヲ入レ候テモ氷之上ニテ水ニ成候間、可

捨トイタシ候得ハ、鬢手洗足縁頬へ水付不取、水ハ

スクイ出シ、三篇迄如其イタシ候へトモ、湯ハ入

ル、ト直ニ水ニ成、水ニテ面ヲ洗ヒ候、又小用ニ二

篇出見候へハ先キイタシ候小便ハ小キツラ、サカリ

居候、ケ様之寒ハ始テ見候、四ツ時分ヨリ世尊寺へ

見物ニ參候、和尚出焼酎共出候、見候へハ小キ六枚

屏風有之、未白張ニ候間、慰ニ拙者へ何かカ、セ給

ランヤト申候得ハ、是ハ々々別テ仕合、屏風ハ張候

得トモ誰コソト頼方モ無之、両三年如斯之由承候、

此屏風只今張候様見掛候得ハ、拙者ニモ下手ナル書

手ニテケ様之事申間敷筈候得共、最早些古ヒ居候ニ

付、乍御失礼慰ニト存候段申候テ、寺僧所持之至極

崩レ筆ニテ唐詩撰五言絶句之内思ヒ出シ書候、九ツ

時分須木飯屋へ帰居候へハ、無程田尻氏其外御軍役

方之面々着有之、直ニ訓練場之様被差越候段届申出

候間、拙者ニモ直ニ差越訓練有之、銘々旅宿へ參飯

共給候テ、七ツ時分ヨリ拙者飯屋へ各被來候テ武術

見分、暮相濟、夫ヨリ番手見分等之儀談合有之、暮

過被帰、五ツ半時分隊候事、

四日 雨、

朝六ツ起、五ツ半御軍賦役見習刈直右衛門殿所へ

一刻立寄、夫ヨリ御軍役奉行田尻種彦務殿所へ參、噯中

山宇平太宅旅宿ニテ候、彼所ヨリ務殿・直右衛門一

時ニ打立、務殿拙者同伴ニテ堂屋敷番手見分ニ參候、

七ツ時分着、番所泊ニテ候、直右衛門殿ニハ袖園番

所見分、明日田代ケ八重辺路番所へ双方ヨリ打寄筈

候、御軍役方御家老座書役田代孫九郎殿ニハ今朝ヨ

リ不快ニ有之、頭痛強被臥居候由ニテ須木府元旅宿

へ被居残候、堂屋敷本番崎山助右衛門・下番人堀添

藤右衛門ニテ候、夜入四ツ時分隊候処、綿入一枚上

ヨリカブリ候テ一息臥候へハ至テ寒ク相成、夜之内

度々起出候テ焚火ニ当リ候テ温リ候節又臥、漸々夜

ヲ明シ候、イロリ囲炬裏ハ壹間囲炬裏ニテ、長四五尺、廻リ一尺余之薪七八本ツ、終夜焚通シ、火ニ当リ候ヘハ別テ温リ候事、

五日 雨後晴、山中雪、

朝六ツ時起出、四ツ時分ヨリ務殿同道ニテ田代ガ八重番手之様參候、着掛一狩倉狩候処鹿壹疋取レ候、直右衛門殿ニモ袖園ヨリ着イタシ被居候、今日田代ケ八重ヘ参リ候、坂道別テ嶮難ニテ、七八拾間モ落候様ナル道モナキ命カケ替之所五六間通り候、袖園ヨリ田代ケ八重番所江之道ハまた格別險難ニ而、命かけ替之場所幾所ト難計程為有之ト直右衛門殿嘶ニ而、珍敷場所ニ而候、今夜田代ケ八重番所一宿、昨夜同前臥候事不相成、夜之内度々大火ニ当リ候事、袖園ヨリ田代ケ八重江之道ハ二度トハ通ル間敷ト直右衛門トノ被申候、堂屋敷ヨリ田代ケ八重ヘ之道モ一ケ所ハ二度トハ通ル間敷所ニテ候、此所番人本番八園田平之進、下番人ハ四位武平太・萩原休兵衛ニテ候、

六日 霜降、晴、

朝六ツ起、今日モ二狩倉狩候処鹿二疋取レ、夫ヨリ須木飯屋之様帰、夜入五ツ半時分飯屋ヘ着候事、袖園番人ハ本番川添金左衛門、下番人園田太郎・蕨野和平太ト申者之由候、四ツ過臥候事、

七日 嚴寒大霜、晴、

朝六ツ起、五ツ時測辺直右衛門殿旅宿ヘ一刻立寄、直二小林之様帰候、四ツ過小林飯屋ヘ着、八ツ過田尻務家・測辺氏・田代氏拙者所ヘ着、飯共寄合、夫ヨリ武衛見分、銘々旅宿之様被帰候、昼吉国孝之進昼ヨリ来居候由ニテ、夕ヨリ召出候、国分之家来銀右衛門ニモ来候間召出、四ツ過臥候事、

八日 曇、未之刻ヨリ雨、

朝六ツ前起キ、五ツ時分ヨリ小林調練場之様参リ候、九ツ前田尻務殿初御軍役方人数モ調練場ヘ被来、小林調練二組之見分有之、引続永吉領温水人数調練有之、夫ヨリ高原之様参ル賦候処、是非拙者不參候テ

ハ不相叶事モ候ハ、如何様トモ無其儀候ハ、是ヨリ可參トノ段銘々ヨリ挨拶承候間、高原・野尻へハ不差越候テ調練場帰候、夫ヨリ暮迄字書イタシ候、五ツ半時分隊候事、

一先日中山宇平太所へ鮫島白鶴之書掛物有之、能詩ト存候ニ付左ニ書写、

丹鳳来儀宇宙春 中天雨露四時新

世間好事惟忠孝 臣報君恩子報親

九日 夕小雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、夕吉次郎へ立木為打、拙者ニモ打、又鐘表一通り一人ニテ仕ヒ候、夜入九ツ時分隊候也、

十日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、扱先達テヨリ飯屋住居所普請有之候処成就相成候ニ付、今日ハ役々へ為一礼酒為呑度、八ツヨリ招呼候人数相談役横山龍見、噯時任強太左衛門・同伊福十郎太・同大

脇七左衛門、与頭横山伴之進・押川愛次郎・井上軍兵衛・横山六郎右衛門・赤木仲藏、普請見廻栗屋仙右衛門、地頭横目横山莊右衛門・横山織兵衛・高野瀬彦七、隠居体ニテ兼テ出入之者伊福十郎太・斉藤八郎右衛門・赤木七郎左衛門・赤木仲太左衛門来候、与頭斉藤武兵衛ニモ来候、丸田竹翠殿亭主前ニテ同断、各夜入帰候、夫ヨリ番屋之三人招呼候、四ツ時分隊候事、

十一日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、四ツ過キヨリ瀬戸尾権現参詣、帰掛ニハ赤木仲太左衛門所へ立寄呉候様承候テ参候、家内子トモニモシ、ミ貝掘ニ来候様承、皆参候、丸田竹翠殿ニモ被参候、暮過帰候、四ツ時分隊候事、

十二日 霜、快晴、

朝六ツ起、朝観音寺被来、拙者ニモ四ツ前観音寺不働参詣、直ニ帰候、九ツ過ヨリ伊福カバ、来候テ夕

歸候、七ツ半時分ヨリ観音寺・昌寿寺来、伊福十郎
太亭主振ニテ来、竹翠殿同断、四ツ時分被帰、無程
臥候事、

一昨日役々招呼候節竹翠殿へ活花相頼候、梅二水仙
ニテ候、左二図絵柄竹翠殿被来直筆ニテ候、

丸田竹翠殿活花之図



竹翠殿筆

十三日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、今朝須木
役々寒中見舞トシテ来、暖黒木元右衛門・与頭鬼塚
仲左衛門・地頭曾木平太左衛門ニテ候、横目ノ字落カ昼十郎太・
七郎左衛門来馬乗、拙者ニモ三鞍乗候、おたね其外
吉次郎・徳熊八王寺社参詣、暮過鹿兒島ヨリ伊太郎

来、夜入四ツ半時分臥候事、

十四日 晴、夜入雨、

朝六ツ起、近々帰りニ付終日屋中取集イタシ候、

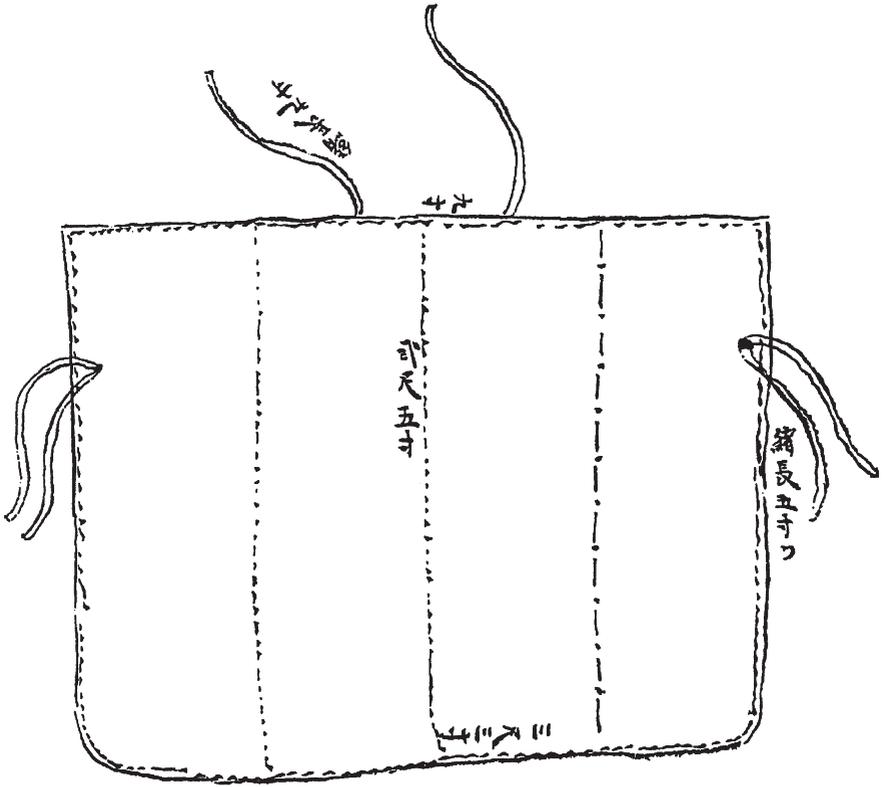
十五日 雨、雷鳴、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、昼過田代酒屋
来、夜入七郎左衛門来、今日モ終日帰り仕廻ニテ候、

十六日 曇、

朝六ツ起、昼神徳院使僧来、十郎太・七郎左衛門来
馬毛焼致、コネ摘ナドイタシ呉候、小林暖時任強太
左衛門・与頭富満武右衛門・地頭横目高野瀬彦七寒
中見廻トシテ出候、夜入竹翠殿申遣、明後日帰りニ
付名残咄ニ候、七郎左衛門妻友ニモ来、細野之千太
郎モ来り、夜九ツ時分臥候事、

下馬緒



十七日 快晴、

朝六ツ起、今日モ終日帰仕廻、段々暇乞之客来有之候へトモ略ス、夜入四ツ過臥候事、

十八日 雨終日不止、

暁起、今日ヨリ鹿府へ帰りニ六ツ前打立候へハ、無程雨降出中々難儀、曾於郡之内大久保之家来^{本ノマ、}
袈裟市所へ一宿イタシ候事、

十九日 間々小雨、

朝六ツ半打立、今日ハ重富泊ニテ候事、

二十日 大雪、

朝五ツ半打立陸地帰ル、早天ヨリ雪降、暫時積ル、
出立之時分ハ里ハ早消候へトモ、白金坂二三十間計
上之方ヨリ積リ始メ、漸々上之方へ深ク、白金坂登
り上りハ深サ一尺余之雪、今日ハ馬乗モ取止候テ終
日歩キ通シニテ候、八ツ時分タシトフ野屋敷飯屋
へ着、供人共へ中途スガラ雪打ナトイタサセ、又ハ

銘々雪へ面押込ミ可笑形ナド付、服ヲ摺ミ笑ヒ帰り

候、荷物ハ重富ヨリ船路帰シ候、七ツ時分帰着之節
ハ荷物モ惣テ帰り居候、町田藤八殿・宮里喜次郎
殿・郷十郎来リ候、

二十一日 曇、

^(町田久憲)
内膳殿・藤八殿・郷十郎・お筆被来候、新兵衛ニモ
来候、

二十二日 曇、

隈元直次郎殿被来、郷十郎同断、清左衛門ニモ来候、

二十三日 快晴、

秋丸仲太左衛門・藤田新之丞、外二番兵田口敬之助
来リ候、川上勘解由殿・お藤・藤八殿・東郷藤十郎
殿・郷十郎被来候、

二十四日 快晴、

今日出殿御届、二之丸へモ罷出候、東郷藤助殿・お

むら様・郷十郎・八之進どの被来、加世田之馬差呼、

二十五日 晴、

出殿、(町田久憲)内膳殿・助右衛門殿・森喜右衛門殿・町田藤

八殿・葉丸猪之助殿被来候、

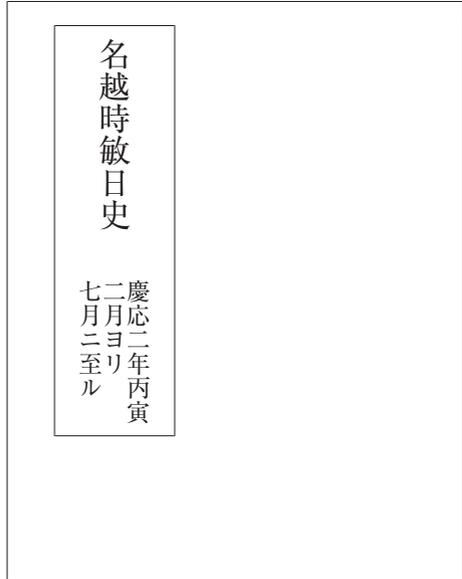
二十六日 晴、

いち、八郎右衛門殿・内膳殿・三木原等どの・おつ

やさま御出、

丑十二月迄

(表紙)



家内中親式且詰之家来共へ盃いたし、四ツ過臥候事、
(親力)
 正月中諸用多く、日史留不埒いたし候事、△

慶応二年丙寅二月ヨリ七月ニ迄ル
 日史第五十七

名越時敏

慶応二年丙寅二月

朔日 曇、

朝六ツ起、四ツ出殿、四ツ過御暇、帰掛平佐へ一刻
 立寄、昼過ヨリ永寿筆弟来筆結イタシ、大筆二本・
 小筆三本出来候、暮帰ル、宮之原善右衛門モ一刻来
 候、夜入四ツ時分臥候事、

二日 烈風雷雨、

朝六ツ起、終日在宿候事、
 夕戸十郎殿被来、飯屋板葺今日之風ニ吹取候由ニテ、
 明日ヨリ仁太郎招呼為吹度被申出候、

(志戸本家本より補)
 日史第五十六

慶応二年丙寅正月

元旦 快晴、

朝六ツ起、詠歌一首、

明て今朝あらたまりぬる春日とは

ひとのこゝろの花にしらまし

五ツ時分来客あり、八ツ後上方諸所礼廻り、夕帰宅、

三日 快晴、

今朝ハ天気モ宜敷候ニ付、おたね初子トモ皆々集成
館見物為差越候、右ニ付テハ不案内之事ニ候間、町
田藤八殿手引相頼早朝被来、五ツ半時分出宅、拙者
一人留主、小兵衛招呼刀共為拭候、名越彦太夫殿・
辻元新兵衛・ヨシバ、ナト来候、集成館見物各暮帰

ニテ候、今日ハ

〔頭注〕中將様集成館御出

中將様御出ニテ、参候節ハ見物モ不出来、御帰後差

〔久光〕

越見物イタシ候由、其内ハ宮原山水殿所へ立寄、帰
ニモ又立寄、山水弟浜田民左衛門被参三味ナト被引
候由、藤八殿モ帰りニ一刻被立寄候、四ツ時分隊候
事、

四日 雨、

朝六ツ起、四ツ過タシトウ屋敷へ参り候、今日ハ
家内中皆々無残参候へトモ、雨故出モ入モ不成、屋
敷番頼置候長瀬市郎次殿招呼、戸十郎殿杯打寄焼酎
トモ給候、二階堂家おミねとのニモ先日ヨリ泊リニ
候テ、今日ハ被参候、幕帰宅候事、

五日 雨、

朝六ツ起、朝丸田竹翠殿・町田藤八殿入来、上原玄
与殿・宮原山水殿同断、八ツ後美代藤兵衛殿一刻入
来、藤八殿同断ニテ夜入四ツ時分被帰、暮ヨリ此節
家来村山善助ト申者兄同道ニテ来、家来川村助市ニ
モ同断ニ候、四ツ過隊候事、

六日 晴、昼ヨリ曇、

朝六ツ過起、四ツ前藤八殿被来、戸十郎ニモ同断、
四ツ半ヨリ初市見物イタシ、夫ヨリ二階堂源太夫殿
〔行光〕
へ一刻、八ツ後ヨリ喜入家へ参り小林之儀ニ付内意
事段々申出、七ツ時分ヨリ川上家へ参候、今日ハ
久々緩々被相晰度段昨日ヨリ承居候、高橋縫殿殿ニ
モ父子被参、夜入四ツ半時分帰り候、九ツ過隊候事、
今日ハ大久保之家来・国分川尻之家来来り候由、

七日 雨、

朝六ツ起、藤八殿・竹翠殿被来、七ツ過是枝龍悅殿
入来、是ハ吉次郎療治相頼ミ候、無程被帰、四ツ時

分隊候事、

八日 雨、

朝六ツ起、朝夕藤八殿入来、おとくととの・基太村新
次郎殿・名越彦太夫殿・郷十郎来候、加藤寛兵衛殿
同断也、

九日 晴、

朝六ツ起、五ツ時分出宅、吉村才之丞殿へ立寄、夫
ヨリ市見物イタシ、製練所硝石丘見物イタシ、帰り
ニ二階堂源太夫殿・川上式部殿^(久美)へ立寄、七ツ時分帰
宅候得ハお藤・お筆来居、追付村田卯兵衛来、町田
藤八殿同断ニテ四ツ過被帰、同刻臥候事、

十日 雨、

朝六ツ起、四ツ時出勤、明日ヨリ小林差越之御届申
出候、両御側ト表御用人座月番方へ申出置候、御本
丸御側役ハ島津求馬、二之丸御側役ハ蓑田伝兵衛殿、
表御用人ハ伊集院十右衛門殿ニテ候、夫ヨリ戸柱町

田家・花舜軒御墓・伊藤六郎右衛門殿・浄光明寺参
詣、七ツ過帰宅、町田藤八殿被来、四ツ過臥候事、

十一日 晴、

朝六ツ起、四ツ過ヨリ町田藤八殿被来、琉球状書ニ
テ候、暮ヨリ葉丸猪之助殿入来、四ツ過被帰候事、

十二日 晴、

朝六ツ起、藤八殿・上原玄与殿入来、加藤源八殿同
断、家来之ケサバ、・スミ来、七ツ過ヨリ加藤家演
武館へ出候、夕帰宅候へハお広との被来候、二階堂
弥九郎殿同断、夜四ツ過臥候事、

十三日 晴、

朝六ツ起、藤八殿・郷十郎・児玉佐平次殿被来、夜
入四ツ過被帰候事、

十四日 雨、

朝六ツ起、美代藤兵衛殿・町田藤八殿・児玉佐平次

殿・卯兵衛来候、宮里氏同断、

十五日 雨、

藤八殿・宮原山水殿・丸田竹翠殿・郷十郎・名越戸
十郎・宮里喜次郎殿、夜入葉丸猪之助殿被来、四ツ
半被帰候事、

十六日 曇、

朝六ツ起、藤八殿・佐平次殿・孝八殿被来、郷十郎
夜前ヨリ泊、九ツ時伊藤彦介殿前屋敷蛭子社・宮里
氏・丸田氏へ一刻ツ、立寄、今日小林之様打立、上
築地ヨリ乗船、加治木七ツ時分着、町へ一宿、役人
新納仲左衛門・与頭白尾理右衛門見廻有之候、浜辺
迄吉次郎・徳熊来相分レ候、今日供鮫島善兵衛・小
宿岩次郎・村田卯兵衛・十右衛門・次郎左衛門ニテ
候、

十七日 曇、八ツ前ヨリ小雨、

朝五ツ時加治木打立、溝辺へ一刻休候得ハ、家来之

前田徳太郎ヨリ鶏之汁・焼酎トモ出シ候、此方ヨリ

モ包物共残シ置候、夫ヨリ打立、横川ニテ中飯、栗

野へ鹿兒島刻割ニテ七ツ時分着、地方檢者

本ノマ、

殿・郡奉行伊地知四郎助殿被来候、拙者鹿
兒島立之節ヨリ飯野噺秋丸仲左衛門供イタシ度申
出候、鹿兒島ヨリ同船、今晚モ同宿候事、

十八日 曇、

栗野五ツ時出立、沢原通りニテ加久藤へ出、町へ九
ツ前へ着イタシ候へトモ、荷物ハ吉松・吉田・馬関
田へ相廻シ候処、七ツ前着、夫ヨリ中飯トモ給、直
ニ打立、飯野飯屋一刻立寄、七ツ半時分小林へ着イ
タシ候、

一 今日ハ沢原へ参リ見候へハ、先日之風ニ此節御造立
之町屋三拾軒之内拾四軒吹倒シ候由ニテ、当分取除
方ニテ候、四人即死、怪我人モ段々為有之由、一小
屋長十四五間ツ、有之候、

一 栗野ニテ噺川俣治左衛門・与頭上田五右衛門出候、

十九日 雨、

朝六ツ起、今日ハ小林嘜・与頭・地頭横目召呼すし致馳走候、無役赤木七郎左衛門・伊福十郎太ニモ来候、相談役横山龍見同断、

一嘜高野瀬庄助事モ来、すし杯給候テ七ツ過時分矢張居ナガラ私ニハ何デモナヘ申候ト申候間、決テ左様之覚モ有之候半カト察候ヘトモ、気分張立候迄ニ何ガ左様之事可有之ト申候得ハ、イ、ヤ立可申トイタシ候ヘハ足立不申、手モ不叶之様御座候ト申候、右様申候前ニハシヲ取落シタル由、決テ不塩梅ト相察シ候人有之、皆々取寄り引立候処、其節ハ右之足不叶ニテ引居候、庄助親ニモ当所仮屋ニテ中風煩付、三日シテ死去之由、庄助ニハ軽キ事ニハ候ヘトモ、今程出勤ナト出来様ニハ有之間敷、右ハ手足トモ全ク不相叶、言語モ少々不宜由、

一観音寺和尚来候ニ付、精進すしモ漬候テ致馳走候、高原之黒木壮一郎御用ニ付来候ニ付、留置候テすし為給候、

二十日 雨、雷鳴、

朝六ツ起、七左衛門・織兵衛出勤、七郎左衛門ニモ来候、

二十一日 雨後霽、

朝六ツ起、半五左衛門・織兵衛・龍見・強太左衛門・伴之進・丹碩来候、請持郡奉行談合役面高与蔵殿ニモ被来候事、八ツ後武術見分、七ツヨリ伊福ば、来、

二十二日 雨、

朝六ツ起、稽古所へ出武術見分、半五左衛門・荘右衛門・武兵衛出勤、高原ヨリ嘜瀬戸口右八郎来り候、今日昌寿寺被来緩々相断、

二十三日 曇、夕雨、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ飯野へ参り調練・武術見分、且大砲手都合断ニテ夕帰、七ツ半帰宅候ヘハ観音寺被来、須木役々来候、嘜中山宇平太・与頭金松喜

助・地頭横目曾木平太左衛門ニテ候、

二十四日 雨、

今日八十郎太・昌寿寺・観音寺被来、暫時ハ相嘶候事、夜入千太郎・利左衛門来、

二十五日 雨、

今日ハ朝五ツ時ヨリ高原へ調練為見分参リ候得共、雨降故手都合見候、余リ強降ニモ無之武術ハ見分イタシ、八ツ過ヨリ打立チ野尻之様差越シ、七ツ時分着、明日武術・調練見分之賦、

二十六日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ武術見分、四ツ過ヨリ帰掛調練見分イタシ、八ツ前小林帰着、夕ヨリ面高与蔵殿被来、夜入五ツ半時分被帰、堀之内半五左衛門召呼候事、

二十七日 快晴、

朝六ツ起、市来正右衛門殿温水ヨリ被来候、主殿殿(島津久壽)

同列ニテ被来居候由、当所締方本ノマ殿ニモ被

来、無程同締方久保喜太郎殿被来候、主殿殿ニハ須木ノ内山へ為狩被差越候由、明後廿九日方帰之賦候由、正右衛門殿嘶ニテ候、織兵衛・莊右衛門・武兵衛出勤、弓削次右衛門・温水恕兵衛ニモ出候、

二十八日 晴、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ調練場へ出候テ小林二隊之調練致見分候、今日之調練別テ宜褒置候、四ツ半過帰宅、今朝半五左衛門・莊右衛門来、調練場之様付参リ候、帰ニモ同断、七左衛門・六郎右衛門出候、竹翠とのにも昨夜中被帰候由ニテ被来候、昨五ツ時溝辺ヨリ被立候由、今日ハ野田源右衛門へ相頼ミ焼酎造イタシ候テ、夕方相濟ミ召呼ヒ酒トモ為吞候テ包物共遣候、竹翠殿モ被来、暮ヨリ卯兵衛召シ呼ヒ酒為吞候、四ツ時分臥シ候事、

二十九日

朝六ツ起、半五左衛門・荘右衛門・織兵衛出勤、九ツ時十郎太来、折柄内膳殿（町田久慈）ヨリ被贈候クシラ相届候間、則相開暫語候、暮ヨリ観音寺被来、四ツ過被帰候、同刻臥候事、

日史第五十八之卷

名越時敏

慶応二年丙寅三月中

朔日 快晴、

朝六ツ起、四ツ前飯野ヨリ暖秋丸仲左衛門、与頭馬場八郎左衛門、地頭青山横目カ七左衛門・同壱岐甚五左衛門来候、竹翠殿・大脇七左衛門・伊福十郎左衛門・堀之内半五左衛門・伴之進・愛次郎・横山織兵衛・横山荘右衛門・横山龍見・赤木仲左衛門・伊福十郎太出候、森惣右衛門郡見廻申付候ニ付出致面会候、今日ハ飯野ヨリ直心影流之人數十二人為稽古来候間、小林人数取会致稽古候、七ツ半相済引入候へハ、飯野ヨリ是枝隆庵殿被来、夕方迄被相咄被帰候、先日

ヨリ島津主殿殿持切へ被来居、使者書翰并ニ塩豚・千数之子持来り、面会ニテ返翰遣シ候、夜五ツ過臥候事、

二日 快晴、

朝六ツ起、朝竹翠殿被来、四ツ時赤木十郎左衛門へ一刻立寄、先日落馬面摺敷タルト承り候ニ付参り候、夫ヨリ大脇七左衛門所牡丹花盛り之由承り候ニ付一刻見ニ参り候、夫ヨリ主殿殿持切温水へ先日ヨリ被来居候ニ付参り緩々相咄、彼ノ地七ツ時打立、帰候得八十郎左衛門・織部出勤、暮ヨリ卯兵衛召シ呼ヒ、四ツ時分迄テ相嘶シ候テ臥シ候事、

三日 晴、

朝六ツ起、今日節句為祝儀横山龍見・伊福左衛門・堀之内半五左衛門・押川愛次郎・富満武兵衛・井上軍兵衛・赤木仲藏・横山伴之進・野元藤太・脇元嘉八郎・森惣右衛門・横山織兵衛・横山荘（右カ）左衛門等出候、吸物壺ツニテ盃イタシ、直チニ帰候、引観音寺本ノマ、

和尚一刻被来、夫ヨリ生産方掛御徒目付三原彦之丞殿被来、御領国中二手二分廻勤之由、骨滓買下シ、(頭注)「生産方骨滓・菜種子・茶等ノ事件」

菜種子御国用余計自分交易御免被仰付、且御国用余計茶御買円等之一条深御趣意被為在候ニ付、右御趣意厚申諭候様致承知廻勤之由、就テハ何ソ地頭へ相嘶置候卜之事ニハ無之候得共、語置候段被申候、高原ヨリ嘸山口新十郎・与頭丸山十郎左衛門来候、細野家来千太郎来候、飯屋番緩々相咄シ度来り候様申遣ハシ候へハ三人之内二人来候、卯兵衛亭主振ニテ酒為吞候、竹翠殿ニモ一刻被来候、夜入り四ツ前臥候事、

四日 快晴、

朝六ツ起、卯兵衛今日帰りニ付分レニ焼酎共出シ候、五ツ半時分卯兵衛打立、今日ハ錫杖院泊之筈候、明日国府浜之市迄都合宜候へハ、夜舟トイタシ候筈、十郎左衛門・織兵衛・愛次郎出勤、十郎太・八郎左衛門来り候、今朝安田氏ヨリ書状来、尚々書之内府下入津之異船一艘者アメリカニテ、薪水モライ出帆

候由、(頭注)「土佐ノ容堂公船ヨリ御出ノ事」一艘ハ土佐之船ニテ御隠居容堂公御家老重役之者共被召列御越之由、(山内豊信)

二之丸公御対顔モ被為在哉ニ風聞承り候、夜入岩次郎へ書物トモ教へ、五ツ半時分臥候事、

五日 快晴、

朝六ツ起、七左衛門・愛次郎・織部出勤、四ツ後七郎左衛門来暫相嘶候、七ツ時分御納戸奉行御勝手方御用人勤市来六左衛門殿、調掛川島平右衛門殿・川島兵左衛門殿、書役家村幸之丞殿・面高与蔵殿被来、酒共出夕方被帰候、今日ハ飯野ヨリ被差入鬼塚原人(崎力)參植付見分、夫ヨリ森山新田桑植付場等見分イタサ

レ候由、帰りニ被立寄候、今朝ハ珍敷六左衛門殿旅宿へ一寸来候半哉之旨承り候テ、御役場モ別段之事候間、苦敷ハ有之間敷存候間差越候テ四ツ前帰候、昼物奉行織屋掛リ新納喜右衛門殿・物奉行同断カ石原十郎左衛門殿・書役広瀬喜兵衛殿一刻被来候、

六日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半時分市来六左衛門殿旅宿へ参り、

六左衛門殿ハ勿論、川島平右衛門殿・川崎兵左衛門

殿・面高与蔵殿・家村幸之丞殿同列ニテ榎木原人参

植付場へ参り、夫ヨリ序ニ（頭注）榎木原人参植付場見分相頼候訳ハ、

■至テ辺鄙之場所柄ニテ町立兼候ニ付、■引続穢

多村へ引直シ願出、尤、自分失脚ニテ引移跡ハ返地

差出入賦、地面ハ却テ返地之方大ク有之、其上■

ハ右之通辺鄙故何之商買迎モ無之、只町ト申名計リ

ニテ至テ見苦敷有之、■之者共モ移来候へハ悦之

由ニテ、段々合力モイタスベク申者共モ罷居候由承

り候ニ付、先度見分置候、追テ可願出賦、夫ヨリ高（頭注）高

原之高千穂御新田并ニ下之崩レ見分、高原飯屋へ立

寄、市来氏ヨリ役々へ達事有之、拙者ヨリ口達相添

置候、夫ヨリ序ニ又岩瀬川涉リ、別テ悪敷場所柄ニ

テ追々土橋ハ掛候事ニ候得ハ、洗ヒ崩シ通シニテ、

瀬早ク殊ニ深ク候故太鼓橋掛度候ニ付、今日受見分

候、双方岩ニテ別テ手安ク候半、然シ涉リハ拾式間

程有之候、洪水ニテ水勢至テ巖敷モ候由、夕帰宅、
何レモ馬ニテ列モ有之、遠馬之如クニ面白乘廻り候、

夜入五ツ時分臥候事、

七日 快晴、

朝六ツ起、竹翠殿被来、四ツ後ヨリ面高与蔵殿被来、

今朝市来六左衛門殿・川崎兵左衛門殿・家村幸之丞

殿被来候、九ツ前島津主殿殿（久徳）・相良助太夫トノ被来、

八ツ時分観音寺被来候、愛次郎・織兵衛出勤、仲蔵

一刻来、日高与一左衛門殿仲蔵所へ被来候由、七ツ

半時分ヨリ些風邪氣分ニ有之候、葉調合攻付給候テ

臥候へハ、暮時分ヨリ少々快、暮過キヨリ四ツ時分

迄之間ニ汗多ク出候、余程快ク候事、

八日 間々小雨、

朝六ツ起、今朝ニ相成風邪ハ寸切快方、早ク用心イ

タシ候処其詮有之仕合ニ候、今晚ヨリ善兵衛・十

左衛門蔵折ニ遣シ候、七右衛門・莊右衛門出勤、須

木ヨリ川添清太夫・蘭牟田孫介来致面会候、八ツ半

赤木仲太左衛門・日高与一左衛門殿同伴ニテ来り候、
昨日ヨリ仲太左衛門所へ被来居候訳ハ、嫡子不具之

生付ニテ、小林へ持高有之百姓居候ニ付、此方へ被
致居住候ハ、却テ其身喜楽ト被存、与一左衛門殿ニ
ハ当年七十六歳ニテ、遙々ト被列越候、一昨日ハ浜之
市ヨリ（飯川カ）秋川迄歩ニテ被来、昨日仲太左衛門所迄被来
候由、誠ニ元氣ノ事ニ候、夕被帰、伊福十郎太ニモ
来り候間、留置候テ日高氏之亭主振相頼候、各被帰
淋敷有之候ニ付、竹翠殿申遣シ候テ来儀、暮迄被相
咄候、夜入り五ツ時分臥シ候事、

九日

朝六ツ起、四ツ前御納戸奉行生産方掛り海老原宗之
丞殿・須田喜左衛門殿一刻被来、今日ハ高原、夫ヨ
リ都之城方へ廻勤、直様帰リ之由承り候、竹翠殿被
来、宗之丞殿存意、儀承り、拙者モ竹翠殿へ一刻
参り候、九ツ半時分大河平孫八郎殿被来、引続御軍
賦役并御軍役方御家老座書役亀山甚助殿被来、各七
ツ半時分迄被相嘶候、亦引続キ緒方猪右衛門殿被来、
当所直心影之流劍術見度由承り候、折角嘸七左衛門
出候間、明朝稽古企候様申付候、七郎左衛門・十郎

太来馬乗候、拙者ニモ乗候、内々ニテ緩々相嘶、夜
入五ツ時分臥候事、緒方氏拙者飯屋へ一宿也、

十日

朝六ツ起、昨日ヨリ緒方氏入来、当所劍術イタサセ
候ニ付稽古所へ出候、緒方氏モ横山織兵衛・野辺嘉
之助・本ノマ、三人ト稽古イタサレ候、五ツ過
相済引入、織兵衛・七左衛門出勤、竹翠殿被来、九
ツ半時分ヨリ島津主殿（久藤）殿・葉丸猪兵衛・市来正右衛
門殿被来、七ツ時過被帰候、大脇七左衛門・赤木仲
藏・脇元嘉八郎・横山織兵衛・押川愛次郎・竹翠殿
招呼暫酒肴取ハヤシ候、昨日ヨリ被来居候緒方氏同
断、今日ハ野田源右衛門来焼酎煎有之、夜入り観音
寺被来、四ツ時分被帰候、無程臥候事、

十一日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半ヨリ竹翠殿同伴ニテ大河平孫八郎
殿所へ躑躅見ニ参ルトテ、中途清水アルモトニ桜子
ノハナ盛リナリケレバ、

道の辺の清水にたよる桜子の

花ハ誰がため盛りミすらん

四ツ半過大河平へ着ヌ、馬場通り生垣イトノウツ

クシク、庭ノアタリ猶ホマサリテ見ユ、

聞しにも増りけりとはこれそこの

ミ庭のつゝし紅のいろ

ステヤウノ日モクレカタチカクナリヌレハカヘラ

ントテ、

帰るとてさても名残よ紅の

盛りのつゝし立とまりミむ

夕方帰リツキヌ、細野ノ家来キタレリ、メシヨビテ

ミキトモ取カハシヌ、緒方ヌシモカタラヒ、コヨヒ

モ仮屋ヘヤトラレヌ、

十二日 雨、

朝六ツ起、五ツ半時分ヨリ須木ヘ訓練見分トシテ参

リヌ、緒方氏モ同伴、訓練ハ雨降故明日イタス筈、

緒方氏ヘ師相頼、大砲手都合稽古イタサセ候、夜入

リ五ツ過隊候事、

十三日 快晴、

朝六ツ起武術見分、四ツ前訓練見分、夫ヨリ焼ケ山

狩倉犬山イタシ候ヘトモ得物無之候、拙者狩二不獵

之事今日初テニテ候、大鐘比仮屋へ帰り、五ツ過隊

候事、

十四日 快晴、

朝六ツ起、月山流薙刀・鞍馬馬流劍術致見分、四ツ

時打立、九ツ半小林仮屋へ帰宿、仲太左衛門・強太

左衛門来リ候、夜入り四ツ時隊候事、

十五日 快晴、

朝六ツ起、観音寺一刻被来、麻苧植之地面牛ニテス

カセ呉ラレ候、今日ハ馬寄イタシ伊福へ立寄場所へ

乗出候、島津主殿殿・薬丸猪之助殿・相良助太夫

殿・市来正右衛門殿外二締方兩人被来候、夕帰宅、

竹翠どの・観音寺被来、各四ツ時分被帰、無程隊候

事、

十六日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半時分ヨリ飯野江大砲打方為見分參候、緒方氏ニモ同伴ニテ手都合指南相頼候、着掛ニハ劍術モ致見分、緒方氏モ稽古イタサレ候、青山七左衛門外ニ一人相手イタシ候、今夕刻竹翠殿・觀音寺・昌壽寺モ被來、竹翠どのニハ拙者同宿、兩僧ハ近辺寺一宿、明日狗留尊參詣之賦り、夜四ツ時分隊候事、

十七日 快晴、

朝六ツ起、今朝町田藤八殿ヨリ書狀來致開封候へハ、
(頭注)新納刑部異国ヨリ帰家
去ル十日(久修)晚新納刑部殿異国ヨリ帰ラレ候テ、平馬ヨリ之書狀モ相届候由ニテ被遣候、時計其外絵ナト遣シ候、おたねへハ糸針・ユビカネナト來候由、五ツ半ヨリ竹翠殿・伊右衛門殿・兩僧・飯野嘜秋丸仲左衛門・与頭壱岐源五左衛門・地頭横目青山七左衛門・拙者家來小宿岩次郎・下人十右衛門、外ニ飯野二才朝稻貞助外ニ三人、夫兩人多人數ノ列立ニテ打立、梅木御番所木屋賀野御番所見分、
(頭注)狗留孫參詣
夫ヨリ狗留尊

參詣、一之鳥居ヨリ一里程行、右手之方へ三四町位入込天狗宮アリ、柞棒數百本寄進有之、夫ヨリ帰、本道ヲ十五六町モ行候へハ、右ハ御社、左ハ寺也、御社随分結構、寺モ念入候、家作三百枚敷計リモ有之候半、当分寺番壱人居候テ、至極ノ破損、棟モ落空見得候テ、晝判力モ削上ケ有之、寺ハ本之通相成兼候半ト存候、求摩クマ其外他所參詣有之候節者千人モ入込候処ニテ、先年ハ余程賑々敷為有之由、御宮有之地面誠ニ奇妙巖石之上ニテ候、下ハ大成窟ニケ所アリ、一ケ所ハ本ノマ□□、

御誕生之地ト云、鉄之少キ御針唐金之小キ鳥井アリ、此辺ヨリ三腰廻リ込御社之巖壁ヲ廻リ所アリ、至テ難場、四十ヲ越テ通ルコト禁セシ所ト聞、当年四拾八ナレハ通ラン方可然込通ラス候、尤、竹翠殿同断、其外通レト、下人ハ少々身大キ者ニテ巖之狭間ヨリ通ラレス込通ラス、先年六部三腰廻リニ落テ死タルヨシ、岩ノ上ニ今墓アリト、至極ノ難場、如何シテ其所ニ墓石持來リタルカト申候、御社ノ手前狼藉墓申候テ數多アリ、鎧其外劍戟ヲ以テ打懸リ候ニ付、

寺僧堪兼御社之内へ逃入候処、御社之橋之辺ニ同士打ニテ死居候由、奇妙之事モ為有之ト申候、参詣共相濟、暮過飯野飯屋へ帰宿、五ツ時分臥候事、

太左衛門・莊右衛門出勤、又観音寺不働参詣、無程帰宅、夕ヨリ竹翠との被来、夜入り五ツ時分被帰、四ツ時分臥候事、

十八日

二十一日 快晴、

朝六ツ起、飯野飯屋ヨリ緒方伊右衛門どの今日帰り、拙者ニハ馬マシブダ関田地頭安田氏へ用向有之候ニ付差越、吉田湯治ナト、イタシ、彼地八ツ半打立、暮前帰宅候、竹翠殿ニハ今朝飯野ヨリ被帰候、夜五ツ半時分臥候事、

朝六ツ起、五ツ半時分ヨリ調練場地形為見分飯野境手前へ参、伴之進・織兵衛付来り候、竹翠殿・強太左衛門・莊右衛門出勤、一陣中談合役・旗預・使役・什長・普請方惣テ出候、小林・加久藤合テ一組之物主新納太郎左衛門殿ニモ今日着掛地形見分之場へ被出候、八ツ時分相濟、直ニ帰宅イタシ居候へハ、新納氏被来暫被相咄候、被帰無程別府藤太郎ト申候ト人参場支配人来致面会候、暮ヨリ赤木七郎左衛門来、四ツ時分迄相咄帰候事、

十九日 曇、

二十一日 快晴、

朝六ツ起、四ツ後吉村才之丞殿・本ノマ被来、八ツ前被帰、引統薬丸猪兵衛殿被来、暮被帰候、竹翠殿度々被来、五ツ時分臥候事、

朝六ツ起、強太左衛門・莊右衛門出勤、竹翠殿朝一刻、又九ツ時分竹翠殿・面高与藏殿被来、夜竹翠殿四ツ時分迄被相咄候事、

二十日 快晴、

二十一日 快晴、

朝六ツ起、四ツ過吉村才之丞殿旅宿へ一刻、夫ヨリ文行堂へ参り、八ツ前飯屋之様帰り昌寿寺来り、強

朝六ツ起、強太左衛門・莊右衛門出勤、竹翠殿朝一刻、又九ツ時分竹翠殿・面高与藏殿被来、夜竹翠殿四ツ時分迄被相咄候事、

二十三日 快晴、

朝六ツ起、四ツ後伊福十郎太来、太郎左衛門殿同断、半五左衛門出勤、井上軍兵衛出候、養子嘉兵衛去冬ヨリ御城下番兵へ出居候処、此節五郷警衛被仰付候由申来候段申出候、六郎右衛門出勤、御軍賦役先状持来、明廿四日当所差入ト相見得候、夜野田源右衛門来候、

二十四日 快晴、

朝六ツ起、半五左衛門・莊右衛門出勤、竹翠殿被来、軍兵衛来、明早朝ヨリ出府之由申出候、八ツ時分御軍賦役園田与藤次殿・御軍役方御家老座書役松元彦兵衛殿被来、今日ハ先何事モ無之、陰陽石為見物被差越由候、先度家来之村田卯兵衛来候節、陰陽石為見物差越候ニ付、誹諧ヲ一句土産ニ持帰り候様申聞候へハ、

陽石やきをいさかまく水の音

陰石に草もなひくや河嵐

ヲモイ出候マ、書付置也、夜入四ツ時分臥候事、

今日島津矢柄殿ヤガラ・大野多宮殿為物主差入被来候事、

二十七日 晴、

朝六ツ起、四ツ時分昌寿寺

(貴久)大中公へ参詣、四ツ過ヨリ物主新納太郎左衛門殿被

来、四ツ過御軍賦役園田与藤次殿・御軍役方書役松元彦兵衛殿被来、於稽古所武術見分有之、拙者ニモ出席、夫ヨリ拙者仮屋へ又々同伴、一通盃出シ籠飯出シ、右外二面高与蔵殿・新納太郎左衛門殿被来候、七ツ時分被帰候、伊福十郎太・赤木七郎左衛門馬コネ摘方イタシ呉レ候、相濟、暫招呼酒出シ候、竹翠殿モ一刻被来、五ツ時分臥候事、今日福留七兵衛来、

二十六日 雨、

夜分九ツ時飯野境之元調練場へ出候、未物主ハ誰モ出席無之、今日一陣調練ニ付追々御城下ヨリ被来候物主方出席、明六ツ一篇足踏イタシ、五ツ半御軍賦役・御軍役方御家老座書役等出席、則調練相始、十郎太調練出来候ト存候、御役々等今日大河平之様被

参、拙者ニモ諸隊引取役（後力）小林之様帰候、追々役々其

ひとをや恵むこゝろなるらん

外調練頭立候者共、飯屋へ出候、八ツ過ヨリ竹翠殿・福留七兵衛其外家来トモ召呼酒トモ為給候、今日ハ

晦日 快晴、

休日ト取究、明日帰仕廻終日相働賦、拙者モ夜前ハ夜起同前、又明朝・明後朝ハ早ク趣候賦、今晚ハ早暮ニ臥候事、

溝辺八ツ時立、朝六ツ加治木着、直ニ舟取仕立六ツ半出船、妙神社下ニテ向風相成候間陸地帰、九ツ前帰着之事、源太夫殿・勘解由殿・藤八殿・喜次郎・新兵衛・郷十郎被来候、

二十八日 曇、

朝六ツ起、終日明日ノ帰仕廻、七郎左衛門其外役々段々来、竹翠殿同断、

日史第五十九之卷

名越時敏

二十九日 晴、

慶応二年丙寅四月中

暁七ツ時小林立、飯野上江通ニテ楠元左衛門所へ一刻立寄、夫ヨリ加久藤へ一刻、馬関田馬継ハ大溝

朔日 快晴、
鹿府滞在中諸用多ク日史不留候事、

原ニテ継、夫ヨリ吉松・栗野一刻ツ、馬継ニテ休、横川同断、今夜溝辺泊之事、今日途中ニテ、

十七日

桜ちる後ことならん色なれや

暁七ツ時起、飯共為焚候、五ツ時上築地ヨリ出帆、

本ノマ、
おふささきるさに咲る卯花

小林之様差越候、此節ハおたね・吉次郎・徳能茂差

稲の穂に麦ハ実のりの時かへて

越、留主番ハ先度之通福留七左衛門召置候、町田藤

八殿モ被差越、七左衛門妻之銀モ差越候、竹翠殿妻とのニモ被差越候、家来者福留七兵衛・白浜小左衛門・福留与市・宮之原友次郎供イタシ候、下女二人春・夏、下人ハ市之丞、中間十右衛門、鑓持花倉本ノマ、 ニテ候、加治木へ八ツ前着、夫ヨリ町へ一刻立宿イタシ中飯給共有之、直ニ溝辺迄參泊候、拙者二者日入比着、外ニ追々ニテ候事、今日之道程三里、

十八日 晴、夜雨、

朝六ツ起、四ツ時分打立、横川・栗野へ一刻ツツ立宿イタシ、栗野地頭蘭牟田利右衛門殿へ一刻立寄、吉松へ七ツ時分着一宿、今日之道程六里位、

十九日 晴、

朝六ツ起、今日ハおたねニハ沢原芝居見ニ遣、四ツ前打立ニテ候、拙者并吉次郎・徳熊ニハ直ニ吉田之様參候、今夜此所一宿之賦り故、終日暇ニテ吉田湯治ニ參り候、二篇入候、吉次郎・徳熊ニモ召列候、

藤八殿ニモ被差越候、夕カタ宿所之様帰り、暮過おたね沢原ヨリ帰り被来候、忠臣藏六段目ヨリ敵討迄為有之由、余程面白為有之由、

二十日 晴、

朝六ツ起、五ツ半時分打立、加久藤・飯野へ一刻ツ、打寄、八ツ半時分小林着イタシ候、役々中途迄三人来居、門前へ嘸・与頭・地頭横目出居、追々皆々出候、夜入五ツ過臥候事、

二十一日 晴、

朝六ツ起、役々追々出候、八ツ後稽古所へ出候、吉次郎・徳熊出候、藤八殿モ被出候、心影流・示現流有之、夕方相濟、藤八殿ト酒共給候、夜入四ツ時分臥候事、

二十二日 晴、

朝六ツ起、七兵衛・与市ト稽古イタシ候、吉次郎・徳熊同断ニテ候、此節召列来候七左衛門妻之銀・宮

之原友次郎・白浜小左衛門、花倉ヨリ来候鐘持イタシ候者七兵衛案内ニテ陰陽石見物ニ差越候、高原ヨリ役々来面会イタシ候、夕ヨリ藤八殿其外家来共召呼酒トモ為給候、小林役々モ追々出候、

二十三日 晴、

朝六ツ起、今日ハ銀其外七兵衛・小左衛門・友次郎・花倉之者高原筋罷帰候、右之者共へ人馬老疋雇呉候テ、外ニ金子沓両・米杯呉、花倉之者ハ別段ニ金子外ニ心付呉置候、朝与市ト稽古イタシ、吉次郎・徳熊同断、小林役々出候、夕方野尻役々同断、夕ヨリ藤八殿酒トモ寄合候、

二十四日 晴、夜雨、

朝六ツ起、四ツ過文行堂へ出候、吉次郎・徳熊召列候、藤八殿同断、竹翠殿ニモ夫ヨリ榎原人參植付場へモ参リ、八ツ時分帰リ候、昌寿寺・観音寺・十郎太一刻ツ、来リ候、伊福バ、来緩々相嘶候、須木役々モ来同断、藤八殿ニモ打寄候、

二十五日 晴、

暁ヨリ起、朝五ツ時分打立、白鳥湯治へ差越シ候、藤八殿同伴イタシ、此節ハ家来中参リ、小林留主ニ鮫島善兵衛・馬飼之十右衛門残置候、其外無残候、飯野上江ニテ楠元左衛門へ一寸立寄候テ子共へ飯共為給候、暫休候テ白鳥之様参リ候ヘトモ、七ツ過比着、飯野暖朝稻佐多右衛門・馬場八郎右衛門・沓岐五左衛門来リ居候、藤八殿并飯野役々召シ呼酒共給臥候事、

廿六日

今日ハ上之湯へモ参リ候、権現参詣、満足寺へモ一刻、

二十七日

上之湯へ行、帰リニ中蒸へモ入り候テ帰ヘル、

二十八日 曇、

中蒸へ参入候事、

二十九日 晴、

藤八殿事、今日ハ上江迄鶯鳴音聞ニ被參候、満足寺庭へ參、吉次郎・徳熊へ稽古イタサセ候、与市出シ、徳熊ハ今日ヨリ初テ稽古イタシ能覺候事、

三日 昼ヨリ雨、

上之湯へ朝五ツ過參リ候得ハ、ミソサ、^(イセ)リ鳴、町田氏別ケテ感心、帰リニ中蒸へ入り候、今日満足寺ヨリ麦飯被具、加減無類、

日史第六十之卷

名越時敏

四日 雨、

終日内ニ罷居、入湯ハ度々ナリ、

慶応二年丙寅五月中

朔日 晴、

五日 小雨、

早天入湯、其余度々^ト同断、書籍トモ見慰ミ候、藤八殿度々被来、高原ヨリ地頭横日來候テ無程帰リ候、今日飯野源昌寺和尚被帰、

九ツ時分満足寺被来、酒共出シ緩々被相噺候、藤八殿被来亭主振、飯野ヨリ大河平清太夫・馬場八郎右衛門・壹岐源五左衛門來リ、緩々相噺候、今日ハ飯野之三人満足寺へ泊リ候由、

二日 晴、

今日ハ昼満足寺庭ヲ借り、与市出シニテ吉次郎・徳熊へ稽古イタサセ候、七ツ過へ上之湯へ一刻、^(空)白^(空) 掃掛中蒸へ一度入り候、下之湯へハ毎之通リ終日之内ニハ度々入湯也、

六日 雨、

今日ハ藤八殿帰、竹翠殿ニモ小林ヨリ打立被帰、上江ヨリ同伴、栗野泊之筈候由、此天氣合ニテ如何、入湯六度、夜モ一度也、

七日 雨、夜少々雷鳴、

終日在宿、入湯迄也、

八日 雨、

朝千石馬場町田家孫お岩疱瘡之由、別テ難儀之段
申来、則返書差出ス、

九日 曇、

お岩との凶左右申来、

十日 間々雨、

今日ハ白鳥ヨリ小林之様帰、木場道通ニテ小林之内
南西村川上筑後殿家来免田見籠所へ一寸立寄、子共
へ飯共為給候、焼酎トモ預馳走候、暮帰宅、役々出
候、

十一日 朝雨後霽、

四ツ過役々出候、十郎太・仲太左衛門・観音寺モ被
来候也、

十二日 晴、

十郎左衛門・莊右衛門出候、当分用達丸田竹翠在府
ニ付、披露物等何篇拙者へ直披可然段十郎左衛門へ
相達、外郷々へモ右之段申越置候様達置候事、

徳熊病氣ニ付、高岡ヨリ来居士師昌斉招呼、鈴木龍
之助モ招呼候事、

十三日 雨、

朝六ツ起、吉次郎へ書物教へ、十郎左衛門出勤、莊
右衛門詰前ニ候へトモ、田植ニ付暇申出、今日ヨリ
出勤イタサス候事、

十四日 雨、

朝六ツ起、吉次郎へ書物為読候、徳熊ハ三日不快故
書物読モ見免候、

十五日 晴、夕雨、夜入霽、

朝六ツ起、吉次郎へ書物為読候、役々出候、九ツ時
分ヨリ今井市兵殿被来候テ、八ツ半時分被帰、夫レ

ヨリ高原へ参り候テ一宿、明朝町人・百姓等御用出
置候褒美イタシ候筈、

十六日 快晴、

朝六ツ起、今朝都城町人野田善右衛門六男高原爰許
野町中宿野田藤次郎、広原村末永門名頭栄右衛門、
麓村大迫門名頭万兵衛男子万作、野町人喜八、
右四人之者トモ喜八ハ所へ鉛差出、外三人ハ村中困
窮之者トモ兼テ相救、家内中睦敷、尤、親孝心等一
向宗へモ不立障、外ニモ不立障様教育等イタシ候段
相聞へ、心入宜候ニ付呼出褒置、聊褒美之印ニ金子
百疋ツ、遣候、四ツ時分ヨリ打立錫杖院へ参詣、寺
僧飯迄差出候、夫ヨリ神徳院へ参詣、直ニ帰、七ツ
過小林仮屋へ帰宿候へハ川上七次郎殿被来、今夜榎
木原人参植付場へ月見ニ来り候様被申候間、暮ヨリ
差越候テ夜九ツ時分帰宅候事、

十七日 晴、

朝六ツ起、吉次郎へ書物為読候、四ツ時分方松岡新

之丞殿・佐伯善次郎殿被来暫被相咄候、七左衛門出
勤、四ツ半時分ヨリ養蚕方掛新納喜右衛門殿被来、
八ツ時分被帰候、又吉次郎・徳熊へ書物為読候事、
須木与頭岩下荘玄院ニモ一刻来候、

十八日 快晴、

朝六ツ起、七左衛門・荘右衛門出勤、吉次郎・徳熊
へ書物為読候、八ツ過飯野暖伸左衛門来致面会候、
昨日養蚕掛申付度新納ヨリ承り候ニ付、細々達之趣
モ有之召呼候、外ニ青山織兵衛、与頭壱岐市郎右衛
門・大河平清左衛門、横目柏木源右衛門、一人ハ地
頭横目ヨリ寄ニテ、青山七左衛門ニテ可然ト申置候、
夫ヨリ高原郡見廻田口箭一郎来致面会候へハ、先日
致褒美候四人之者共為一礼召列来候由申出候間、町
人之分ハ末座へ召出致面会候、在之者へハ念入候段
申聞候様相達シ候、

十九日 曇、夜入雨、

朝六ツ起、五ツ半時分ヨリ打立須木之様参、武術致

見分候テ一宿、五ツ時分臥候事、

今日ハ早ク致着候ニ付、庄内軍記持越居候ニ付致一見候テ日暮イタシ候事、

二十日 雨無堪間降、

朝六ツ起、四ツ時分佐伯善次郎殿先日ヨリ被来居候由ニテ見廻有之、昨日ハ狩イタサレ候由候ヘトモ不獵之由候、二三疋ハ出タルヨシ候ヘトモ、鉄砲モ鳴リ不申之由候、今井市兵衛拔米取締ニテ当所廻勤、昨日ハ袖園番手為見分被差越、片手ニ狩之由候ヘトモ是モ不獵之由、宍ハ三疋歟出、鉄砲モ一ツハ鳴リ候由、当分差テ用向モ無之候ニ付雨降故滞在、日暮ニ庄内軍記共見候、役々ハ勿論、小藤田甚左衛門度々来候、右甚左衛門書付持参、夫ヲ横物ニ認呉レ候様申候、掛物ニイタシ朝夕見候テ慰考之由候、拙者ニモ此前輯録之内何ニカ書留置キ候得共、今日徒然ニ候マ、マタ記シヌ、

万のことはらすか、わらす、わつらいなき身と成、春秋の花もミちを友なひ、をのかま、に盃を

かたふけ、世をうしともたのしひともおもはて、

閑々座をしむる折からハ、一枝の花をいけ、一煙の香をたき、能茶などのミ、ふるきふミを友とし、若心あらん人の問くる事あらバ、古へ今までの道のかたはしをも語りなくさむこそ、こよのふのとけしや、人ことにかゝる業をなさむ事ハ、山林の中に入れてこそといへとも、たとひ山の奥林のしたにすむとても、名利の心はなれすハいかてあかるへき、只市の中にするとも心から成へし、必所をえらひすかたを改むへきにあらす、僧ハ僧のま、俗ハ俗のま、にて、柳はみとり、花はくれないなり、

まよはぬも

まよふもおなし

みなもとの

心をミれば

た、ありのま、

烏丸光広卿

須木暖中山宇平太所持白鶴書

丹鳳來儀宇宙春

当分番兵故儀一郎名代ニテ申付

中天雨露四時新

普請方見廻

世間好事惟忠孝

竹之下庄五

臣報君恩子報親

地頭横目

黒木孝之介

二十一日 雨、

牛馬役

朝六ツ起、雨強降候ニ付今日モ滞在、

入来藤十郎

二十二日

右之人数今日飯屋ニテ申付候、外二六人先日役目替、
噯ヨリ申付候様先日申渡置候処、今日御請御礼来候、

郡見廻

朝六ツ起、五ツ半時分須木打立候テ、九ツ時分小林
飯屋帰着、十郎左衛門・彦七出候、赤木仲太左衛門

甲斐良左衛門

ニモ来、夜入幸藏・善兵衛・岩次郎呼出相咄候、四

庄屋

ツ時分臥候事、

永野藤八郎

二十三日 雨、

黒木伝左衛門

朝六ツ起、十郎左衛門・弥兵衛・彦七出勤、吉次

用水掛

郎・徳熊へ書物為読候、高原役目替、左之通申付候、

高妻彦五郎

地頭横目ヨリ普請見廻へ

用水掛

丸山儀一郎

馬場万之助

用水掛

黒木勘之進

二十四日 雨、

朝六ツ起、

二日 雨、夜雷鳴、

朝六ツ起、吉次郎へ読書指南、強太左衛門・六郎右衛門・織兵衛出候、高原ヨリ黒木孝之助御用ニ付来候、夜入幸藏・岩次郎招呼候、四ツ時分隊候事、

三日 間々雨、昼過ヨリ霽、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物被読候、夫ヨリ吉次郎へ手習指南、六郎右衛門・織兵衛出勤、昼十郎太暫来居候、夜入四ツ時分隊候事、

日史第六十一之卷

名越時敏

慶応二年丙寅六月中

朔日 雨、

四日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半時分ヨリ吉次郎召列岩瀬川出川見
ニ参候、横山織兵衛付参候、九ツ半時帰、横山龍見・赤木七郎左衛門・時任強太左衛門・横山伴之進・大脇七左衛門・横山六郎右衛門・時任弥兵衛・伊福十郎太・同十郎左衛門・横山荘右衛門・高野瀬彦七・富満武右衛門来候、八ツ後稽古所へ出候テ直

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物教候、夫ヨリ五ツ半時分迄草取イタシ候処、余程体之為ニ相成候様覺有之、汗出手水共仕ヒ気分宜候、何レニ人間之体ニハ土扱ハ葉ニテ候、強太左衛門・六郎右衛門・織兵衛出勤イタシ候、夜入四ツ時分隊候事、

心影之流・示現流致見分候、夫ヨリ引入候へハ伊福

五日 快晴、

ガバ、来候テ夕方迄相咄候、夜入四ツ時分隊シ候事、

朝六ツ起、稽古所へ武術致見分候、夫ヨリ吉次郎へ

書物為読候、徳熊同断、六郎右衛門・織兵衛出勤、夜入吉次郎・徳熊へ字共為書候、四ツ時分隊候事、

六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・六郎右衛門・織兵衛出勤、七郎左衛門四ツ時分ヨリ来、蚤今日飽キ候ニ付終日加勢共イタシ候、馬拵モイタシ呉候、夜入四ツ時分隊候事、

七日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読毎之通り、十郎左衛門・六郎右衛門・織兵衛出勤、七郎左衛門今日モ四ツ時分ヨリ昨日同断加勢ニテ、七ツ時分帰候、同刻土師昌齊来候、徳熊并おたね頼見候、夜入四ツ時分隊候事、

一先日ヨリ大工相頼細工イタシ、今日檜ニテ重二組キチャウメンニテ候、長盆式ツ・入子一重ネ出来候、マダ外二段々細工之筈候、

八日 朝霧雨、後晴、

朝六ツ起、稽古所へ出武術致見分候、夫ヨリ吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・六郎右衛門・織兵衛出勤、七郎左衛門昨日同断、

一今日キチャウメンナシ、檜重式組・長盆一重成就、九日 晴、夜少々雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・六郎右衛門・織兵衛出勤之事、

一今日檜ニテ封箱式ツ出来候、

十日 大雨、新宅取付雨漏如滝門滝、
(電力)

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・六郎右衛門・織兵衛出勤、七郎左衛門来暫相嘶候、夕方観音寺被来、四ツ時分被帰候、夕遠方雷鳴アリ、

一今日檜ニテ包物入箱式ツ・甲之立物入箱取榿蓋新調出来候、

十一日 晴、

東方村辺大雨之由、

朝六ツ起、強太左衛門・六郎右衛門・荘右衛門出勤、

十郎左衛門・荘左衛門養蚕所掛被仰付候由ニテ出候、

町之平兵衛娘兩人来蚕之糸取イタシ候、夜四ツ時分

臥候事、

今日八ツ後稽古所へ出武術致見分候、

十二日 晴、

朝六ツ起、稽古所へ武術致見分候、吉次郎モ致稽古

候、引入吉次郎・徳熊へ書物為読候、強太左衛門・

六郎右衛門・荘右衛門出候、今日モ糸取之者共来候、

今日モ糸取^術之者共^カ来候、今日ハ大工トモ重箱外入四

ツ出来候由ニテ差出候、

十三日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、七郎左衛門

来、六郎右衛門・荘右衛門出候、今日昌齊来ル、

一今日桐之木ニテ筆墨入出来候、引出シ式ツ有之、

十四日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、六郎右衛

門・荘右衛門・強太左衛門出勤也、

十五日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物教へ候、赤木仲太左

衛門・同仲蔵・強太左衛門・六郎右衛門・荘右衛門

出候、赤木七郎左衛門・同十郎太ニモ来候、暮ヨリ

大工兩人招呼酒共為吞候、今日桐之木ニテ具足箱出

来候ニ付キ祝ヒ候、

一今日桐具足箱一荷・檜小ダンス一ツ、引出六ツアリ、

鬼頭灯炬一对、昌寿寺大中公^{貴久}へ献上用、

右之通出来候事、

十六日 間々雨、少々雷鳴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、富満武右衛

門・横山荘右衛門出候、

一今日桐之木ニテ菓子入箱三ツ出来候事、

十七日 晴、

四ツ時分隊候事、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、強太左衛門・武右衛門・莊右衛門出勤、四ツ後観音寺不働明王へ参詣、八ツ後観音寺和尚被来、

二十日 霽、

一今日吉次郎・徳熊へ呉候文庫ニツ檜木ニテ出来候、檜ニテ小タンス一ツ出来候、引出シニツ、押ハメ板式ツ有之、小キ茶舟一ツ、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、武右衛門・莊右衛門出勤、今日ハ具足虫干イタシ候、七左衛門ニモ出候、暮ヨリ七郎左衛門招呼、四ツ前帰、無程隊候事、

十八日 晴、遠方雷鳴アリ、

二十一日 間々小雨、雷鳴、

朝六ツ起、吉次郎書物為読候、七左衛門・武右衛門・莊右衛門出候、昌寿寺被来、今日横山織兵衛申遣来、又昼来、強太左衛門ニモ一刻来、
一今日書物箱ニツ出来候、今日迄二大工物成就、手間代料拾壹兩七貫五百文也、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、八ツ後稽古所へ出武術致見分候、武右衛門・莊右衛門出勤、二十三日昌寿寺之(貴久)大中公へ 献上之鬼頭灯炉一对張方イタシ候、夜四ツ時分隊候事、

十九日 晴、

二十二日 間々小雨、少々雷鳴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、富満武右衛門・横山六郎右衛門出勤、四ツ半時分ヨリ文行堂へ参候、赤木(仲太左衛門カ)仲左衛門・赤木七郎左衛門来り候、夜入

朝六ツ起、稽古所へ武術致見分候、武右衛門・彦七出勤、灯炉張方イタシ八ツ前致来候、八ツ前観音寺和尚来、物種色々持来ニテ候、ドウゴリ之苗持帰候、

八ツ後書見共イタシ、夜入四ツ前隊候事、

一宿之事、

二十三日 間々雨、

朝六ツ起、昼内取集、武右衛門・彦七出勤、横目弓

二十六日 快晴、

削次右衛門ニモ養蚕所掛被仰付候由ニテ出候、高原

朝六ツ起、野尻武術致見分、大炮手都合モ致見分、

ヨリ山口弥藤太来候、先日横目被仰付候御礼、今日

帰掛満留民左衛門所庭迄一寸立寄、直ニ帰り、又伊

町ヨリ仕立物来候テ袴仕立候、七ツ時分ヨリ昌寿寺

集院源次郎墓モ致一見候、外ニ平田増宗嫡子墓等モ

大中公へ参詣、鬼頭灯炬一对献上、無程帰宅、夜入

有之、九ツ半時分帰宅、鹿兒島状共段々相届居候、

四ツ時分隊候事、

内島状モ段々有之、四ツ時分隊候事、

二十四日 晴、

小林

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、野尻ヨリ地

井上嘉兵衛筑前ヨリ来書之写

横目カ頭海老原伴助来候、強太左衛門・武右衛門・織兵衛

〔頭注〕五脚一件前略

出勤、今日モ仕立物立揚仕立候、今晚ハ右之者居間

阿久根泊り、此所ニテ太宰府ヨリ之飛脚到着、承候

へ招呼酒為吞候、五ツ半時分帰宅、無程隊候事、

ハ博多へ幕府御役人数多相見得候間、早々宰府之様

二十五日 快晴、

参着仕候様ト之事ニテ、同所ヨリ急キ相成、当月朔

曉七ツ過起、飯共為焚相仕廻、六ツ時打立候テ高原

日同所出足、出水米之津へ四ツ過着、昼飯、直ニ乘

へ差越武術致見分候、八ツ前ヨリ野尻之様参り今晚

船、日奈久港へ六ツ過着船、一宿之賦御座候処、人

候処、折々引汐ニ罷成、船居リ船中ニテ一夜明シ、少々霧雨降り退屈仕申候、翌二日朝夕ニ漕出シ、四ツ時分肥後八代へ着岸、昼飯、急キ之事御座候ニ付、同所ヨリ壱人ニ付乗下馬カ疋ツ、被仰付、直二同所出立、川尻迄通行、一宿、同所ニテ又候宰府ヨリ飛脚到着、急速ニ相急キ候様申来、翌三日ニハ松崎泊之賦御座候処、中途ヨリ夜ニ入候故、瀬高ト申所一宿、四日同所出立、松崎昼飯、七ツ時分太宰府大町通角屋ト申町家へ拾人共ニ安着、一宿ニテ、翌五日ニハ連歌屋町泉屋ト申所へ相直リ、十一日迄在宿、同日連歌屋坊ト申寺へ引移方相済安堵仕候間、乍恐尊意易思召被遊可被下候、

一五卿方ニハ御社内別当寺延寿王院ト申寺へ御住居之由御座候、

一天満宮へ参詣仕候処、誠ニ結構之神殿ニテ内外ト云、又ハ諸所茶屋杯相立、殊ニ毎日参詣人夥敷、是社コレヲ九州一之名所ト相覺へ申候、

一当所ヨリ半道計之処二日市ト申町へ幕府御目付始五十人余、此内ヨリ被差入候由、就テハ此節五卿方御

帰京之処申立、御警衛可致トノ趣ヲ以五ヶ国警衛之頭役衆へ被相達候由、私共同列之壮士着迄之内御国ヨリハ返答無御座、前条之通四日着仕候ニ付、五日昼時分頭役之御銘々幕役方へ被差越、御返答之趣ハ、我カ 君

勅命ニ依リ主人ヨリ我々共迄警衛トシテ被差出候ニ付テハ、何レ主人ヨリ可相渡トノ君命無之内ハ其方へ相渡候儀不相成、併不得止事不法之働ヲ以奪取被成儀モ候ハ、薩兵死ヲ以御警衛可致トノ御返答有之候由、就テハ幕方ニモ威ヲ見テ威懼イタシ、則答無之、今日迄ハ何分相分リ不申、然トモ右之通争論ニ及候ニ付テハ何様之事カ取催候儀難計、始終油断不相成世話等敷事ニ御座候、譬へ戦争ニ及申候テモ難有御警衛被仰付候事御座候ニ付、御国之為又ハ家之奉公ト朝夕相考、少モ恐懼仕申事ニテハ全無御座候、武士ニ生レシ当然ト勇敷相考申事ニ御座候、併此節迄ハ無難ニ相治リ候向ニモ評判承申事御座候間、決テ無相違ト奉存候、少モ御氣遣被遊間敷候、

一私共住所連歌屋房ヨリ天満宮之間纒マ疋町ニハ足り不

申候付、毎日社殿内外へ日暮二差越申候、五卿方住
所延寿王院迄ハ壹町半程モ御座候半、

以下略ス、

寅四月十三日付也、

前略ス、

此内ヨリ再度御左右申上置候、公儀小監察衆ニハ矢
張二日市ト申所へ御滞陣ニテ、五卿方御帰京之処被
申掛候儀ニおひてハ未何分相決不申候、依テ当藩ヨ
リ大監察下向之処申掛被申越候趣トノ評判トリノ
二有之、然トモ只今マデハ漸々静謐之向ニテ、何ソ
御懸念等被遊丈之事ニテ全無御座付、左様思召可被
下候、扱当月始長藩百五十余人程国元脱走、備中之
内倉敷ト申所三万石計之幕領ニテ、公義御代官衆兼
テ住居之由、然処右長藩攻入代官ヲ始討取、其上備
中領吉井川ト申所迄踏取居候処、去月十日比公義并
近国ヨリ壹万騎之兵士ニテ三日ニ相掛戰爭有之、長
藩少勢ニテ悉ク敗軍イタシ、二十八人程国元へ駈戻
リ、寄手之方モ相応之戦死為有之由御座候、折々六

ケ敷成立、長州征伐之儀モ相始リ申筈共ニテハ有御
座候哉、評議区々ニテ何分イマダ吟味決定不仕由御
座候、折々細事承合候上可申上候間、左様思召可被
下候、以下略ス、

寅五月七日

扱此内ヨリ再三御左右申上候通、公義御監察小林甚
六郎殿ニハ二日市ト申所へ御逗留之処、去月廿一日
博多之様御転移相成、外ニ御徒目付前田大太郎殿ト
申人去月廿三日彼之地へ被罷下、当分皆々幕役衆博
多へ滞陣之由、当地ニヲヒテハ静謐之向ニ相成申候、
併御軍賦役川畑伊右衛門殿始大山格之助殿、御目
付伊集院喜左衛門殿・山田孫一郎殿其外京師并長州
又ハ博多・小倉・福岡辺へ度々御発足有之、決テ探
索方之儀共ニテハ有御座間敷哉奉察候、就テハ何歟
騒働等敷儀有之申儀トモハ相違無御座、吉凶難計事
ニ御座候、乍併当所ニテ万一戰爭ニヲヨヒ申候テハ、
天下之大乱ハ案中御座候、此節迄テハ程能相治リ、
御懸念無御座様奉願上候、且又御側役吉井幸助殿ト

申御方モ去ル六日御当所へ御到着ニテ、御目付三雲
 藤一郎殿ト同列ニテ、一昨八日福岡之城主(黒田齊連)松平美濃
 守様御方へ御越之由、何様之訳モ能相分り不申候へ
 トモ、何カ御直シキ被仰上儀共ニテハ有御座間敷哉、
 蜜々承及申候、ヲノツカラ御聞及モ御座候半、長州
 御征伐之儀モ相始、筑前ヨリハ三千人余モ及出陣候
 段評判有之、就テハ此節ハ大合戦ニ成立申儀ハ案中
 ニ奉存候、最早去ル二日ヨリ関東勢押寄、岩国之内
 福川トヤラ申所ニ長兵相守居候処、相応之戦ニテ稍
 関東勢引足ニ相成、終ニ敗軍ニヲヨヒ退陣ニ相成為
 申由、一昨八日飛脚到来ニ付粗承及申候、且又右戦
 争前以小倉之城主小笠原大膳(忠幹)太夫(壹岐守カ)様御事、長州
 御征伐一条ニ付芸州表へ御逗留之処、長藩完(六戸カ、機)戸備後
 之助ト申人応接方ニ付小笠原様御方へ差越居候処、
 何様之働ニ御座候哉、直ニ完戸氏ヲ擒ニイタシ候テ、
 芸州広島へ御預ニ相成候由、実否相分り不申、評判
 区々ニテ不一方事ニ御座候、若長州及敗軍ニ候テハ
 五卿方へ幕勢押寄候儀難取計思召ニ茂御座候哉、御
 国ヨリ式百人余モ重ニテ近々到着之筈ト粗風聞御座

候へトモ、是以実否相分り不申候、折々長州合戦之
 一条承合、何分御シラセ可申上候間、左様思召可被
 下候、

以下略ス、

高百六拾九石

一歳三十計

三条実(美カ)卿

右筑前御請持、

高五百石

一同五拾六

三条西季知卿

右肥後同断、

御蔵米

一歳三拾四

東久世道禧(ヨシ)卿

右久留米同断、

高百三拾石

一同三拾式

壬生基(修カ)経卿

右薩州同断、

一同三十九

四条隆(ウツ)訶卿

右肥前同断、

一三条殿御付

森寺大和守

三宅左近

太田周馬（司馬力）

戸田雅楽

杉本拙藏

山田栄之進（山岡力）

島村左伝次

三村鉄三郎（上杉力）

盛岡延太郎

武部諫尾

安芸盛衛

谷普（晋力）

小藤又兵衛

芳木松太郎（春太郎力）

小松泉太郎

水野緩雲（漢雲斎力、正名）

土方楠（楠左衛門力、久元）

丸茂文興

乾久馬太郎

高橋久之進（久之助力）

安田祭藏

杉山路吉

小谷三吉

安部助之進

新四郎

鶴松

善兵衛

吉藏

鹿藏

尾吉

源藏

樋口助藏

山泉直吉

直次郎

清五郎

安次郎

一三條西殿御付

安井千代国

一 東久世殿御付

宮原主税

藤岡彦四郎

大山彦太郎

長谷川与吉

(木村力)
森喜助

大沢寅吉

勝藏

渡辺左衛門

(伊藤力)
伊東忠雄

今井左司馬

鏡五助

嶋島三郎
此字不詳

萩野元七

中村井藏

高津亡吉
(定吉力)

長谷伊三郎

喜千藏

一 壬生殿御付

一 四糸殿御付

長村縫殿

藤田主税
(主水力)

安並直樹

平川和太郎

奥田常太郎

田中吉兵衛

大谷栄藏

小西直記

(田村力)
田出豊前

三浦主税

櫛田連男

(木村琢磨力)
森隊磨

坂元禎次郎

福瀬三代吉

上野直次郎

早川巳之吉

新藏

万助

二十七日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書為読、十郎左衛門・武右衛門・織兵衛出勤、十郎太来、観音寺ニモ来暫相嘶候、夕ヨリ細野之千太郎来、夜入四ツ時分歸り候、無程臥候事、

二十八日 曇、夜入雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、十郎左衛門・武右衛門・織兵衛出勤、今朝稽古所へ武術モ致見分候、高岡ヨリ村田正次来、又高原請持郡奉行田畑武右衛門殿書役何某殿召列被来、与頭丸山十郎左衛門・地頭横目（空白）来り候、暫被相嘶候、夜入四ツ時分臥候事、

二十九日 間々小雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・武右衛門・織兵衛出勤、終日写本ニテ候、夜入五ツ過臥候事、

一夜更風雨烈敷、東南之戸口惣テ戸ヲ立候事、

日史第六拾二之卷

名越時敏

慶応二年丙寅七月中

朔日 雨風、今朝西ニ風替ル、

八ツ後稽古所ニテ武術見分、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、大脇七左衛門・伊福十郎左衛門・赤木仲蔵・井上軍兵衛・横山六郎右衛門・横山織兵衛・赤木七郎左衛門・伊福十郎太・横山龍見・堀之内半五左衛門来候、夜四ツ臥候事、

二日 朝雨後霽、

朝六ツ起、武術見分、吉次郎・徳熊へ書物為読候、半五左衛門・七左衛門・軍兵衛出勤、八ツ後拔米取（スガ）締伊地知休蔵殿・野尻表締方横目松山半次郎殿被来、高原町人・百姓共孝養又ハ施行等イタシ候者共聞合被仰付、右ニ付承候儀トモ有之、畢テ暫被相嘶、夕細野之千太郎来、夕夜入無程臥候事、

小林衆中押川諸右衛門家有之、先祖押川強兵衛殿以

来之古書致一見、左ニ写置候、

周防国池田之村

応徳元年甲子正月十八日より甫拾九代宗近

押川橘朝臣

氏神三所権現本地千手観音

近理

杉原紙ニ

認有之、

元龜三年壬申六月吉日

応徳元年ヨリ慶応元年迄六百九十三年也、

元龜三年ヨリ慶応元年二百九拾五年、

高麗渡海之覚

文祿三年甲午伊勢弥九郎殿高麗御陣ニ御立被成候時

与力ニ罷成、八月廿七日打立、水俣ヨリ舟ニ乗、肥

前牛津ニ舟ヲリテ、其ヨリ陸路ニテナゴ屋ニ参候、

又八様者京ヨリ直ニナゴ屋ニ御着被成、九月八名（家久）ゴ

ヤ御逗留ニテ、拾月六日ニ御舟下被成、八日夜半ヨ

リ御出船ニテ、十月卅日ニ高麗カラ島ノ御陣ニ御着

被成候、我々モ御供申候、

文祿四年乙未八月カラ島御陣ヲ御引被成、高麗カト

ク島ニ御在陣ニテ候、我々モ御供申候、其島ヨリ御

暇被下候テ、文祿四年十二月十四日ニ加徳島ヲ出船

仕、同月卅日ニ薩摩之内阿久根ニ着船仕、慶長元年

正月三日ニ帖佐参申候、同月八日ニ日州真幸三山ニ

帰宅申候、以上、

押川五右衛門

近長



又高麗ニ渡海申事

慶長元年丙申十二月十二日宿元ヲ打立、薩摩之内隈

城向田ニテ致越年、慶長貳年丁酉正月廿八日出船仕、

三月十日ニ高麗ニ着船申在陣申候、六月十八日カト

ク島へ番船カケ申シ候得トモ、サセル手立モ不仕候、

然ハ諸大名御談合ニテ番船崩可被成之由候テ、諸大

名ハ舟手、薩摩衆ハカラ島ノ陸路ノ手ヲ御請取ニテ、

七月十五日ヨリ御舟メサレカラ島ニ船ヲリ被成、明

十六日寅之時ヨリノ軍ニテ番船コトノク海ニシツ

メ被成候、従其奥入被成候処ニ、南原ナノモリ之城ニ大明・朝鮮人差コタヘ候条、八月十五日夜詰ニ切崩被成、自其奥ニ御入被成候ヘトモ、然々儀無之候条、御引取被成候テ泗川ソナカニ御陣取被成候テ御番被成候、其陣ヨリ我々ハ御暇ヲ被下候時内蔵丞ト名ヲ給候、慶長三年戊戌四月十五日ニ泗川之御陣を出舟仕、五月十五日在所へ令帰朝候、已上、

押川内蔵丞

近長



覚

一 先年高麗御在陣之時致渡海候、自力ヲ以四年御奉公申候事ハ、伊勢貞昌兵部少輔殿御存ニテ、同前ニ御奉公被成候蒲生衆福崎甚作殿・高岡衆折田七右衛門殿・飯野衆下島甚左衛門殿、此衆ハ御侘申上被成候条、知行御給ヒニテ候、拙者事未御侘不申上候事、
一 庄内御弓箭候時、上井仲五殿兼政戦死被成候時拙者弟ニテ候弓蔵遂戦死申候ヘトモ、子孫無之候間ナミノ三石加増ヲモ不被下候間、其跡無体ニ罷成候間、拙

者子アマタ候内ニ一人跡ヲ継シ申候条、百日番同前ニモ御手付成被下候ヘカシト奉存候、

右ハ御侘之事連々タノモシク及承候間、能様ニ奉頼候、

十二月七日

押川内蔵丞

諏方仲右衛門殿

於今度朝鮮国泗川表大明・朝鮮人催猛勢相働候之処、父子被及一戦則切崩、敵三万八千七百余被討捕候段、忠功無比類候、依之為御褒美薩州内御蔵入給人分有次第一円ニ被宛行訖、目錄別紙ニ有之、并息又八郎被任少将、其上御腰物長光、父義弘御腰物正宗被為拝領候、於当家御名譽之至也、仍状如件、

慶長四年正月九日

輝元毛利

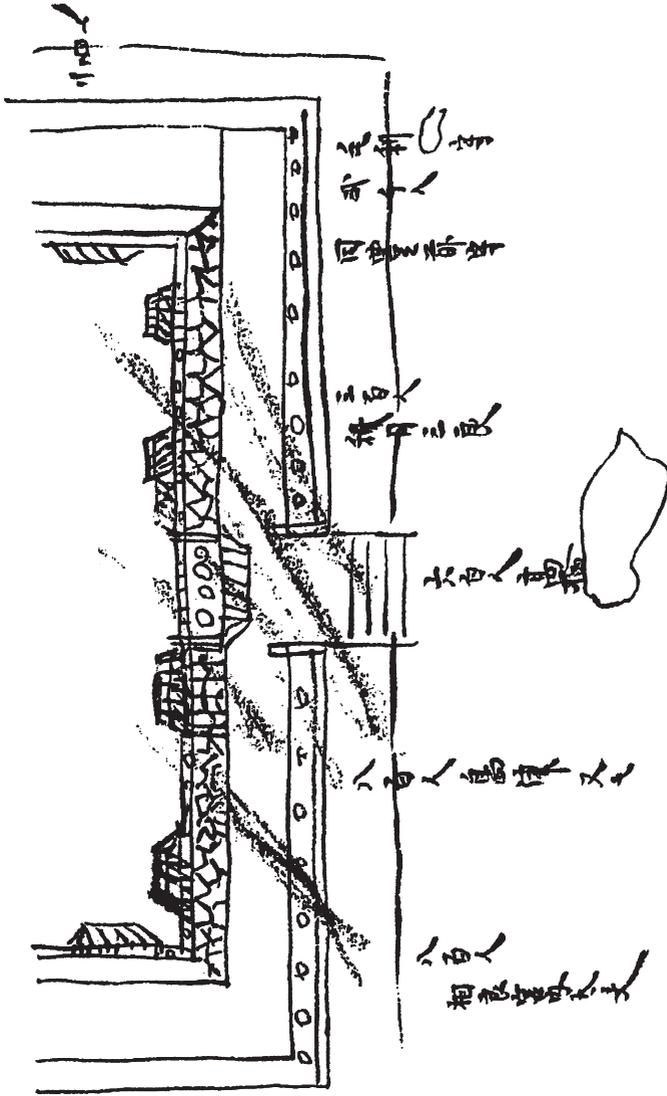
景勝上杉

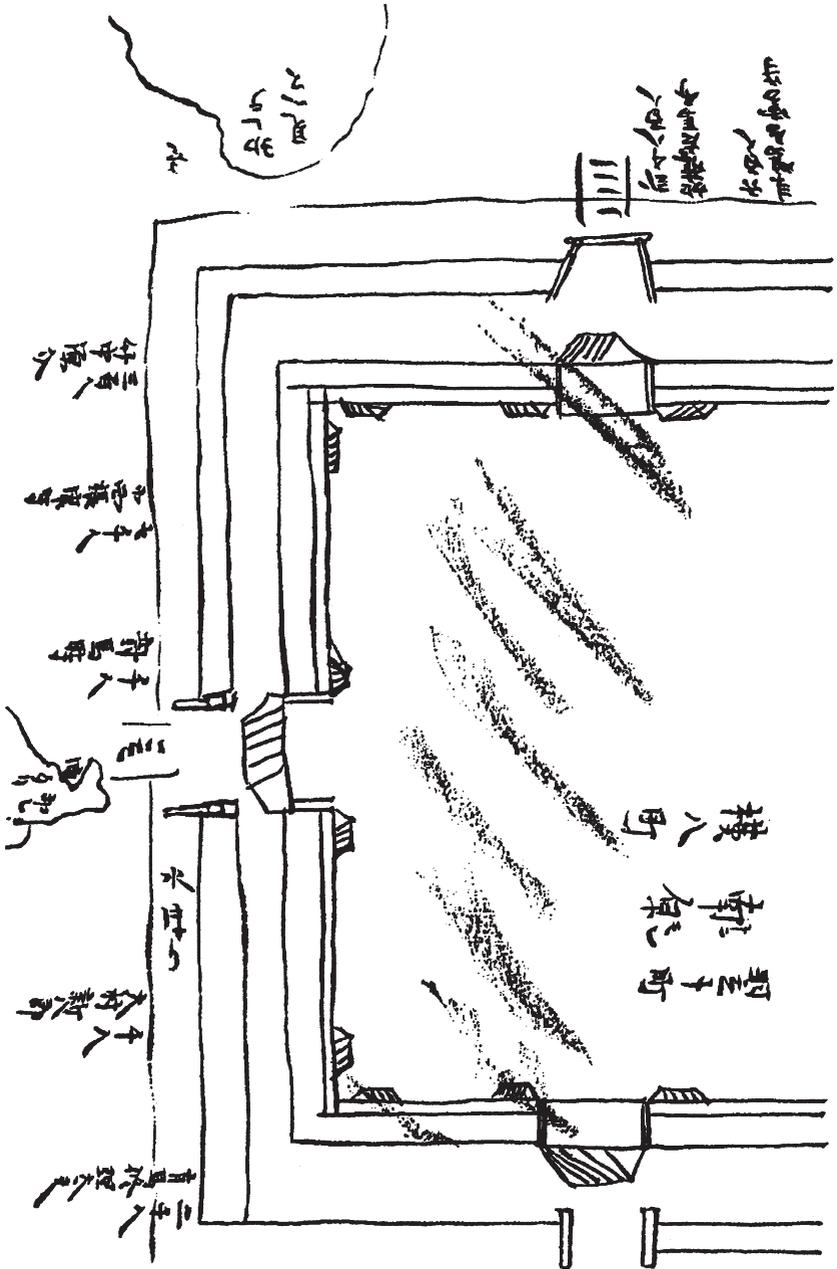
秀家宇喜多

利家前田

家康徳川

羽柴薩摩少将殿家久





条書

一 前々ヨリ被仰渡候諸御法度被相背間敷事、

付、夕ハコノ事、

一 一向宗前々ヨリ御法度候間、若衆中被申渡相背人ハ

承立、此方へ可被仰知事、

一 従公儀諸事御奉公方被仰付候御無緩可被相調様、到

衆中ニ相応之御奉公暖中ヨリ被申渡候割、於難渋ニ

ハ堅被届置、日記ヲ以此方へ可承事、

一 隣所之御外城地頭・暖衆江被申合、御奉公方可被相

閉目候事、

一 小林中御鹿倉用木猥伐採事堅可為停止候、折々檢者

被廻可被念入事、

一 六度之御狩堅固ニ可被相閉目候、不参之衆及沙汰ニ

日記ヲ以此方へ可承候事、

一 私之狩犬山堅可為停止候、無余儀望之方ハ暖衆へ被

理候テ尤敷事、

一 諸寺社へ窄人格護之儀、暖衆へ可被相理候、ミダリ

ニ被召置間敷候事、

一 小林中走者或ハ旅人宿カリナトムサト相抱マシク候、

節々念入可被相改事、

一 両町大市之時分暖衆被指出、諸事念入可被見廻候事、

一 小林中ヨリ他方へ相通シ候荷物之口銭、念入公儀へ

可被差上候事、

但、手形役人西田弥左衛門・富満左近將監、

一 田島仕明地等之首尾毎年念入公儀へ可被差上候事、

一 在郷江被居候衆中、諸御奉公遠方トテ於不被相閉目

者懸持之屋敷可被召上候事、

一 諸衆中之内筆者・算用者衆、其外公儀之御奉公節々

可被申候人之儀者、本ノマ諸合ヲ以心得可有之候事、

一 殿役追立オツクテ宿返等無緩念入可被申付候事、

一 沢原野御馬追、毎年念入如御差図之衆中・在郷之人

数罷登、堅可相閉目候事、

一 道橋折々ニ念入可被仰付候事、

右条々各談合以無緩可被相勤事可為肝要候、已上、

寛永元年十月廿五日 鎌田左京亮御在判(政徳)

坂元清右衛門殿

押川内蔵丞殿

御狩御法度之条々

- 一 御狩之儀ハアナカチ御慰ノ為ニアラス、或ハ人数ヲ被集兵具ヲ改之タメ、或人数サワキ稽古之為ニ候之間、可得其心事、
- 一 惣狩奉行カゴシマ衆へ被仰付候間、彼衆之下知少モ相背輩ハ可処嚴科事、
- 一 自一所奉行人申付、其所之下知可入念候、若緩之儀有之テ狩倉内於不相調ハ、到其奉行科可被仰付事、
- 一 諸所之衆取合之所区々ニ無之様ニタカヒニ可入念ニ、氣任之儀有之而取合之所於不相調ハ、自其所何土執合之場ニ為罷居之由及沙汰、曲事之科可被仰付事、
- 一 横目衆被仰狩蔵内ニ様子見廻サセラレ候事、
- 一 狩衆道具ハ弓・鉄炮得方次第可持候、鹿ヲ射サセラレ候事ハ其日之可応御誼事、
- 一 付、雖為若輩御免之外狩倉内入マシキ候事、
- 一 諸所賦之人数於不足ハ、其科可被仰付事、
- 一 付、入念承候テ可狩事、
- 一 ヨ七螺急ニタ、ヘカヒナカク吹セラレ候間、螺之趣ヨクく入念承候テ可狩事、

一手ニサシ又タ、ヘナトノトキ、キリくニ可有之事、

一 狩声無油断可仕事、

一 山ウチハ大カタニ仕、狩相濟候時分ヨリ野ニ狩出候

テカリ立ヨキ様仕候、比興至極不可然候事、

一 又小者皆々狩衆ナミニクシメニ可立事、

一 御狩ニ可罷出時分ハ御触可有之候間、無相違可罷出

事、

右之旨ヨクく可相守候、若疎略之輩有之者、稱

其科可被仰付者也、

慶長十八年九月四日

大野殿奉行之時条書之写也、

増宗 

右、反逆人之判也、ケ様之判不宜為心得写置也、

六月十八日仕出

井上嘉兵衛筑前ヨリ来書之写

扱長州御征伐之儀、去ル二日比ヨリ相始、既ニ寄手敗北之哉ニ承候ニ付、去ル十一日仕出之書状ニ申上

置候へトモ、其後色々風評有之、区々ニ而始終実正之儀相知不申、イマタ合戦不相始哉ニモ承申事御座候、且又去ル十一日夜八ツ時分ニテモ御座候半、当連歌屋ヨリ三町程右町鶴屋ト申裏屋ヨリ火相起、宰府中ハ勿論、警衛五ヶ国騒立、御国へモ直様勢揃、延寿王院城戸へ張出シ、尤、余国警衛ニモ追々張出相成、御国ニハ延寿王院後之御門御堅ニテ、一時計モ相過候処火鎮相成、解兵帰陣仕申候、尤、敵寄来候節ハ火相掛、其騒働ニ乗テ襲来候半杯之義論仕吏右様出火成立候ニ付、今社第一之場所ト直様合戦用意、切火繩ニテ出張仕申候、前後略シ写シ残シ候、

福七ヨリ遣候書状之内

去ル十六日八ツ時分英船三艘前之浜ニ入津仕候処ニ、下台場ヨリ大炮数個打出候処ニ又船ヨリモ数箇打出シ候、夫ヨリ御役々乗込被成候哉、七ツ半時分下之浜ヨリ英人上陸仕、二十人余江戸橋堀ノメン通大小路口築地中通ヨリ良永寺(良英寺カ)へ参、行掛ニ大小路口辺ニテ店ニ出候ナシヲ取皮之マ、カミ行候、中村八郎右

衛門店先へ立掛リ品物取見候由、御付之御役方ハ小松殿初諸御役人・横目・足軽・町人迄多人数相付候由、夜入前船ヨリ帰船仕候、

一十七日四ツ後

上様小鷹丸ヨリ御馬印御吹貫、御側廻小早船左右ニ相付本船へ御乗付被遊候テ、一刻ニテ御立、直ニ英人ニモテン馬ヨリ数艘乗出シ、是モ色々旗ヲ立磯御茶屋へ参上致、英人拾九人御前へ出、内五人へミニストル初御盃被下、直ニ御能之御ハヤシ有之、御吸物十三、三汁九菜之御飯被下、様々之御取持、御菓子ハ色々美ヲツクシ、兼テ無之菓子出来候、夕方ニ相成御側廻リ調練有之、六十人備打大砲十五挺ニテ候由、夜入過ニ帰船イタシ候由、又本船江残り居英人四拾九人下浜ヨリ上陸、昨日通良英寺へ参り候、見物人大事ニテ御座候由、

一十八日英人大人數下浜ヨリ上陸、所々廻見候テ、拾人計ハ南林寺へ参り候所ニ、
(貴久)大中公御免無之通ス事不罷成段申候へハ、英人クシト返候由、爰ニ妙成事ハ、此夜南林寺下之大松木落

木致、真中ヨリホキト折申候、其音大炮ヲ打カ如ク有之候、今日上陸之内女五人西田橋マテ見物ニ参リ候由、

一十九日英人八ツノ前ヨリ標的ヲ立、船ヨリ大炮打有之、私ハ御二階ヨリ見申候カ、標的ハ竹ノ先ニ手ノコリ之様成切レ付テンマヘ何本モ立置候カ、其竹残ナク射打候由、大船ヨリ八百発余モ打申候、次之船ヨリモ五六十発打申候、火矢ト相見得三本沖ヘ打出候カ、上瀬ヨリ半道モ先キ行申候、先年之合戦之時之打方ヨリモハゲシク御座候、今朝英船壹艘入津イタシ候カ、是ハ本国ヘ合戦初候ニ付飛船ニテミニストルヘ向船之由ニテ御座候、

一廿日八ツ時分ヨリ磯ヘ

御両殿様御出、英人訓練有之、訓練テンマ七八艘乗リ、壹艘ニ三十人計ツ、乗り船モ揃ヘ乗来リ、上陸一所ニイタシ、直ニ備ヲ立三百人三行ニ立口ヲ打立、手拍子之様成鐘ヲ打、牛ホラヲフキ足並ヲ揃ヘ押太鼓ヲ打出ス、鉄炮ヲ四方ヘ打候カ、一ツ筒ヨリ打カ如ク有之候由、間々大炮ヲ打退キ候時ハ足並ニ

引、大砲モ車計ヲ持、将又進候時ハ直ニ車仕合足並ニテ打出シ追詰候テ、劍ヲ抜四方ヘ突廻リ、時ノラ声字上ケ足並ニテ引、進退之掛引誠ニ壹人之如有之候由、

左候テ、鈴御門外ヘ

（久光）中将様、其次ミニストル、其次

（忠義）太守様・重富・宮之城・英之進様・二之丸御子様方

（グラバールカ）其次カラハ一ツ並ニテ 御覧有之、諸人見物人モ鈴

御門下迄罷出候由、夜入元ミニストルハ磯下ヨリ船ヘ乗り、飛船ヨリ帰帆致候、下台場ヨリ大砲数筒打出シ、ミニストル船ヨリモ打出シ申候、

一廿一日英人磯山狩有之、猪鹿七八ツ取レ候由、鹿壹疋走内ニ英人鉄砲三発打候ヘトモ中ハ無之由、浜ニテ壹人ニテ三疋生取候由、又良英寺ヘカラハ初拾四五人参候テ幸蔵見物ニ参候処、御付衆北郷数馬様ニテ御座候、幸蔵ヘ英人ト丈ケクラヘ致見レト被仰候ニ付イタシ候処、我モくくト替ルくく出、同高サ四人有之、外ハ一ニ寸英人ヒキク候ニ付、カラハ年ハト尋候、十七オト申候ヘハ、是ハ大気々々日本々々ト申テセナカタ、キ候、親ユビ出シ有カト申

候ニ付、親事ト存アリト申候ヘハ、年ハト尋候ニ付、七十ト申候ヘハ、是ハ長年々々ト申候、今日ハ台場諸所絵図取ニ参候哉、直ニ幸藏カ絵図ヲ取候、宿ハ口コカト尋候ニ付、是ヨリ八町計有之此方ト申候ヘハ、カテンノ頭ヲフリ候、我国ヘ行シカ明日出帆スルカト申候ニ付、太守之御免ナクハ行事ナラント申候ヘハ、カテンノ頭ヲフリ候、夫ヨリ帰り候ニ付手マネキイタシ見候ヘハ手マネキイタシ、ノチハ笠ヲ取、笠ニテマネキ候ト申候、

幸藏脇差ヲ見セト申テ引拔候テ、是ハ首ニ手ヲ当伐ルノカト申候、ウント頭ヲ下ケ候、又刀ヲ拔見テ是ハト申候ニ付、頭ヨリ尻迄手合シテ伐、二ツニ成ノト申候得ハ目ヲめ候、本ノマ、

一廿二日八ツ前下台場ヨリ大炮数筒打出シ、船ヨリモ打出シ出船仕候、見ル内ニ沖島ヨリ三里計モ乗候、此節上ヲ下ヘト皆々見物ニ出申候ヘトモ、私ハ英人陰モ見不申候、廿一日ニハ柳町モ五人通候由、又是ヨリ先ハ一ケ年五六度モ可参候、此節ハ

上様御物入式万両計モ入候ト申事御座候、昨日塩田

武右衛門参候テ咄ニハ、此節二階堂源(行光)大夫様御掛リニテ候、英人ヨリ金之ヌベ竿御モラヒ被成候ト申事ニテ御座候ガ、御聞被成候哉ト申候、未承リ不申、長三尺計有之、所々ヘコク印打候ノト申候、正金ナラハ何百万両有之候ヤ、誠之事ニ御座候哉相考申候、一廿五日山田孫一郎殿昔屋ヨリ飛脚ニテ下り候テ、着掛ニ二之丸ヘ罷出御咄被申候由、廿六日ニハ西郷吉之介殿御用ニテ

御本丸へ出、

(忠義) 太守様御直御聞之由、アラマシ喜右衛門ヨリ承候、十二日大島口ト申所ニテ伊井家本ノマ、之勢敗軍イタシ候由、長州方強キ事町人・百姓迄一足モ引ン心得ニテ候由、当冬ニ相成候ヘハ大合戦モ可有之トノ咄ニテ御座候、又脇ヨリ承候ガ肥後勢小倉ヘ張出シ候処、夜打ヲ掛鉄砲五百挺計長州方取候様承リ申候、先ハアラノ書留奉申上候、以上、

六月廿七日

七月朔日町藤殿ヨリ来状之内

先日ヨリ追々申上越候通長州征伐相初り申候、井伊

田中源兵衛

（直憲）
掃部頭様御備へ横ヨリ大炮ヲ打込、大崩レニ御座候

中江八左衛門

由、掃部頭ニモアブナキ事御座候由、

御軍賦役頭取・御軍賦役御旗預マダ承り不申候、

一 小倉田之浦ヲ焼払ヒ、大炮モ取扱候由、当分ハ長州

之内へ相渡居候由、昨夜飛脚着候処、右之通申来候

三日 晴、

由、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、七左衛門・

一 今之処ニテ申セバ、双方ヨリ大炮ヲ打候迄ニテ、乍

軍兵衛・織兵衛出勤、夕方ヨリ岩次郎・善兵衛召呼

双方相引ニテ御座候模様、番兵モ昨夜上京被仰付候、

為相嘶、四ツ時分臥候事、

一 此節上京被仰付候物主・談合役名前左之通、

壹番組 物主

四日 快晴、

島津相馬

暁七ツ過起、飯共為焚相仕廻、六ツ時打立、野尻牛

諸郷物主

馬改ニ付参候、岩瀬川未深キ由相聞得候間、浜野瀬

染川五郎左衛門

川之様通行、七八合位モ廻リ二候半、四ツ過着、御

千田伝一郎

厩御役々ハ昨日ヨリ着有之、御馬預見習新納十郎殿

牧野正之進

ニモ宿札相見得候間、着掛立寄候、無程仮屋之様参

大山後角右衛門

居候処、十郎殿被来暫被相嘶候、御召馬乗家村彦八

椎原小弥太

殿ニモ外迄被来候由、八ツ時分ヨリ牛馬改有之出會、

談合役

夕方又仮屋之様帰候、夜入四ツ前時分臥候事、

志岐藤九郎

一面高与蔵殿ニモ此節馬改ニ付差入ニテ、夜前ハ高原

(被川カ)
碓川泊ニテ、今日着之由ニテ一刻被来候、

家村彦八

五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過面高与藏殿被来暫被相咄、所役々

馬医

種子田藤七郎

追々来、外之方へ嘸・与頭・地頭横目等詰居候、四
ツ半時分ヨリ牛馬改相初り候ニ付出張候、八ツ半時
分相濟飯屋へ帰候、江平村・笛水村ハ手分ニテ見分
有之、与藏殿・彦八殿・馬医勘左衛門被差越候、

野尻惣牛馬式千百四拾三疋

江平村・笛水村改早ク相濟候由ニテ、各七ツ半時分
被帰、暮ヨリ面高与藏殿被来、四ツ時分被帰候テ、
四ツ半時分臥候事、

内、駒百七拾式疋

六日 快晴、夕雷鳴アリ、

駄千式百五拾疋

朝六ツ起、月代イタシ今朝武術見分、直心影流・東

男牛三百七拾七疋

家水野流ニテ候、九ツ半時分ヨリ牛馬改相始り、八

女牛三百四拾四疋

ツ半時分相濟、改場所ヨリ直ニ小林之様帰り、七ツ

右之内今日迄之改残り七八百モ有之候半、明日ハ相
濟賦、

過飯屋着イタシ候、夜入五ツ過臥候事、

此節牛馬改ニ付御厩役々

七日 快晴、

御馬預見習

朝六ツ起候へハ、些暑氣相当候様ニテ頭痛強有之候

新納十郎

ニ付、藺香正氣散調合イタシ給、粥ヲ給、四ツ前迄

御召馬乗

臥候へハ少々汗出頭痛モ止候、強太左衛門・軍兵

衛・織兵衛・十郎太・昌齊来候、新納十郎殿野尻ヨリ着掛被来候、七ツ前ヨリ飯屋門前ニテ二才牛馬改有之、暮相濟、夫ヨリ御厩役々四人、面高与蔵殿被来、四ツ時分被帰候、無程臥候事、

一 今日鹿兒島ヨリ書到来、其内、

一 京都守衛モ十日方出立之哉ニ御座候、

一 小倉領内田之浦繫居候商買船數十艘、都テ長州ヨリ

焼払申候、此

御方砂糖船三艘之内壹艘ハ被焼、式艘ハ逃延申候由、

一 長州蒸気船三艘・帆前船式艘アチコチイタシ相働

キ候哉ニ御座候、

一事模様ニ依リテハ跡ヨリ追々決テ人数御差出相成候

半ト奉存候、柳川・久留米ナトモ追々人数サシ出シ、

当分筑前黒崎へ仕寄申候由、尤、筑前モ亭主前ニテ

ヲノツカラノ事ト奉存候、

一 京都ヨリ五拾人計脱走之人有之、是ハ長州へ差越候

トノ事ニ御座候、脱走之御届ニ相成候由伝承候、

右ハ七月三日仕出書状也、

右同日書状到来左之通、是ハ七月五日仕出、

一 摂海へ異船三艘參候由、是ハ

公義へ長州御征伐ニ付、御加勢可致トノ事ニテ御座候由、

一 江戸大駱働、是ハ 御殿山へ八百人計屯集、江戸町

人富家之者共焼払金錢奪取候テ、困窮者共へ配当イ

タシ候由、日本橋迄ハ焼払可申ト申居候由、長州人

ト申事ニテ御座候由、押買乱妨之上ノ仕業、必竟金

銀奪取之巧ニテ可有御座候、

一 番兵モ来ル九日方出帆之由御座候、此

御方軍艦參候由ニ御座候、飛脚モ右船ヨリ被差越候

段、今日御通達相成申候、

一 御鳥見ハ横目又ハ蔵方目付被仰付候、書役等之儀ハ

未タ承リ不申候、

（頭注）典艦様重富江御入之筈一
一 典姫様重富へ被為入筈、御細工所へ御出来物御手当
（齊彬女、島津忠鑑室）

相成、都テ銀金具ニ候、

（頭注）佐次右衛門殿、市来六左衛門英烈行
一 英国へ正使佐次右衛門殿・副使市来六左衛門也、
（岩下方平）

一 京都諸人数守衛方御門留ニテ外出不相成、毎日四ツ

ヨリ八ツ迄調練之由ニ御座候、一橋・会津、薩摩ヲ

疑ヒ警衛人数大形御屋敷ヲ廻リ候ヨシ、此節飛脚便

ヨリ申来候ヨシ、土州・因州ニモ同断ニテ、警衛モ

同様之由也、

四日被仰渡、

八日

朝六ツ起、五ツ時分ヨリ打立、須木牛馬改ニ付須木

之内奈崎之様参候、八ツ半時分ヨリ改始リ候処、初

発帳面取仕立様不宜、且居付繰出等同断ニテ、前後

次第不同頓着ナキ様相成、無是非今日ハ取止相成リ

候、明日ハ御厩役々方打寄帳面取仕立被呉、三日中

ニ又々改直シ有之筈、所役々共不案内之旨而已故之

事ニ候、珍敷改ニテ候、先仕合ニハ須木ハ須木之処

ニテ役々方ニモ勘弁有之、何レ此節ハ帳面取仕立不

被呉候テハ首尾取レ兼候半トノ事ニテ、如斯夕方宿

ヘ帰り、夜入五ツ半時分臥候事、宿亭主ニハ土持正

左衛門ト申候、此所蚊不居、

九日 快晴、

朝六ツ起、今朝新納十郎殿一刻被来候、須木受込地

方検者佐々木伊兵衛モ被来、昨日ハ家村彦八殿・種

子田藤七郎一刻ツ、被来候、今日昼時分御厩役々衆

御通達

(頭注)「廢合之通達」

一 磯奉行

一 尾畔奉行

一 玉里奉行

右御役名被廢候、

一 御鷹部屋

一 御鳥見方

右御庭方へ合併、

一 御納戸与力御小人

一 御広敷与力足輕

右御兵具方へ合并、

右ハ世体ニ応シ何篇易簡之取扱被仰付候ニ付、右之

通御役名被廢、又ハ合并被仰付候ニ付、向々へ可致

通達候、

七月

(桂久武)

右衛門

出会之宿へ参り候、牛馬札引合等御馬預始所役々等迄打寄り取調、荒取込ニテ候、暫罷居又宿へ帰候、拙者ニハ仕事モ無之、唯宿ニ起臥ヲ事トシ、絶壁数重ヲ疊ニ片岸之松幾千歳ヲ経タルヲ見レハ、蒼々タル緑リ糸ヲ鳴サス、却テ岩間セク川音烈シ、或ハ重ナル山々遙カニ見之、間々ニハ陽春早蕨モへ出ヘキ野原モアリ、マタ門田之稲葉ワツカバカリ青ミワタルモイト珍シクシテ、申之刻ハカリヨリ夕日サシ入ハ、センカタナク庭ノアタリ川ツラナラントアルキメクリテナン、日モヤウ／＼暮レ、御風呂ナトニ入り、暖中山宇平太暫来テ咄、昼モ役目ハ折々替々出候、夕方少々牛馬之改モアリ、四ツ時分隊候事、

十日 晴、

朝六ツ起、奈崎ヨリ八ツ打立、七ツ過小林仮屋帰着イタシ候、軍兵衛・織兵衛・半五左衛門出候、強太左衛門同断ニ候、

十一日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、軍兵衛・半五左衛門・荘右衛門・七郎左衛門来候、当月朔日代ニテ被来候当所締方^{本ノマ}□□泰蔵殿被来候、八ツヨリ馬改始り出候、吉次郎ニモ参候、夕方帰候へハ赤木伸太左衛門妻・同七郎左衛門妻来居候、無程帰候、夜入五ツ半時分隊候事、

十二日 間々雨、夜入雨、

朝六ツ起、稽古所へ出候テ武術致見分候、八ツ前ヨリ馬改ニ出張候、暮過帰、徳熊ニモ跡ヨリ来候テ、同暮帰候、五ツ半時分隊候事、

十三日 晴、夜雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・軍兵衛・荘右衛門出勤、八ツ後ヨリ馬改トシ改場へ出張、七ツ時分相濟、夫ヨリ新納十郎殿・小田原勘左衛門殿被来馬爪打具候、高岡・国府杯角力取共来居候間召呼、玄喚庭ニテ為取候、家来曾於郡大久保^{空日}之「」袈裟助モ取候、随分何レモ能角力取共ニテ候、

高岡之者或国府之者三人、小林ヨリ中野庄之助・山口助左衛門取候、暮ヨリ灯炉共トモシ何かト取合上候テ、盆祭り之形イタシ候、同鹿兎島ニテ毎之通イタシ候様七左衛門夫婦へ申付置候、家来共両三人召呼筈ニテ候事、

十四日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・

軍兵衛・莊右衛門出勤、九ツ時分ヨリ昌寿寺

(貴人)大中公へ参詣、無程盆踊相初り候ニ付見物、八ツ過

仮屋之様帰宅、

壹番

太鼓 真方村

貳番

御田 細野村

三番

手拍子 東方村

四番

手太鼓 後川内村

五番

兵子二才 小西方村

六番

太鼓 南西方村

七番

阿波鳴戸 五日町
一之谷

おたね并二子供杯ハ観音寺へ参候、夕方被帰候、夜入細野千太郎夫婦并嫡子来候、四ツ時分帰候、無程臥候事、

十五日 快晴、

朝六ツ起、十郎太・七郎左衛門・龍見・昌寿寺・観

音寺・伴之進・愛次郎・十郎左衛門・軍兵衛・莊右

衛門・喜右衛門・六郎右衛門来候、如形盆祭イタシ

候ニ付、夜九ツ時分御立ニテ、盆中備品々取置候ニ

付、水棚モ無之候間、苞ニ入レ岩次郎宰領付ニテ川

へ為流候、終テ諸子祝ヒ、吉次郎起居、徳熊ハ臥候、

無程臥候事、

十六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読候、十郎左衛門・軍兵衛・織部出勤、終日書見共ニテ日暮、夜入四ツ時分隊候事、

十七日 間々小雨、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書読為致、半五左衛門・愛次郎・織兵衛出勤、四ツ後観音寺来候、昨夕平馬ヨリ書状来、今日ハ四ツ時ヨリ此方ヨリ之書状認、且宿許又ハ類中藤八殿杯へ之書状認、八ツ時分相濟候、今晚ハ五ツ時分隊候事、

十八日 快晴、

暁七ツ半時分家来共起、飯共為焚候テ六ツ過ヨリ高原牛馬改トシテ差越居候処、拙者今朝出跡ニ福留兵左衛門・長倉袈裟助飛脚ニテ来候テ、直様高原之様来候、承候処、平馬事、去ル十六日夜中英因ヨリ帰着、去ル十一日長崎へ着ニテ十三日出帆、十四日阿久根着ニテ為有之由候、帰モ俄ニ相知レ荒取込ニテ

為有之由、則郷十郎其外家来共迎ヒシトシテ差越候処ニ、横井手前ニテ行逢候由、夜入八ツ前新納家へ立寄、夫ヨリ千石馬場町田家へ一刻立寄、夫ヨリ帰着之由、則兵左衛門・ケサ助飛脚トシテ打立候ハ昨十七日暁ニテ為有之由候、八ツ半時分ヨリ牛馬改相始リ、二才三才牛馬ニテ候、明後日迄モ相懸賦候へトモ、右式之事ニテ、受持郡奉行田畑武右衛門殿へ頼候テ、日入比今日改後直ニ小林之様罷歸候、夜九ツ時分隊候事、

十九日 晴、

朝六ツ起、今日ハ役々共追々出候、拳テ難數、おたね・吉次郎・徳熊則差返シ度存候得共、此節ハ平馬モ罷歸候ニ付テハ皆共戻リ切ニ差歸候賦ニテ、諸道具モ段々ト返シ可申候ニ付取集方等モ有之、来ル廿二日小林立ニテ帰ニ取究候、拙者ニモ罷歸度御暇願出候様、今日藤八殿迄申シ遣シ候、夜九ツ時分隊候事、

二十日 晴、

朝六ツ起、今日皆々諸道具取集等ニテ候、拙者事、
少々不塩梅故六ツ半時分隊候事、

二十一日 間々雨、

朝六ツ起、所役目共段々来り候、赤木仲太左衛門・
伊福十郎太・赤木七郎左衛門ニモ来候、明朝早起ニ
付夜五ツ前隊候事、

二十二日 曇、

曉七ツ前人々起飯トモ為焚、夫ヨリ皆々仕廻方有之、
おたね初吉次郎・徳熊朝六ツ起、打立帰候、今日ハ
栗野泊、明日ハ重富泊、明後日鹿兒島帰着之筈候、
供人ハ福留兵左衛門・長倉袈裟助・市之丞、召列女
春・夏也、六ツ過ヨリ稽古所へ出武術致見分候、今
晩おたね其外帰府ニ付半五左衛門・愛次郎・織兵
衛・荘右衛門出候、荘右衛門者暫茶共給帰候、半五
左衛門・愛次郎・織兵衛出勤、高原地頭横目来、亦
飯野暖朝稻般多左衛門・与頭馬場八郎右衛門・地頭

横目壱岐源五右衛門来候、暮ヨリ岩次郎・善兵衛召
呼候テ酒共為吞相嘶候、五ツ半時分隊候事、

二十三日 雨、

朝六ツ起、今朝東郷藤十郎殿ヨリ書状到来、右之内
ニ、戸柱郷十郎杯ニモ此内御安着被遊、平馬様同断
御帰郷、御双方共ニ大之御壯健ニテ御掛念被遊マシ
ク候、夕ヘモ葉丸氏・藤八・私伺公、緩々彼之地御
嘶等奉承知中ニ音ナシクナラセラレ、今朝モ又々伺
公仕、藤八同伴出勤、奥様ニモ疾ニ御許へ御発足被
遊候半、川上家御娘様混ト御出被遊候、一日モ早メ
御懷様御帰ヲ御待被遊居候、今晚彼国へ御使札等御
取仕立之向、表向末御殿へモ御出勤ハ不被遊候、御
届之方ハ相濟申候、半五左衛門・愛次郎・織兵衛出
勤、夜入齊藤八郎左衛門来、四ツ半帰候、無程隊候
事、郷十郎上京イタシ居候処、蒸汽船ヨリ長崎辺へ
モ参、当月十一日着、
平馬事、英国へ参り居候処、長崎迄ハ当月十一日着
ニテ、同十六日鹿兒島帰着、今両三日之事ニ兄弟思

ヒノ外長崎ニテ取会之筈、

二十四日 雨、

朝六ツ起、居間掃除、夫ヨリ写本、観音寺被来、七左衛門・愛次郎・織兵衛、七ツ半時分七郎左衛門来、同刻野尻嘯留主民左衛門・（空白） 兩人来致面会候、七郎左衛門夜入迄相嘶、暮ヨリ伊福二郎太ニモ来、四ツ時分各帰候、無程臥候事、

二十五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半時分ヨリ打立、飯野牛馬改出会トシテ参、御馬預早川黒・御馬乗鎌田一郎・御厩書役市来万兵衛・馬医入江清之丞・惣博旁内野助右衛門ニテ候、受込郡奉行ハ黒葛原源助、右人数各出会、内鎌田氏ハ六観音参詣之由ニテ出会無之、改メ相濟、当分仮屋修補中故秋丸仲左衛門所へ一宿、黒葛原氏・是枝龍庵被来候、所役朝稻佐多右衛門・同般多左衛門抔出候、四ツ半時分被帰、無程臥候事、

二十六日 快晴、

朝六ツ起、朝黒葛原氏一刻被来候、御用之儀有之今日ヨリ帰府之由承候、乍併今朝武芸致見分候処、其分ハ相見候、今日ハ吉田辺迄ニテ、明晩ハ加治木泊ニテ、明後日帰着之含候由承候、追々役々共出候、八ツ時分ヨリ牛馬改出会、七ツ過比秋丸所へ帰宿、町ニテ秋丸馬ニ鎌田一郎殿被乘候間見ニ参候、養蚕掛新納喜右衛門殿小林ヨリ帰府之由、今夜当所一宿之由見廻有之、同伴ニテ町へ参、夕帰宿、夜入朝稻佐多右衛門・青山織兵衛来候、四ツ時分帰リ、無程臥候事、

来書之内写

（眞注）五御事性一

一 当所へ御越相成居候幕府御役人衆ニハ矢張博多へ御陳相成居申候へトモ、当分ハ少シ静謐之向相成申候、一 五卿方ニハ平日御一座ニテ御座候由、御一ツ、御離被遊候儀御嫌之由、御警衛之儀ハ五藩共江宿陣ヨリ守護仕申事御座候、其内御番へ申候テ式人ツ、御住

居、延寿王院御玄関へ相勤申事御座候得共、是以五ヶ国五日宛之輪番御座候二付、巷ヶ月二忝度位モ御番前相廻り、其上私共同列三十人、加治木・種子之兵三拾人致都合六拾人計之人数御座候二付、是迄三ヶ月計之間私共ニハ御番忝度ツ、廻合相勤申候、尤、外ニ御城下兵大^(綱長)格之介殿一列三拾人計、私共着跡以被參詰居相成居候へトモ、救込隊ニテ御警衛迄ニテ、延寿王院御番之儀不被相勤候、

一 加治木・種子兵之儀、私共交代之賦御座候処、幕府御目付御差入旁之訊ニモ御座候哉、于今交代ニ相成不申、矢張相詰被居候、

一 此節御城下巷与、諸郷三与、番兵隊ヨリ式組、都合一陣京師へ被差向候由、就テハ五之丞殿・休藏殿・伴之助殿ニモ上京御座候半、奉察京都之儀ハ伝声繁花之地ニテ能見物御座候半、爰許天満宮丈ハ成程名所御座候へトモ、其外名所旧跡等モ実ニ京都之儀思ヒヤラレ、浦山敷次第御座候、諸郷ヨリ三与被差出候ニ付テハ、小林ヨリ外ニハ如何、以下略ス、

一 長征之左右モ日々承申事御座候へトモ、区々ニテ始

終実事相知不申、去月始方大島ト申所合戦、是初戦ニテ、同十四日幕勢先手彦根勢芸州口争戦、彦根大敗、軍悉敗走、鎧其外乘馬扱長へ分捕、同十七日ニハ高杉^(晋作力)新作ト申イマタ廿七八之若将諸道ニ秀、就中軍法ニライテハ拔群之由、大将ニテ蒸気船ヨリ田之浦へ押寄放火之、小倉勢為致敵対由候得共、終ニ小倉方敗北、作事奉行初五六拾人計戦死、当月二日方小倉大路ト申所ニテ争戦、小倉敗走、打死六七十人計之由、其外石州口・芸州口之合戦是迄数度有之候内、長ニハ戦死纔之由、幕方ニハ数百人打死有之候由承申事御座候、

二十七日 曇、

朝六ツ起、二オトモ致劍術候ニ付参致一覽、五ツ時分引入秋丸方へ参、亦四ツ時分町ニテ鎌田一郎殿馬乗イタサレ候ニ付見ニ参候、拙者馬モ乘方相頼候、八ツ時分ヨリ残牛馬改有之、夕方相濟秋丸方へ参、是枝隆庵殿被来候、四ツ過臥候事、

二十八日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半時分飯野秋丸宅打立、四ツ過小林
飯屋帰着、帰掛文行堂へ一刻立寄候、夕ヨリ鈴木龍
之助・赤木七郎左衛門申遣シ、四ツ過キマテ相嘶シ
候、各帰、無程臥候事、

一 今夜中書状到来左之通り、亦兼地頭被 仰付候、

馬関田并諸県郡——吉田 吉松 加久藤

名越左源太

右之通兼地頭職被

仰付候、

右可申渡候、

七月

（諏訪武盛）
伊勢

今日御名代御用島津織部殿ヨリ被仰渡候ニ付、二階
堂源（行光）大夫様御承知被下候処、別紙御書付之通被仰付
候段被成御承知候、恐悅御儀奉存候、依テ宿次時付
ヲ以早々差上申候、御礼廻之儀モ源大夫様被成下候、
郷十郎様ニモ御用人西筑右衛門殿ヨリ御用ニ付御直

御承知被遊候処、此涯為遊字江戸表へ被差越候様被

仰付奉恐悅候、外列村橋昇殿・島津求馬殿・郷原氏
嫡子外ニモ有之、大概十人計、田尻（種賢）務殿・吟味役鳥

丸六左衛門・谷川次郎兵衛殿ニモ御用ニ御座候、是
モ其内カト奉存候得共、委敷ハ承不申、

郷十郎御出立（空白）之儀ハイマダ不被仰渡、追テ可被
仰渡旨ニ御座候、

七月廿六日

是迄被 仰付置候節之御書付左之通、

一大番頭格

一 御役料高八拾石

一 小林居地頭

兼

野尻 須木 高原 加久藤 飯野

一 惣物主

名越左源太

右之通御役替并地頭職被仰付、御役料高被下置候、
小林之儀要枢之地不容易場所柄ニテ、兼テ人心一和

武備不行届候テ不相叶事候ニ付、一郷中ハ勿論、近郷迄致支配、文武ヲ引立兵備ヲ練磨シ、御趣意十分致拡充、每事行届候様心掛致精勤、馬関田居地頭へ万端引合可相勤候、当世体出格之以思召被仰付候、

九月十六日

右之通被 仰付候、

右之通候処、加久藤之儀ハ無程安田助右衛門方へ被召加候、惣物主之儀ハ御吟味之訳有之、西目東目惣物主人數惣テ御免相成候、今日又左之通被 仰渡候、西目東目一陣惣物主之儀ハ被成御免候得共、御渡付相成居候大砲等取始抹并届向等之儀トモハ何篇是迄之振合通被仰付、加世田一陣大砲等之儀ハ鈴木壮七同断致差引候様被仰付候条可申渡事、御旗一流ツ、

右ハ西目東目一陣惣物主へ被渡置候処、此節惣物主被成御免候ニ付返上之筈候得トモ、先当分通銘々へ被預置候条、此旨可申渡候、

但、旗預之儀ハ是迄之通可相心得候、左候テ、加世田惣物主へ被渡置候御旗之儀ハ可致返上候、

七月

(諏訪武盛)
伊勢

七月廿五日仕出

一町田氏ヨリ来書之内

一爰迄認候半ニ、京都ヨリ之飛脚昨夜着ニ付、足輕兼テ存候者ニ付承合候処、京都・大坂無事至極之靜謐、大坂ヨリ出帆、豊前中津へ着船、夫ト申モ下之関通帆不相調所ヨリ中津へ着候テ、中途諸所承合候処、馬子共諸所ニテ咄申ニハ、長州勢盛ニテ田之浦・大里等乘取長州領ト札ナト建、百姓共へ金子等与へ支配イタシ候由、乍併当分ハ長州へ引取居申候由、芸州口・石州口モ敗レ申候由、芸州口ニテ井伊之手ヲ敗り候ハ長州穢多・百姓共ニテ、未タ士分ハ戦ニモ不出ナト、評判之ヨシ、九州路ハ長州カ天下ト上モ下モ申候由、薩摩ナラテハ征伐ハ不出来ト申事ニテ、當時ハ 公義ハ至テ不評判ニテ、只今
(家茂)
將軍様ハ大坂ニテ御病氣之由御座候、御病氣之段ハ

大坂ニテ承候由御座候、一橋・会津ハ此御方様ヲチトニクミニ候哉之京都評判之由、別ニ巨細嘶モ御座候、

七月廿五日

七月十八日来書之内

長防之一条、何分長州死武者故勢強御座候由、昨夜承ニハ、英船ヨリ下之関モ焼払申答之由御座候、亦本加世田郷士欠落者江戸・京都諸所徘徊候処、何カ芸能宜候カ 公義へ五百石ニテ被召出置候処、此内京師御屋敷御留守居内田仲之助殿所へ参り、何方御国之御名不宜向ニ被伺候、就テハイマタ御国ヨリモ人モ多ク御持被成事候ニ付、公儀向御都合相成候様御取計被遊候方可然、右御主人之事ニ付、御為ニ申上候旨申聞候由、夫故カ当分ハ其向ニ彼是御用施御座候哉ニ承り申候、

二十九日 快晴、

朝六ツ起、早天竹翠殿被来、半五左衛門・愛次郎・

織兵衛出勤、暮ヨリ観音寺・竹翠殿被来、暮過家来之長倉袈裟助来、二男郷十郎ニモ昨廿八日江戸江為遊学出立之由、此節ハ面会間ニ逢可申卜存之外早ク出立ニ候、各四ツ過被帰、袈裟助ニモ此方へ泊リ之事、近日帰之節供ニ召列之賦候、

晦日 快晴、

暁七ツ起、飯共為焚、六ツ時打錫杖院参詣、平馬ニ立ノ字落ル歟ハ英国へ参居、二男郷十郎ニハ上京イタシ居候、武運強兄弟共諸芸致上達候様精願申上置候ニ付、兄弟共此節帰着ニ付為御礼参詣、郷十郎ニハ又々右之通江戸之様参候間、以前同断精願申上置候、小林へハツ半帰着候得ハ、町田氏ヨリ之来書左之通、

今日御暇御願書相下候ニ付差上申候、郷十郎様ニモ江戸へ御越之儀モ誠ニ急速之事ニテ、明廿八日四ツ時迄ニ御船御乗付有之候様被仰渡候、シカシ御仕廻迎モ無御座、能都合御座候、御祝儀申上候、一平馬様ニモ今日島津織部殿ヨリ御用ニテ海軍方別勤

被仰付奉恐悦候、

鳥津助之丞

求馬殿
嫡子 鳥津織衛

伊織殿
嫡子 鳥津城之助

伊集院半之丞

三男 郷原昌二郎

主税 新納織之丞

西左一郎

昇殿 村橋仙之丞

武之橋川上勇七

町田郷十郎

右此涯為遊学江戸表へ被差出候間、可申渡候、

七月

右之人数ニ鳥丸六左衛門被付遣候、諸差引被致候由、
御遊学中ハ被付添候由、

寅七月終

(表紙)

名越時敏日史

慶応二年寅
八月朔日ヨリ
十二月廿五日迄

慶応二年寅八月朔日ヨリ十二月廿五日迄

日史第六拾三之卷

名越時敏 (花押)

慶応二年丙寅八月中

朔日 間々細雨、

朝六ツ起、無程竹翠殿被来、四ツ時分加久藤役(暖)

西田奎之丞・同宮田奎右衛門、組頭川口納右衛門、

普請見廻齋藤太次右衛門、横目谷口城之助・同西田

八郎右衛門、地頭横目前田源右衛門、郡見廻原田助

左衛門来致面会候、夫より引続須木役々暖黒木本右

衛門・組頭児玉源七郎・地頭横目曾木平太左衛門各

致面会候、夫より馬関田役々暖田代覚之介・組頭黒

木本ノマ・地頭横目黒木勇静来致面会、夫より野尻暖寺田

半左衛門・組頭富永万左衛門・地頭横目寄横山善四

郎、夫より小林役々伊福十郎左衛門・横山伴之進・

押川愛次郎・富満武右衛門・赤木仲藏・横山六郎右

衛門・青山丹碩・栗屋仙右衛門・富満清左衛門・堀

喜右衛門・野本藤太・弓削次右衛門・西田正左衛

門・中山吉左衛門・上井甚七・植村嘉右衛門・黒岡

清右衛門・前田徳左衛門・森岡仲之助・大坪市之

丞・田畑助之丞、引続無役衆中数十人、未名前不相

分、引続町役三人、夫より飯野役々暖朝稻佐多右衛

門・組頭壱岐壱郎右衛門・地頭横目青山七左衛門・

郡見廻寄川瀬武右衛門、引続町部当大川内市兵衛、

夫より引続吉田・吉松同列二面会、吉田暖岩崎七太

夫・与頭押領司嘉右衛門・地頭横目川崎弥藤太・吉

松暖中村平左衛門・組頭村岡十右衛門・地頭横目中

原善左衛門、夫より高原役々噯黒木佐平太・与頭丸
山林二・地頭横目黒木孝之助致面会、右人数役々之
分者惣而益取替シいたし候、夫より引続小林二才共
褒美左之通、

芭蕉布 一端

前田徳次郎

右者一昨年拙者当地差入涯文武共致出精候処、于今
無懈怠相励別而心掛宜大悦存候、当世態二付而者尚
又不懈致勉励、行々御用立候様可心掛候、依而聊為
褒美右之通遣候、

寅八月朔日 左源太

金子 百疋料

山口助左衛門

右者武術心掛別而宜無懈怠相励大悦存候、当世態二
付而者尚又不懈致出精、行々御用立候様可心掛候、
依而聊為褒美右之通遣候、

寅八月朔日 左源太

金子 百疋料

中野庄之助

右書同断、

一 加久藤・馬関田・吉田・吉松江者此節兼地頭被仰付
候二付別紙壹通相渡候、書付左之通、

一 昨年拙者江地頭被

仰付、其土地被召置候付而者不容易

御旨趣二而、拙者始而

本府出立前日

太守様・
(忠義)

(久光)
中将様

御前江被召出、

御手厚難有

思召之

御旨

御直奉承知、重キ職掌中々難堪、其任汗顔之至奉恐
縮候得共、御請仕候上者只管尽精力不堪を堪候様相
勤度存慮二候、然れ共不肖之身何篇不行届之儀も可

有之、各も一統拙者一身之如く相成、不行届之儀者不差置申出、古来淳朴易簡之風ニ相復シ、民間之疾苦を除キ、文武引立兵備充実、勸農等之事ニ至迄以前より被

御出置候

御趣意ニ基キ、追々切迫之世態相成候ニ付而者尚又万端意を用ひ、役々之詮相立候様存慮之程拙者と各と上下致通徹、

御政事公平、今こそ万民拳而奉唱歡樂候様相成度存詰候事致成就度、各茂厚汲受

御趣意致貫徹、奉安

尊慮候様有之度幾重ニも相頼候事、

寅八月

左源太

一 加久藤・馬関田・吉田・吉松江左之通書出候様今日申渡、

一 所惣龜絵図面、

一 惣廟何社并大小之神社、惣廟之儀者仮屋より何方道程何丁程、祭等之節又者平日市立場所、何そニ付多

人数集会之儀有之候者細々月日可被相記候、

一 御手当人数帳、

一 大炮其外武器拝借被仰付置候郷々者其訳可被申出候、

一 所惣高頭并衆中何程、

一 御軍役用金并所救金等所格護茂候ハ、何程并訳合、

一 往古より由緒之古城・古戰場之訳、

一 所中惣武器銘々所持之名前可被相記、不持合面々茂候者跡ニ連名ニ而右人数不持合訳可被相記候、

一 所役々名前、

但、諸掛等茂可被相記候、

一 所衆中十五歳以上銘々年付、

一 所百姓用夫幾人之訳、

但、用夫過候而も八拾歳以上相成居候者、男女

無構銘々年付ケ名前可申出候、

一 野町人体、

一 廃寺一件年内より及両三度、寺社方江取調帳差出候

由書留有之筈候ニ付写を以可被差出候、

○ 小林より筑前警衛井上嘉兵衛来書之写

〔頭注〕長州戦争之形状

扱五卿方御帰京之処申立二而被罷出候、幕府小監察

小林甚六郎殿二者五月中旬方二日市払陳、当分者博

多江宿陳相成、於当所者追々静謐之向二御座候、将

又長御再討二付是迄状毎二荒増承候儘御左右申上置

候得共、此節少し実説之やうなるはなし承候二付左

二申上候、

一石州口寄手備後福山城主阿部伊勢守・雲州松江城主

松平出羽守・石州浜田城主松平右近将監、尤、卒從

人数委相分不申、六月十七日戦争始、同十九日迄幕

勢悉敗走、防境より十七八里計石州之内益田と申所

迄退陳、長兵同所迄蹈入陳取居候由、幕方軍監察式

人内忤人ハ長江被生捕、于今山口之城江罷居候由、

忤人者戦死之由、其外雜兵戦死数不相知、長之戦死

悉數相分り不申候へ共纔計之由御座候、尤、十九日

已後之合戦悉相知不申候、

一芸州口惣大将紀伊大納言殿・江州彦根城主井伊掃部

頭・美濃大垣戸田委女頭・越後高田城主榊原式部大

輔・讃岐高松松平讃岐守・伊予松山松平隠岐守、幕

府歩兵隊都合七頭六月十四日初十七日・十九日・廿

五日戦争、是又幕方大敗軍二而長境より拾式三里程

芸州之内小瀉と申所迄相退陳相構居候由、長兵二者

同所迄責入居、是又陳取居候由、寄手打死、彦根家

老木俣土佐其外数不相知、此口二而も長兵打死少々

計之由、廿五日已後合戦にて委相知不申、

一 小倉方六月十七日田之浦并もしの合戦、七月三日大

寺戦争、何れも長兵蒸気船より押渡上陸合戦、小倉

方大敗軍、大炮六拾挺計三ヶ所之戦争ニ長江分捕い

たし候由、最早小倉方二者城丈相残、其余焼払はれ、

当分籠城之姿ニ御座候由、尤、城下ニも近日中攻入

賦之由承居候処、昨日未明より大炮之音遙二どふ

くくと相聞得候付、最早落城候半歟と奉存候、

一 是迄数度合戦ニ幕勢二者大敗北之由、戦死千人余も

相及候半承申事ニ御座候、長州二者戦死纔計之由、

誠二天命自然之事ニ而御座候半、何れ世の中ハ正道

ニ而無之候得者相立不申儀と乍恐奉存候、先ハ用向

迄荒々如斯御座候、以下略、

○〔頭注〕鹿之肥時分
男鹿者霜月より少々肥上り、五月六月肥候由、女鹿
者霜月ハ肥候由、夫より漸々おとる、

二日 曇、

朝六ツ起、朝竹翠殿被来、無程仲太左衛門来候、觀音寺同断、七左衛門・伴之進・莊右衛門出勤、夜入竹翠殿・七左衛門来、四ツ過被来、（掃カ）無程臥候事、

三日 快晴、

朝六ツ起、竹翠殿被来、八郎左衛門来、七左衛門・伴之進・莊右衛門出勤、仲太左衛門来、昌寿寺同断、強太左衛門・六郎右衛門・武右衛門・織兵衛来、御手当帳并役目帳・惣衆中武器書出帳御渡付相成居候、（空白）武具品々調帳差出、当所締方（空白）殿一刻被来、伊福十郎太一刻来候、七左衛門・十郎左衛門其外役々追々出候得共不相記候、夜入竹翠殿夫婦一刻ツ、被来、今晚ハ早ク臥シ候事、

四日 曇、夜入雨、

曉八ツ起相仕廻、七ツ過小林出立、飯野上江通二而上江在宅江六ツ過着、人馬繼立候間暫休、嘸大河平清太夫、与頭壹岐源五左衛門、地頭横目青山七左衛

門・壹岐甚五左衛門出張居候、夫より出立、加久藤立宿、衆中山口納右衛門・所嘸其外役々出居候、此所二而人馬繼立出立いたし、吉田町立宿人馬繼立出立、吉松者衆中永井玄碩所立宿人馬繼立、栗野町立宿人馬繼立、横川町立宿、日入前溝辺着、一宿之事、

五日 曇、

曉八ツ前起候得共、人馬揃兼七ツ半出立、加治木江六ツ半着、五ツ半時分加治木出帆、四ツ半鹿兒島着、久々ニ平馬致面会候、至極之元氣致安心候、三崎平太左衛門殿・町田申四郎殿・町田武輔殿被来居候、亦町田少輔殿被来、名越戸十郎殿・町田藤八殿入来、夜四ツ半被帰候、

六日 間々雨、

朝六ツ起、今日迄ハ御届不罷出、七ツ時より宮里喜次郎殿・大島之龜蘇民来、各暮被帰候、昼丸田孝八殿ニも一刻被来候、

一 小林江御用触被差出候由ニ而昨日加治木迄継越、今日当所迄継返シ相届左之通ニ候、

御自分事御用候間、早々罷届届可被申出候、尤、

心遣被存儀ニ而者無之候、此旨伊勢殿依御差図申

(諏訪武盛)

越候、以上、

八月五日

上封猪飼史御取次

七日 快晴、

朝六ツ起、朝藤八殿被来、今日出府、御届且御差図御用之起(趣方)ニ付而茂御届申出置候処、追而被仰渡御用

ニ而今日者御用無之段承、尤、兩御側へも御届申出

候、九ツ時御暇、帰掛平佐へ一刻參候、内記様江も

同断ニ而直ニ帰宅、又藤八殿・戸十郎来、夜入四ツ

過被帰、無程臥候事、

八日 快晴、

朝六ツ起、たんととふ屋敷江參、九ツ時分帰宅、藤

兵衛殿・藤八殿被来、七ツ時分より戸柱町田家・伊

藤六郎右衛門殿・葉丸猪兵衛とのへ參、日入前帰宅、

お事との一刻被来、夜入猪兵衛殿被来、四ツ時分被帰、無程臥候事、

九日 晴、

朝六ツ起、朝安田喜藤太殿被来、町田武輔殿・加藤権兵衛・島津新八郎殿・伊藤万次郎殿・同六郎右衛門殿追々被来、大島人吉郎来、小林より羽島栄之丞・前田治左衛門来、夜入町田彦市殿被来、四ツ過被帰、昼龜蘇民ニも来候、九ツ過臥候事、

十日 晴、

朝六ツ起、朝相良吉右衛門殿・町田藤八殿被来、加藤寛兵衛殿・町田武輔殿・平野林左衛門・指宿猪之助殿家来長倉善太郎嫡子善左衛門来候、夜入おつや様・玄裕殿被来、

十一日

朝六ツ起、花舜軒御墓、夫より福昌寺(重豪)大信院様・中納言様(家久)・大慈院様(齊直)・

（齊彬）
順聖院様 御惣霊様参詣、夫より戸柱御墓へ参詣、

夫より加藤権兵衛殿、夫より浄光明寺

浄国院様・（吉敷）月柱院様参詣候処、小僧走出、（空白）「」金

盃二而御造酒頂戴いたさせ候、四ツ時分帰宅候得者

奥山藤左衛門殿・薬丸猪兵衛殿一刻ツ、四ツ半よ

り町田藤八との入来、七ツ過被帰、夫より川上勘解

由殿被来、無程被帰、暮より安田喜藤太殿・中原長

左衛門殿被来、九ツ過被帰、無程臥候事、

十二日 晴、

朝六ツ起、吉次郎・徳熊へ書物為読、昼时分森喜右

衛門殿被来暫被相噺、七ツ過より高見弥市殿・白川

健司郎殿被来、夜四ツ半時分被帰候、

十三日 雨、

朝六ツ起、野屋敷へ参候、明四ツ時猪飼御取

次を以右衛門殿より御差図、御用致承知候、夜入四

ツ時分臥候事、

欧羅巴魯矢亜 人口六千八拾一万千八百人

軍兵百十三万五千三百七拾三人

極矢寧例苦 人口三千六百一万八千九百八拾八人

軍兵八拾二万八千四百人

仏蘭西 人口三千七百三拾八万百六十人

軍兵四拾六万三千七百二十八人

勃漏生 人口千九百三十万三千二百六拾三人

軍兵六拾三万四千四百二十一人

伊多里亜 人口二千七百七十七万七千三百三十四人

軍兵五拾一万二千二百八人

英吉利斯 人口二千七百三万二千二百九十八人

軍兵二十一万三千五百五十人

意斯巴尼亞 人口千六百三十万八千人

軍兵二十一万二千八百三十六人

都兒格 歐羅巴 人口千二百八千人

軍兵十七万五千三百人

別兒儀 人口四百九十四万五千五百七十人

軍兵九万五千四百八十三人

和蘭 人口三百五十万八千六百十一人

軍兵五万八千九百四十二人

補見智瓦兒 人口四百三十二万三千七百九十三人

軍兵三万七千三百六十二人

十四日 小雨、

朝六ツ起、藤八殿・万次郎殿被来、四ツ前出殿、於

敷舞台伊勢殿より左之通承知、
(諏訪武盡)

高岡・綾・穆佐

倉岡地頭

名越左源太

右之通地頭所繰易被

仰付、御役料高是迄之

通被下置候、

但、高岡江可罷在候、

八月

伊勢

夫より伊勢殿・民部殿・登殿・戸柱墓并花舜軒御墓・

猪飼御太郎殿・御蛭子御社参詣帰宅、藤八殿・藤兵

衛・喜次郎殿被来候、打寄酒相給、各夜四ツ時分被
帰候、類中吹聴迄二候、

十五日 快晴、

朝六ツ起、六ツ過打立、宮里氏へ一刻参、夫より岩

切清太殿へ参候、高岡談合役ニ而被参居、先日御広

敷御用人江御役替被仰付候ニ付参候而何歎之事承候、

五ツ過帰宅候得者、右岩切氏代リニ被仰付候談合役

川村七郎左衛門殿被来居、暫被相咄候、伊藤万次郎

殿・中山甚五兵衛殿・島津新八郎殿・大山新兵衛殿・

町田藤八殿被来、お筆ニ茂来候而今晩者泊候、

十六日 晴、

朝六ツ起、伊藤万次郎殿・上原玄与殿被来、八ツ後

高岡・倉岡・綾・穆佐当分出府いたし居候者共、一

郷より一人ツ、来致面会盃共いたし候、お筆今日も

滞在、

十七日 晴、

今朝二階堂源太夫殿・安田喜藤太殿・岩切清太殿・

二十一日 間々小雨、

伊藤彦介殿・丸田孝八との被来候、昼町田武輔殿被
来、今夕お筆帰、昼過より下方諸所参、夕帰宅候得

朝六ツ起、朝万次郎殿・藤八との、昼武輔殿被来候、
八ツより藤八殿被来、夜入四ツ時分被帰、宮里仁兵

者東郷藤十郎殿被来、暮より戸柱町田家江同伴、外
二段々相客有之、九ツ前帰候、

衛殿ニも被来、

十八日 晴、

二十二日 晴、

朝六ツ起、野屋敷江参候、九ツ時分帰宅、宮里氏・
万次郎殿被来候、

朝六ツ起、朝川村七郎左衛門殿被来、四ツより才助
来、書物表紙掛方いたし候、辻元新兵衛ニも来候、
万次郎殿被来、藤八との朝夕両度被来候、

十九日 晴、

二十三日 快晴、

藤八殿被来候、

朝六ツより桂家・田尻務殿（種賢）・登殿へ参、夫より出殿、

二十日 晴、

藤八殿・喜次郎殿・藤兵衛殿・藤十郎殿八ツ後より
被来、各暮被帰、藤十郎殿二者夜入四ツ時分被帰候、

四ツ半時分帰宅候得者中原周助殿被来居暫被相噓候、
八ツ後田畑平之丞殿・桂家・二階堂源太夫殿江参、
夫より平佐おつや様へ参候、大鐘時分帰宅、おこと

昼平野林左衛門殿・市来半之丞殿被来、町田清次郎
殿ニも昨日仏より帰リニ而被来、暫被相咄候、

との被来、東郷藤十郎殿・前おみつさま・おむらさ
ま・おせつとの御出、四ツ過御帰候事、

二十四日 快晴、

朝六ツ起、四ツ時出 殿、九ツ時分御暇、帰掛平佐へ一刻参、帰宅候得者お藤来居、町田武輔殿被来、暮より葉丸猪之介殿被来、四ツ時分被帰候事、

二十五日 快晴、

朝六ツ起、四ツ時分出 殿、八ツ前帰宅、今日高岡旗預寺師休五郎江被仰付候、今朝藤八殿被来、おこととの・武輔殿同断、大鐘比より寺師休五郎殿・東郷藤十郎殿被来、夜四ツ時分被帰、無程臥候事、

二十六日 快晴、

朝六ツ起、田畑氏・川上家・二階堂家・永田与右衛門殿・中原周介殿・日高与一左衛門へ参候而四ツ時出 殿、九ツ時帰宅、藤八殿・藤十郎殿被来候、

二十七日 晴、

朝六ツ起、今朝指宿猪之助殿嫡子召列被来候、嫡子昨日より造士館江被罷出候由、藤八との・おこととの被来候、八ツ後亦藤八との・藤十郎殿被来、夜入

五ツ時分被帰候、九ツ時分臥候事、

二十八日 晴、

(野屋敷)野屋し江六ツ時参、五ツ時分帰候、夫より又下方江詰所参出殿、八ツ前帰宅、藤八殿・喜次郎殿被来候、吉国壮吉ニも来候由、相良氏同断、

二十九日 快晴、

朝野屋敷江参無程帰候、八ツより藤八との・藤十郎殿・喜次郎殿被来、夜入五ツ時分被帰候、無程臥候事、

晦日 快晴、

朝おこととの被来、入来院家より娘貰之事相断置候(島津忠寛 重寛)処、静洞様御聞二人、来月相成候得者日柄も不宜候、貰呉候得者別而仕合、左源太ニ茂明後日より高岡之様差越事ニ候得者、直ニ今晚呼入滞在いたし可然事候、何も易簡ニ早く埒明方が宜候間、其通おことより計ひ候様仰之由致承知、御尤之御儀、此方も仕合

日史第六十四之卷

慶応二年丙寅九月中

朔日 晴、

名越時敏（花押）

朝川上勘解由殿・美代藤兵衛殿・町田藤八殿被来、
四ツ時出勤、明日より高岡之様差越候御届表御用人
座并両御側御内証之御届申上候、四ツ半退 城、帰
掛平佐江立寄、夫より御墓参共いたし、重富へ罷出
帰宅候得者、東郷藤十郎殿・安田喜藤太殿・宮里喜
次郎殿被来、今七ツ時分平馬事出崎被仰付、則より

二而其通此方より相願、則より彼是と終日取込二而

候、八ツより藤十郎殿・藤八殿被来、夕より薬丸猪
兵衛との、おこととのハ終日被来居、夜入五ツ半時

分入来院家よりお悦との、娘二相成候おたけとの同
伴にて被来、お悦との二者八ツ時分被帰、おたけと

の者直ニ滞在二而候、夫より七左衛門夫婦呼出し、
おたけとのより盃とも為頂候、相済、無程臥候事、

右仕廻取掛候、夕より佐土原之家老樺山（久舒）舍人被来、

同伴宮里喜次郎殿二而候、四ツ時分被帰候、夫より
家来共召呼盃共いたし候、九ツ時分臥候事、

二日 晴、少々風アリ、夜雨、

朝より安田喜藤太殿・東郷藤十郎殿・薬丸猪兵衛
殿・藤八殿被来、平馬二者九ツ時乗船、拙者出船無
之故乗船不相調、お藤・お筆二も来、宮里喜次郎と
の同断、各夜九ツ時分被帰候、お筆泊候、

三日 晴、風強、夜入雨、

今日迄風並不宜候間、陸地より高岡之様参候、夕方
溝迎着泊、町田藤八殿同伴、家来者福留七兵衛・同
幸藏・白浜熊太郎・村田弥兵衛・山下龍左衛門・小
宿岩次郎・野元休之丞、鎗持栗野迄ハ太郎、中間十
右衛門、下入市之丞二而候、尤、拙者三男吉次郎二
も召列候、

四日 晴、

朝六ツ溝辺出立、加久藤泊、

五日 晴、

朝六ツ過加久藤立、飯野秋丸仲左衛門所江立宿いたし候処、役々惣而出、軽く取肴等仕立酒・飯共預馳走候、無役衆中小林境迄ハ見送度申候得共申断、秋丸宅ニ而惣而致面会候、境迄小林役々も来居、尤、飯野役々并道案内ニ而候、小林江八ツ時分着、小林役々等飯野同断ニ而候、四ツ時分臥候事、高岡役々も先日より来待居候由ニ而面会、

六日 晴、夜入雨、

朝六ツより終日諸道具取集ニ而、夕より横山龍見・伊福十郎太・赤木七郎左衛門等来緩々相嘶候、九ツ時分臥候事、

七日 晴、

四ツ時分出立、役々惣而出候、案内同断、野尻境より引取、野尻より兩人来居候、役々も相待居候、小

林役々も此所迄付来候、野尻飯屋江立宿いたし候得者、酒肴等軽く差出飯預馳走候、日入前紙屋着泊、此所迄高岡・綾・穆佐・倉岡役々来候而面会、何れ

も今晚一宿、明日ハ高岡迄付参之筈、此所ニ而も酒肴等軽くいたし飯預馳走候、飯野・小林・野尻・紙屋ニ而も金子を以一礼申置候、拙者旅宿者西田利左衛門所故、別段ニ芭蕉布一端為一礼遣置候、四ツ時分臥候事、

八日 晴、

紙屋五ツ時分出立、中途立宿ニ而見合、七ツ時分着、紙屋より高岡飯屋迄道案内町足軽兩人・無役衆八人ニ而候、飯屋手前江無役衆中出、門前江者所役々出候、何れも盃共いたし候、夜入酒肴・飯共軽くいたし差出候、穆佐押毛利強兵衛殿被来候、外三ヶ郷役々同断、寺師休五郎殿ニも中途迄被来居候、

九日 晴、

今日者所役々出候、善載坊・糺木・二見杯出候、今

日者無異、

十五日 朝暫雨、

十日 晴、

（宗廟カ）
今日崇廟青野権現・城山鎮守之神悟寺

綾出立、川下り二而穆佐着、崇廟參詣、武術弓・鉄
炮迄も見分、夕相済泊、同所押毛利強兵衛殿被来候、

（貴久）
大中公・ （義久）
龍伯公・ （家久）
中納言様へ參詣、夫より諸武

十六日 朝雨後晴、

芸見分、夕相済、

穆佐四ツ時分出立、帰掛調練見分、八ツ時分舟より
川上り高岡飯屋江着、寺師休五郎・町田藤八殿二も

十一日 晴、

調練・武術弓迄も見分、暮相済、

同列被相廻候、

十二日 晴、

今日者無事、

十七日 曇、夜入雨、

寺師休五郎殿度々被来候、役々も出候、藤八殿二者
鉄炮、綾・穆佐・倉岡役々も廻勤之為一礼出候、

十三日 晴、夜入雨、

綾調練・武術見分、崇廟參詣、泊、

十八日 快晴、

十四日 雨後晴、

綾出立、舟より川下り二而倉岡着、崇廟參詣、武術

暁六ツ時より打立、善載坊并八代嚶勤番所粗木・八
代南俣御藏等江立寄暮過帰宅、今日者御領本庄町坏
通行之事情間、行列二而通行候様所役々申出尤之事

見分、調練同断、泊、

候間、家来七人、所衆中も八人出、役々者騎馬二而
兩人相付、刀筒鉄炮四挺為持、玉葉たんす・合羽籠

為持候而踏込抔着候、騒々敷事候、

一拙者高岡着之節者、無役衆中別而多く出候而ねだ踏

落し、誠ニ嬉敷事候、

十九日 快晴、

今日者町田藤八殿并家来福留七兵衛・同幸藏・白浜熊太郎・村田弥兵衛・山下龍左衛門鹿兒島之様帰候、家来鎧持田中熊吉者小林之様帰候、四ツ時分より休五郎殿被来、八ツ過被帰、地頭横目三人・町役七人・二見出候、噺本田次郎五郎同断、谷村彦左衛門殿ニも紙座話之由ニ而被来候、夕方一刻休五郎殿被来候、夜入岩次郎招呼相断候而、四ツ時分臥候事、

二十日 晴、

朝吉次郎起シ寺師氏へ書物読ニ遣シ、帰之上拙者ニも為読、四ツ前志賀七左衛門来候、今日より吉次郎儀練士館江出シ書物為読、四ツ過寺師氏被来、八ツ後被帰、地頭横目毛利郷左衛門高岡惣絵図持来候、善載坊先日參候為一礼被来致面会候、夜入休五郎殿

被来、穆佐より宍巻丸取得、地頭横目小田軍兵衛持

来ニ而呉候由承候間致面会、則相開酒共いだし五ツ過帰候、休五郎殿二者四ツ前被帰、無程臥候事、

二十一日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎へ書物為読、又噺本田次郎五郎来、読書人呼出之儀且噺助兩人・与頭助兩人出来候様申出候ニ付、存寄之儀相達置候、四ツ時吉次郎練士館へ出候、四ツ半より寺師氏被来、八ツ半被帰、夜入小林より噺伊福十郎左衛門・与頭横山伴之進是迄之為一礼猪宍一丸持来、今晚可帰段承候得共差而之用向とも不被聞候ニ付、適遠方より来候間緩々相断度申候処、四ツ過帰候、無程臥候事、

二十二日 晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ遣候、帰候而素読いたさせ候、四ツ時寺師氏被来、同伴ニ而練士館并示現流方へ参見分、素口本マ兎共川口次之助・土橋嘉之助・外山佐市・米良茂一郎・高木幾太郎・市来徳之進・志

賀直太郎・横山宗次郎・三石孫次、示現流別而相少、比志島彦太・本田半左衛門・野元市郎三人二而候、亦同伴二而帰宅、吉次郎二も練士館出席、帰後亦吉次郎寺師氏より書物習、夫より屋敷内天神堂之辺歩行、寺師氏被帰、高岡与頭大迫弥太郎一刻出候、地頭横目市来正太郎同断、暮より又寺師氏申遣来、（空白）□
飯屋内鐘つき之肥後九左衛門二も招呼候、何れ茂四ツ過帰二而、無程臥候事、

二十三日 快晴、

今七ツ後より吉次郎鎗術稽古として長野助兵衛所江遣候、夕方帰、朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ遣、六ツ半帰、又素読いたさせ、四ツ時より練士館へ出し候、四ツ過より寺師氏父子被来、吉次郎も九ツ時帰、休五郎とのより素読いたさせ貰ひ候、同所市来善助来、八ツ半より寺師氏父子同伴、嘸・与頭・地頭横目召列候、而栗野駈乗、為見物町下より舟二而栗野下迄参見物、子共之馬乗誠二達者二候、来月初午之日乗候、而其節乗方

いたす由、七月比より乗方稽古いたし、其時分より馬も他事二者不召仕候而、余程能飼置候而乗候由、今日者石之惣揃之由二而見物いたし候、当日者隣国よりも多人数見物として入込候由候間、今日可然と存候事候、暮相濟、又々舟より帰宅、夜五ツ半時分臥候事、
一今日者当所締方横目山沢勇左衛門殿・抜米取締横目柏原吉兵衛殿被来候、

二十四日 間々細雨、

朝六ツ吉次郎寺師氏江遣、五ツ前帰又素読、四ツより練士館へ出シ、四ツ過寺師氏被来、九ツ時被帰、八ツ半又寺師氏被来、市来善助孫召列来度申候由、不差支段申候処七ツ前より来、夕帰候、七ツ過より小児共三人吉次郎江遊ひ二来居候間、夕方拙者前暫呼出候、今日（町田久慈）内膳殿より書状式通京都より八月八日・九月六日仕出、町田郷十郎より八月廿九日仕出書状、老通寺師氏持来、郷十郎ハ着後初而之書状、夜入岩次郎・善兵衛呼出相嘶、五ツ半時分臥候事、

○ 長州戦争書付

（頭注）長州戦争之事

（奇兵隊カ）

七月二日夜九ツ時分長州寄兵隊一手門司浦より上陸

し、土民二人を生捕案内者として、山路之間道四里

計を経て大裏（里カ）之後山江潜匿し、同報国隊・寄兵隊一

手之陸軍者正兵と相成、相凶之砲発二者先月十七日

戦争之折、於田之浦専一二乗取処之荷方船一艘江六

封度三門・軍士四五人を乗せ付、暗夜二乗し幕府第

一之軍艦富士山碇泊せし舳の方へ乗廻り、石炭積船

と偽七八間位之処迄近付候哉否砲発シ、銅度（マ）も損せ

しならん、故二軍艦よりも大小之砲式ツ三ツ発すと

いへとも、速二伝馬江乗移飛か如く二漕出候故、砲

丸終二達する事を得ず、難なく帰船す、夫を相凶に

福浦よりも発砲し戦争相始る、依之長州軍艦も富士

山江押寄互二砲発す、然処二前文潜伏する処の寄兵

隊発起し、大裏屯集之小倉勢と戦争甚烈敷、然共無

程小倉勢敗走し、同三日朝六ツ半時分長浜之方江退

散す、長州方江分捕する本込大砲七門、其外器械等

者数を知らず、糧米二千表を納る之後兵火四方二起

り、長勢者悉馬関江帰陳す、日暮二至而大裏不残焼

失す、

一長州勢海軍凡四百人計之内戦死する七人、手負十人

計、

一小倉勢都合五六百人位、戦死五十人計、手負不相分、

三番手之大将沼田甚五兵衛戦死之由、

六月十九日芸州境小瀬川口

一十八日夜四ツ時本ノマ、遊撃隊カ遂撃隊松ヶ原と申間道大野道小方より三里相

進ミ、銃隊江砲隊相添同夜九ツ半時出陳、本往来江

進ミ曉七ツ半時大野放火、戦争、

一岩国より之援兵追々進ミ、膺懲隊其外岩国勢玖波よ

り四里計山奥津和野より二日市江之石州往来迄出張（廿日市カ）

一後藤深蔵・益田一・岡田駒太郎率伍中二至る迄敵兵（卒カ）

数多打取、大砲小銃二而打留又ハ打捨候者幾十人、

戦止小方迄引揚ル、

一先達而之戦争二大竹辺二而敵兵割腹討死十八九人、

首を取事六七級、波中二打斃し候者幾十人、彦藩家

老木俣土佐打斃居候様子相聞候、

一六月廿日午之中刻より芸州波田村之内十王堂と申所（津田カ）

二而、先鋒膺懲隊、応援益田孫植一手一小隊・山代一小隊二而及戰爭候処、味方応援之兵手薄二付、未之中刻戰山^{（止カ）}、一先相引二而龜尾川迄引揚ル、

敵兵三拾人余死人有之候由、内老入長官と相見得候者討留、

一 味方討死老入、怪我人五人有之候事、

一 援兵も繰出相成候事、

小瀬川口

一 六月廿五日朝六ツ半時迄^{（よりカ）}戰爭、互二及発砲、搦手ハ

衝撃隊六小队旧砲^{（白カ）}三門、追手岩国勢游撃隊六小队、

大砲四門、津田口第一大隊、同所間道第二大隊一中隊、援兵として玖波屯集第三大隊、小渴屯集岩国勢

右之手組二而激戦、移時は非大野丈ケハ乗取之決心

二候処、敵強兵拔擢之部も有之歟、幕歩兵紀州等二

而、策略二ハ弱卒を以誘引候事二而、戦時を移し候

而已二而敵兵要害二寄り一步モ不退、味方発砲、是

迄ハ大概五十発位二候処、今日八百二十三十発二及び、

小銃火之如く握るへきやふも無之、弾丸不下故幾度

も掃除して発砲、苦戦難尺筆紙、味方討死十人余・

手負三十人二及び、敵兵旗本長官之者兩人即死、其

余手負死人幾百人歟不知、味方山上より之狙撃、彼

ハ山之下二而防戦、追々弱兵退散、強兵而已相残り

一入苦戦、昼八ツ時相引二而玖波迄引揚候処、同所

より小渴之前江人数繰^{（上カ）}込、途中蒸気商船より頻二発

砲候得共手負之者一人も無之、人足杯ハ少々及狼狽

候、地方より者三丁之間江乗付候事故味方も争候得

大島郡

一 六月十五日大島郡椋野村奥於碓ヶ崎村上龜之助一手

其外幕之歩兵と合戦、久賀迄追打候事、

一同十六日石観音於清水峠第二寄兵隊其外松山勢と合

戦、安下庄迄^{（本マ）}追討、船不残出帆、

一 七月三日晝七ツ時分長州勢より大裏も攻懸、海陸二

手二而発砲いたし候処、無程退散二付火を懸不残焼

払候事、

一 長州戦死七人・手負十人計、敵兵死傷之者多しとい

へとも未其数を知らず、勿論幕府第一之軍鑑(鑑カ)富士山

と大ニ発砲、乍併小舟より商船之姿を以右富士山鑑

江乗掛、大砲三発打放し互ニ退去之由、

一寄兵隊一手ハ門司より夜九ツ時分上陸、間道より大

(里カ)裏之後江打出横撃いたし、一入深入之故手負、

一六月十七日石州口之戦、朝五ツ時分より精銳隊・南

園隊第二大隊を合、横田口より清末須佐之兵、高津

口より益田屯集之福山・浜田之兵千人計と戦候事、

一穴戸備後介・小田村量(柔太郎カ)太郎兩人儀、何も子細有之筋

ニも不相聞候ニ付、一往差返と之趣ニ而去朔日山口

江着之由、

一於津和野幕府より之軍監一人を殺シ、一人者生捕山

口江幽囚いたし置候由、左候而広島表より小倉江渡

海之松山藩一人於高聞生捕同断之由、尤、近習役相

勤候者之由、

一津和野ハ疾ニ長州ニ相降ル、尤、人質として国主之

夫人山口江送預候由、

一浜田も内心本ノマ、ハ于今相降居候由、故ニ強而不及攻撃候

事、

一先日并今朝も砲声大ニ当所迄相響候ニ付、最早決而

小倉城江相懸候半、尤、小倉ニおひても町人・百

姓・婦女之類ハ都而人心長州江相降居候由、田之

浦・門司・大裏第一討取処之人民江者分捕所之粮米

其外日用之器物等ニ至迄尽ク分配相与へ候由、故ニ

欽事限りなし、追々戦止之上者居宅迄も造立成呉候

筋戒諭ニ相成居候由、

一芸州口も右已来之動静委敷不相分候得共、追々降シ

ニ成立候半見得申候、

○ 小倉落城駅路之聞書

一七月廿七日未明長州勢式千人計帆前船五艘ニ乗付、

小倉領大裏長浜江上陸、小倉勢六百人計新町より半

道程大裏之方馬寄村と申所江繰出、且又肥後、谷藏人

之備も同断繰出、其中幕府軍鑑并小倉船江も軍軍鑑(筋カ)

式艘押寄海陸大ニ戦争之処、小倉勢忽チ敗走、肥後

陳屋之様退候ニ付不得止事、長岡監物之備も同所赤

坂と申所江繰出、谷合江押寄三方より長州勢を挟撃

ニいたし、長州別而危キ苦戦ニ而、未明より終日兵

糧之支度も無之、至而兵卒相勞候得共、新手を不嫌

相戦候処、夕方ニ至リ馬関より兵糧且人数等いたし

送り頗ル勢ひを得、然といへとも当日ハ日暮候ニ付

勝敗不相決、少シ長州強目ニ而相引、大裏迄退陳、

尤、双方戦死するもの夥敷候事、

一 何様之訳合候敷、肥後勢者今晚より追々退陳之用意

相促し、人数繰去候由、

但、長勢を恐れてならん、

一 肥後手ニ撃取処之首級三拾九、長州方ニ得る処之首

級数をしらす、

一 幼君并閣老小笠原候事、今晚窃ニ逃去、蒸気船より

長崎の様被逃越候由、夫より浪花の様被登越候賦之

段、今晚より長崎より相分来候事、

一 幼君儀、未落行先委敷不相分候得とも、多分肥後ヲ

差被落行候筋共ニ而者有之間敷哉、家中之老若男女

者都而肥後江逃集之由、

一 同晦日迄ニ諸陳熊本ハ勿論、柳川・久留米・佐賀共

ニ惣督なきを幸ひ、臆病神ニ被誘引不残退陳、

一 諸藩応援無之ニ付、小倉一藩ニ而者防戦籠城出来兼、

去ル朔日家老島村数馬（志津摩之）と申者自ら城中ニ放火割腹、

落城之事、

一 豊後国日田代官所并市中不残去ル五日夜放火、尤、

是者長より忍而相焼候よし、代官大ニ恐怖、行方不

知落行候由、

一 讃州高松ニモ攻掛候哉之風説所々ニ御座候事、

一 石見国浜田城・津和野城共ニ長州相降ル、不残一円

ス、

一 芸州も半バ長州江随心、尤、当分敵屯ひいたし候ニ

付、広島城下近キ迄攻拔候由、

一 幕兵も都而長崎逃集居候様子御座候、

一 当筑前国黒崎駅之近辺も三ヶ所程乗取放火いたし候

由、追々当方角へも攻掛候勢ニ而、当藩之混雑筆紙

ニ難尽御座候、

一 小倉城市朔日夜中不残灰燼と相成候由御座候、

（朱書）
「是迄糾合以下糺合ノ印〇
以下平常之件ハ糾合ヲ省ク」

二十五日 小雨、

朝六ツ吉次郎起シ寺師氏江素読ニ遣シ、今朝より帰
リニ市来善助所江劍術ニ茂遣シ、五ツ半帰り、直ニ
素読いたさせ、夫より練士館江出シ九ツ時帰、夫よ
り手習いたさせ候、九ツ前より休五郎殿被来、四ツ
後暖本田甚七来、先日練士館素読指南之者兩人程相
重メ候様、人柄可取調旨申聞置候処、安藤与右衛
門・本田吉之助右兩人之者共、与頭へも致吟味取調
候段申出候間、可然候ニ付指南可申付旨申聞置候、
九ツ半時分米良茂一郎・市来徳之進・高木幾太郎皆
児之者共ニ而吉次郎江遊ニ參候、今日者雨も降候ニ
付暮迄終日玄喚之辺ニ而遊ひ候、夜入吉次郎江素読・
字書抔いたさせ、四ツ時分隊候事、

二十六日 朝小雨、風吹、

朝六ツ時より吉次郎寺師氏・市来所江遣シ、五ツ半
帰、夫より素読いたさせ、四ツより練士館^(練カ)江出し、
九ツ時亦素読いたさせ候、四ツ半寺師氏被来、今日
より倉岡江用向有之、面高十五郎殿江面会いたされ、
明後日方歸り之段承候、今日も小兒共七八人来遊ひ

候、吉次郎大悦ニ相見得候、七ツ前手習いたさせ候、
夜入亦字書いたさせ、五ツ時分隊候事、昼毛利郷左
衛門一刻出候、

二十七日 晴、

朝六ツ起、吉次郎素読いたさせ、夫より市来善助所
江劍術ニ遣シ候而五ツ半帰、又素読いたさせ、四ツ
時より練士館へ出し候、九ツ時帰、夫より手習いた
させ、拙者二者今朝より諸道具取集ニ而七ツ時分相
濟、夕方又吉次郎江書物読いたさせ、暮より番所受
持郡奉行種子島六郎殿被来、四ツ時分被帰、無程隊
候事、

一 今暮ニ兵左衛門より九月廿四日付之書状来候事、

二十八日 快晴、今朝冷氣、所ニ依而者初霜降ならん、

朝六ツ時吉次郎江書物教、夫より市来江劍術ニ遣候、
帰候ニ付書物為読、四ツ半練士館ニ而劍術いたし候
ニ付參、吉次郎ニも出席、試合三ツいたし候、八ツ
過引入、吉次郎竹弓射ニ而遊ひ候ニ付、拙者ニも弓

持出拾建計射候、綾与頭并当所地頭横目毛利郷左衛門出候、七ツ後吉次郎儀、長野助兵衛所江鎗術為稽古遣候、今日二而両度参、表十四本者習受候由、夕帰候、

二十九日 快晴、

暁七ツ半起、六ツ時より綾之様参候、暖長野助兵衛出候、地頭横目毛利郷左衛門付参候、境迄無役衆中兩人参候、彼方よりも同断来居候、五ツ半着、今日御軍賦役門松市兵衛殿差入、調練文術見分有之候二付参候得共、未着無之候二付、調練場所最寄故町二而相待、九ツ半時分相成候二付、追付御軍賦役も着有之候半と調練場之様参候得者無程着、直二見分有之、夫より飯屋之様参候、門松氏ハ暫旅宿江被参、八ツ過より被来飯屋二而武術見分、七ツ過相濟、直二帰候、無役衆中参候節と同断、暮帰宅、寺師氏も只今倉岡より帰之由二而被来、四ツ前被帰、無程臥候事、

嘜
是枝八右衛門
地頭横目
市来正太郎

十月中当番
与頭
大迫弥四郎

横目
河上彦九郎

日史第六十五之卷

慶応二年丙寅十月中

名越時敏（花押）

朔日 晴、

朝六ツ起、吉次郎江素読いたさせ、四ツ時寺師氏被来、今日者御軍賦役門松市兵衛殿於練士館高岡武術被致見分候二付寺師氏同断出席、示現流・神心流・直心影流有之、八城示現流も有之筈候処、遠方故及間違候儀有之、出席いたさず候間、明後三日倉岡帰之当日見分いたし被呉候様所役々より相願、七ツ時分稽古相濟候、三日跡より痰気差起、夜二者致難儀存分難臥、不気分故薬用共いたし、夕方より臥候、然処今晚ハ殊之外快候而能臥候事、

一当月中年行司当番田円平助と申者届承届候事、

二日 快晴、

(晚力)
晚七ツ起、今朝高岡調練御軍賦役見分有之候ニ付、

六ツ過より調練之様出張候、五ツ半御軍賦役出張有之、直ニ調練、首尾能相濟、夫より同船ニ而穆佐之様參、着掛調練・武衛見分有之、示現流・直心影流・

水野流・飛太刀流・本心鏡智流、八ツ半相濟、倉岡之様參、着掛調練・武衛見分、示現流・川上天真流・本心鏡智流・月山流見分相濟、鎗術者吉次郎ニも致稽古候、飯屋ニ而右之通武衛相濟、門松氏ハ旅宿之様被婦、寺師氏者夜入五ツ半時分迄被相嘶旅宿之様被婦、無程臥候事、

三日 曇、

朝六ツ起、衆中吉井権兵衛倉岡飯屋江招呼、吉次郎江鎗術稽古いたさせ候、四ツ時分より射場之様弓・鉄炮致見分候、弓五拾五人、五寸一建ニ而二ツ矢無之、鉄炮三十人、八寸角中放立打ニ而、二箇ニツ星四人、黒葛原治左衛門・長友猪兵衛・大迫与兵衛・日高佐藤太ニ而候、八ツ過倉岡出船、川上り七ツ過

着、川涯迄案内兩人・地頭横目三人出居候、飯屋へも喫其外役々出候、穆佐より喫中村四郎太・与頭野村健介・横目竹本源七・地頭横目小田軍兵衛昨日差入候為一札来致面会、近比念入候儀夫二者不及段相達候、

一 今日取納米差引横目兎玉藤次郎殿着ニ而、坂元佐兵衛所江被致止宿候段町役より申出候、

一 談合役川村七郎左衛門、今日高城より只今着之段夕刻被来候、嫡子一人被召列候由、

一 暮寺師氏一刻入来之事、

四日 朝雨晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来江遣候、寺師氏江用向有之申遣来儀、御軍賦役旅宿江郷々見分之挨拶寺師氏を以申入候、自身参度存候得共、当所者近他領より旅人多く入来居候間、猥ニ町家杯難参右式ニ候、亦右之首尾として寺師氏一刻被来、朝(空)様ニ候間、今日御軍賦役立無之候ハ、相嘶度存候得共、少々晴上り候ニ付高城之様追付出立之由、昼過綾喫大野權

四郎・与頭田中駿助・地頭横目石尾長左衛門来面会、先日綾へ差入候為一礼来候由承候、無程亦倉岡役々三人来面会、同断承候、夕方寺師氏被来、綾より刃路番所番人御扶持米重願書差出、継書いたし藤八方へ可遣段承候、夜入手習共いたし、四ツ時分臥候事、

五日 晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣候、五ツ半帰、四ツ時より練士館へ出し候、九ツ時帰、四ツ半より寺師氏被来、八ツ過被帰、四ツ時談合役川村七郎左衛門殿被来暫被相噺候、拙者にも七ツ時分一刻川村氏へ一刻見廻候、八ツ後より寺師氏嫡子被来、吉次郎同伴、尤、休五郎殿にも彼宅より同伴二而青野駈乗見二參帰候、夕方面高十五郎殿被来、今日鹿兎島之様帰之由二而一刻二而被帰、暮寺師氏被来、五ツ過被帰候、無程臥候事、

六日 晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師休五郎殿へ素読、市来善助所

江劍術二遣候、五ツ半帰、四ツ時より練士館江出し候、九ツ時帰、四ツ過より川村氏・寺師氏被来、八ツ時被帰候、夫より書状認、宿許并葉丸家・七左衛門・町田氏へ書状遣候、暮二助教より諸郷学寮入之儀廻文来候二付、寺師氏申遣、本文松山之様相廻し、支配郷々江も廻文いたし候、五ツ半時分被帰候、無程臥候事、

七日 晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣候、五ツ半帰、四ツより練士館へ出し、九ツ時帰、直様練士館之様出劍術、八ツ前帰候、四ツ時より七郎左衛門殿・休五郎殿被来、八ツ前被帰候、八ツ半休五郎殿被来、七ツ過被帰候、七ツ過より鎗術式日二而長野助兵衛初四五人来稽古有之、出席、拙者にも表一廻り入身共突候、尤、吉次郎も致稽古候、夜入善兵衛・岩次郎召出相噺候而、四ツ時分臥候事、

八日 快晴、

暁七ツ時起、宿許并平馬へ遣候長崎状相認、七ツ半又臥、六ツ時起、吉次郎寺師氏へ遣候、市来所今朝者稽古無之由、五ツ前帰、用向有之寺師氏へ申遣候而同刻より被来、川村氏同断、噯市来善助召出候而

達候趣も有之、各八ツ前被帰候、
与頭紙座掛
一吉賀江惣兵衛不宜聞得有之、当役故障申立断申出候

様羽書を以達相成候事、

一夕方川村氏江風呂入ニ被来候様申遣候而来儀者有之候得共、些風邪氣分之由ニ而風呂ニ者不被入、夜五ツ半時分迄被相噺候、兎玉藤次郎殿ニも夕より被来、川村氏同伴ニ而被帰候、四ツ時分臥候事、

一今晚紙屋之銀助弟も明日栗野祭駈乗見物ニ来候而泊候、

九日 快晴、

暁より起候、飯共為焚候、今日者栗野祭ニ而、於社前之馬場例年之駈乗有之候ニ付吉次郎見物ニ遣候、地頭横目毛利郷左衛門来列立候、川村氏嫡子川村与十郎殿ニ茂被来同伴ニ而候、拙者二者先日より痰氣

差発、夜ニ者臥候儀難成、中々難儀之事ニ候、今日者能留主ニ而、世間者皆栗野祭ニ出、誰も来人も無之淋敷罷在事候間、四ツより八ツ迄昼寝いたし候、八ツより善兵衛江相頼灸治いたし候、七ツ半時分相濟、夫より屋敷内歩行、暮吉次郎帰、五ツ過臥候事、

十日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎江書物教、四ツより吉次郎練士館へ出候、九ツ時帰、四ツより川村氏・寺師氏被来候、九ツ半被帰、夫より灸治・書見共ニ而日暮、夜入焼酎共給、五ツ半臥候事、

十一日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣シ、五ツ半帰、四ツより練士館へ出候而九ツ帰、夫より素讀いたさせ、八ツより吉次郎志賀七左衛門衆中之兎共列立權之実拾ひニ參候、夕方帰来候、地頭飯屋より半道計有之処之よし、大成岩窟為有之由、奥之深サ如何計しれさるやうにて、穴之奥者五里有之と皆人為申由

候、八ツ後川村与十郎殿被来、朝市来正太郎召呼廻

半隊候事、

り刀箱之金物相頼候、亦夕忠正作拵刀壹本・同人弟子作拵刀一本持来致一見候、無程帰、八ツ後鐘樓江

十四日 快晴、

遠望鏡持登り諸所遠見す、巖壁高キ所小キ社杯見出ス、夜入鐘つきの肥後九左衛門召出酒共為給候、五ツ過帰、無程臥候也、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来江遣、五ツ半帰候、四ツより練士館へ出し候、九ツ時帰、四ツ後寺師氏被来、終日書見、或鎗とも取扱日暮候、吉次郎江昼一度夜一度素読いたさせ候、夜四ツ前臥候事、

十二日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣候、五ツ半帰、

十五日 快晴、

四ツ時より練士館へ出し候、九ツ時帰、四ツより川村氏・寺師氏被来、九ツ過被帰候、七ツ後亦寺師氏一刻来、（空目）役目替等之事承候、暮より善兵衛・岩次郎召出シ相嘶候、五ツ半臥候事、

朝六ツより吉次郎毎之通稽古ニ出し、又練士館等昨日同断、四ツ後川村氏・寺師氏同断、今日より三日穆佐江被差越由、小鳥筒被借候、木刀切之由候、穆佐・倉岡より嘍壺人ツ、来、御用有之申遣置候ニ付（取）

十三日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来江遣候而五ツ半帰候、四ツより練士館へ出候、四ツ後寺師氏・川村氏被来、九ツ前被帰候、今日者終日何事も無之、風呂入書見共二而日暮候、夜入善兵衛・岩次郎召出相嘶、五ツ

而也、西洋流訓練并ミニヘル申請被仰付等之事、伊勢殿（助武盛）より御沙汰之趣、御軍賦役門松氏より承知之通相達候、おのつから別段表通御達シハ有之筈と之事也、終日書見・鎗すごき、弓も拾建計射候、夕より川村氏来儀、五ツ時被帰、夫より家来三人呼出酒共為給候、無程臥候事、吉次郎江も度々素読、

一夕川村氏へ遣候詠

旅の身ハ淋しきものとしりながら

とひくる人のあらまほしさよ

十六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎江素読いたさせ、夫より市来善助所江劍術ニ遣候而五ツ半帰、四ツより練士館へ出し候、拙者ニも練士館江為不時弓見分出張、平田家門人共拾人計集り居候、暖市来仲左衛門出席、讀書指南人七左衛門・与右衛門・吉之助何れも出張居候、吉之助指南相濟弓も射候、九ツ半飯屋之様引入、○一志賀登竜者書家ニ而高岡出之人之由、志賀七左衛門家者彼之出跡ニ而無之哉之旨承候処、左ニ而無之、登竜者志賀之末々之家之二男之子ニ而被召出、其出跡者于今連続いたし、(朱書)〔本ノマ、(季今カ)志賀「」と申由、登竜者当所より為被召出事ニ候得者、同人之書者于今段々持合の方も有之筈、拙者二者是こそ登竜之字と申を一見不致、見度旨申候処、夫者段々多きものニ候、右市来仲左衛門ニも持合候間、後赴可致持參、追付持来

段々為見候、草行之書者左迄面白も無之候得共、眞ハフ之字随分骨折たる人と相見得候、今少しくき丸く有之候ハ、と存候、拙者氣ニ入候の貰ひ可畏旨申候ニ付、ハフ字書たるを一卷貰ひ候、

一夕方小林より衆中山口平太郎使として、暖より小林之絵図持合候ハ、借用いたし度承候得共番所江不持合、当小林地頭より一見いたし度為見候様被申候得共、所格護之の見失ひ、新ニ取仕立候儀も不相調込入候段承候付、拙者空ニ覚候籠絵図面書認、委敷者於其許取直し認替候様申遣候、平太郎者夜入召出焼耐共為吞、五ツ過迄相嘶、末ニ而飯共給候様申置候、四ツ時分臥候事、

一今日者弓射・書見、的作張方迄いたし、八ツ出来候、

十七日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎より素読いたさせ、夫より市来所江劍術ニ遣、五ツ半帰候、四ツより練士館江出し、九ツ時帰、拙者六ツ半より五ツ半迄弓射、四ツより練士館江柔術為見分出候、九ツ半飯屋之様帰、八ツ半

より談合役川村氏江參候而、七ツ後川村氏被來候、
今日者鎗術式日ニ而長野始拾七人來、拙者二者表手
數入身も突候、川村氏者今日迄ハ稽古いたされす候、
各暮引取、四ツ時分隊候事、

十八日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎江書物為讀、夫より市來善助所江
劍術ニ遣候、五ツ半帰、夫より父子ニ而弓射、四ツ
過より吉次郎ハ練士館江出、九ツ帰、亦練士館江鎗
術ニ出候、八ツ後川村氏被來、四ツ後安藤与右衛門・
川添仙助御用ニ而罷出申渡候訳ハ、此兩人養蚕掛発
起より被仰付置候処、所中引進致精勤候、御褒詞之
御書付読渡、木綿縞一反ツ、被成下候、則右之御礼
御届養蚕所掛物奉行新納喜右衛門迄申越候、尤、右
喜右衛門より養蚕所江麻袴御用ニ而申渡候格を以可
申渡段申來候、夕方又々弓、夜入四ツ時分隊候事、

十九日 快晴、夜入風烈シ、

朝六ツ過起、吉次郎江書物為讀、市來善助江遣候、

五ツ半帰、四ツより亦練士館江出し素読・鎗術いた
し、八ツ後帰候、七ツ後射場能切出し候而弓射候、
書見共ニ而日暮、夜入吉次郎へ書物為讀、自分ニも
書見、四ツ時分隊候事、

二十日 快晴、終日烈風、

朝六ツ過起、吉次郎江暫書物讀いたさせ、市來へ劍
術ニ出し候、五ツ半帰、四ツより練士館江出し、九
ツ時帰、四ツより川村氏被來、四ツ半より同伴ニ而
神心流長刀致見分候、帰掛腰役所江參見候、段々武
器格護有之候ニ付夫も致見分候、八ツ時飯屋之様帰
候、夫より書見共いたし、七ツ半時分寺師休五郎殿
今日綾より帰之由ニ而被來、夜入五ツ過被帰候、無
程隊候事、寺師氏先日者穆佐へ被承と承居候処、綾
ニ而為有之由、十五日書留ハ書損ニ而候、

二十一日 快晴、初霜、殊ニ氷ル、

朝六ツ起、今朝詠、

終夜さむけき床の起うきハ

今朝初霜の水るにそしる

吉次郎寺師氏・市来江遣候、五ツ半帰、四ツより練士館へ出し候、拙者ニも練士館へ出候而直心影流剣術致見分候、吉次郎ニも出致稽古候、八ツ時飯屋之様帰候、七ツ時分より寺師氏・川村氏被来、夕方被帰候、夕方野尻之仙次郎ニ茂来候、暮召出相嘶候、四ツ前隊候事、仙次郎泊、

二十二日 快晴、朝雨粒少々、

朝六ツより吉次郎寺師氏・市来江參候而、五ツ半帰、夫より素読いたさせ手習同断、九ツ時寺師氏被来、亦吉次郎素読いたさせ候、四ツ後者毎之通練士館江も出候、寺師氏八ツ後被帰、夫より腹ニ灸治、夜入五ツ時分隊候事、

二十三日 曉小雨、晴、

朝六ツより吉次郎寺師・市来へ遣候、五ツ半帰、四ツより練士館江出候而、九ツ時帰、四ツより甚左衛門孫之甚太郎召列来候、綾迄者先達而より来居候由、

月山流師匠江墓參之由、当年七十四才、須木より綾迄之難路六里を掛而師江之墓參殊勝ニ存候、殊ニ此所迄も来、左候而拙者江大書望候ニ付唐紙三枚ニ二字ツ、認候、鶴寿・積善・能粹と書候、暮帰、暮より寺師氏被来、此節島津又之進様御出府ニ付御通行、当所廿七八日比御泊之筈、今日鹿兒島より申来、噯是枝八右衛門召呼御手当向等之儀先例見合可申出旨申付候、此節者極御内輪ニ而、御出府御手輕之御供連ニ而御乗切之事候間、先例ニ者取捨も可有之と存候、各五ツ時分被帰候、此節者客屋御泊ニ付、寺師氏(字)□八町江引移之筈候、

二十四日 晴、

朝六ツ起、寺師氏今日者(町カ)□江引移ニ付、吉次郎素読ニ不遣候、市来所江者參候而五ツ半帰候、夫より素読、又練士館へ出シ、帰亦市来所江參候、今日者九ツ時より終日稽古有之由候、四ツ後川村氏被来、九ツ時噯長野助兵衛出候、又之進殿御通行御手当向之儀共段々承候、七ツ時分より市来正太郎来、先日刀

箱金物造方相頼置候処、出来候由ニ而持来仕合方迄
いたし呉、暫相嘶夕方帰候、夜入吉次郎へ素読いた
させ、四ツ時分臥候事、

二十五日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎市来所江遣候、五ツ過帰、今朝者
始而しなへ之形習候由、四ツ時練士館江出し候、九
ツ時寺師氏被来、八ツ後被帰、夕方灸治、夜入吉次
郎江書物為読候、昼も一篇同断、四ツ時分臥候事、

二十六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣候而五ツ半帰候、
今日者昼両度寺師氏被来、佐土原樺山（久舒）舎人夕より被
来、九ツ前被帰候、寺師氏同断、九ツ過臥候事、

二十七日 快晴、

朝六ツ起、寺師申遣無程被来候、樺山舎人江内談且
者昨夜之一礼申入候儀相頼、則被差越又無程被来、
七ツ時分同断ニ而郡奉行種子島六郎殿先刻着之由候

間、此節佐土原島津又之進様御通行ニ而、明後晚高
岡御泊之事ニ付内談申遣候、無程又被来、押付種子
島氏ニも入来承候得者、先日被差出候御書付振と者
相替、御勝手方御用人税所竹兵衛より承知之由ニ而、
何れ仮屋之方ニ御泊り可然と之事ニ而、明日早朝よ
り客屋之様移り之賦、各夜入五ツ時分之帰、四ツ前
臥候事、

二十八日 快晴、

○ 朝六ツ起、今日者移り之賦何歟と取集方等いたすへ
くといたし候処、六ツ半時分噯是枝八左衛門来、佐
土原御出府御延引之由、昨夜佐土原へ之御用封持越
候、足輕兩人通り候由、其者承知二者通り筋郷々諸
手当向心得ニも可相成候ニ付、御延引之儀迄者可申
置と之事候由、訳者不存候得共押而承候処、委者不
存候得共、玉里真了院御死去ニ而者無之哉と之事候
由、右通承候付今日より客屋移り之儀者取止、尚又
為念与頭兩人佐土原公明日御出立之儀乗切ニ而伺越
候様申付候、五ツ過川村氏・寺師氏被来、四ツ半過

被帰候、無程又種子島六郎殿被来、八ツ前被帰候、

長寛

九ツ時練士館劍術有之、吉次郎出候、八ツ過帰、昨日寺師氏より短冊一枚書呉候様承、おかしくも今日一首を詠し認め、

物事は木々のミとりの色に見よ

ねにつちかいて枝そうるほふ 時敏

七ツ時分より当所總方佐伯善次郎殿被来、酒共出シ暫被相嘶候、夕方より寺師休五郎殿被来、夜入五ツ時分被帰候、五ツ半臥候事、

二十九日 快晴、夜入曇、

朝六ツ起、吉次郎者寺師氏・市来江遣候、五ツ半帰、四ツ時練士館へ出候、九ツ時帰、佐土原より使者来、書翰到来、心了院御不快二付、又之進殿鹿府御越之儀御延引相成候段申来候、暖本田甚七右之届来候間致面会候、四ツ半馬二乗相濟、寺師氏此節転宅之旅宿へ一刻、夫より客屋へも参、又川村氏へも参候、暫ツ、何れも罷居候而八ツ半時分帰宅候得者綾地方檢者相良作太郎殿被来、段々自詠被為見、左二記、

○

高岡香積寺庭前の白梅を月知梅と世に称す、梢はひきくして丸くツミ、枝より枝は地中に着く、いつれを幹ともわかす、四方に根五六丈はかり栄て、今は植初し世の本木は朽果て、かたちもなくあととはしるしに細く埒あり、めくり丸く三重給て、敬しくはなの色さわめて白く、盛なる時はぬは玉の闇を照す心地して、たくひなき名木なり、実はすぐれて大に酸といふ、先年

宰相君御関外御巡見の折からミそなはせ給て、此梅おのか生茂るまゝに榮させよとの給てより、一入はなの色香もいやまして春ことに遊客多し、そのかミハ見所すくなしといふ、

はなの咲春は無なとめつるかな

月知る梅の四方の梢を

久かたの月知る梅の陰とひて

めつるも君かめくミなりけり

此寺の月知る梅は人つてに

聞しにまさるはなの俤

またいつの春かきてみんなつとふ

月知るうめの花の盛りは

綾衆中野元五右衛門八十八の年齢祝掌^{賞カ}して

世にまれのよハひ経にけり今よりは

ちとせの坂も安く越らん

在役彦右衛門か男子腫物の煩ありて、纒の日数

を経て六とせ終の別にて、悲哉鳥部野の夕部の

けふりとなんはかなくきえ果ぬと聞に、かれら

彦右衛門は兼て敬処最厚なれば、小子慟して哭

するに堪すして

ありし世をおもひいて、はいと、しく

老の袂も打しほるらし

八月十五夜雨

しはしたにはれ間もあらて望月の

空はあやなく雨にふけぬる

九月九日

すへとをさちとせの秋を汲そへん

君か世いはふきくのさかつき

九月十三夜雨

此秋はふた夜と、もに雨ふりて

とちこもりぬる長月のそら

長月のかつらもこよひもみちして

もなかよりけにてり増らん

此歌はまへつかた月のあかきよ詠し置ぬ、

晦日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣候、五ツ半帰候、

今朝嘍甚七来、四ツ後寺師氏・川村氏来儀、昼吉次

郎へ書物共為読候、

横目

神崎平左衛門

嘍 本田甚七

十一月 中月番

与頭

高木正右衛門

和田十郎兵衛

毛利郷左衛門

清水武右衛門

年行司

慶応二年丙寅十一月申

名越時敏（花押）

朔日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣候而五ツ半帰候、
四ツより練士館へ出し候、同刻寺師氏・川村氏被来
候、仲左衛門・正右衛門・助兵衛・甚七・郷左衛
門・正太郎・権右衛門・喜助出候、八ツ後亦川村氏
被来、夕より寺師氏・種子島六郎殿被来、九ツ時分
被帰候、

二日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏・市来へ遣候而五ツ半帰候、
六ツ半川村氏被来、五ツ過種子島氏、四ツより寺師
氏被来、種子島氏被来、四ツ過当所嘸・与頭兩人
ツ、召呼、拙者書取相渡候、談合役川村氏も又々被
来、寺師氏兩人席詰二而候、書取左之通、

○ 当所之儀、境目要枢之場所柄二而、已前より衆中

多人数被召移置候者、平日者下々之不法をいまし
め、非常之事も候ハ、攻守進退其時之応機変、
御国家之

御固メニ相成候様ニと之儀者顕然之御事ニ而、自
其

御趣意于今相貫一統文武相属候儀と別而令感服、
満悦不浅存候、当世態柄ニ付而者尚又武士之気性
致興起、文武出精者勿論之事ニ而、専主忠信行儀
を正し、古来淳朴易簡之風を相守リ、士道之本体
を不取失、誠実之

御国風下々迄押移リ候様根元を正シ、枝葉之潤色
ニ致充実、上下一統無申旨相治居候様、役々之儀
者右ニ基キ、平日年若之面々江申論方等行届心、
実ニ士道相属、無懈怠文武出精いたし候様有之度
存候、

十一月

左源太

七ツ時分鹿兒島より伊勢平右衛門殿被来、家来福留
七兵衛・同塩田清次郎来候、今晚泊、寺師氏七時分

より被来、四ツ過被帰候、今朝本田宗兵衛来候、四ツ半臥候事、

三日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏（脱カ）参候、市来方者御停止ニ付武術無之故不参候、四ツより練士館江出候、拙者ニ者今日者城山稻荷社御祭ニ付参詣、案内兩人、地頭横目市来正太郎付参候、四ツ半帰ル、伊勢氏ハ谷村氏へ被参候、四ツ時分寺師氏被来、四ツ半時分より追々穆佐・倉岡・綾与頭兩人ツ、来、書取を以存慮相達、左之通、

当所之儀、境目要枢之場所柄ニ而、役々を始末々ニ至迄心得厚可有之筈之事ニ而、衆中之儀、平日者下々之不法をいましめ、非常之事も候者攻守進退其時之応機変、

御国家之

御固メニ相成候様ニと相心得候儀当然之事ニ而、

其旨趣兼而相貫居候と相見得、文武相厲候儀と別

而令感服、満悦不浅存候、当世態柄ニ付而者尚又武士之気性致興起、文武出精者勿論之事ニ而、専主忠信行儀を正し、古来淳朴易簡之風を相守リ、士道之本体を不取失、誠実之

御国風下々迄押移リ候様根元を正シ、枝葉之潤色ニ致充実、上下一統無申旨相治リ居候様、役々之儀者右ニ基キ、平日年若之面々江申論方等行届心、実ニ武士道相厲、無懈怠文武出精いたし候様有之度存候、

十一月

左源太

又夕方穆佐より五卿警衛として筑前宰府へ参居候者罷帰候段届承、中村敬助・二見角兵衛・小岩屋武右衛門ニ而、外ニ兩人帰、足痛之由、綾より今吉孫四郎、倉岡より佐竹次郎左衛門同断致面会候、伊勢氏・福留・塩田泊ニ而候、

○一心了院様先月廿八日御死去御通達来候、

四日 霜、快晴、

朝六ツ過起、吉次郎寺師氏へ書物読ニ參候、練士館へも出候、九ツ婦、寺師氏・川村氏被来、九ツ時分中原太郎殿被来暫被相噺候、いせ氏者昼間諸所為見物被出候、暮被帰泊、四ツ過迄者相噺候事、

五日 薄霜、快晴、

六ツより吉次郎寺師氏へ遣候、練士館毎之通、四ツ後寺師氏・川村氏嫡子一刻ツ、被来、地頭横目正太郎来、綾之寺社人此節伺御機嫌として面会、昼過高岡衆中小林居住之医師吐師昌齋来、面会暫相噺候、夕方より伊勢氏・福留・塩田抔緩々相噺、四ツ半臥候事、

六日 快晴、

曉六ツ前起、五ツ時より法華嶽寺江乗切ニ而參詣、吉次郎ニも召列、寺師氏・谷村彦左衛門殿ニも被差越、所役々・無役ニも段々差越、都合馬上拾式人ニ而候、家来者福留七左衛門・塩田清次郎・鮫島善兵衛・野元休之丞・小宿岩次郎・次郎・市之丞ニ而候、

十右衛門留守番、日高夕婦、無程寺師氏被来、平右衛門殿打寄緩々相噺、寺師氏ハ九ツ前被帰、八ツ前臥、いせ氏泊、

七日 快晴、

朝六ツ寺師氏江吉次郎參候、五ツ前婦、四ツより練士館へ毎之通、四ツ後川村氏・寺師氏被来、市来正太郎ニも来、七ツ後鎗術式日ニ而所衆中来、暮帰候、拙者ニも稽古いたし候、暮過より谷村氏・川村氏・寺師氏被来、尤、伊勢氏同道也、各九ツ時分被帰、八ツ時臥候事、いせ氏泊、

八日 快晴、

曉六ツ前伊勢平右衛門殿鹿兒島之様被帰、福留七左衛門・塩田清次郎同断、朝六ツ起、寺師氏も夜前遅く候間、今朝者吉次郎素読ニ不遣、練士館へ者毎之通出候、拙者二者五ツ半より鉄炮場江出張候而、郷原家・和田家之両稻留流小筒致見分候、郷原家五十人計、取次本田次郎五郎、和田家百五十人計ニ而候、

取次谷口彦五郎、式ツ星本田方三人、谷口方九人、其内兎一人、拾二三才位珍敷候、各火繩二曲ツ、為褒美遣候、七十余人、春田八左衛門老体迄不懈射候、士練不相替候ニ付為褒美遣候、右相濟馬術見分、人数十七八人、鎌倉流取次者志賀幸助、夕方相濟、暮より寺師氏被来承候者、受持郡奉行種子島六郎綾江何歟徒党等敷事被聞候ニ付、折柄高岡噯彼表江參居候間、致聞合候様被申越候処、只今罷帰申出候由、綾無役衆中何歟所役々江不合点之事有之、先日より綾之内寺江相集り日々人数相重ミ、今日者百人計ニ相成候段承得候段申出候ニ付、何れ地頭之事地則差越存慮承居候上、能程合則為致退去候様いたし度、寺師氏同伴ニ而家来・下人ニ而馬上より直ニ差入、則所役々・寺師氏町江無役衆中招呼銘々存慮承候処、承候程之事ニ者無之候得共、所役々も段々存慮申出度事有之、先日右為相談打寄候由、何共徒党と申程之事ニ而者無之候得共、何歟不服ニ者有之、先日より役々江訴出候儀も有之候由承得候間、双方共先日より之無役より申出候次第返答之訳、無役之方ハ兼

而存慮之形行書付を以申出候様相達候、夜七ツ時臥候事、今夜八ツ時分高岡横目兩人来候、

九日 快晴、

朝六ツ過起、今晚取納米差引横目兎玉藤次郎・高岡表締方横目山沢勇左衛門・佐伯善次郎殿被来候段承候間来被呉候様申遣、拙者存慮之儀共相咄候、又昼時分兎玉氏・佐伯氏被来承候処、左程之儀ニも無之と存候間、他領境目騒々敷相聞得候而も如何ニ存候間、先今日者引取、聞合いたし候儀も候ハ、掛而可承段被申候、高岡より噯谷口彦五郎・与頭高木正右衛門来候而、急成御用筋ニ而夜前来候由、其節者全不存候ニ付態々来候段承、無程又地頭横目毛利郷左衛門同断来候、格別用向も無之候ニ付今日者各高岡之様差返シ候、

一昨夜相達置候通綾役々より書付を以申出候得共、段々（空白）認、残之（空白）又々外ニ書出候様演達候処、又々書付を以申出候、

一夜入五ツ過無役衆中より書付差出、段々不審之ヶ条

有之、又々問条相下ケ候、

十日 霜降、

朝六ツ過起、今日者役目方・無役衆中江度々問条を以双方より度々書付を以差出候、昼間此前之押宿見ニ參候、別而風景宜敷所ニ而候、町之上高ミニ而候、綾光寺・伝徳寺江も一刻ツ、參候、伝徳寺ニ而ハ焼酎出候、右者九ツ前より九ツ半(時脱カ)分迄之間ニ而飯屋之様帰候、今晚者高岡之様帰之賦候処、御用筋不相濟儀有之、今晚迄一宿、夕方綾地頭飯屋絵図取共いたし候、夜入四ツ時分臥候事、

十一日 快晴、

朝六ツ過起、今朝五ツ過調練式日ニ而於射場地調練有之候間、休五郎同列ニ而致見分候、揚貝并太鼓少々間後ニ相成候間、以後者今少シ其心得有之候様相達置候、外ハ余程宜有之候、今朝迄ニ而無役衆中共不服之儀者、役目方・無役方双方共書付を以委細承届候、無役より申出ニ、

○ 一向宗取締之儀、爰元衆中四組ニ分有之、一ヶ年春

冬式度一日ニ二組ツ、所無役衆中之振合宜候者所江宿申付召寄、御取締向之御条書弘有之、衆中之儀者拝聞相濟次第直ニ諸人者引取候、其跡ニ役々衆之儀者宿亭主より酒食等差出種々物入ニ及申候、当时者諸色一統高料之砌ニ而、一日分諸色代銀札ニ而者式百貫文程も無之候而者相濟不申儀と奉存候、右式故御地頭飯屋ニ而御条書拝聞相濟申候ハ、右之物入も無之仕合奉存候、

○ 右通承候ニ付役目共招呼承候処、其通之事候段申出候間、以來者飯屋ニ而拝聞ニ相成候而も差支之廉無之候ハ、無役衆中申出尤ニ存候、如何と承候処、御尤ニ奉存候、宗門方より之承知振辺鄙之所迄も引廻り拝聞いたさせ候様承知ニ而、是迄衆中宿申付候一段申出候間、承知者何方ニ而承知ニ而も人別承知さへ相成候得者、場所ハ何方ニ而も可然事候得共、右通之承知振ニ候ハ、是迄之通衆中宿申付拝聞いたさせ、酒食之儀者前により不差出候様相達シ置可申候、乍其上差出候而も受用申問敷候様ニ相達置候、

外二御軍役金等之儀申出尤之儀二而、是以無役申出

届承候、

之向を以役目へも取扱振尚又都合能取計候様訳而相
達、役目共二も尤之儀と致承知候、其外之儀者尚又

十二日 霜降、晴、

念入聞合等相濟、談合役等相談之上者双方之申出聞
取置、今日者昼過より高岡之様帰候、綾二而相良作
太郎殿一刻被来候、今日

朝六ツ起、吉次郎寺師氏江素読ニ參候、五ツ時分帰、
四ツ川村氏・寺師氏被来候、来月初旬帰ニ付差掛ハ
混雜之訳も可有之候ニ付、今日者諸道具ともいろ、
と取集ともいたし候、暮より岩次郎・善兵衛呼出嘶
共いたし候、四ツ時分臥候事、

寄道祝二首 時敏

あた事のありとおもひし武士の

十三日 霜降、快晴、

こ、ろやはらく敷島の道

武士のたけき心もいつしかと

やはらきやすき敷島の道

七ツ時分高岡帰着、帰掛談合役川村氏江一刻立寄、

休五郎殿二も同断、暮過寺師休五郎殿一刻被来候、

来ル十五日射納いたし候由本田甚七より申出、拙者

差支不申候哉伺具候様承候段承候付、何も不差支段

及返答候、又地頭横目毛利郷左衛門来、四ツ時分迄

相嘶候、夕方二者地頭横目市来正太郎も来候、外二

噯・与頭等外（全五）来候由届承候、

候一礼として来致面会、何哉歟哉と承候、無程帰、
夫より志賀幸助江馬為乗候而見候、拙者二も一鞍者

一今日郡方書役白坂彦兵衛着、宿者清水清兵衛所之由

乗候、無程暮二相成、夫より善兵衛・岩次郎召出暫

相嘶候、夜五ツ半臥候事、昼谷村彦左衛門殿・取納方取締横目宗左衛門殿明日より帰之由ニ而被来候、

とせまで之歌一ツ謡ひ納候、暮前引入、暮過より寺師氏被来、五ツ過被帰、無程臥候事、

十四日 快晴、

十六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏江參、五ツ前帰候、四ツ後取納方取締横目竹原弥右衛門殿被来、夫より追々引続夕方まで之間川村氏嫡子・同七郎左衛門殿・寺師氏・市来仲左衛門・種子島六郎殿被来候、今日者飯屋下屋敷ハ明日射納之習礼之由ニ而、早天より暮迄賑々敷事候、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ參候、五ツ時分帰、七ツ後志賀幸輔来馬拵具候、内へも招呼暫相嘶、先日より吉次郎足江少々切疵より腫物之様相成、未快氣いたさす候ニ付、今朝者所医西泰輔と申者申遣来具候、今朝永野九八郎も一刻来候而面会、夜入五ツ半時分臥候事、

十五日 快晴、

十七日 霜降、快晴、

朝六ツ起、今日者高岡射納ニ而六ツ半過より川村氏・寺師氏被来同伴見ニ出候、衆中射手三百人余、三ツの一建ツ、二ツ矢与頭永野九八郎一人、町人共軍勢町人者射候人数四拾人余、二ツ矢白坂寿太郎射候、拙者より褒美衆中江者の矢一手、町人江者弓絃五掛遣候、夕方相濟、拙者棧敷前荒庭敷付、嘸・与頭出茶碗ニ而酒一ツツ、呑候而、旧例之由ニ而千

朝六ツ起、五ツ時分より兎玉藤次郎殿・山沢勇左衛門殿被来、四ツ時分より川村七郎左衛門殿被来、何れ茂同伴一昨日之射場地ニ而町之者共武術并捕方致見分候、八ツ時分相濟、夜入寺師氏被来、五ツ時分被帰、四ツ時分臥候事、

十八日 霜降、快晴、

暁七ツ半起、六ツ時より倉岡弓射納ニ付参候、吉次郎ニも召列候、川村氏・寺師ニも同船、二ツ矢長友為兵衛一、二ツの二人ニ而褒美的矢一手遣候、今夜倉岡一宿、尤、川村氏・寺師氏同宿ニ而候、

十九日 霜降、快晴、

朝六ツ過起、五ツ半倉岡飯屋打立、穆佐弓射納ニ付参候、町手前より上陸、町通行飯屋之様参、無程射場之様参候、金の的ニツ矢野崎直左衛門一人ニ而褒美的矢一手遣候、七ツ時分相濟飯屋之様参、押毛利強兵衛殿宍之汁一ツ呉度存候間、帰掛一刻来呉候様被申候間参、川村氏・寺師氏・吉次郎ニも参候、無程乗船、夕高岡飯屋之様帰着、夜入四ツ時分臥候事、

二十日 霜降、快晴、

朝六ツ起、練士館江出張調練見分、五ツ過引入、吉次郎者寺師氏へ参候、五ツ時帰、四ツ時寺師氏・川村氏被来候、四ツ後与頭大迫弥四郎江嘜助横目田原（空白）江与頭銘々役替申付候、穆佐より昨日之礼と

して嘜・与頭来候、去ル五日より豊後日田江為聞合被差出置候中村敬助昨夜罷帰候由、拙者前より差遣候野村為兵衛ニも帰、外ニ森家藩中一人召列帰候由、書留もいたし帰候得共前後之儀も有之候ニ付、尚又書綴り候上後程も可来と之事候、八ツ過比御仕立杉江火入候段相聞得候ニ付、為消方衆中町在惣而差越可申候ニ付、嘜市来卯左衛門ニも則差越候段届承候而、庭之あたり見候得者焼ケすほり多く降り候、拙者ニも則馬ニ鞍置、七八合之処岡之上迄参候得者、夫より亦壺里計之所へ煙り多く立登り候、追々駈付参、七ツ半時分二帰之者も嘜より最早消シ留、大抵四五丁方（號カ）暁候段届承候間罷帰候、（音彬）順聖公御仕立杉六里廻り之内ニ而候、最早一間半計相成居候由残多事候、一番ニ見事ニ立居候辺之由也追々嘜・与頭等右之届ニ来候、五ツ半時分可臥といたし候処、穆佐より野村為兵衛豊後聞合一条ニ付届ニ来候、中村敬助二者風邪強く由ニ而不来候、寺師氏ニも被来候、四ツ過被帰候ニ付直ニ臥候事、

二十一日 霜降、快晴、仮屋ニ者霜不見得、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ参候、朝市来正太郎召呼、御領本庄江当夏時分劍或刀・鏡等堀出し候由、其已前も度々如斯事為有之段承候間、為堀出所四面者石藏之様いたし為有之と之事、于今其跡其儘有之候哉、亦折々堀出候器物持合候者共有之候哉承合候様申聞候、天明年簡^(間カ)二堀出候書留者群書輯録二十二之卷ニも有之候、其節者甲冑并玉類も為有之と相見得候、従時機場所并器物類見物ニ差越候考ニ候、四ツ後毛利郷左衛門出候、八ツ前寺師休五郎殿被来候、夕方倉岡嘜・与頭来致面会候、亦寺師氏茂一刻被来候、夜入岩次郎・善兵衛招呼相嘶候、四ツ時分隊候事、

二十二日 快晴、夕小雨暫降、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ遣候、五ツ時帰、四ツ時寺師氏・川村氏被来、正太郎・郷左衛門同断、今日者雨乞之由ニ而六ツより六ツ時迄之神舞有之、八ツ後より吉次郎見物ニ参候、郷左衛門付参候、暮帰、夜五ツ時分隊候事、

二十三日 快晴、

暁七ツ時起、飯共為焚候、正六ツ打立ニ而高岡衆中ニ間切れ佐土原江致遠馬候、吉次郎も召列、寺師ニも被参、嘜谷口彦五郎・与頭長野九八郎其外見・才七人参候、佐土原江四ツ着、愛岩へ登リ諸所見物、御城内も門を三ツ入致見物候、家中・町共考よりも立派ニ相見得候、肴抔過分ニ有之場所ニ候、鶴・雁・鴨・鴛鴦之類多く取る、所之由候、八ツ半時分打立、少々者乗切ニ而暮ニ帰着いたし候、高岡より佐土原城下迄五里之由候、毛利郷左衛門・高木正右衛門来、直ニ帰候、五ツ過隊候事、

二十四日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ参候、五ツ時帰、四ツ時谷口彦五郎・長野九八郎来、無程寺師氏被来、毛利郷左衛門来候、吉次郎足之疵未快氣いたさす候ニ付西泰輔江申遣置候処、暮過來候、暫打嘶帰候、夜五ツ半時分隊候事、

二十五日 快晴、夜暫小雨、

朝六ツ起、吉次郎へ書物為読候、練士館江茂出候、
四ツ時分川村氏来儀、同刻穆佐押御引取ニ而、押毛
利郷兵衛儀過日郡奉行江転勤被仰付、此節彼表引扨
今日当所通行之由ニ而、一刻被来候、八ツ後より番
人肥後九左衛門と弓可射と打立射候処、寺師氏被来、
志賀幸輔馬ニ可乗と来居候段申候間、暫取止飯屋門
前ニ而乗方いたし候、拙者ニも一鞍乗候、外ニ神崎
助千代・市来百太郎・長野九八郎馬も銘々致乗方、
大方幸輔も乗候、七ツ半時分相濟、寺師氏・幸輔ニ
も来候而又致弓射候、暮より五ツ時分迄ハ皆々相嘶
候、九左衛門同役ニも暮より召呼候、寺師氏者五ツ
半時分被帰候、無程臥候事、

二十六日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ参候、拙者ニ者暫弓射い
たし候、四ツ前より寺師氏・川村氏被来候、噯市来
善助呼出、右兩人席詰ニ而拙者より達候趣者、二才
共酒狂一件ニ付噯共より拙者江書取願出候ニ付、此

節迄ハ叱置ニ而、先日之書取ニも響候様ニと之心得
も有之候間、夫ニ而止不申候ハ、書取ニ而も出シ可
申相達置候、且又和田一件ニ付申出之趣有之候間、
達置候儀も有之候、各八ツ前被帰、同刻紙屋之千次
郎来、拙者七ツ時分より飯屋絵図所打立候、夕方取
止、吉次郎些風邪塩梅と相見得候ニ付徳丸玄竜申遣
来候、何ぞ臥候程ニ者無之、矢張元氣之事ニ候得共
食事不宜、少々頭痛いたし候、暮より千次郎・善兵
衛・岩次郎呼出相嘶候、四ツ時分臥候事、

二十七日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ参候、四ツ時寺師氏被来、
今日穆佐衆中中原滝右衛門江御用申渡置候処、三日
風邪氣之由、悴岩右衛門出候、彼江申渡候、左之通、

○ 一塩焔 一袋

一火繩 二曲

中原滝右衛門

右者老年ニ至迄文武共心掛宜段相聞得、士操不相替

頼母敷存候、年若之面々江何篇可致教育候、仍而為
褒美右之通遣候、

十一月

左源太

右滝右衛門事、当年八十七才ニ而小筒抔者始終射候
由、未歩行等も達者ニ而、当秋高岡ニ而御関外四ヶ
郷取会砲会之節も鉄炮持參ニ而射候由、且亦兼而鎗
術ニも出席、自身ニも毎々稽古いたし、年若之面々
引進取直シ方等もいたし候由、

一七ツ時分より志賀幸輔来致馬乗候、拙者ニも出張一
鞍乗候、百太郎・助千代其外ニ茂馬乗来乗候、暮引
入、夫より明日緩行之仕舞共いたし候、四ツ時分隊
候事、

二十八日 霜降、快晴、風烈、

晝七ツ過より召仕共起し飯共為焚候、六ツより綾江
差越候、川村氏・寺師氏ニも被差越候、綾江五ツ時
分二者着、四ツ時分より弓射納始る、射手百五十人
計、差的・三ツ的・金的・四半見候得共ニツ矢無之、

亦三ツ的望候得共ニツ矢無之候、町之者共十四五人
跡ニ而四半射候得共ニツ矢無之、又望候得者一人二
ツ矢射候、絃五掛褒美、夕方仮屋之様引入候、川村
氏・寺師氏も被来、四ツ時分銘々宿々江被帰候、

二十九日 霜降水、快晴、

朝六ツ起、五ツ時分より川村氏・寺師氏被来、静心
ニ茂一刻来候、四ツ時分嘸・与頭呼出、先日より無
役衆中方と入組之儀能治り候様致理解、役目共能納
得二候、夫より無役も呼出、寺師氏より諭方いたさ
れ候、何れも納得ニ而是よりハ余程能相成候半と存
候、何れニ役目共いたし方不宜事而已有之候得共、
亦余リニ役目押付候得者、是より者役威全ク無之様
相成候ニ付、双方程能ク相諭候、七ツ時綾打立、夕
方帰着候得者福留七左衛門より書状来居、見候得者
去ル廿六日晚戸柱町田家真寿院様御事何も御病氣も
無之候処、湯被召上度と被仰直ニ御死去之由、御年
輩も当年七十七才ニならせられ寒当り之御塩梅ニ而
も候半、同日夜御葬式も為有之由候、近日帰府もい

たす筈之処ニ御残多存る事候、

晦日 霜降水、快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ素説ニ参候、用向有之市
来善助へ申遣、今朝来暫相嘶候、四ツ時川村氏被来、
七ツ時分より寺師氏被来、夜四ツ時分被帰候、来月
五日より打立帰府之賦ニ而、今日より帰仕廻ニ而何
歟と取集方いたし候、夫より家来とも召呼暫相嘶臥
候事、

日史六十七之卷

慶応二年丙寅十二月中

名越時敏（花押）

朔日 快晴、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏江遣候、五ツ時分帰、五ツ
半市来善助一刻来候、川村氏同断、四ツ過より寺師
氏被来、来ル五日爰許打立帰府之賦ニ而先状被差出
候、八ツ時分被帰、無程市来善助来、夕帰候、昼毛
利郷左衛門ニも出候、夜入四ツ時分臥候事、今日者岩

次郎鶉取ニ参り候而鶉壹疋取り帰、夫者生なからニ
而其儘置、外ニ壹疋列之者前以取つまミ置候を貰ひ
帰、汁出来候、

二日 間小雨、風強、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ参候、今日者終日取集方、
志賀幸輔小林江馬取入ニ先日より差越居候処、昨晚
帰之由、右之馬乗可申見申間敷哉之旨申候間見候、
拙者馬ニも為乗候、また暮迄取集候、小林より家来
之田中利左衛門来候、拙者来ル五日より帰ニ付供方
也、召出焼酎共為吞候、家来共三人も召出候、四ツ
時分臥候事、

三日 霜降、快晴、朝風強、

朝六ツ起、吉次郎寺師氏へ参、朝より取集方、四ツ
帰、川村氏被来候、九ツ時より志賀幸輔馬毛焼とし
て来候、外ニ馬医壹人、依而鶉汁ニ而飯差出、川村
氏・寺師氏へも同断、七ツ過被帰候、夫より亦取集
方、夜五ツ半時分臥候事、

一今朝法華嶽寺和尚被來、昼穆佐嘯野村市兵衛・与頭
二木市郎兵衛・横目竹本源七・地頭横目小田軍兵衛
來候、綾嘯野元四郎左衛門・与頭大野正兵衛・地頭
横目大始良勇一郎來、各拙者明後五日より帰府二付
而見廻と之事、

四日 晴、風烈、

朝六ツ起、四ツ後嘯・与頭出候、川村氏・寺師氏同
断、今日者終日取集方、地頭横目毛利郷左衛門度々
來候、夜入川村氏被來、番人肥後九左衛門外二壺人
招呼候、四ツ半時分臥候事、

五日 晴、風烈、霜降、

曉八ツ時起、飯共為焚七ツ半打立、今日より帰、去
川之二見休右衛門所へ一刻休、高城之内所所休、七
ツ半時分都之城町着泊、三男吉次郎召列、当年十一
才也、拙者四十八才、家來者鮫島善兵衛・野元休之
丞・小宿岩次郎、鐘持小林居住家來田中利左衛門、
中間十右衛門、下人市之丞二而、旗預寺師氏二も今

朝高岡出立、嫡子新太郎殿二も被召列、

六日 晴、風強シ、霜降寒厳シ、

朝六ツ起、五ツ時都之城出立、通り山、福山人馬繼、
国府浜之市江暮二着泊、尤、町宿也、

七日 快晴、

七ツ半起、六ツ過浜之市立、五ツ過加治木町着、八
ツ時出船、暮過新築地着船、直二帰着、戸十郎・七
兵衛・助市等下人召列迎供二來居候、夜四ツ時分臥
候事、

八日 雨、

朝六ツ起、朝兎玉佐平次殿・町田藤八殿・名越戸十
郎殿被來候、夜東郷藤十郎・上村笑之丞殿・町田藤
八殿・宮里喜次郎殿被來、九ツ時分被帰候、

九日 晴、

今日戸十郎殿・高岡与頭市來伸左衛門來候、おむめ

との・きせにも来、夜戸十郎被来候、

十日 晴、夜雨、

朝藤八殿・戸十郎殿被来、昼東郷藤助殿家来之宮之
原平次郎・国府之十右衛門叔父辻元新兵衛来、七ツ
過よりお筆・伊勢平右衛門殿被来、夜四ツ半被帰候、

十一日 間々小雨、

高岡之市来仲左衛門・種子島六郎殿・町田藤八殿被
来、夜七兵衛・兵左衛門招呼、四ツ半臥候事、

十二日 霜降、

朝六ツ起、四ツ後伊地知八郎右衛門殿被来候、暮よ
り屋敷人数江宗之汁共いたし、土産開キニ焼酎共為
呑候、四ツ各引取候、夕より国俊来、留置候而四ツ
帰、無程臥候事、

十三日 霜降、

朝六ツ起、朝藤八殿被来候、八ツより東郷藤十郎

殿・町田藤八殿被来、夜入五ツ時分藤八殿二者被帰、

○一静洞殿極々太切之為御知有之候、
（島津忠寛、重富）

十四日 晴、夜大雨、

四ツ時伊地知八郎右衛門殿被来候、
一静洞殿今晩御死去之為御知来候、

十五日 晴、

戸十郎来、夜入おつやさま・猪兵衛殿被来候、九ツ
時分御帰、

○一静洞殿今晩私領御引越、

十六日 晴、

今日出
殿、帰之御届申候、藤八殿・玄迫来、夜入寺師休五
郎殿・宫里喜次郎殿被来候、

十七日 曇、

安田助左衛門殿被来、昼よりお広との被来、夜入塩

田清次郎来、四ツ後より浄光明寺・福昌寺等参詣、

伊藤家・町田家・重富杯へ罷出候、

十八日 曇、

源太夫殿・相良作太郎殿被来、藤八殿同断、相良氏

二詠歌持来、左二写、

御尊詠をくたし給ふ御返し

冬の野の草もかしこきことの葉の

つゆのめくミにいろそうるほふ

言の葉の露か、らすは冬の野の

しもの下草いかて匂はん

十九日 曇、

朝野やしきへ馬より参、帰伊藤六郎右衛門殿江一刻

参、亦六郎右衛門殿二も被来、藤八殿同断、

二十日 雨風、

不老院様二十五回忌御法事二付、五ツ半より花舜軒

江参、用頼町田藤八・役人福留七左衛門参、九ツ過

御法事相済御墓参、御墓江者小僧参、九ツ半帰宅、

類中其外菓子共遣シ、伊藤六郎右衛門殿・同万次郎

殿其外兼而内用世話いたされ候藤八殿・宮里氏・東

郷氏被来、花和尚来候、各暮過被帰、東郷氏ハ四ツ

時分被帰候、

二十一日 晴、

朝六ツ過より田畑氏へ参候、五ツ過帰、八ツ後花の

との被来候、不老院様へ御墓参二而帰二被来候、

(齊彬) 順聖院様へも参詣之由、花のとのハ不老院様和歌浦

様二而、御年寄御勤之節部屋子之由二而、于今折々

御墓参等いたされ候、緩々被相嘶暮前被帰候、御年

寄迄被相勤候而、当分者伊敷妙谷寺より八丁程先キ

二被致居住候由、町田藤八殿二も朝も八ツ後も入来、

暮より吉国壮吉来、四ツ過帰候、無程臥候事、

二十二日 快晴、

朝七左衛門出候、昼より拙者嫡女川上家へ参居候お

藤親子列来候、

二十三日 晴、

朝田畑氏へ参候、八ツ後より竹翠殿被来、夜入四ツ時分被帰候、七ツ時分川上勘解由殿一刻被来候、

二十四日 晴、

朝田畑氏へ参、帰掛平佐安田氏江参、帰宅候得者先刻藤八殿被来、戸柱町田家より伝言有之候由、江戸より平馬・郷十郎書状来居、京都よりも内膳書状来居候二付来呉候様と之事二候、則差越、八ツ過帰宅候、七ツ時分より藤八殿又被来、夜四ツ半被帰候、無程臥候事、

二十五日 晴、

朝諏訪家へ参、帰二町田家并種子島六郎殿・佐志島津登殿へ参、四ツ過帰宅、昼過おこととの一刻被来、今日より忌明二而被出候、

名越時敏日史

慶応三年
卯正月元日ヨリ
同四月晦日迄

日史六十八之卷

慶応三年丁卯正月

○朱印ノ所マテ

名越時敏



糺合済

○元旦 快晴、

朝六ツ起、五ツ時分吉次郎・徳熊吉書認、拙者ニモ
同断ニテ左之通、

試毫

眉寿万年

明方ナゲシニ掛タル年繩  如斯ヲ見テ、

よりふしの玉に似たるや年の繩

扇子ヲ開キタリケレハ霧ニ菊ノ絵ナレハ、

秋霧のたつをこりまで咲菊の

盛りのいろも見ゆへかりける

はなの盛りのいろも見ゆへし

九ツ時分ヨリ上方礼廻り、福昌寺御墓ナト参リ夕方

帰宅、家内中規式盃共イタシ候、四ツ時分臥候事、

客来記ニ不暇、

○二日 快晴、

朝六ツ起、明日飛脚立ニ付平馬・郷十郎へ江戸へ遣

候書状認、尤、品物等遣候ニ付終日取込、後客来之

人々ヨリ承候得者、来ル六日蒸気船ヨリ立之由候、

夕ヨリ役人七左衛門出候テ、旧例之通蔵祝ニ付餅之

吸物ニ俵子有之候、夫迄ニテ家内中盃、四ツ時分臥

候事、客来記ニ不暇、

○三日 晴、

朝六ツ起、五ツ時出殿、御太刀進上ニテ年首御祝義
申上候、四ツ半退出、帰掛千石馬場ヨリ西田・園^{（草牟田）}傘
田方祝廻、城ヶ谷越ニテ道筋礼廻イタシ七ツ時分帰
宅、平馬へ遣候品物共仕合方イタサセ、付添下知イ
タシ候、客来人数記スニ暇アラス、四ツ時分臥候事、

シ候テ暮帰候、夫ヨリ猪兵衛殿被来四ツ過被帰候、
無程臥候事、

六日 晴、

何モ無事、夜入伊彦介殿・宮喜次郎との被来、九ツ
時分被帰候事、

○四日 晴、

朝六ツ起、客来人数記ニ暇アラス、八ツ後ヨリ浄光
明寺ヨリ上之原・冷水辺礼廻リイタシ候、四ツ時分
臥候事、

○七日 晴、

一 小林衆中山口平太郎ヨリ梨木二本接遣候ニ付、居宅
後之方馬場通り畠脇へ二本共植付候、

朝六ツヨリ野屋シキへ参候テ、小林時任強太左衛門
ヨリ接木接付遣具候梨木二本、一里塚長瀬市郎次前
畠之内へ植付、九ツ時分帰候、八ツ後ヨリ加藤家稽
古始へ出稽古イタシ候、吉次郎・徳熊モ列参候、吉
次郎当年ヨリ始テ稽古イタシ候、徳熊ハ未稽古イタ
サス、夜入四ツ時分臥候事、

○五日 晴、

暁六ツ前起、六ツ時ヨリ荒田方礼廻イタシ、四ツ過
帰宅、九ツ過須木之囀中山宇平太一杖持来、召呼
酒共出シ給帰候、塩焔共遣候、無程藤八殿被来、七
ツ時分ヨリ高岡・綾・倉岡・穆佐役々来候、酒共出

○八日 雨、

朝六ツ起、四ツ半ヨリ梅田家稽古始ニ出候、演武館
宅共ニ参候、帰ニ貴島平八殿へ参候、夕方帰宅、無
程お筆来、四ツ時分帰、無程臥候事、

九日 雨、

八ツ後ヨリ藤八殿被来、夕方被帰候、

○十日 雨、

四ツ時出 殿、

(頭注朱書)主上御抱瘡
主上御抱瘡御難痘二付、

太守様
中將様 江伺御機嫌申上候、帰二大興寺・町田家へ參、

八ツ後帰宅、夜入四ツ半臥候事、

十一日 晴、

朝六ツ起、朝藤八殿被来、四ツ伊地知八郎右衛門と

の被来候、夕六郎右衛門殿被来候、四ツ過臥候事、

十二日 晴、

朝六ツ起、浄光明寺・福昌寺參詣、四ツ時平佐へ一

刻立寄出

殿、九ツ過退、直帰宅之事、

十三日 晴、

朝六ツ野屋敷へ參、帰二一刻藤八殿へ立寄、五ツ過
帰宅、四ツ出

殿、九ツ過退出掛平佐へ一刻立寄、直二帰宅、八ツ

後藤八殿・笑之丞殿被来候、暮ヨリ宮喜次郎殿被来儀、

四ツ過被帰候、無程臥候事、

十四日 快晴、

花舜軒御墓詣、国府之銀蔵来、

十五日 晴、

朝六ツ起、四ツ前戸柱町田家・奥山氏へモ一刻參、

八ツ後町藤八殿被来、夜入五ツ過被帰候、八ツ後彦

太夫殿一刻被来候、

十六日 霜氷、

朝六ツ過起、八ツ後伊藤彦介殿・名越戸十郎殿・町

藤八殿・町少輔殿・東郷藤十郎殿被来、奥山藤左衛

門殿ニモ被来、少輔殿・戸十郎殿ハ一刻、其外ハ暮

ニ被帰候、今日仕立物来候、

十七日 桜島雪、

○ 朝六ツ起、五ツ時分ヨリ野屋敷へ参候テ、植杉七百本・檜三百本伊敷御苗場ヨリ申請、今日植付候、飯屋奥野呂上之廻唐金竹有之辺亦坂ノ登立馬場脇原之脇へ植付候、八ツ時帰宅、伊藤要之介殿被来、今晚ニハ彦介殿ヨリ来候様承、暮ヨリ参、九ツ時帰宅、直ニ臥候、八ツ後ヨリ藤八殿被来、夜入被帰、仕立物モ今日モ来候、

十八日 如霜雪、

朝六ツ起、四ツ時出
殿、九ツ時退出候得者伊地知八郎右衛門殿来儀也、
十九日 快晴、
朝六ツ過起、四ツ後安田助右衛門殿来儀、九ツ時分ヨリ下方諸所参、夕方帰宅候事、

二十日 晴、

朝六ツ起、四ツ時出

殿、藤八殿被来、八ツ後上村笑之丞殿来儀、無程被帰候事、

○二十一日 快晴、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ野屋敷へ参、国府へ家来之鮫島善兵衛遣松苗為致世話候処、昨日相届候ニ付千式百本植付候、先日今和泉西平屋敷之杉穂貫ヒ為取置候ニ付七百五拾本今日差方イタシ候、惣テ原之畠脇ニテ候、此式十四五年跡ヨリ追々差又ハ植付候杉、当年迄ニテ三千本余根付居候半ト存候、日比差方功者二成、当年ノモ惣テ付候半ト存候、植杉ハ弥壹本モ無相違可根付候、檜木モ白鳥ヨリ昨年持帰三百本余モ候半植付置候処、皆根付能進相成居候、当年植付候檜木ト共六百本ニテ候、

二十二日 快晴、

朝六ツ起、朝玄与殿・市郎次殿被来、四ツヨリ奥山藤左衛門殿・前川為兵衛殿同伴ニテ集成館へ参候、夕方帰宅候得者お藤・お筆来居候、奥山氏・前川氏

ニモ来儀ニテ各夜四ツ過被帰候、無程臥候事、

二十三日 曇、

朝六ツ起、八ツ後ヨリ美代藤兵衛殿・町田藤八殿被
来内用之儀共相頼候、暮ヨリ島出雲殿へ緩々参候テ
九ツ前帰候、直ニ臥候事、

二十四日 晴、夜入雨、

朝藤八殿来儀、夜入長瀬市郎次との・上原玄与殿被
来、四ツ過被帰候事、

二十五日 小雨、

朝藤八殿被来候、四ツヨリ野屋敷へ参カテ苗八百本
植付候、

二十六日 晴、

朝一刻野屋敷へ参候テ桑苗五拾本植付候、先日伊敷
御苗場ヨリ申請置候、

二十七日 快晴、

朝六ツ半時分川村七郎左衛門殿父子被来、先日高岡
ヨリ被帰候由、八ツ後ヨリ美代藤兵衛殿・町田藤八
殿被来候、内用之儀相頼候ニ付テ也、家来之名越清
左衛門・塩田武右衛門ニモ同断ニテ来候、東郷藤十
郎殿夕方一刻被来、各夕方帰ニテ候、暮過ヨリ佐土
原御家老樺山^(久舒)舍人殿・仮屋守宮里喜次郎殿被来、児
玉佐平次殿ニモ暮ヨリ被来、各八ツ前被帰候、直ニ
臥候事、

二十八日 快晴、

四ツ前出 殿、明日ヨリ高岡之様差越候御届申上候、
〔^(久武)両御側御内証之御届モ申上候、帰ニ御家老桂右衛門
殿へ参拜謁、夫ヨリ不働参詣、八ツ過帰宅候得者家
来村田卯兵衛昨日不快ニテ不埒イタシ候由申出候、
町田藤八殿ニモ被来、各々夜四ツ半帰ニテ候事、

二十九日 晴、

朝野屋敷へ参候、昼彦太夫殿・万次郎殿被来、四ツ

半時分隊候事、

日史第六拾九之卷

慶応三年丁卯二月

朔日 朝小雨、後晴、

朝六ツ起、伊藤万次郎六ツ過被来、五ツ過被帰候、
同刻名越彦太夫殿被来、夫ヨリ伊藤彦介殿へ一刻、
野屋敷へモ一刻參、帰ニ伊藤六郎右衛門殿・名越彦
太夫殿へ參、四ツ半帰宅、八ツ後藤八殿被来、同刻
ヨリ六郎右衛門との被来、夕ヨリ万次郎殿・宮里氏
被来、各四ツ過被帰候、

二日 快晴、

朝六ツ起、九ツ時分ヨリ藤八殿・宮里喜次郎殿被来、
各八ツ半時分被帰候、夕方ヨリお筆来泊、暮ヨリ宮
里氏被来、七左衛門・塩田清次郎ニモ来、各四ツ半
時分被帰候、無程隊候事、

名越時敏（花押）

三日 後雨、

朝六ツ起、朝藤八殿・喜次郎殿・戸十郎殿被来候、
九ツ前氏神様・御先祖様へ參詣、前へ立寄、蛭子御
社・佐土原飯屋樺山舎人殿（久留）へ參面会、夫ヨリ宮里氏
へ參、船許へ參候、吉次郎ニモ高岡之様列越之賦ニ
テ船許迄參候得者、俄ニ風邪氣ト相見得、頭痛杯イ
タス塩梅故帰候、八ツ前前之浜出帆、重富沖辺ヨリ
向風ト相成、福山迄ハ迎モ六ヶ敷候段船頭申出候テ、
漸々加治木湊へ取付候、今夜船泊ニテ、明朝ニ相成
候ハ、浪モ沖ニ相成可申、福山迄早天可差越ト存船
泊イタシ候、
今宵こそ実にもうき世のかち枕
なみにゆられて夢も結はず

○

扶桑諸国硝石品砲術
明鑑火焔製造法拔書

△加州ノ五ヶ山、加州領越中国ニ属ス、上製ハカリ他
国ニ出ル、コレヲ本邦第一硝石ノ上品トス、煎鍊ノ
法此書ニ述スルカ如シ、

△安芸東条芸州領備後国ニ属ス、上製ハカリ他ニ出ル、

コレヲ本邦第二ノ品トスレトモ、加賀ニ比スレハ大ニ劣リテ其間ニ幾等ヲモ入ルヘシ、

△周防ノ山城山城ハ地名ナリ、国名ニ非ス、上製ハカリ他ニ出ル、コレヲ第三ノ品トス、コノ品石州ヨリモ出ル、

△(飛彈カ)飛彈ノ白川

△信濃ノ木曾

△出羽ノ最上

△武藏ノ秩父コノ品甲州ヨリモ出ル、

コレヲ大体其次トス、其外四国ニテハ伊予・阿波、北陸ニテハ越前ヨリ出ル所大体右之品位ナリ、此等之品諸国ヨリ産スル事猶多ク有トイヘトモ、一々枚挙スルニ暇有ス、

九州ヨリ産スル所ハ豊後・肥後・肥前等多ク産スレトモ、多クハ下品ニテ此等ノ下ニ出ルナリ、関東所々・奥州等ヨリモ多ク産スレトモ、多クハ下品ナリ、然レトモ生硝ヲ分量多ク採リ得ルコトハ東国ヲ第一トス、此書述スル所生硝ヲ采ルノ法、頗其法ヲ

雑ヘ記ス、

四日 小雨不止

今日者四ツ過迄見合候得共、福山迄差越候天氣ニ無之候故町へ上陸、今日ハ人馬之手当モ出来兼候ニ付、明日福山迄差越候先状差出、加治木町へ一宿也、役人新納仲左衛門・与頭本田郷兵衛旅宿へ見廻、

五日 朝小雨、

朝五ツ時加治木町打立、案内兩人町廻レ(外カ)ニテ断候、国府浜之市ニテ人馬繼之間町休、福山八ツ時着、町泊役々出候、

六日 快晴、

朝五ツ時福山打立、財部ニテ人馬繼之間休、郡見廻出候、案内兩人無程断候、都之城境迄案内兩人来居、都之城町着、領主ヨリ飯馳走有之、人馬繼之間休、又案内兩人出候間町廻レヨリ断候、高城境迄案内兩人来居候、高城町泊、噯・与頭・郡見廻出候、

七日 快晴、

朝五ツ時高城打立、案内兩人無程相断候、同郷之内

貴島十兵衛人馬休ニ付暫休、九ツ半去川ニ見休右衛

門所迄着、烧耐共出飯逢馳走候、此所迄寺師休五郎

殿父子・地頭横目毛利郷左衛門来候、尤、案内兩人

高岡境来居、此所ヨリ舟ニテ下リ、七ツ過高岡飯屋

着、寺師氏被来、役々出候、暫面会、地頭横目毛利

郷左衛門・市来正太郎昼ヨリ来居、夜入五ツ時帰候、

寺師氏ニモ同刻被帰候、無程臥候事、

一高岡中村源兵衛・石神満右衛門、拙者出府中役目代

申付候者共ニテ出候、

八日 快晴、

朝ヨリ寺師氏被来、今日ハ諸道具取集候、所役々昨

日不出候人々出候、面会、

九日 夕小雨、

朝六ツ起、四ツヨリ寺師氏被来、穆佐・倉岡・綾役々

出候、行司・竹木見廻・出府中役目代之者出候、高

岡ヨリ此内京都為守衛相詰居候者今日着ニテ出候、

名前、
組頭

入田才右衛門

西平一

二見武一郎

吉富源八

河上次郎兵衛

大岐恕介

同宗太郎

垂野七兵衛

春田周右衛門

長友次郎二

横目

山田勘左衛門

毛利八左衛門

田原孫一

長野直八

中村作右衛門

甲斐直次郎

本田善次

海老原静助

山本伝太郎

坂元甚助

十日 晴、

朝六ツ起、四ツ時ヨリ寺師氏被来、昼時分倉岡郡見

廻出候、出府中役目代申付候者候、高岡地頭横目毛

利郷左衛門出候、

一御手山掛中原太郎殿今日着之由候、

十一日 晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ寺師氏被來、郷左衛門出候、
今日ハ直心影之流并示現流致見分候、八ツ過相濟、
入田才右衛門・山田助左衛門出候、紙座見聞役石神
吉左衛門殿外迄見廻之由、

十二日 晴、

今日者役目呼出、豚之汁ニテ飯振廻候、飯前吸物巻
ツ・井三ツニテ酒出シ、取替シ迄致候、皆々少々ハ
酒モ給候、人数拾八人有之候、

十三日 快晴、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ寺師氏被來、今日ハ八代之示
現流并柔術致見分候、寺師歌一首遣、
風吹と散もはしめぬ家桜

いまを盛りのいろを見ましや

われならてしる人もなし家桜

けふこそ花の盛り也とは

寺師氏來ラレタントヒト蒜ヒト宍ヒトナト煮テ置シニ、夜モ入ヌ
レ八月サへ涉リテ又一首ツカハシ候、

月と花ひるとはかりに成にけり

今宵とてこそとひも来ましや

シテ暮過ヨリ來ラレ、四ツ半被歸候、無程臥候事、

十四日 晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ寺師氏被來候、四ツ過ヨリ薙
刀師内野源太左衛門・鏡智流鎗術取次長野助兵衛見分、
八ツ前相濟、当所役目代之人数・綾同断并綾上京歸
式人出候、各面会、夜四ツ過臥候事、

十五日 晴、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ寺師氏被來、四ツ後ヨリ練士
館へ出候テ讀書講義イタサセ候、夜入種子島六郎殿
被來候、

十六日 晴、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ穆佐へ馬ニテ差越候テ文武致
見分候、八ツ前相濟、夫ヨリ湯治場へ參、風呂為焚
候テ二篇入湯、腫物・疔癩坏余程効能有之由ニテ他

領ヨリモ多ク来居候、二ヶ所ニ薬水沸出候、大抵一
丁程相隔候得共、効能ハ同様之由候、七ツ時分打立
帰、未日高ク高岡着イタシ候、夜入四ツ時分臥候事、

十七日 雨、

朝六ツ起、寺師氏被来、四ツ後倉岡地頭横目吉井権
兵衛来、無役衆中惣人数共ヨリ横目萩原平兵衛へ遠
慮申付、当分平兵衛ニハ寺へ差越居候由申出候、亦
佐土原藩中御料穂北村ニテ異変之事申出候、左候内
当郷嚶長野助兵衛出候テ、亦佐土原異変到来ニ付、
佐土原家老ヨリ当所嚶へ書状ヲ以申来候趣申出候、
則鹿兒島へモ言上、与頭・横目為聞合差遣候、拙者
ニハ又倉岡之一条モ不被差置、為治方差越承候得者
居屋敷売買之事ニ付萩原不義之事有之、衆中惣人数
申談義絶イタシ候由、寺へハ自分ヨリ差越、坊主相
頼断申含之由候、今晚ハ倉岡一宿イタシ候、五ツ半
時分臥候事、

十八日 朝小雨、後晴、烈風、

夜前ハ倉岡へ泊居、九ツ時分倉岡打立高岡之様帰、
八ツ半時分飯屋へ着、穆佐・倉岡・綾・高岡ヨリ佐
土原聞合書出候、郷左衛門出候、善助同断、夜入種
子島六郎殿被来、四ツ時被帰、当所嚶谷口彦五郎出
候、御用之儀有之、寺師氏へ申遣、四ツ半被帰、無
程臥候事、

十九日 風、

朝六ツ起、安藤七郎先日ヨリ佐土原へ遣置候処、今
朝帰候由ニテ出候、市来仲介・長野九八郎モ先日ヨ
リ富高手代方へ遣置候処、只今帰候由ニテ出候、高
岡与頭市来伸左衛門出候、御領森永村ト高岡之内向
高ト入組之儀有之、向高之者ヲ兩人森永へ留置、御
手山材木下シ方不相成様川へセキ掛候由、一々不法
之イタシ方有之段申出、就テ少々人数召列留置候兩
人取返シ、川セキモ為取可申哉之段申出候ニ付、未
応接モ無之候二人数迄召列差越候テハ、御大国ニテ
隣国へ温和之御所置振ニモ無之、御徳義相輝候道理
無之、百姓共ニテ利非不相分候故、人数坏ハ不召列

差越、致理解候ハ、手モナク聞入相済可申、乍其上
不法ニ申募り候ハ、亦

御国威ヲ以相示候所置モ可有之、一先致理解候様申
聞、乍然在方之事ニモ候間、郡奉行ニモ差入有之候
間、彼方ヘモ右之段申出候テ、何分温和ヲ以承服之
処第一之段手厚相示シ候、然処又々来リ、右之一条
ニ横目遣候処、中途ニテ在役ヘ行逢候得者、在役方
ニテ何事モ解ケ合、留置候兩人モ差返シ、川セキモ
早々取除候由ニテ、中途ヨリ立帰、差越候ニモ不及、
役目共些早マリ候段申出候、穂北村混雜之儀ニ付又
今日大宿次差出候、寺師休五郎殿今朝ヨリ被来、八
ツ半被帰、夕方福山地頭堀四郎左衛門殿被来、寺師
氏同断、各四ツ過被帰候、無程臥候事、

二十日 夕小雨、

今早朝ヨリ佐土原家老新納巨・伊集院新右衛門当ニ
テ、文言大意、此節異変之儀ニ付テハ各様御一同御
配慮之筈ト存申候、就テハ拙者ニモ当分御隣境地頭
承居、不被差置

御間柄様御事始終之事実心得ニ相成儀モ御座候付致
承知置度、旗預寺師休五郎御面謁之上御弁解被下候
様相願ト之書面相認、寺師休五郎殿遣候、高岡嘜市
来善助出候、先日ヨリ鮫島善兵衛并庄次郎飯野秋丸
仲左衛門方ヘ相頼置候馬為牽ニ遣置候処、今夕方帰
候、青毛馬三才為一礼泥障并轡・干鯛杯為持遣候、

二十一日 雨、

朝六ツ起、高岡嘜本田甚七・市来善助出候、昼過野
尻之千次郎来候、一宿ニテ夕呼出候、今日庭前之花
ヲ見テ、

年毎に遅くとく咲花見れば

木々の心もこゝろこゝろよ

遅くとく咲花見ればおしなへて

おなし春とはいはれさりけり

花にしる人もひとよのひと盛り

さかりのいろのよくもありてし

二十二日 晴、

朝六ツ起、千次郎今四ツ過打立帰候、同刻福山地頭堀四郎左衛門殿被来、今日ハ緩々被相嘶候様申候テ袴抔取ラレ、七ツ半被帰候、九ツ時分此節番兵人数式拾人へ面会、亦佐土原ヨリ用人市来益太郎御使者被成下面会、訊ハ先日寺師へ書状相添遣具別テ御懇意申上候段辱候趣ニテ候、夕方ヨリ毛利郷左衛門来候、四ツ時分帰候、昼市来正太郎ニモ出候、今晚五ツ時分寺師氏被帰候、

二十三日 霜降、晴、

朝六ツ起、五ツ前ヨリ寺師氏被来、今日佐土原一件大宿次御用封差出、四ツ前ヨリ郡奉行種子島六郎殿被来候、各八ツ半被帰、郷左衛門出候、与頭大迫弥四郎・河上次郎左衛門出候、八ツ過英式兵隊調練見分、七ツ過志賀幸輔へ拙者持馬式疋ニ為乗見候、此節飯野ヨリ取寄候青毛馬始テ乗候、夕ヨリ郷左衛門来、今晚大宿次ニテ黒田嘉右衛門ヨリ左之通、

右者近他領江御用有之、夜白被差越候付、着之上其許人数式拾人位同人江被召付候間、其手当可被申渡置候、左候而、同人方ヨリ又々人数等之儀掛合有之候者、又々人数可被差出儀も可有之候間、其心得を以手当いたし可被置候、此旨右衛門殿依御差図早々申越候、以上、

二月廿二日已之下刻仕出
二十三日酉刻届 黒田嘉右衛門

高岡

地頭

名越左源太殿

右ニ付申付候人数左之通、

与頭

長野九八郎

与頭

田原孫右衛門

横目

安藤七郎

徳丸卯助

柚木崎良之助

黒木藤次郎

田中郷右衛門

西平一

吉富源八

竹田泰助

中村平八

山口雄助

和田八七郎

比志島彦太

志賀幸輔

本田吉之介

御軍賦役見習

黒田了介

(清隆)

谷山十左衛門

本田与九郎

是枝強左衛門

田尻仲左衛門

岩崎早八

海老原静介

河上次郎兵衛

暮ヨリ種子島氏ニモ被来候テ、九ツ時分被帰、寺師氏ニモ同断ニテ、同刻過被帰候、

二十四日 霜、快晴、

○ 朝六ツ前起、黒田了介六ツ時着之届承候、五ツ半時

分右黒田氏被来、寺師氏ニモ同断、八ツ過ニモ黒田氏被来、御領穂北一条ニ付高岡衆中市来仲介呼出被開候処、穂北村ニハ北方・南方ト庄屋モ相分居、双方共庄屋共兼テ懇意申由ハ此内ヨリ承居候処、此節北方庄屋原田三左衛門ヨリ仲介へ書状ヲ以、三左衛門儀、此節之一条ニ付テ別テ込入次第トフソヤ兼テ懇意申候由身ニ、命ダケハ有之候様働呉候様平ニ頼来候由、能折柄ニ候故、右仲介遣候テ下死人差出候様厳敷迫リ付候テ、無左候得者最早鹿兎島城下ヘモ相知、是非下死人取候様申来迎モ其儀不相調候ハ、

城下元ヨリ人数追々參、四ヶ郷之人数ヲ以攻付、下

死人相請取時機ニモ可相成、左候へハ如何様之大変

二相及候モ難計、何レ丑藏へ始為手差者有之筈、其

者差出候ハ、随分御方之儀ハ宜都合、仲介請合ニテ

候段申掛、黒田氏ニハ佐土原之様差越、佐土原役々

ト供ニ表通下死人差出候様申募り候ハ、下死人相渡

候半、下山人サへ取付候ハ、佐土原之名義ハ立候ニ

付、北南双方庄屋共ニ露命助り候様迄モ相働候ハ、

右之

御恩徳ヲ以一統心服難有可奉仰候半ト承、至極上計

ニ可有之可然段申候処、小子ヨリ仲介へ右之段申付

呉候様被申候ニ付、則呼付了介殿前ニテ申付候、明

朝ヨリ了介殿ニハ佐土原之様被差越、仲介ニハ原田

三左衛門方へ参答候、七ツ時分了介殿被帰、同刻過

寺師氏一刻被来、夫ヨリ明日番兵便ヨリ藤八殿并宿

許・内膳殿杯へ之書状相認候処、暮前宿許書状相届

右之内ニ江戸ヨリ平馬・郷十郎書状来候、正月七日

八日仕出ニテ候、宿元ヨリのり・ゆべしナト来、書

状ハ認済居候得共、又々書添小柳筒リ壺ツ本田甚七

方迄遣シ相頼候、暮過ヨリ宮里喜次郎殿被来、此節
佐土原又之進様御越ニ付、カイヤモリ仮屋守故被差越候、佐土
原御用聞之由、鹿兒島下町人平野屋何某被列来召呼
候、兩人共ニ泊ニテ候、然ル処夜五ツ時分別紙之通
佐土原御家老樺山久軒舎人ヨリ申来候、

益御勇健可被為成御在職、恐悅御儀奉存候、しか
れハ此程穂北卷之儀ニ付而者段々御配慮被成下
候段、誠以御間柄と者乍申御厚志之程別而難有奉
存候、就而者御内分今晚御当所江御見舞申上度御
座候、御用障も御座候ハ、今晚歟明早朝歟之内尊
館江参昇仕度、押掛参上ニ而も如何敷御座候付以
使奉伺之度御座候、右可奉得尊意如斯御座候、恐々
敬白、

二月廿四日

樺山舎人

御仮屋ニ而

左源太様

御用達衆中

右之通候処、故障無之段申遣候処無程被来、八ツ過
被帰候、

二十五日 曇

○ 朝六ツ起、宮里氏・平野屋何某夜前ハ泊リニテ、四
ツ過被帰候、五ツ前高岡衆中今明日ヨリ番兵へ出候
人数左之通、
噯

○ 是枝八右衛門

中村源右衛門

榎木平千代

本田半左衛門

山口新新太郎

本田惣次郎

海老原才助

有屋田善七郎

本吉千代岐

有屋田治平

中村吉次郎

岩崎甚四郎

久保田新之丞

落合勘六

中村直熊

有馬善太郎

柚木崎嘉一郎

宇都源太

海老原直一

野元一郎

○ 右之者来候ニ付面会、各念入相勤候様訊テ相達置候、
朝寺師氏被来、九ツ時分家来野元休之丞へ書物為読

教モイタシ候、本田次郎五郎昨日八代勤番ヨリ帰之由ニテ出候、八ツ後寺師氏被来、倉岡先日之一件ニ付テ之事承、又穆佐役々ヨリ押々養子申付候一件之事承、高岡与頭河上次郎左衛門一刻出候、市来正太郎同断、夫ヨリ平馬・郷十郎へ遣候江戸状并宿許状認、七ツ半時分佐土原御家老新納巨郡奉行之由此節之穂北騒働掛之由、市来増太郎被来面会イタシ候、暮過当所噺長野助兵衛出候、鹿兒島ヨリ左之通申来候由申出候、

○ 此節穂北表騒働ニ付、御人数被差出候時宜ニ及候ハ、関外四ヶ郷之儀一番手ニ而出軍可被仰付候間、即より其心得ニ而可罷在候、左候而、其内猶又彼表之形行無手拔様致探索、時々届可申出候、以上、

卯二月廿三日

御軍賦役頭取

御軍賦役

高岡・綾・穆佐・倉岡

噺中

○ 右之通申来候得共、前ニモ相記候通折角ト穩便ノ計ヒニテ

御徳威相輝候様と之趣意第一之事候処ニ、四ヶ郷人数惣テ内達共ニ相成候テハ余リ騒々敷相成、折角之上計モ調兼候半、明日三ヶ郷噺・与頭当所迄召呼篤ト致示談、人数サへ取調置候得者急速出兵調兼候儀ニモ無之候間、如何可有御座哉之段承候、至極尤之事ニテ、明日早々当所役目之者共ヨリ外三ヶ郷来候様申遣、四ヶ郷打寄遂吟味、其上拙者ニモ可承候間、篤ト致示談、人数取調置可然ト存候段相達候、谷口彦五郎へモ申遣出候、寺師休五郎殿へモ申遣、各用向相達候、昼来候佐土原家老并市来増太郎へモ申遣、明日ヨリ鹿府之様差越之事候ニ付、此方之当分穂北一条取扱向委曲相咄、右衛門殿へ面会之節無残所申出被具候様申置候、各九ツ時分被帰候、無程臥候事、

二十六日 小雨後晴、

○ 朝六ツ起、六ツ半高岡噺是枝八右衛門へ来候様申遣候処、折角参考ニテ門前ニテ使へ逢候由無程来、今

日ヨリ番兵ニテ出府ニ付、穂北一条事実且取扱振之事委敷相嘶、御軍賦役頭取・御軍賦役之間へ右之趣委曲相嘶置候ハ、心得ニモ可被相成候付、着候ハ、直ニ申出候様申付候、高岡暖谷口彦五郎招呼、昨日申来候御手当向之一条存寄相達候、地頭横目毛利郷左衛門出候、高岡暖長野助兵衛出候、佐土原飛地妻迄為聞合誰欺遣候ハ、可然哉之段申出候、尤之事ニテ其通申付候、九ツ過寺師休五郎殿・種子島六郎殿被来候、来ル廿九日佐土原侯当所御泊ニ付テ之事共談候、

○ 八ツ時分谷口彦五郎外二綾・穆佐・倉岡暖出候、面会御手当向之儀人数取調置候様申付候、高岡二隊、高岡・綾ニテ一隊、穆佐・倉岡ニテ一隊之賦、夜五ツ半時分臥居候処、九ツ時分市来仲介、佐土原ヨリ市来仲左衛門へ之自分状相届候ニ付見候処、佐土原ヨリ相手敵敷迫り掛候処、相手ハ穂北北方頓々原之嘉兵衛ト申者之由、少々手疵モ逢居、此者始手差候相手ニ相違無之段申出候由、佐土原ヨリ召捕候様申出候由、尚又問糺弥此

者相手ニ相違無之トノ証文相受取賦之由ニテ、御軍賦役見習黒田了介殿（清隆）ニモ右之首尾相成次第第二ハ引取之筈候由申来候、仲左衛門へモ面会イタシ候事、

二十七日 快晴、

○ 朝六ツ起、来ル廿九日佐土原侯地頭仮屋へ御泊ニ付、今日ヨリ多人数相集草取等有之候、四ツヨリ地頭横目毛利郷左衛門出候、同役市来正太郎八ツ時分ヨリ出候、明後廿九日佐土原御嫡子又之進殿当所地頭仮屋御泊ニ付、今八ツ後ヨリ談合役仮屋へ移り候、郷左衛門・正太郎ニモ付来候、談合役川村七郎左衛門殿ニハ当分出府中三日之内帰ニ候半歟、夕方郷左衛門・正太郎帰候、暮過ヨリ高岡与頭長野九八郎佐土原ヨリ帰来候、昨日佐土原ヨリ相手之者为捕方差越、今朝丑藏子ヨリ首ヲ放シ、死体ハ向へ返シ、村役之者共六拾人程是迄為断、佐土原へ来候段申出候書面等段々有之候得共、分り兼候ニ付書写、跡以可差出段申出候、六ツ半毛利郷左衛門来、佐土原首尾之事共暫相嘶、四ツ時分臥居候処、八ツ時寺師氏被来、

佐土原騷働之一件首尾相成候書面一綴り嘸ヨリ届申

出候、則寅之刻付ヲ以御届申上候、昼当所締方権原

助左衛門殿一刻見廻有之候、

二十八日

朝六ツ起、談合役々所一木之桜盛りナルヲ、

名残ある人のためとやおもふらん

あを葉か中の遅桜はな

咲るその青葉かなかの遅桜

けふたに風のちらさてそミン

○

四ツ時ヨリ抜米取締横目兎玉藤次郎殿被来、暫被相

嘶候、高岡与頭市来仲左衛門出候、四ツ過当所締方

横目大河平彦六殿被来、同刻ヨリ寺師休五郎殿被来、

人別改帳次書イタサレ候、九ツ時分種子島六郎殿被

来、倉岡取納一件并佐土原御出府一件之事共段々承

候、暫被相嘶候、市来正太郎出候、市来百太郎ニモ

一刻出候、本田甚七・田原孫右衛門外迄来候、明日

川村七郎左衛門トノ被帰候、先状来候由、八ツ後毛

段々申承候、夕方市来仲介来、只今佐土原ヨリ帰候
由、穗北表之一条事治り候諸首尾承届候、
夕方に残花ヲ一首、
咲初し木々より猶もとめて見む
ことしのはるの花の名残に

二十九日 曇、

朝六ツ起、五ツ時寺師氏へ被来候様申遣、則時ニ被

来、昨日倉岡之一条ニ付テハ穆佐嘸両人ヨリ聞合イ

タシ、何ソ不審之廉モ無之事為相済上之事ニテ、尤、

取納一件ニ付テハ郡奉行請持之事ニモ有之、彼方ニ

テ右通之事申旨モ無之候間、先此方ヨリ聞合ニハ不

及段相達候、町田藤八方ヨリ夜前高岡竹木見廻等役

目代相済来候由、右書付共イタサレ、四ツ過被帰候、

四ツ時毛利郷左衛門来、今日佐土原御光着有之候事

ニ付テ進上物旁之事ニ付テ嘸方へ參候、無程帰来候、

又嘸本田次郎五郎鯉二尾拙者ヨリ進上之目録持来、

尤、面会種々申承モイタシ候、拙者ヨリ進上之使者

ニハ与頭本田宗左衛門罷越之由ニテ、嘸本田次郎五

即此前使者口上手控為見候、見候処此前ハ鹿兒島ヨリ掛テノ事ニテ、此節者拙者当所へ罷居、殊ニ直御見廻モ申上候事故、手控些可相替候ニ付、案文認遣候、綾ヨリ嘸大始良五右衛門・与頭田中駿助・横目野元弥次右衛門、穆佐ヨリ嘸野村市兵衛・与頭野村伝次、当所嘸大迫弥四郎出候、本田宗左衛門ニモ使者手控書面振之事ニ出候、申出之通可然段相達候、八ツ半時分宮里喜次郎殿佐土原ヨリ着掛被来、暫被相嘸候、綾役々控所無之立惑ヒ居候間、末之間ハ召呼相嘸候、七ツ過相成又之進殿御着有之、拙者罷出候儀時刻都合イタシ置候処、夕方罷出候様申来罷出候処、御面会候テ彼是ト御嘸共有之、先日穗北一条ニ付テモ段々ト預御世話、夫故旁都合宜候ト之御挨拶モ致承知候、無程御暇、引統寺師休五郎罷出候、暮ニ佐土原御家老樺山舎人（入舒）被来候テ、（島津忠寛）淡路守殿ヨリ御内輪御使者如ク之塩梅ニテ、先日穗北一条ニ付テハ御本藩ヨリ何篇御構ヒ被下、其上拙者ヨリ段々ト御都合申上故ヲ以都合能相濟、別テ得被思召候、就テハ自御使者ヲ以御礼可被仰述候得トモ、其内舎人

面謁厚御礼申述置候様ニトノ事候、無程被帰、五ツ半臥候、四ツ過宮里喜次郎殿被来候由、臥涯ニテ全不存、取次之者へ又之進殿ヨリ被成下候由ニテ御肴料三百疋持来之由、同刻市来仲左衛門・長野九八郎来候由、夕方モ来、佐土原侯御出之砌之事ニ先例ト相違之事有之段、家老迄右与頭兩人自身之考ヲ以為已後引合可申段申候、其事之首尾ニ候半、

晦日 朝小雨、後霽、

朝六ツ起、又之進殿今朝早ク御立ニ付テハ、拙者ヨリ御礼旁之儀ニハ不及段、宮里ヨリ訳テ承候ニ付、自身罷出候儀ハイタサス、寺師氏申遣被參呉、宮里へ引合拙者ヨリ御礼旁之儀モヨロシク計ラヒ呉ラレ候様相頼候、郷左衛門ニモ早天申遣直ニ来候、又之進殿六ツ半御立、右之首尾嘸大迫弥四郎申出候、本田次郎五郎ニモ来候、与頭市来仲左衛門来、昨夕之首尾承候、市来正太郎モ出候、地頭横目兩人共飯屋之様參、拙者彼方へ帰宜敷都合為知候様申聞候、夫ヨリ詠歌一首、

遅桜咲しもけさハ飛蝶の

しとふ羽風にみたれてそ行

九ツ時分飯屋へ移り候、郷左衛門・正太郎出候、無程帰、種子島六郎殿被来、暫被相嘶、八ツ後寺師休五郎殿被来、夜入五ツ時分被帰候、七ツ過馬乗見候、夕方帰、八ツ後談合役川村七郎左衛門殿ニモ只今着之由ニテ被来、暫被相嘶、宿元書状并油竹筒三ツ預り来被呉候、今日之便ヨリ大学或問二冊宿元来候、暮ヨリ岩次郎・善兵衛呼出候、四ツ時分隊候事、

日史七拾三卷上

名越時敏(花押)

慶応三年丁卯三月中

朔日 雨、

朝六ツ起、毛利郷左衛門・寺師休五郎殿被来候、外迄ハ市来善助・市来正太郎・市来仲左衛門・本田次郎五郎・本田宗左衛門・今井新右衛門来候、大迫弥四郎来候間致面会候、長野助兵衛外迄来候、七ツ時

分高岡此節行司申付候野村平之丞来致面会候、浦之名同郷竹木見廻申付候野村平之丞・児玉次右衛門右各御請御礼トシテ来候間面会イタシ候、比志島彦太来候、東郷藤兵衛殿此内ヨリ中風症之病氣ニテ、高岡衆中高木正右衛門家伝之灸治イタサレ度、拙者ヨリ直ニ承候テ絵図面ニテモ取仕立、能分り候様イタシ遣呉様承居候ニ付、則承含候処、正右衛門儀先達テヨリ相応之病氣相煩ヒ出勤イタサス候ニ付、地頭横目毛利郷左衛門ヨリ委敷承呉候様申聞之処、右彦太儀示現流取次モイタシ、彼方へ先達テヨリ申来居候付、明日ヨリ打立可致出府段申出候間、委敷伝言等イタシ度来呉候様申遣置候テ只今来致面会候、入田才右衛門来候、(施条飽力)施修炮申請之書付致内見呉候様持来候、川村七郎左衛門殿ニモ被来候、一刻被相咄候、当所噺谷口彦五郎来、佐土原侯御通行ニ付テ去川へ差越、何篇都合宜敷為有之段申出候、噺大迫弥四郎ニモ同断差越居、今朝首尾承候、夜入四ツ過臥候事、



外国奉行使節柴田日向守風聞書

ロシヤ
魯西亜

字漏生

窩々所旬礼畿
オ、ステレンレキ
フロヒセン

第那瑪爾加ヘシカトワカカネ註云
デーネマル

波爾杜ホルト瓦爾カク

航海小記付録

方今歐羅巴洲ニテ英利・仏郎西・魯西亜・字漏生・
(奧カ)窩々所旬礼畿ヲ五強国ト唱、其他意太里亜・和蘭・

第那瑪爾加等皆文明ノ政事ニテ、相互ニ条約ヲ押立

信義ヲ以テ相交リ居申候、然共其政府ノ内情ハ互ニ

異心ヲ挟ミ、若交際ノ間ニ条約ヲ背キ信義ヲ失ヒ候
(ニカ)

国有ハ、猶予ナク討伐シテ其国ヲ取ラント事ヲ望、

英吉利・仏郎西・魯西亜其志最モ甚シク、仏郎西

政府ニテハ英国ヲ亡サンコトヲ希望スル故英国ノ過

リヲ見出シ、是ヲケ条ニトリ罪セントノ企ヲナシ、

英国ノ仏郎西ニライテモ同様ナリ、魯西亜本ノマ、ヲ日本

及ヒ支那等ヲ取ラント欲スルノ内情ハマタナキニシ

モ非ス、然ニ一度条約ヲ取替タル上ハ罪ナキニ其国

ヲ伐事能ハス、譬ハ魯西亜ニテモ英吉利ニテモ私ニ

日本ヲ伐ントスル時ハ、仏郎西・米利幹等ヨリ日本

ニ応援シテ其妄(善脱カ)ヲ伐テ罪ヲ正シ申ヘシ、故ニ各国ノ

交ヲ結フニハ国ノ富強大小ニ不拘、只信義ヲ失サル

ヲ以主トシ、即今波爾杜瓦爾ハ歐羅巴中第一ノ貧国

ニシテ軍備ナキ国ナレトモ、条約ニ背カス交ニ信義

ヲ以スル故ニ、英仏ノ如キ強国ノ近方ニ在トイヘト

モ手出ヲナス事不能、近来合衆国(ヨリカ)ノ英吉利ニ使節有

リ、其趣意亜墨利加南北戦争ノ時、南兵ハ全謀反シ

テ、亜米利加大統領ノ為ニハ大賊タル事モ世ノ人皆

知ル処也、英吉利ヨリ南方ニ軍艦ヲ遣シ応援ナシタ

ルト、信義ヲ以交ル国ノ為ヘキ事ニ不有ト、依之亜

国ヨリ其罪ヲ正シ、莫大ノ科料ヲ不出ニヲキテハ、

即刻英国ヲ討伐スヘキヨシヲ申問候処、英国ニテハ

兎哉角通ントシテ暫時ハ押移リ候得共、終ニハ科料

ヲ出ス談判相決候由、過利員(科料カ)数失念仕候、英国強慕

トイヘトモ理ニ戻リ条約ニ背キ候得ハ、如此ニ候故

各国交リヲ結ヒ一度信義ヲ失フ時ハ一日モ其国難立

御座候、然ニ日本政府ノ外国ヘ対シ条約ニ違ヒ、信

義ヲ失フ事度々ニテ、加之(動カ)対スレハ永統無覺束、誠薄氷ヲ蹈ム涉姿也ト一般ノ風説ニ御座候、

一 仏国ハリース歐羅巴理府滯留中、同所之學生等相交リ談話之末、歐羅巴ニテ日本ノ風聞如何候哉、少シモ忌ニ不憚申問候様相尋候処、右學生之説ニ、日本ノ外国人ト交ル事ヲ喜ス、歐羅巴ノ威勢怖レ交ヲ為ス故ニ、時々日本國民等事ヲ計リ鎖港ノ説ヲ唱候者多シ、且政府ニテモ屢々条約ニ背キ、虚ヲ以て外国人ニ交ル、故ニ世界相当ノ交リニ戻リ、然トモ未日本ヘ兵ヲ向ケサルハ、元日本ハ今ヨリ式百年前波爾杜瓦爾人九州ニ在リテ乱妨シタル事ヨリ即刻打払、其後鎖國シテ且和蘭・支那人ニ長崎通商許スノミ、諸歐羅巴共条約ヲ結ヒタル事ヲサス、故ニイマタ字内本ノマ、(日浅クカ)ノ形勢ヲシラス、所謂井中ノ蛙ナリ、方今間々日本討伐之儀モアレトモ、各国ノ人民イマタ日本開ケサル故ニ如斯、夫ヲ討テハ不仁也、不義也ト、寛恕シテ一致セス、若歐羅巴ノ内日本政府ノ為ス如キ所置アレハ決シテ猶予セス、忽チ各国申合討伐スヘシ、
近來已ニ英国ノミニス日本討伐之儀ヲ各国ヘ布告シ

タリケレトモ、イマタ諸国共ニ決定ノ返答ナク、多分日本討伐之儀先此儘ニテ押移ヘキ哉之風説ナレトモ、事情ケ様之場合ニ至リタレハ、日本一速ニ富国強兵ノ政ナク、(ヲナシカ)各国ト交ルハ信義ヲ以て条約モ違サル様無之候テハ実ニ危キ時節也、

一 亞国ノシヨシリント云者ニ巴利府ニテ逢候時、同人嘶ニ、英仏兩國ハ頗ニ日本ヲ取ラム事ヲ希望スルノ模様成、夫故今薩州ハ幕府ニ背キ、内事ヲ計リ討幕(タニ脱カ)ノ企ヲ為サン事ヲ英国ニテ能々承知スルトイヘトモ、是ヲ不知体ニテ薩州人等ト英国ニ至リ諸器軍艦ヲ求(カカ)或ハ諸學術伝授杯ヨリ懇切ニ取扱置テ、夫ヲ幕府ニハ何ノ沙汰モ不致、又幕府ニモ懇切ニ相交リ、此節於横浜海陸軍ノ伝習ヲ頼候処、英仏争候テ伝習セン事ヲ望メリ、人ノ物ヲ教ルニ相争フテ伝授セン事ヲ望メリ、人ニ物ヲ授ケルモ是英仏日本ヲナツケ、終ニハ吾モノニセントノ遠謀ナリ、亦今幕府ト薩州トノ間ニ事アラハ、其勝敗ノ模様ニ寄必ス勝利ノ方ヘ応援スヘシト語申候、

一 亞国ノピールト云者ニ出合其咄ニ、元日本人ハ其性

質銳敏ニシテ、物事ニ合点スル事至テ速也、又国民等随分貿易スル事モ好候モ、政府ニテハ国民貿易ハ不好ト外国人へ申問スレトモ、（申問アレトモカ）左ニアラス、凡宇内ノ人民欲心ナキモノアラス、皆金銀ヲ得ント欲スルハ人情也、今貿易ヲナサ、（ナスコトカ）ル事不能、然ニ往々日本人鎖港之説唱へ、或ハ外国人ヲ殺害スルニアリ、此事実考ルニ全ク外国人ヲ悪ニアラス、是ハ幕府ヲ怨（ニカ）ミ有者政府ヨリ莫大之過科ヲ出サセ、終ニハ幕府疲弊シテ日本國ノ諸大名ヲ指揮スル事能ハサルニ至ラシムル術ナルヘシ、若左ナクシテ外国人ヲ嫌フノミニシテ斯屢々外国人ヲ殺ス成ハ、日本人ハ世界中ノ尤痴愚ナル者也、其故ハ幾千万人ノ外国人五人拾人殺害シタルトモ、其人種尽候ヘキ歟、又ハ外国人ハ其勇氣恐怖シテ再ヒ日本行ヌヤウニ可成トノ存念カ、何モ可笑也ト語申候、

一 仏郎西ノシヤルト云者嘯ニ、日本ハ氣候世界ニ勝レ、地面富饒シテ諸産物又莫大也、然共イマタ富国強兵ノ場ニ至ラサルハ全ク其國政ノ宜カラサル故也、其政事何ニヨラス御老中ノ意ヨリ出テ、万民ノ心服スルトセサルトニ闕ラス所置ヲナス、而シテ人ヲ挙用（二脱カ）ル門末ヲ以テシテ人材ヲ挙ス、一度人材ヲ挙ルトイヘトモ、重役ノ意背ク時ハ忽チ貶廢シテ再ヒ用ル事ナク、故ニ下ニ人材多ク、上ニハ愚蒙ナル人多シ、是其國ノ一致セサル所也、亦外国人ニ接スルモ諸談判ノ時理セサル時ハ当座通ノ返答ニ及ヒ、後日再ヒ（七マルカ）其末ヲ押尋ル時ハ前日ノ説ニ齟齬スルニ、大ニ困ニシテ終ニハ國ノ費ト成様之事多シ、且マタ古ヨリ貿易ナサ、ル国ナル故貿易ニ暗ク、商人等只今ノ利ノミ争フテ、吾サヘ利徳アレハ他人ノ後事ノ事ハ思ハサル故ニ、日本國中許多ノ損失ニ成、終ニハ我カ身ノ利徳モイマタ遂ケヌヤフニ成行ニ心付ス、今ノ西洋ニテハ幼年ヨリ商売ノ学校ニ入テ商売ノ學問ヲスルトモ、日本ニテハ町人ノ子弟ハ教ヘナク、只算用手習ヲシテ目先ノ利ヲ得ル事ヲ知ルノミ成ハ、日本ニテハ賤ム事甚シク、（人カ）商大ノ學問ヲモセス事疎故ニ賤シムル理モアルヘケレトモ、士官ノ位ニアリテ其道ヲ失フニ比スレハ町人ノ今日ノ活計ヲ困セス、他ノ助ヲ受サルヲ以見レハ亦士官ニ劣ラサル事アリ、

然共日本ハ往古ヨリノ風習ニシテ士ハ粗食麤服シテ其家貧乏、且其人才力本少シトイヘトモ、元ヲ充分トシテ商売モ賤ムルモノ多シ、今日本ヲシテ富国強兵ニ至ラシメント欲セハ産物ヲ開キ、巧者ニ商売ヲスルニアラサレハ能ハス、且商人共開テ学問ヲサセ、政府ニテモ貿易者ヲ用ヒテ諸産物ヲ輸出シテ金銀ヲ得、其金銀ヲ以テ武器ヲ備フルニアラサレハ強兵タル事ヲ得ヘカラスト語申候、

一 英国ノニエートント云者ノ嘶ニ、方今世界ノ挙様ヲ見ルニ、国ヲ治メ民ヲ愛仁求ル事ノ容易成ハ日本ニカチ候国ハナシ、日本ハ数百年來打統、(太平脱カ)下ニアル者ヨリ高貴ノ位アル人ヲ見テ、賢愚ニ不拘シテ尊敬スルコト甚ク、故ニ高貴ノ人ハ臣下ハ勿論、町人・百姓等ニ些少ノ物ヲ給ハル時ハ親族・朋友打寄テ相祝シ、其品終身ト重宝トナス、是ノ如クナル故ニ今上仁ヲ施シ、公之政事ヲナス時ハ、國中忽チ一致シテ国民等其恩ヲ報セン事ヲ競フ様ニ成事ハ掌ヲ反スルカ如ク成ヘシ、若歐羅巴ニハ日本ノ如ク平人ハ国帝(テカ)ヲ仰キ見ル事ヲ許サス、宰相重役ノ通行ニハ人ヲ払

ヒ退ル事等ヲカサハ、忽チ人氣沸騰シテ其国亡ヘシ、故ニ国帝ヨリ国民ヲ取扱フ事至テ親切也、(昨カ)已時丑年仏郎西國中コロリ病流行ノ節、国帝自身病院ニ至リ懇ニ病者ノ安否ヲ尋問スル事屢也、貧院ニ入是ヲ訪フ等ノ事モ亦屢ナリ、是ヲ以テ其他ノ事情推テ知ルヘシ、英国亦女王ノ自身病院・貧院及老兵院ニ入テ尋問スル事仏国同様ナリ、故仏国ノ民ハ日々々帝ノ恩沢ヲ仰キ、英国ノ民亦女王ノ恩ヲ報セン事忘ル事ナク、是蓋シ日本ト歐羅巴ト往古ヨリ其政事風習ノ異成ニヨリテ也ト語申候、

一 巴理府滯留中薩州人石垣銃之助

本名新納何某、大身ノ由、此度參候者之内重役也

関研蔵

本名五代才介、此者ハ長崎ニテ親敷交リ候者ニテ、外ニ志人名前失念仕候

以上三人者役人ニテ致渡海居候、外ニ拾六人、薩州人都合拾九人、又前(別カ)ニ長州人九人、土州三人英国へ参居、何レモ遊学御座候、併面会ハ右新納以下三人計、此三人ハ英国ヲ本旅館ニシテ仏国等ノ近国一通リ何歟周施ノ様子等ニ、(施カ)兩三度致面会谈話之序ニ、

何故ニ事ヲ公ニシテ渡海ハ不致哉、ケ様私ニ忍テ渡海ナレハ、公辺ヨリ異心ヲ挟ミテノ事歟ト疑念懸間敷ニモアラスト申ケレハ、五代云、今日本ノ事情薄水ヲ蹈カ如クニシテ一日モ因循シガタシ、幕府ニテ速ニ奮発シ、日本国ヲ歐羅巴各国ト交リ同様ニ相成候ハ、豈幕府ノ臣下タル薩州ヨリ許多ノ金銀ヲ費シテ斯ル事ヲ可成哉、然ハ依然タル幕吏カ因循深ク、是ヲ嘆スルノ余リ物入ヲモ不厭、ケ様ニ遠路ヲ隔テ是迄モ罷越タルハ日本国中ノ為ニテ、日本ノ為ハ即チ幕府ノ為不成候哉、唯々日本ノ歐羅巴ニ劣ラサル様ニトノ寸志ニシテ、敢テ幕府へ異心ヲ挟ミテノ事ニテハ毛頭無之候得共、ケ様ノ事ヲ今幕府へ申出シ、決テ聞済可成勢ハ無之故、差当リ日本ノ危急ヲ維持（スルカ）之（スルカ）ノ為ノ渡海也ト申候間、私ヨリ貴公ノ久敷此地へ遊（ヨリ脱カ）ヒ、固波濤ノ弁舌昔日ヨリマタ一步進メリト申笑ヒ候得者、五代モ決シテ左ニアラスト是モ又笑ヒ申候一帰帆之節船中ニハ乗組諸歐羅巴ノ人等ノ噂ニ、英国ヨリ薩州へ心ヲ寄セ、薩ト幕トノ事アランヲ希由ス（希望カ）ル挙様アリ、故ニ龍動ニハ薩州ヲ懇切ニ取扱事幕府

ノ使ヨリモ叮嚀也、今年モ鳥津三郎二男龍動ニ渡海ニ相成候由此事異説也、依テ歐羅巴風聞ニモ、薩州ハ却テ幕府ヨリモ権アリテ、不遠日本国中ハ薩州之物ト可成抔ト申唱ル説モ有ト、此儀決テ行レサル事ト心有ル人ハ承知セリ、英国ノ幕ト薩トノ間ニ事アルヲ希望スルハ幕府ヲ疲弊セシメ、終ニハ日本ノ諸港ヲ英ノ物ニセントノ底意成ヘシ抔ト取々ノ噂ニ御座候、右之外諸人ノ説話・同港本マ、閩カ之風聞、日本ノ事件ニ関ルモノ前文ト大同小異ニシテ、別ニ録上仕候程之事承リ不申候、以上、

使節

外国奉行

慶応二年寅三月 日 柴田日向守（副中）

同支配与頭（樂太郎カ）

水品東太郎

同調役 富田達三

通弁英仏 塩田三郎

小花作之助

俗事英仏蘭 福地源一郎

二日 朝雨後霽、

朝六ツ起、御軍賦役黒田了介殿へ見舞之含ニテ出掛

候処、中途ニテ行逢、駕籠ヨリ暫時被下中途ナカラ

少々用談等モ有之相分レ候、夫ヨリ帰掛川村七郎左

衛門殿へ参候テ暫相嘶帰宅、今朝毛利郷左衛門へ一

刻来候様申遣、出掛玄喚ニテ用向相達候、今日ヨリ

比志島彦太鹿兒島へ出候由ニテ来面会候、寺師氏一

刻被来、今日兄殿赤江詰ニテ当所迄被差入候、先状

相見得候ニ付、嫡子被召列去川迄迎ヒニ被参之由被

申候、八ツ過郷左衛門来、御料本庄一揆之儀相嘶候、

追々蜂起之形候由、近所之者昨日参候テ承候由、始

ハ米一件ニテ候処、蛭子屋へ第一帖有之、蛭子屋ヨ

リ米拾石歟ニ錢千貫文差出、夫ニテ先其事者兎哉角

相治リタル哉ニ候得共、富家之者地面過分買円居、

地面ナシノ百姓共三部一位ハ居候テ、其者共ヨリ何

歟六ヶ敷申之由候、何レニ富家之者共ヨリ地面不差

出候テハ不相治ト申之由候、七ツ過川村氏被来暫被

相咄候、夕方志賀幸輔・拙者馬式疋乗候、夜入四ツ

時分隊候事、

三日 陰、七ツ時暫時小雨、亦夕ヨリ雨、夜入強雨、

朝六ツ起、四ツ時分抜米取締横目兎玉藤次郎殿・川

村七郎左衛門殿被来暫被相嘶候、長田六郎兵衛・市

来仲介・本田甚七・市来仲左衛門・同人嫡子徳之進

出候、右之外高岡役目同列ニ出候、穆佐ヨリ噯阿万

孫八郎・与頭野村伝次・横目前田休左衛門・地頭横

目小田軍兵衛出候、種子島六郎殿一刻被来候、倉岡

ヨリ噯坂元利右衛門・与頭平田正左衛門・横目黒葛

原治左衛門・地頭横目吉井権兵衛出候、先日頼置候

極上半紙五束持来候、誠ニ奇麗也、市来正太郎出候、

綾ヨリ噯大始良五右衛門・与頭大串周兵衛・地頭横

目石尾長左衛門来面会候、七ツ前英式兵隊訓練音イ

タシ候ニ付、拙者ニモ可出トイタシ候処、雨少々降

出候ニ付不出、訓練モ無程取止候、同刻野尻紙屋へ

罷居候仙次郎藤・山芋ナト持来候、夕ヨリ居間へ召

呼焼酎トモ為吞候、四ツ時分隊候事、

四日 快晴、夕曇、

朝六ツ時起、紙屋之千次郎泊居候ニ付呼出シ茶寄合

給候、五ツ半時分紙屋之様帰候、四ツ前寺師氏被来御用向承ル、且藤八殿ヨリ之書状持来、文中ニ先日番兵出府便ヨリ遣候書状品々無相違先月卅日大鐘時分相届候由、其砌藤八殿・藤十郎殿ニモ被来居候由、先月廿九日中（久光）将様御上京御発御供連等未相分候得共、御道具ハ御手鐘壺本・御馬験壺本迄ト承候事ニ御座候、陸軍方ヨリ一番ヨリ四番隊迄、海軍方一隊カト承事ニ御座候、是以悉皆トシタ事ハ聞出シ不申候、四ツ後高岡衆中西平一來候テ、拙者所持ノダイフル一見イタシ度申出候ニ付為見候、尤、面会也、市来正太郎出候、昨日高岡給地高之事ニ付相達置候趣有之候処、羽書ニテ持来候、拙者青毛之三才ニ幸輔乗候ニ付出見候、拙者栗毛少々ハ食不宜候ニ付、馬医招呼為見候処、少々熱氣モ有之候得共格別之事ニモ無之、口洗ヒ候テ先薬用ニモ及ヒ申間敷段承候、此上不塩梅相成模様ニモ候ハ、薬相用可申トノ事候、夫ヨリ幸輔招呼候テ暫相嘶候、暮ヨリ川村氏・寺師氏へ申遣被来候テ、四ツ時分被帰候、無程臥候事、

一千次郎ヨリ今朝承候、国府大根之種ヲ五月朔日ヨリ十日迄之間ニ蒔候得者、七月之盆之用ニハ立派ニ立候由、十日ヲ過候へハ用ニ立兼候由、四月中旬比ヨリ先キニ相成候得ハ早キ方宜候半ト存候、千次郎ハ当分ハ野尻紙屋へ致居住居候得共、全体ハ国府素生之者ニテ、大根作抔之事者能相心得居候ト相見得候也、

五日 快晴、

朝六ツ起、四ツ時分迄書見、夫ヨリ馬湯浴アミドモ見候、夫ヨリ又書見、四ツ半ヨリ市来正太郎出候、市来百太郎列来、拙者ダイフル見度ト之事ニテ為見候、寺師氏被来、嚙大迫弥四郎ニモ御用之儀有之呼出候、町役之者一昨三日節句之為祝儀今日出候間、致面会候、夜入五ツ半臥候事、

六日 快晴、

朝六ツ起、四ツ過川村氏被来暫被相嘶候、九ツ過寺師氏被来、一刻ニテ被帰候、同刻福山地頭堀四郎左

衛門殿ヨリ書状到来、先日來儀之一礼也、同刻過地

頭横目市來正太郎出候、拙者仮屋へハ明日佐土原御

(鳥津忠徹室、齊直女)

隠居随真院様鹿府御宿相成筈候間、今八ツヨリ談合

役川村氏宿へ引移候、川村氏ハ亦外場所へ引移度承

候得共、随分卜屋内モ広ク、不被移候テモ分々二住

居候様有之候間、引移リ不給候様相頼其儘被居候、

正太郎モ何歟ト世話イタシ、彼宿迄付來候テ暫相咄

候、寺師氏ニモ一刻被來候、寺師氏兄之猪俣休右衛

門殿赤江御囲場詰見聞役ニ而被相勤候処、只今ヨリ

三日之考ニテ被來候様申來候間、暇具候様川村氏方

迄申來候段被申候間、何ソ差支不申被差越候様返答

イタシ候、無程又寺師氏被來候テ只今打立之由、陸

地被行候由、夕方ヨリ七郎左衛門殿取会嘶共イタシ、

暮ヨリ焼耐共逢馳走候、五ツ半時分被引取、拙者ニ

モ臥候事、

七日 快晴、

朝六ツ起、同刻過川村氏一刻面会、同刻町田藤八殿

ヨリ書状來、文中左之通、

一 此度又之進殿御越ニ付テ者、調練其外諸所御見物之

筈、加世田則踊等有之ヨシ、

(久光)

一 中将様御上京ニ付、御行列立写差上申候、

御易簡之御事ニ者御座候得共、中々多人數之事ニ而

平常之御供立より格別賑々敷御事ニ御座候、御家老

御供ハ無之候、御側役ハ下人壱人供之由承申候、兵

士其外共此節者一身賦被成下候由ニ御座候、来ル十

六日

御首途、十九日午之刻 御発駕之旨被仰出候、

先者右旁奉申上度奉呈書候、敬白、

三月四日

(久光男)
悦之助様御儀、御修学且方今天下之形勢等御觀察之

御為京撰辺江

(歴力)
御遊曆被遊、御供廻之儀者極々御手輕ニ而於他所者

御同列御同学之姿ニ而、今般

中将様御上京付被遊 御同船候旨被仰出候条、此旨

向々江可致通達候、

二月

(川上久齡)
龍衛

中将様御上京御行列

陸軍兵士一隊 御兵具方足輕棒突

同

陸軍兵士一隊 同

韓一軒督刺劔 韓一駉騮劔 吉野劔

御先走足輕 陸軍兵士半隊

同 一本杉御馬駿御供使

同 同

同 同

島嘉藤王同 寺崎督劔御劔 彌論劔 寺崎督劔御劔 彌論劔

同 同

両掛竹之御挟箱

御馬 御召替 御馬 沓籠 飼料桶

同

同 同 宗孝劔

影取劔 影取劔

御身 御身 御身 刺劔

陸軍兵士一隊

同 以上

四ツ後大河平彦六殿川村氏方へ被參候テ、又拙者方

へモ被來暫被相咄候、郡奉行見習毛利強兵衛殿先日

ヨリ山方為木立被差入見廻ニテ、暫被相嘶候、八ツ

後家來休之丞來、書物教具候様申候ニ付教候、川村

氏過刻ヨリ紙座へ用向有之被差越由ニテ被出候、八

ツ後被歸候、七ツ前毛利郷左衛門出候、暫相嘶歸候、

暮ヨリ七郎左衛門殿被來焼酎共寄合、五ツ半時分臥

候事、

八日 快晴、風少々立、

朝六ツ起、夜前遅方ニ寺師氏赤江ヨリ被歸、外迄被

來、拙者ニモ臥居候ニ付伝言イタシ被歸候由、六ツ

半時分七郎左衛門殿寄合茶共給候、四ツ市來仲介來

候、此節穂北一条御構ヒ被下候御札トシテ、佐土原

側役出府ノ由ニテ、昨日ハ仲介所へ來、夜前遅方迄

相嘶候、穂北ヨリ本庄中村辺迄延岡御預ケニ相成候

事相違無之由、御料手代空白「幸平佐土原へ先日ノ一

礼ニ來候由、右ニ付テ段々咄モ有之候、延岡ニハ一

統余程人氣不相進候由、右支配相成候得者、決テ不

遠何歟変事到来イタシ候半勢ヒニ候由、同刻過寺師氏被来暫被相咄候、同刻ヨリ毛利郷左衛門来、九ツ半嘜所之様拙者ヨリ今日進上物之儀杯引合旁トシテ參候、無程亦来候、今日進上物之儀ニ付嘜長野助兵衛一刻来候、倉岡ヨリ嘜坂元利右衛門・与頭佐竹次郎左衛門・横目黒葛原治左衛門今日

(島津忠徹室、齊宣女)
随真院様当所

御着為御祝儀罷出候ニ付致面会候、

八ツ過馬乘一騎通行候ニ付、御先番共ニテハ有之間敷哉ト存、郷左衛門嘜所迄遣候テ、無程帰来候、市来正太郎ニモ八ツ時分ヨリ出候、綾ヨリ嘜野村龍左衛門・与頭野元六左衛門・横目田上壮左衛門、穆佐ヨリ嘜阿万孫八郎・与頭中原利左衛門・地頭横目浜田八左衛門、倉岡同様今日為御祝義来候、七ツ半時分
随真院様御着被為在候ニ付、御内証ヨリ鯉二尾進上、無程シテ為御祝義參上、御広敷御用人御付人八木源七へ相付手控書ヲ以御祝義申上候処、暫相待候様被申御前へ被罷出候処、被成 御逢筈候得者御取込アヲセラレ候間、宜申置候様

御沙汰之由致承知候、無程金子貳百疋・御菓子一包致拝領候、則宿元書状相認、右御菓子子共杯へ分遣度、御付医師安藤養沢殿御殿へ相頼遣候、暮過ヨリ七郎左衛門殿取逢、少々焼酎共給候テ五ツ半臥候事、

九日 晴、風烈シ、

曉六ツ前起、髮結、直ニ昨日

御品致頂戴候為御礼同刻

御本亭へ參上、八木源七へ相付御礼申上、直ニ帰宅、六ツ過御立、毛利郷左衛門来候、五ツ時ヨリ郷左衛門飯屋へ遣候テ諸取集、相濟帰候、能時分致都合候様申聞候、四ツ過飯屋之様帰候、毛利郷左衛門・市来正太郎ニハ先刻ヨリ飯屋へ參居候テ暫相咄帰候、未川村氏之方へ居候内首尾能御立有之候、為届当所嘜本田次郎五郎・長野助兵衛・大迫弥四郎出候、七ツ時寺師休五郎殿一刻被来候、夜入四ツ過臥候事、

十日 快晴、

朝六ツ過起、四ツ時分佐土原御家老新納巨并郡奉行

市来増太郎被来一刻面会、先月末出府之処、今日帰之由承候、四ツ過当所暖市来善助来暫相咄候、四ツ半市来正太郎来候、

穆佐地頭へ

久留米浪人

田中善藏

右者此御方江致依頼差越居候処、此涯穆佐郷江被召置候、左候而、年分現米三石六斗ツ、関外御蔵米之内より御臨時上りを以所暖方江引渡、右を以諸事相弁候様可申渡候、

二月

右衛門

右之通先日致承知居候間、穆佐暖へ召列罷出候様申渡置候処、暖阿万孫八郎召列罷出候段申出、寺師氏ニモ被来、既拙者ヨリ申渡之節相成、俄ニ病氣之段申出不罷出候ニ付、病氣之事ニ候得者不及是非候間、名代ニテ承知之筋ヲ以寺師氏ヨリ阿万へ被相渡候、少々過言モ為有之哉ニテ不屈之儀ニモ存候得共、差付余り事立候モ如何卜存候得者加堪忍候、寺師氏阿

万ニモ別テ強腹（業腹カ）ニ候、八ツ半東郷藤兵衛殿一刻被来、

昨日着之由候、当所へ此節被差越候訳ハ、藤兵衛殿事、些中風塩梅ニテ、種々養生方等イタサレ候得共、始終効驗無之、然処当所衆中（空白）□□卜申者先年六部ヨリ名灸習居、余程効驗有之由被承候由ニテ、直ニ当人へ灸点相頼度態々被来候由、一七日位ハ罷居ト之咄ニテ候、同刻過宗門改役今日差入、有川恕一郎殿見廻暫被相咄候、七ツ半時分ヨリ寺師氏并見玉藤次郎殿被来、夜入時分被帰候事、

十一日 陰、七ツ時分雨、

朝六ツ起、休之丞書物習ニ出教候、四ツ時川村氏被来暫被相咄候、九ツ時分ヨリ志賀幸輔来、八ツ後ヨリ市来正太郎・西平一其外ニ才共来、ミニヘル遠丁打トシテ（空白）□□へ差越候、拙者ニハタイフル持出張、三百間之見賦之処ニテ、始一筒打候処三間計下り候ニ付、次之一筒見当太ク見出シ打候テモ余リ替り無之下り候間、三百七十間計ニテ打候得者一間三尺計下り候ニ付、四百五十間之賦ニテ打候処中リタル様

二有之、亦同賦ニテ打候得者二枚敷計之的之星近ク
ニ中リ候、夫ヨリ田代半助之四匁八分有之候火繩筒
ニテ打候処、亦三間計下ニ參候、亦少シ上ニテ打候
得者少シハ上ニ參候得共、先同様之所ニ參候、四百
五十間之賦ニテ中リ候得共、拙者ハトロン久敷相成
ノ二候間、塩焔位劣リタル様ニテ下タルト覺候、今
日之射留大抵三百五十間計モ有之候半、七ツ過雨出(降脱)
シ帰候、帰リニ正太郎・幸輔ニハ來候テ暫相咄、夕
方帰様、中リハ拙者計ニテ候、夜五ツ時分ヨリ善兵
衛・岩次郎呼出相咄候テ、四ツ時臥候事、

十二日 快晴、

朝六ツ起、休之丞書物持參ニ付教候、川村氏へ五ツ
半時分一刻參候、今日ハ東郷藤兵衛殿隙ニ候ハ、
緩々相晰度川村氏ヨリ被申呉候処、今日者決テ故障
有之間敷、則宿所へ差越可申段被申候ニ付、直様帰
宅イタシ居候処、無程川村氏來儀有之、只今河上彦
九郎來申候ハ、法華嶽寺へ東郷氏明十三日參詣之筈
候処、法華嶽寺和尚明日ヨリ佐土原へ差越之由ニテ、

和尚留主ニテハ何歟不都合モ可有之候間、今日參詣
之筋被取究、最早被打立居候由、左候テ、一宿ニテ
明日被帰之由候段承候間、左様之儀ニ候ハ、明日ハ
待迎イタシ置ヘク候ニ付、帰掛直ニ咄宅之様來儀相
願度、風呂杯モ為立置可申候間、其通相願置給候様
申置候、外ニ井上助右衛門殿国府ヨリ門人壱人付來
居候由、四ツ過穆佐ヨリ嘸野村伊兵衛・与頭中村敬
介來候、今日ヨリ致出府由ニテ來致面会候得者、当
分溜池有之候場所池ヲ上へ引上築立候得者、相応之
田地出來、行々御軍役助用高二被召置被下候様奉願
度、就テ御物御計ヒ被成下候得者其儀モ不相調候ニ
付、所計ニイタシ度含之由、少々右之雜費モ有之候
ニ付、彼是之事奉願含之由、右御軍役助用高之事候
間、此節惣夫立ニテ衆中ヲ始取掛賦ニ候得共、少々
夫仕モ有之、彼是奉願之由、左候テ、炭山奉願候テ
宮崎辺へ薪モ差下候得ハ、弘方等之儀モ随分能相運
ヒ、御手当モ此涯屹卜御備リ可申卜之事申候ニ付、
夫ハ格別之存付ニ付、屹卜相濟候様相働可申田地等
之事候間、願書ハ郡方へ相付可申上卜之事候、九ツ

時分毛利郷左衛門来候、右穆佐溜池之跡田地相成候
得者、五拾石位ハ出来候半ト之事候、此節穆佐へ被
召置候久留米浪人田中善藏何ト相考候哉、九ツ過先
日ノ御礼ニ參上申候由ニテ玄喚迄来候由、七ツ時分
志賀幸輔来、拙者持馬二疋へ乗候間出候テ見候、又
調練モ練士館ニテ見候、夕引入又幸輔一刻来、夜入
五ツ過ヨリ善兵衛呼出暫相噺候、四ツ過臥候事、

十三日 快晴、少々風アリ、

朝六ツ過起、今朝承候得者、馬飼之喜右衛門暮過
皆々打寄平常之様相噺候折柄、風ト立出候ニ付馬飼
方ニテモ候半歟ト為存由候処、余リ内へ長ク不入候
間、不時宜ニ存、処々為相尋由候得共、今迄不帰来
由承候、平常之勤振人並越別テ宜者ニテ皆々褒者ニ
候処、如何様共不存当候ニ付、当番地頭横目毛利郷
左衛門申遣、則来候ニ付尋方相頼候、五ツ半時分地
頭横目市来正太郎来申候ハ、馬飼喜右衛門不相見候
ニ付テハ不時宜之事御座候、当所ハ狐別テ多キ所ニ
テ毎々人ヲ誑ス事有之由、昨年モ衆中之内家内共寝

入候テ後拔出行衛不相知候ニ付、法者ニ為占候処、
死シテハ不居、五日目歟ニハ出可申ト為申由候、然
処丁度占通五日目ニ為申通帰来候由、就テハ怪敷事
ニハ候得共、先法者へ為占參候方角ニテモ見可申ト
申候間、山伏ト盲目ニ法者居、能中リ候間為占可申
ト申候ニ付、岩次郎同道ニテ遣候、郷左衛門ニモ又
来、噯方へモ噺可申ト存、是枝八右衛門江相噺候処、
夜前八右衛門下人逢候由、何歟白キ者ヲ持、肌足ニ
テ右下人ヲ行抜候由、兼テハ物申事モ有之候得共、
何共不申小急キニ行候由申候、四ツ半正太郎・岩次
郎帰判談承候由、兩人へ為占候処、兩人共死ハイタ
サス、今日八ツヨリ内ニハ何分相知レ可申ト為申由、
少々ハ判談相變候得共大抵同様之由、折角可帰之存
念有之候得共、道迷ヒタルヤウニテ不被帰、誰カ列
有之様ノ形子之由為可申由候、三里ヨリ外ニハ不出
ト之事候由、只今衣服改候得者白キヒトへ無之由、
八右衛門下人為逢節手ニ持タルハ右之ヒトへニテ可
有之ト之事候、四ツ半穆佐ヨリ二見利左衛門来致面
会候、此節庄屋御礼申出候、九ツ半綾ヨリ中原直右

衛門・野元七左衛門・石尾長左衛門・大始良勇一郎・上井万次郎・野元兵吉・石尾愛次郎・今吉孫四郎英兵隊為稽古來候段申出候、七ツ時川村氏被來、只今法華嶽寺ヨリ被歸候由、藤兵衛殿其外ニモ被歸候由候間、御同伴給候様申候、左候テ、国府衆中其外比志島彦太・河上彦九郎・同次郎左衛門ニモ被召列候様申候、毛利并市來正太郎夕方出候而、倉岡の方へ似^(合カ)候人相之者肌足ニテ參候ヲ為見受由候間、只今町之者ヲ遣候テ倉岡之渡シ相糺候由、今暫イタシ候ハ、歸候半ト申候、暮前ヨリ東郷藤兵衛殿・井上助右衛門殿・大河平彦六殿・川村七郎左衛門殿、国府衆中示現流取次林市左衛門、高岡示現流取次比志島彦太・河上彦九郎・河上次郎左衛門被來、夜入九ツ前被歸、無程臥候事、

十四日 雨、

朝六ツ起、夜前遅方市來正太郎來、倉岡へ町之者遣置候者歸候処、倉岡ヲ肌足ニテ通行イタシ候者ハ倉岡之者ニテ為有之由、喜右衛門ニテハ無之候段申候

由今朝承候、四ツ時分川村氏被來暫被相咄、毛利郷左衛門・市來正太郎ニモ同刻ヨリ出候テ終日罷居候、喜右衛門行衛不知儀ニ付テ昨日モ今日モ川山尋方イタシ候、昨日モ与頭兩人・地頭横目茂山へ參、無役衆中多人數召列候テ尋方モイタシ候、甚面働相成候、町役モ兩人終日飯屋へ來居、今日者地頭横目ヨリ差返シ候由、夜入五ツ過臥候事、

日史七十之卷下

名越時敏(花押)

慶応三年丁卯三月

十五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半川村氏被來、町田藤八ヨリ被申遣候由ニテ、志賀七左衛門へ句読師被仰付御書付左之通、

一句読師

一役料米式拾五俵

高岡衆中
志賀七左衛門

右之通被 仰付候条可申渡候、

三月 図書

右者七拾余才相成、若年之砌ヨリ造士館へモ度々罷出、于今不懈致勉学高岡練士館学頭申付置候者ニテ、心掛宜、殊ニ老年ニモ罷成候間、年内御内意申上候趣モ有之、此節被仰付候、

四ツ前郷左衛門・正太郎出候、四ツ時志賀七左衛門罷出候ニ付、川村氏席詰ニテ申付候、同刻過高岡暖大迫弥四郎出候、馬飼喜右衛門先ヨリ行衛不相知事ニ付テ、一昨日ハ三拾人ニテ尋方イタシ、昨日ハ六拾人ニテ相尋、今日ハ八拾人ニテ尋方イタシ候由、今日ハ拙者家来・下人等モ地頭横目列合ニテ尋方ニ差出候、倉岡ヨリ暖日高佐藤太来候、喜右衛門行衛不相知事ニ付テ諸所尋方等イタシ、近他領迄モ致尋方候得共不相知段申出候、尚又手ヲ付置候由、綾ヨリ郡見廻久木山岩右衛門・牛馬役吉野清右衛門今日町へ用向有之罷出候处、馬飼之喜右衛門行衛不相知

段承候付、一寸見廻ニ来候段申出候間、何レモ則致面会候、八ツ過東郷藤兵衛殿・井上助右衛門殿先日之為一礼被来候、同刻過大迫弥四郎来、喜右衛門事、穆佐へ足ハへ少々シレタルヨシ、町之者遣置候处彼者聞出来候由、十三日早天二段々為逢者有之由、人相・衣服等之次第承候处相違無之候、七ツ半時分郷左衛門・正太郎・家来・下人等モ帰来候、夕方穆佐ヨリ郡見廻平坂太右衛門来、喜右衛門足バへノ事申出候、今日町之者承得帰候形行ニ相替儀無之候、逢候下人暫者道列イタシ候、旗預之所へ奉公イタシ候者ニテ、脇ヨリシヨノミニ逢候間帰考之由申候由、此方ニテハ何モ右様之事無之不時機ニ候、内場之方へ拔道相尋候ニ付、夫ハ無之段申候テ、富吉村之方へ參候ハ、可然由為申置由候間、決テ彼方へ何方也トモ罷居候半ト申出候、今日ハ少々腹合不宜、服薬等イタシ候ニ付暮ヨリ臥候事、

十六日 晴

朝六ツ起、四ツ時川村氏被来暫被相咄候、同刻毛利

郷左衛門・市来正太郎出候、又休之丞へ書物教候、同刻過綾ヨリ嘸大野権四郎・与頭彦人喜右衛門事ニ付テ山川ナト探索イタシ候得共、不相見段申出候、二見源兵衛来、是以御番所ニハ不相掛候段申出候、各面会当所嘸大迫弥四郎モ出候、是番兵出府、是枝八右衛門ヨリ申来候由、造士館ヨリ御用有之候付罷出候処、志賀七左衛門へ句読師被仰付、名代ニテ承知、諸所御礼廻等モ八右衛門イタシ、諸事相済候段申出候、七ツ時分寺師休五郎殿只今赤江ヨリ帰之由ニテ被来、夜入四ツ時分被帰候、郷左衛門・正太郎ニモ来候テ、四ツ時寺師同伴ニテ帰候、無程臥候事、

十七日 曇、昼過ヨリ雨、

朝六ツ起、九ツ時分毛利郷左衛門・市来正太郎出候、今日ハ書見、郷左衛門・正太郎ハ八ツ半時分帰候、喜右衛門事、延岡富吉村・浮田村辺へ罷居候半ト之事ニテ、昨日彼方江町足輕兩人遣置候処、浮田村へ為罷居由候得共、透ヲ計拔出、又々行衛不相知空敷為罷帰由ニテ、何モ子細ハ無之者ニテ候得共、拙者

召仕置候者近他領へ拔出居候テ外分ニモ相成事候間、又々是非為捕方可差出之手段ニ候処、今日七ツ時分去川ヨリ二見休右衛門飛脚差立遣候、只今馬飼之喜右衛門去川御番所近辺山中狼藉イタシ居候ヲ御手山材木下シ之者見当リ、御番所へ列出候由ニテ、折角此方へ列越候手筈イタシ候得共、隙取候ニ付此段早々届申出候、迎ヒ共差遣候ハ、追付本道可遣候ニ付、為心得此段申出候段申来候間、則岩次郎・市之丞遣候、郷左衛門ニモ早々申遣、捕方之手筈モ取止ニイタシ候様申聞候、追付二見武右衛門外ニ兩人ニテ召列、岩次郎杯モ中途ニテ為逢由ニテ喜右衛門来候、武右衛門ニハ面会酒共為吞候、外ニ兩人モ外ニテ焼酎共出シ候、寺師氏・毛利・市来正太郎ニモ来、則明早天ヨリ岩次郎宰領ニテ喜右衛門事鹿兒島之様遣候致手筈候、去川迄ハ外ニ町足輕兩人モ付參筈候、武右衛門ニハ昼之内帰、其外ハ夜四ツ時分帰、夫ヨリ七左衛門へノ書状認、九ツ時臥候事、

十八日 朝暫雨、晴、

暁七ツ時起、宿許書状認候、六ツ過岩次郎打立候、
四ツ過毛利郷左衛門出候、終日書見・写本ニテ候、
暮過紙屋之千次郎山芋・生蕨ナト持来、呼出候テ五
ツ半時分マテ相咄臥候事、

十九日 快晴、

朝六ツ起、千次郎呼出相咄候、先日ヨリ綾へ武術為
見分差越筈之処、穂北一条ヨリ佐土原御通行、引続
馬飼喜右衛門一条就テ者岩次郎召付喜右衛門モ差返
シ、只今ハ又人支ト相成、岩次郎帰リヲ相待居候処、
折能千次郎来候付、留守番相頼差越度致相談候得者、
無故障受合仕合之至、則今日ヨリ綾へ及掛合候様寺
師氏へ申遣候、九ツ過当所ヨリ先達テヨリ御城下へ
罷出居候庄屋長井善兵衛宿許書状預リ来呉候、町田
郷十郎江戸ヨリ之書状、同所ヨリ鳥丸六左衛門と
の・篠崎彦十郎殿ヨリ之書状モ来候、千石馬場町田
家娘お筆ヨリモ同断、吉次郎・徳熊清書、且平馬ヨ
リ先度当春宿元遣置候短刀大和太一腰・古今集・遠
鏡・西洋事情等来候、お筆ヨリノ贈品相届候、七ツ

半川村氏被来、只今穆佐ヨリ被帰候由、暫被相嘶候、
夕方毛利郷左衛門・市来正太郎出候、暮ヨリ千次郎
呼出、五ツ半時分迄相嘶候、無程臥候事、

二十日 快晴、

朝六ツ前起、五ツ時ヨリ綾へ武術為見分差越候、高
岡ヨリ境迄道案内兩人、綾モ境マテ兩人同断来居候、
寺師氏ニハ昨日ヨリ被差越居、高岡地頭横目市来正
太郎ニモ付添參候、

一綾ニテ市来正太郎ヨリ承ル、高岡衆中村源右衛門
一之谷ニテ読タルヨシ、
差まねく扇の風にさそはれて
ちりにしはなの跡そ恋しき

八ツ前ヨリ武術見分、示現流・鏡智流・月山流薙刀
ニテ、八ツ半時分相済、今日ハ終日閑暇罷在候間、
此辺何方カ致見物步行等相成候場所ハ無之哉之旨申
候処、是ヨリ拾二三町計之所池有之候得共、夫ヨリ
モ川ニテ網ヲ打セ可申候間、其方却テ見物ニ可相成
ト之事ニテ差越、イダ之魚多ク取レ随分一興相成候、

御手山勘場へ暫上り、暮ニ飯屋之様帰候、丁度勘場

之少シ頭ニ川水ヲハネ釣(撥釣瓶カ)ニテ汲候様イタシ有之、

珍敷候ニ付籠図ニ出ス、



自然生之木之縁ニ矢倉掛有之、夫ヨリ用水ヲ、(以下欠)

寺師氏・市来正太郎其外所役々拾人余參候、飯屋ニ
テモ少々取肴有之、焼酎出シ候得共猪口ヲ取候迄ニ
テ不給、五ツ過臥候事、

二十一日 晴、

朝六ツ起、昨日勘場ニテ写置候ヲ爰ニ写ス、

長六尺余
厚サ式寸位 木槻歟モツ歟ト見得候、

上下共四
方ヨリ切
ヘツリ有
之、如図



右之通三ツ同様造り、材木ヲ始テ川へ流シ入ル日此
三本ヲ流シ、夫ヲ川下ニテ材木ヲ積候船頭壹本ニテ
モ見付候得者、其船之保チ限り無難之者ト申候、
先々ヨリ之山之云習之由、然ル処内壹本此勘場下へ
掛り居候ヲ勘場之者見付候ニ付、是ハ決而勘場へ留
置モノニテ可有之ト爰ニ止り居候由ニテ、今日一見
イタシ始テ承候事ニテ珍敷候故写置、

一今日ハ陣ケ平辺路番所見分、夫ヨリ綾之内三里奥之
山中川中嶽金峯山西光寺薬師參詣相企、西光寺へ九
ツ半着、夫ヨリ中飯給候而大口狩倉并楠木ばへこふ
狩倉狩候得共不獵、拙者マブシニモ鹿出候得共別テ
遠ク、矢放ハイタシ候得共何方射候トモ不相知候、
一今日綾飯屋ヨリ之道筋日和賀野坂ヲ越行、此所左之
方少々杉山アリ、無程陣ケ平辺路番所アリ、番人兩
人、番所之前別テ宜候鉄炮射場アリ、番所ヨリ西光
寺之方へ行カント西北之方へ五六丁ハカリモ攀登レ

ハ、右之方ニ見下シテ竹野村^{なんの}アリ、往古ヨリ竹野^{タケノ}甚

介居住セリ、此竹野ハ由緒アル者ニテ、従 御先代

様此辺狩倉山頂戴シテ年々熊芘丸ツ、献セシト、然

ルニ連々ト熊之取レ愚敷成候得者夫ニ甚込リ、山ハ

皆返シ奉リケレハ高八石ヲ御返シニ下シ給ヒテ于今

所持セリト、何歟拜領物等モ所持セシトナリ、又此

所ニ鷲^{コマン}之巢次郎左衛門・爰野兵左衛門、是モ拜領物

等所持シテ何歟由緒アリト聞、其少シ下之方僅計之

高岡飛地アリト、番人如クニ高岡之者人家一軒アリ、

其所ヨリ式里ケ程野路山路下リ、上リ山ニハ左之方

漸々掛橋ナトニテ通行片岸数十丈之所数多アリ、若

キ人石ヲ落セハ雷鳴ノ轟クカ如クシテ、川ニ落テス

サマシキ音ス、彼ノ所ナト通行過テ原上ニ登レハ見

下シテ西光寺アリ、六七丁モ下リテ着ヌ、此所僧ハ

久シク住マテ、家内持之者寺番セリ、

一 此所薬師如来ハ養老元年ニ建立セリト云伝フ、法華

嶽寺之薬師ハ養老二年ニ建立ニテ、法華嶽寺ヨリ一

年早ク建立也ト聞、已前ニハ当分之所ヨリ半道程山

之奥ヘ薬師堂アリシガ、伊東時代ニ此所ヘ遷セシト

ナリ、

一 竹之野村ハ人家拾四五家部見得候、此所之者共別テ

狩ヲ能イタシ候ト也、田地モ少々アリ、竹之野甚介

ハ辺地之山中江居候得共、綾一番之富家之者ニ候由

此節京都守衛ニモ相勤候テ近比ニ帰リ、已前ヨリ竹

之野村ニハ文字モ書候者無之候処、当分之甚介少々

書習候テ皆々折角相勵シ習ワセ候テ、両三人ハ書候

者モ有之、当分ハ彼之村ヘ御用モ少々之事ハ書通ニ

テ相分リ候様相成候由、

一 今日之狩ニ七十九才野村善之進ト申候衆中犬式疋引

来、犬付イタシ候ト聞、カヅリニ飯料其外入付覆鉄

炮同断ニテ三里之難路ヲ越来、高山之嶮難ヲ二狩倉

犬付イタシ、終日ニハ五里余モ駈廻リ候半、呼出シ

見候得者未齒モ一本モ不落、五十余才之様見得、音

声ハ壮年之人モ不可及、誠之奇老ナレハ爲褒美金百

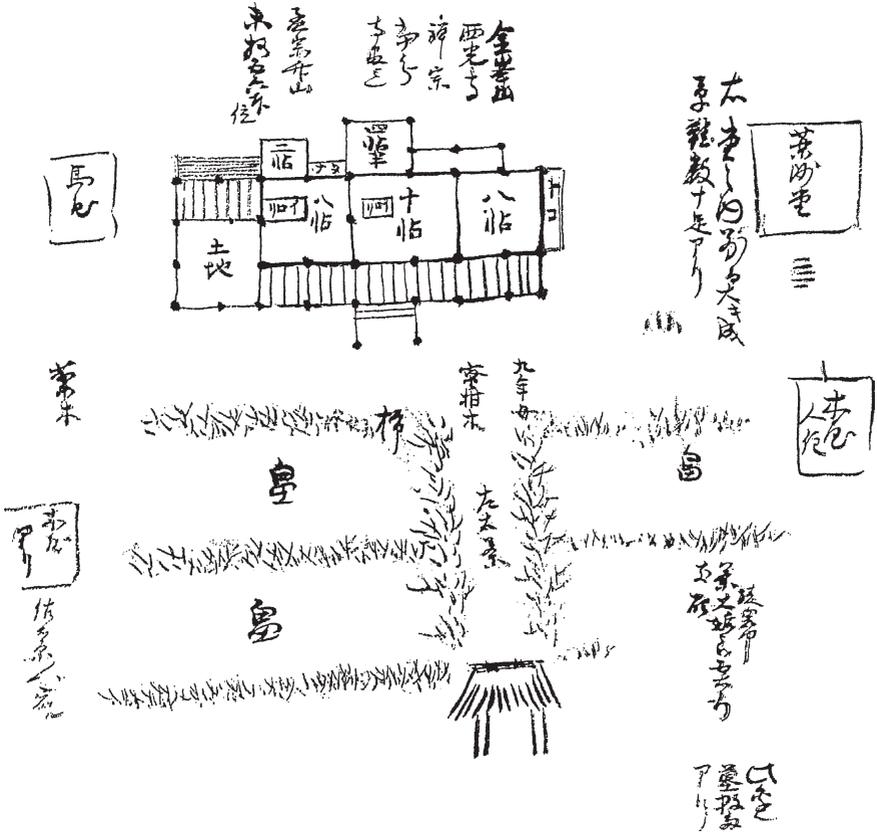
疋遣候、麓松道ト云所居住也、

一 又綾宮之谷居住七十三才池上源兵衛トイヘル老人モ

狩立トシテ来候、是モ漸六十内外ト見得、宍射大上

手之由、是モ金子五十疋ヲ与フ、

一昨日之網打人数へ金子貳百疋、今日狩立人数へ八塩
燗三斤卜金子貳百疋、酒卜毛相与候、



二十二日 巳之刻ヨリ雨、

朝六ツ起、六ツ半時分佐土原之者之由ニテ、拙者宿
り候寺之前ヲ通薬師參詣人有之、男五人女三人列ニ
テ候、足軽体ニ見得候、夜前遅方ニ着ニテ木屋ニ宿
り候由、今日ヨリ是ヨリ法華嶽寺之様參詣イタシ、
直ニ佐土原迄歸之由為申由候、

一六ツ半過ヨリ大口狩倉狩、四ツ半狩相濟、鹿二丸・
猪一丸取レ候、大野権四郎・鷲巢次郎左衛門兩人ニ
テ鹿一丸、伊福庄助鹿一丸、池之上源吾猪一丸都合
三ツ打留相成候、鹿六ツ・猪一ツ出鉄炮十一鳴ル、
今日者一狩倉ニテ雨降出シ早ク取止、木屋之内日モ
長ク候故、八ツ過ヨリ何レモ昼寝、七ツ半時分起、
四ツ時分隊候事、

二十三日 晴、

朝六ツ起、六ツ半ヨリ楠バへ八重狩倉狩、鹿二丸取
レ候、射手長池源右衛門・日高曾右衛門ニテ候、拙
者ニテ川マブシニテ候処不出候、マフシノ前ニ小キ
丸木ニテ一木ノ橋アリケレハ、

渉るへきものとも見えす山賤の

掛し丸木の谷川の橋

夫ヨリ四ツ半時分西光寺へ參、今日薬師參詣、狩イ
タシ候得者、參詣ハ狩濟之上可然之由承テ也、堂之
内別テ大キナル紙草履夥敷有之候、九ツ時分西光寺
打立、帰掛六郎木長尾崎狩候処、又鹿二ツ取レ候、
七十三才池之上源兵衛大男鹿、爰野兵左衛門同断射
候、夫ヨリ直ニ帰、陣ヶ平辺路番所迄嘍・与頭等來
居候、尤、拙者乘馬為牽來居候間、是ヨリ馬トイタ
シ暮前帰、夫ヨリ役目之者共へ祝料等相与、鹿一丸
開キ有之、皆々焼酎共為吞候、拙者ニハ毎之通猪口
取候迄ニテ候、四ツ時分隊候事、

二十四日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半綾打立高岡之様帰候、郷左衛門・
正太郎度々出候、寺師氏同断、嘍大迫弥四郎面会、
其外外迄役目出候、暮ヨリ嘍・与頭・横目召呼穴開
イタシ候、各四ツ時分引取候、寺師氏并地頭横目ニ
ハ居残、四ツ半時分帰、紙屋之千次郎ニモ客相濟呼

出シ候、無程臥候事、

二十五日 曇、

朝六ツ起、五ツ半時分正太郎外迄来、今日ハ深年へ差越之由申出候、休五郎殿一刻被来、郷左衛門・善助出候、八ツ後川村氏一刻被来、昨日ヨリ去川へ被差越居今日歸之由、七ツヨリ幸輔馬乘イタシ見候、夫ヨリ招呼穴開キイタシ候、川村氏へモ申遣被来、各四ツ時分被歸候、無程臥候事、

二十六日 雨、

拙者手ノ小指少々痛メ腫レ候間、徳丸玄籠招呼為見候事、

朝六ツ起、終日書見、七ツ後寺師氏被来、夕被歸候、暮ヨリ善兵衛呼出相咄候、休之丞ニモ一刻出候、五ツ過臥候事、

二十七日 晴、

朝六ツ起、四ツ時川村七郎左衛門殿・紙座見聞役石

神吉左衛門殿被来、無程被歸候、川村氏ニハ被居残候、地頭横目毛利郷左衛門出候、同人練士館へ遣、

今日出席之童子素読可承相達候、横山吉太郎・長田剛之進・海老原助一・野村藤太郎・杉尾源二・溝口源太郎六人、志賀七左衛門召列出候テ銘々素読相濟、無程寺師休五郎殿被来、引統（緩力）ヨリ大始良五右衛門・与頭垂水為右衛門先日差越候為一礼来候、同衆中野村善之進七十九才ニテ犬付イタシ、別テ元氣ニ付テ為褒美金子相与候為一礼来、引統又佐土原御家老新納巨ヨリ書状到来、且半切紙式百枚・孟宗筍・募風ト申候珍草被具候、募風ハ使之者へ承候得ハ浜桐トモ申由、酢醬油ニテ給候者之由、又塩漬ニイタシ置、酢ヲ掛給候テ宜由候、不差置拭候（試力）処別テ感味之者ニ候、則刻返翰相認、使之者へモ夫々会釈等イタシ、弓弦十掛差贈候、

一 佐土原新納巨使之者相咄候由、海ヨリ式里計之処へ潮沸出候所有之由、山之脇ニ候由咄候ト家来鮫島善兵衛申候、

一 七ツ前ヨリ訓練為見分練士館へ出候、暫罷在、夫ヨ

リ門前之馬乘見、尤、拙者青毛馬へモ志賀幸輔乗候、大鐘比岩次郎鹿兒島ヨリ帰来候、是迄鹿兒島の方へ召仕置候三四郎召列来候、暮ヨリ岩次郎・善兵衛・休之丞召呼候、四ツ時分隊候事、

二十八日 晴、

朝六ツ起、四ツ後休五郎殿・川村氏被来候、市来正太郎・毛利郷左衛門一刻ツ、来候、中將様廿五日御発駕ニ付、御祝儀トシテ穆佐衆中噯阿万孫八郎・与頭野村伝次来、高岡噯・与頭等同断、七ツ過ヨリ寺師氏被来、夜入五ツ半被帰候、四ツ時分隊候事、

二十九日 雨風、夕霽、

朝六ツ起、今日ハ穆佐・倉岡へ武術為見分差越管候処、両所ヨリ地頭横目来候、穆佐ヨリ小田軍兵衛、倉岡ヨリ吉井権兵衛ニテ候、五ツ時舟ヨリ穆佐之様差越、同船寺師氏、尤、地頭横目兩人乗組候、川村氏ニモ被差越管候得共、雨降出候ニ付勝手ニイタサレ候様申越候得者、留守番イタスヘク旨返答有之候、

四ツ前穆佐着候得共、稽古所無之故武術ハ見分不相調、二才・児素読承、席書イタサセ候、穆佐明堂館

学頭黒木了輔、

素読宜

中村鎌太郎拾一才

読書共二宜

山口市介十二才

中村嘉之助十二才

児玉岩次郎十二才

桜橋才助八才

早田惣一十才

字宜

園田矢四郎十一才

未 榎木崎平次郎十二才

未 竹之山善次郎十一才

未 二見源熊十三才

未 谷口袈裟次十二才

未 中原弥一郎十四才

上野与之助十三才

読書共二宜 中原岩吉十六才

読書共二宜 阿万孫之丞十五才

右九ツ半相濟、倉岡之様參、舟路川風雨マジリイトハケシカリケレハ、

去川や下す小舟もよとみけり

むかふはけしき雨と風とに

去川や雨と風とのはけしさに

岩浪高く立まさりけり

雨もそひ風のかけたるしからみに

下す小舟の棹もさ、れす

シテヤウく未ノ刻ニ着、是モ武術ハ見分不調、左
之人数素読承候、

諸国御改所

佐竹熊袈裟九才

緒方吉四郎十才

四ツ時分臥候事、

上野叶助十才

平田正次郎十四才

上野寛之助十四才

谷村諸次郎十五才

平田正太郎十七才

緒方七郎十六才

日史七十一之卷

庭ノアタリ見ルニ、過シ比コシ時ハ盛リナル桜ノ

名越時敏（花押）

木々イマハ青葉ノ緑リトナリテ、

花盛り見しハ日数の程なきに

朔日 晴、

あを葉となりて春ぞ暮行

朝六ツ起、

暮カタ高岡ヨリ暖大迫弥四郎来候、明日城ヶ崎・中

鵜戸詣道の記

村・飢肥辺地理見分ニ付テハ往来有之方可然ト認来

候由ニテ、左之通包紙往来手形、

薩州領内高岡越山右源二・旗田久四郎・大沢弓五

郎、外二（七人脱カ）

近国大社為参詣差越候条、往来無異儀御通可被成

候、以上、

慶応三卯三月廿八日

高岡飯田村庄屋
山田新六左衛門

いま高岡の地頭てふ仰をなん蒙りてぬれハ、日向
国ハ御領・私領あちら見めぐらまほしく、お
もひ立しハとくよりの事なりしか、ことし慶応の三
年といふとし弥生の末の九日といふに出立しは地頭
の職務なれば、たけき武士の鎗・つるきなむと手な
らせる業、あるはおさなましり読書の事とも見侍ら
んと、穆佐・倉岡の郷へなん行事あり、いまハあつ
からすさむからす、（はカ）さたさ、わり事もなければ、こ

はよき折ふしになんありつらめとこそ、飴肥領内淡

島大明神・鶴戸六社大権現・榎原大権現へ詣なんと

おもひ立ぬ、けふは暁夜もまたしらくゝに起いて、

彼れなんこれとものしぬれは、やうく辰の刻にな

りて出なんと敷台へ蹈か、れは、庭のあたり高岡の

暖役なる本田甚七・地頭横目市来正太郎立揃ひぬ、

穆佐の地頭横目といへる大田軍兵衛、倉岡よりも同

し職務なる吉井権兵衛なる人々つとひきて付添ぬ、

かれこれともの語りなんとして門さし出れは、門の

両脇へ若きもの、ふの陣笠とりてひかへたり、あな

いして行も勇しくぞ見えたりける、

(以下不記)

八日 晴、

朝六ツ起、四ツ後市来善助来暫相咄候、寺師氏・甚

七・弥四郎来、七ツ過ヨリ馬乗馬場ニテ弓見物、

日入前帰候、帰掛門前ニテ馬乗、

九日 晴、

朝六ツ起、昼休五郎一刻被来候、

十日 曇、

朝六ツ起、四ツ後嘉太郎一刻来面会、七ツ後調練場

へ出候、夜七郎左衛門殿被来、四ツ時分被帰候、

十一日 雨、

朝六ツ起、八ツ後市来仲介来暫相咄候、同刻過寺師

氏被来、暮被帰、夫ヨリ善兵衛・岩次郎招呼相咄、

五ツ半時分隊候事、

十二日 快晴、

朝六ツ起、四ツ前寺師氏被来、同刻市来正太郎来、

帰又来、九ツ時分米良新左衛門来暫相咄候、同刻過

ヨリ市来仲助掛持来致目利候、フクサ物探元之梅之

絵大見事、一蝶之竹ニ雀九疋、安信芦ニヒスイ、岸

良ノ芦ニ鮎五疋、何レモ大見事ニ候、夕方ヨリ市来

正太郎来、暮候迄相咄候、五ツ半時分隊候事、

一今日ヨリ川村氏ニハ穆佐へ被參候テ狩之由候、寺師氏ニモ今日ヨリ家内中打列宮崎御囲場へ被差越候テ、夫ヨリ淡島參詣之由承候、

十三日 晴、

朝空カキ曇リ既ニ雨降出シナンケシキナリシカ、ヤウく晴渡リス、ケフヨリ米良稻荷モフテシテ、城下マテモマキリ、カヘリニハセノ観音ナントへ行カナントオモヒ立ヌ、未ノ刻ヨリ地頭横目市来正太郎ナルヲツレ、ツキシタカフ輩ハ家来野元休之丞・小宿岩次郎、中間三五郎、下人庄次郎ツレテ打立ヌ、高岡ノ内境ケ尾峠ヲ越テクタレハ、左ノ片ヘ二田ノ中へ六地藏アリ、天文十六年トエリツケタリ、伊東氏ノ灰塚ナルヘシ、本庄町ニ行カ、レハ、正太郎語レルニハ、先年一向宗僧御国内場へ入来リ、遁出候ヲ跡ヲ追、此所ノ寺法光寺逃込候ヲ関外四ヶ郷之衆中ニテ彼ノ寺取巻、飯料モ銘々差統ケ昼夜警衛イタシ、右出家出シ候様申募リ嚴敷勢ヒニ候処、終ニハ右之出家土藏ノ内ニテ自殺イタシ、辞世アリト、

おもふてもいふてもとても尽されず

あにきと親とミタの御恩は

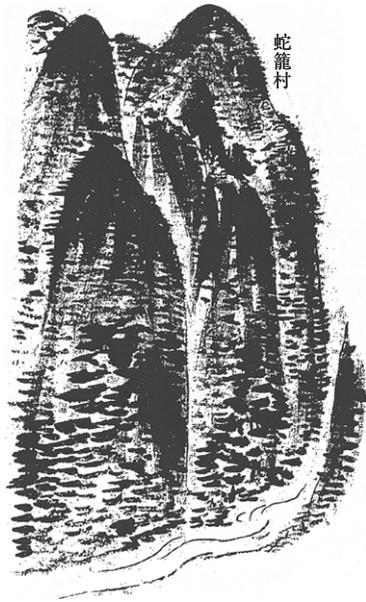
此者ノ墓モ此アタリ通りノ近クニアリテ、右之辞世モエリ付アルノヨシ也、榎木平千代所迄參、今晚一宿也、

十四日 曇、

朝六ツ半打立、佐土原三左衛門川ヲ渉ル一本橋長ク候、夫ヨリ坂ヲ高ク登リ佐土原ト米良トノ境アリ、此所茶屋一軒佐土原之内へアリ、永野地トイフ、是ヨリ坂ヲ登リ行ハ、左之方谷合ニ米良之内佐婦川人家十四五軒アルト也、榎木平千代先祖ハ此所へ居住シテ于今墓ナトモアルト也、米良一門之内第一之高家、一村持切之何ト歎申人、先年身分召離此村へ居住之由、家内三人之由、右之飯料丈本家ヨリ続ケ之由候、此辺坂ヲ登リ一里之由、夫ヨリ山之腰ヲメクル事一里、此辺左リニ高山之八分目計ニ人家諸所ニ七軒見ユ漸此図ナルヘシ、蛇籠ト申所之由、夫ヨリ先キニ又橋トイフ村アリトイフ、

谷越シニ見ル図

此蛇籠村アル所ヲ廻リ拾丁計モ行テ橘村アリ、人家又五六軒モ有之候半、



蛇籠村

夫ヨリ又坂道ヲ高ク登リノクテ亀ヶ茶屋アリ、此所迄粃木ヨリ五里、是ヨリ稻荷社迄二里アルト也、誠之絶頂ナルガ、此茶屋之一丁計先之方ヘフキノ水トテ清水出ル、如何成日照ニモ此水絶ル事ナシトイフ、諺ニイフ、昔シ弘法此坂ハ人々難渋シテ登ル、水吞スシテハ中々難絶也ト、フキ葉ニ水ヲ包テ此所ヘ捨ラレシニ、夫ヨリ此所ヘ水絶ル事ナシトイフ、夫ヨリ又壱里余モ行テ茶屋一軒、引物細工ヲスル物居レ

リ、至テ荒々シ、夫ヨリ下リ右ニ大キ成五葉松一本ヲ見レリ、夫ヨリ坂ヲ下リ一畦計之田面山之峯ニアリ、其腰ヲ拳廻リテ二三町計行ハ稻荷社アリ、社守之家ニ暫休ミ稻荷江參詣、夫ヨリ城下小川ヘ行、道程稻荷ヨリ三里ナリ、日入比着、諸所見物、今宵ハ銀鏡^{シロミ}治右衛門所ヘ一宿、家老用人歟之内ニテモ候半歟ト存ル様有之候、此家ニテ塩焔焚アリ、城下二門之建有之屋敷四五軒アリ、夫モ皆カウシ門ニテ扉ナシ、城内モ屋敷地二三反アルナシノ様見得候、前通りハ高ミニ少々石垣アリテ白屏、本門者放手門、裏門ハ長屋門ニテ候、屋敷掛ハ流レ二十間計モ有之候半歟、其脇ニ寺アリ、參リ見レハ菩提寺ト見得主人之墓アリ、此寺之庭ヨリ城之境屏アリ、中門アリ、明キ居タリ、其所ハ休息所之庭之様有之候、亦西之方本城ヨリ一町余離レテ隱居之人住居之屋敷アリ、是モ屋敷漸一反計モ有之候半、茅屋ニ屋根見得タリ、後之土手ヲヘツリ、射場地計モ平地トナシ、麦ヲ植ラレタリト見得タリ、此屋敷之川越ニ少シ高ミニ鐘樓アリ、観音堂アリ、城下人家各々川面ニ都合三四

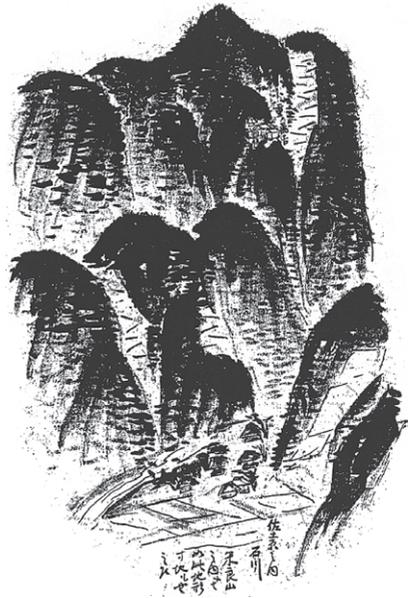
拾軒モ有之候半歟、僅迪モ自然之平地ハ無之、家作
 リ有之所モ皆引地也、主人モ無高之由也、十年已來
 領内ニ可成拾枚敷・式拾枚敷計、又ハ壹畦式畦計
 ツ、田地開方有之、少々ツ、米モ此近年出来候由、
 夫モ皆土手ヲ切崩シ一方ハ築地ニシテ出来候也、別
 テ之大山ニ候得共、平垣之地ハ全クナキ也、家中如
 何シテ餓ニ不及歟ト見ルヤウ也、食物黍・粟・稗之
 類也、難路ニ身ヲ勞スル故長寿之者居ルト見得タリ、
 老母カ、リヲ脇ヘ置昌之草ヲ取ル者居候間、年齢如
 何計歟ト問ヘハ、ヲレヤア、八十六ヂア、八十六
 才トイフ、肌足ニシテ至テ元氣、彼者ヲ見テ又行ハ
 老母居テ、是モ作ヘ行歸之体也、齡ヲ問ヘハ八十七
 才トイフ、又其先キヘ七十余之老女居候、其外ニ若
 キ面々ヘハ男女共不逢、如何様遠方ヘ働キニ出未皆
 不歸者歟、丁度城下ヘ行シ時狩リ戻リ之人々七八人
 見掛候、稻荷社ヨリ城下迄間一本橋ニツヲ通ル、此
 間ニ腰之内ト申候村アリ、人家拾軒計有之候、此所
 ヘ琵琶引座頭兩人休ミ居候、何方之者歟ト問候得者
 筑前者之由ニテ、琵琶モ筑前ニテ稽古イタシ候由申

候、為引候得者琵琶ハ兎哉角ニ有之候得共、歌ハ三
 味之歌ニ似タリ、

十五日 晴、

朝五ツ半時分銀鏡宅打立、亭主分レントスレハ杖ハ
 不入哉ト申候、夫ハト申候得者、此杖進シ可申、八
 角ニ削タルヲ差出、楨之杖ニテ候由、珍敷致受用候、
 則突歸候処至テ輕ク強ク禿レモイタサス、最上之者
 ニ候、夫ヨリ昨日之道筋ヲ行候テ稻荷社守所ヘ暫休
 是ヨリ二町計先キ之小キ田面之腰ヨリ左ヘ坂ヲ長ク
 下リ一里半計モ行、大小屋ト云茶屋一軒アリ、亭主
 引物細工ヲシ色々アリ、至テ荒々シケレト珍敷所之
 品ニ候間、尺余之平鉢一ツト丸キ掛子有之候、独リ
 弁当一組求候、此弁当ハ塗りモイタシ有之、内ハベ
 ンカラ、外ハ黒塗ニテ至極荒々シ、シカシ地漆故ハ
 ゲハイタス間敷候、夫ヨリ尾留茶屋一軒アリ、杉之
 元同断、是ヨリ行左之方ヘ下ヘ村見得候、佐土原之
 内石川ト申所之由候、又遙向之山之八分目家アリ、
 土蔵ニツアリ、米良之内コハエ小八重ト申所之万吉ト申候

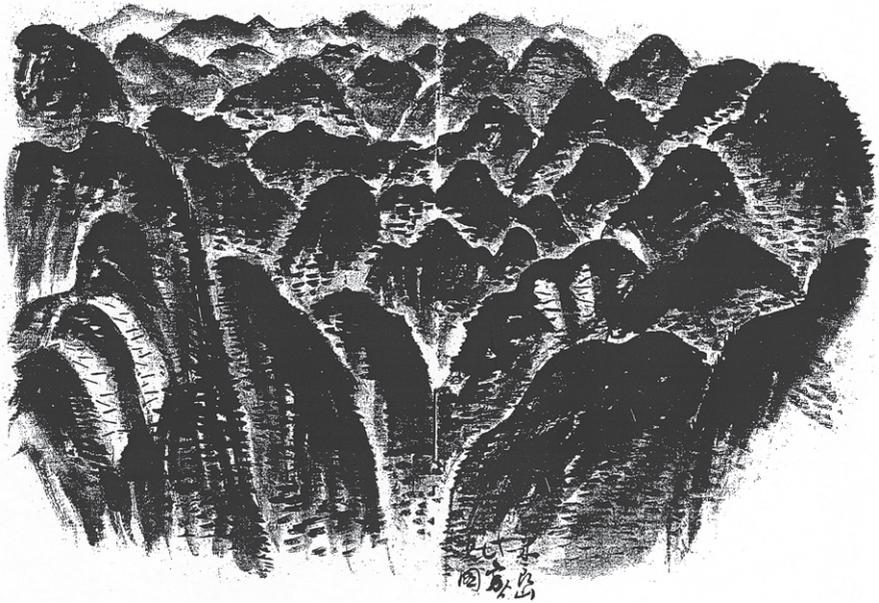
富家之百姓也、大八重ト申所モ有之由、



夫ヨリ行ハ笹之元茶屋五六軒、内壺軒ハ富家之者ト
見得土蔵一軒アリ、夫ヨリ稍遠ク行、又三四軒茶屋
アリ、是モ笹之元内ト也、此辺佐土原、夫ヨリ長谷^{ハセ}
観音まで二里、此所迄モ佐土原之内ナリ、此観音三
体中十一面観音、左右ハ何ニテ候哉、中高サ壺丈八
尺、左右ハ壺丈六尺之由、伊東三位入道義祐建立之
由、堂モ別テ大ク至テ結構ニ調有之候ト見得ツレト、
近比堂ハ風ニ倒レ、本堂迄今ハ茅ブキニテ至テ鹿抹
也、古材木ハ惣テ其辺積ミ有之候、追々朽スタルヘ

シ、三位入道建立ニ付テハ、御家之怨敵ナレハ如何
成所存ニテ建立モ難計、皆人參詣スレト拙者ニハ見
シ儘也、細工ハ至テ宜、無類之上手之割ミシト見得
候、此所迄榎木ヨリ馬牽来居候間、馬ヨリ榎木迄參
候、此所ヨリ榎木五里之由候、今宵者榎木平千代所
ヘ一宿也、平千代所江大式法橋之鯉之滝下リ之絵有
之候、平千代先祖望ニテ候処、暫被考候テ、成程鯉
ハ上ル事計ナレハ滝ノ上ニ計鯉可居ナレトモ、下ニ
多キ事候得者下ル事モアルヘシト被書候由、外ニ竹
ニ虎アリ、至テ宜候、同大式法橋ト銘有之候、

尾留茶屋ヨリ十四五丁頭之方通路筋山之腰ヲメ
クル所ヨリ見ル図



十六日 快晴、

朝六ツ起、榎木ヨリ四ツ前打立、九ツ前帰着、直ニ善助・甚七・郷左衛門・正太郎出候、七ツ時分寺師氏ニモ御困場ヨリ只今被罷帰候由ニテ被来候、留置候、鹿兒島ヨリ書状来候処、（町田久慈）弟内膳京都ヨリ去ル四月十日下着、十一日御家老被仰付候由申来、休五郎殿打寄酒共給候、川村氏へモ申遣、暮ヨリ被来、各四ツ時分被帰候、無程臥候事、

十七日 快晴、

朝六ツ起、四ツ時分兒玉藤次郎・大河平彦六殿一刻同伴ニテ被来候、兩人トモ今日ヨリ打立被帰候由、無程川村氏被来、同人ニモ三日之内帰之賦候処、兒玉・大河平ノ両士今日ヨリ帰ニ付、可致同伴旨被申候ニ付打立、暫帰度被申候、寺師氏・郷左衛門ニモ来候、

十八日 快晴、

朝六ツ起、雉子貫候間、昼飯可進寺師氏父子三人列

ニテ被来候様申遣、八ツヨリ被来、七ツ時分被帰候、

十九日 快晴、

朝六ツ起、内膳吉左右ニ付高岡噯・与頭・横目・地

頭横目為祝義出候、

二十日 晴、間々曇、

朝六ツ起、七ツ時分寺師氏一刻被来、同刻ヨリ練士館へ出候テ調練見候、終日書見共ニテ候、

二十一日 雨、

朝六ツ起、終日写本、七ツ半ヨリ寺師氏被来、暮ヨリ本田甚七御用之儀ニ付外迄相見得候ニ付召呼、各四ツ時分被帰候、無程臥候事、

二十二日 快晴、

朝六ツ起、終日写本、七ツ時分寺師氏被来、穆佐噯兩人御用申遣置候処只今来候由、衆中二見宇右衛門へ役目共ヨリ押々養子申付候処不致承知候ニ付、役

目ヨリ為申聞事相背候逆逼塞申付、四拾計相成候得共未明候段相聞得存外之仕方ニ付、如何成形行之事

二候哉、寺師氏ヲ以相糺候処、一々申分モ不出来、

今更込入候由承候、右一条相濟無程被帰候、暮ヨリ

書見、四ツ時分臥候事、

二十三日 快晴、

朝六ツヨリ五ツ過迄書見、夫ヨリ写本、又午之刻ハカリヨリ書見ニテ机ニ独寄カ、リオリシガ、申ノ刻ハカリニナリテメツラカニ軒端チカク時鳥ノ鳴ケレハ、

さひしさの友とはかりに思ひけり

軒端にちかく鳴ほと、きす

同刻寺師氏被来、御用書付共相濟、同伴ニ而飯屋内鐘楼脇ヨリ後田面之辺ヨリ大金屋敷内通抜、鎮守稻荷堂へ參候、家来鮫島善兵衛・野元休之丞相付候、無程帰、又直練士館へ參、英式調練日入比迄見候、寺師氏ニモ同被參候而飯屋之様同伴、夜入五ツ半時分被帰候、夫ヨリ善兵衛・岩次郎呼出相呼候(増カ)、休之

丞ニモ一刻呼出菓子呉候、四ツ時分队候事、

二十四日 晴、午之刻ヨリ小雨間々降、

朝六ツ起、昨日寺師氏ヨリ賀之歌読呉候様承、左之

通短冊ニ認候、

寺師ぬしの祖母君八十八の年賀を祝ひて

鶴亀に齡あらそふ此君は

八十八とせの末もはるけし

トイタシ、夫ヨリ終日白鷺洲一見候、七ツ半一刻寺

師氏御用候ニ付被參、且町田氏ヨリ之書状、其内へ

郷十郎江戸ヨリ書状モ有之候、

一拙者事、内用之儀有之、御当地江差越度御暇相済来

候、主計殿御名前御付紙、

一廃寺一件日々ニ而福昌寺脇寺石心院・梅香院ニケ寺

江御竿入申候、福昌寺門前者都而諸士屋敷之筋ニ被

仰渡候、近々竿入申由申受人多御座候由、将又京都

御着御左右未無御座、佐土原侯も来ル廿八日御馬追

御供ニ而、右相濟、廿九日御立之積ニ相成申候、

右町田氏ヨリ

和州式上郡芝村

御高壹万石

織田撰津守旧臣

山下助右衛門

一別紙名前之者自筆ニテ認サセ置申候ニ付差上申候、

本岩下候ヨリ御讓渡相成、混ト於京都ハ御長屋二階

へ被召置候由、（小松清兼）帶刀殿抔モ深ク存知、勿論於大坂ハ

中将様へハ御直ニ御申上為相成由御内沙汰御座候、

（久光）矢張御屋敷へ罷在、使者之間へ相住居、三十七歳ト

咄、老僕一人列下り、是ハ作功之モノ、由御座候、

勸農方委敷仁ト福ケ迫・井上抔吹拳ニテ此方へ被召

拘候向、親ハ家老職相勤居タルモノ、ヨシ武鑑ニモ

相見得候、当人咄、小姓抔幼年ハ相勤、郡奉行為勤

居ト、大和廻此度首尾、其折母弟子抔ハ御目見モ内

膳様へ申上候由、（町田久憲）

一昨日ハ御用ニテ御小姓与被仰付、当晚モ出入之者

共計両三人伺公御賑り申上候、当日ハ御家老衆方田

之浦佐土原侯へ御召、（諏訪武憲）伊勢殿・龍衛殿・伊集院左中

殿御帰ニ御列ノリ被遊候、皆様御酔沈ニテ、私ニモ

罷出申候、旅人ハ見得ス、打拔正道成生質ト見掛居申候、夕へハ緩々御咄、ほふそふ院流之鎗術又ハ謙信流之兵学者之由、音ナシキ生質、近々御帰館之上御覽可被遊候、

一 此度後迫勝軍院廢寺相成申候、

一 佐土原君余程御丁寧成御方様ト被聞申候、加世田御參詣一二日越、其外方々御光越被遊、藤八掛リニテ度々御屋敷へ被召入、御手杓ニテ御酒モ頂戴被仰付候由、至テ御壯健成咄度々承申候、

右東郷氏ヨリ

暮ヨリ書ヲ灯前ニ翫へハ蚊出テ食フ事甚シ、独リ中々恨敷シテ申辞、

蚊よく爾をみるに、何の一能もなく、只日の暮る、を待て人を食ふのミなり、旅の庵り物静かに書を開ひてとふつ賢き人を友とせむ事をおもへは、いつとなく群り来りて閑居のさまたけをなす、その恨いくばくぞや、直ちに忿怒のおもひをなしてあたりにある反具(反故カ)を引さきつ、よりことなして油をそき、灯火をこれに移してかれをほろほさ

んとす、それくミよく何れに行へきや、のかるへからす、是悪事則其身に報ふ、残る輩人心の直なるに及ふへからす、全く善心にたちかへれ、

二十五日 雨、

朝六ツ起、四ツ時分米良新左衛門来暫相嘶候、今朝ハ宿元状并町田氏・東郷氏へノ書状相認、其余ハ終日写本ニテ候、夜入五ツ半臥候事、

二十六日

朝六ツ起、今曉方珍敷夢見候間爰ニ左ニシルス、何かたともしれす、にきくしく多く集りて地突きかたむる所の脇き家の内へ独り居て、古今にも類すへきなにかふるき歌集を熟覽せしに、そか中にこれハとおほしき歌あり、よきやうにて数百篇吟すれと趣意貫徹にいたらす、その日もくれいまの地突する日雇ひの人々かへりて後もこの歌はいつれに貫徹いたしたく、幾千篇となく吟唱すれハ此夜の明けたるも覚へす、くりかへし吟すれハき

のふの地突の日雇ひともきてまた地突を初んとす、
その時夢さめ、いと珍敷夢ニありしと、かの歌を
吟すれハ下の句よくつゝ、らす、上の句は覚へたり、
こゝろよりとく咲く花の春そしる

実にも花咲ころをしもなれハ、こゝろよりこそは
やいまハさきつらむそとはおもへり、果してそれ
なんあるものそかし、

あゝのとかなる春もこしよとおもふこゝろの花よ
りこそ咲初つらむを、いかて木々の花のミ盛する
やとも然らむ歟、

朝ヨリ写本、四ツ後市来正太郎一刻来、当所当分熱
大流行ニ付、願相撲願出候ニ付差免候処、近他領へ
掛合、来ル廿八日ニ関外四ヶ郷一方ニ、近他領一方
ニテ有之由、先日ヨリ地取イタシ候間、今日者見間
敷哉之旨申候間、七ツ時ヨリ杉山へ参致一見候、夕
方帰、夫ヨリ書見、五ツ半隊候事、日比ハ蚊多ク
中々ノサス、早夕隊候也、

二十七日 曇、

朝六ツ過起、八ツ前寺師氏被来候、暫被相咄、終日
写本、夜入暫書見、夫ヨリ善兵衛・岩次郎呼出相咄、
五ツ半時分隊候事、

二十八日 朝暫細雨、後快晴、

朝六ツ起、四ツ後寺師氏暫被来、九ツ時市来正太郎
同断、朝ヨリ八ツ時迄写本、白鷺洲ナリ、八ツ後ヨ
リ今日者病除願相撲有之、客屋内ヨリ覗候、高岡町
人駒嵐随分能相撲ニテ候、此内上方ニテモ少々致稽
古、三拾五匁位迄ハ成居候由、已前ハ潮見崎ト為申
由候得共、此節ヨリ駒嵐ニ相成候、同町人放駒・川
嵐当分取上リ相撲ニテ余程能取レ候、噺谷口彦五郎
抱下人ヨソモノ山桜能キ相撲ニテ候、為致稽古者ト
相見得候、与頭今井新右衛門下人体モ能ク、余リ手
ハ無之候得共、力相撲ニテ随分強ク、是ニノシ候者
ハ無之候、高岡町人早渡角力ハ能取候得共余リ取レ
ス、此内ハ随分取レ候由、国分町人当分高原中宿愛
右衛門ト申者先年上方へモ参取候テ、四拾目迄相成
候由、四拾才近ク之者ニテ候得共、飛入ニテ取り能

亂髮俗名喜藏

相撲ニテ候、倉岡ヨリ若緑リ・立浪・花見川・二瀬川ナト能相撲ニテ候、佐土原ヨリ親之肝焼ト申候珍敷角力名之者取候、随分強ク候、暮帰宅、猪俣氏・寺師氏・甚七申遣各来儀、四ツ被帰候、無程臥候事、今朝綾衆中黒葛原六郎へ横目勤相達候、締方野村次兵衛殿・平山佐八郎殿四ツ後一刻被来候、

二十九日 曇、

朝六ツ起、六ツ半寺師氏并嘸本田甚七来暫被相咄候、猪俣氏并長瀬吉之進殿ニモ一刻ツ、被来候、其余ハ七ツ時迄写本、七ツ過ヨリ今日迄者相撲地取イタシ度申出候ニ付差免候テ、拙者ニモ客屋へ参相視候、尤、客屋之儀ハ寺師氏旅亭ニテ、今晚ハ緩々イタシ呉候様被申候間居残、寺師氏実兄猪俣氏ニモ川尻御囲場ヨリ昨日ヨリ為見物被来居、亭主振ニテ候、嘸本田甚七ニモ来候、五ツ半時分帰宅、直ニ臥候事、一今日モ放駒・川嵐ハ余程取レ候、今日ハ栄島・早渡リ・岩熊・山桜ナトモ能取レ候、昨日佐土原之飛入今日ハ白旗ニテ取、コレモ取レ候、

一御家老座堀直太郎殿・有馬新助殿豊後辺へ御用之儀有之、当月朔日高岡町止宿ニテ被罷通候処、今日高鍋ヨリ当所迄着、折柄相撲有之、見物ニ被出候ニ付拙者所ヨリ被見候様申遣候処被来、此節廻勤ニ珍敷事ハ、奥平大膳^(自取)大夫様御国城中ニテ一七日之シバイ有之、其後町ニテ有之候由、佐土原ニテモ十五日シバイ有之、四月初被差越候日ガ初日ニテ為有之由、何方茂寛大之政事ニ向キ候半敷ト存ル事候、

一倉岡馬医之由ニテ名ハ何ト申候哉、赤面大男余程相撲好ト相見得、角力溜リニ居候テ始終元氣強ク角力取ヘ声ヲ掛取様致下知候、然処右馬医之子之由ニテ後取候名ハ是モ能不相分、兼テハ相応取候者之由候得共、早涉リニ二番打ニ負候処、右親吃リ出シ、又土俵へ出栄島ト取候、此角力誠ニ可笑候、双方ヨリ前ツキヲ取候処、双方共ニ金玉出、双方ヨリ外角力取共参候テツマミ込候得者又出候事ニテ、後ハ夫成召置、多人数之見物人可笑人ハ無之候テ、誠ニ可笑事無限、其相撲モ栄島終ニ勝候、馬医之子親ヨリ糺明ラレ、引続キ右様之角力ニテ負、中々心服^(腹力)モ立候

半、其次ノ角力ニハ向フ之角力溜迄栄鳥ヲ突出シ、
自分ニモ倒レ込候、其次勝負ニハ又負、面真赤ク相
成候テ引込、可笑事ニテ有之候、

晦日 間々小雨、

朝六ツ起、先日ヨリ御手山掛見聞役猪俣休右衛門殿・
長瀬吉之進殿相撲為見物被来居、今日ハ被帰候半ト
存候間、立前匁飯致馳走度申遣、五ツ時分ヨリ被来
候、飯前酒モ差出候、所役河上彦九郎・本田甚七召
列被来候、寺師氏モ被来、各八ツ後被帰候、皆相応
酌酩ニ被及候ヘトモ、拙者ニハ兼テ下戸ニ候間不吞
候テ、随分亭主振ハ出来、余リ不酔候間被帰候ト直
ニ又写本ニテ候、夜入鐘突兩人招呼候テ酒共為吞候、
五ツ時帰候間、善兵衛・岩次郎招呼酒共為吞、四ツ
時分隊候事、

鶉
戸
詣
道
の
記



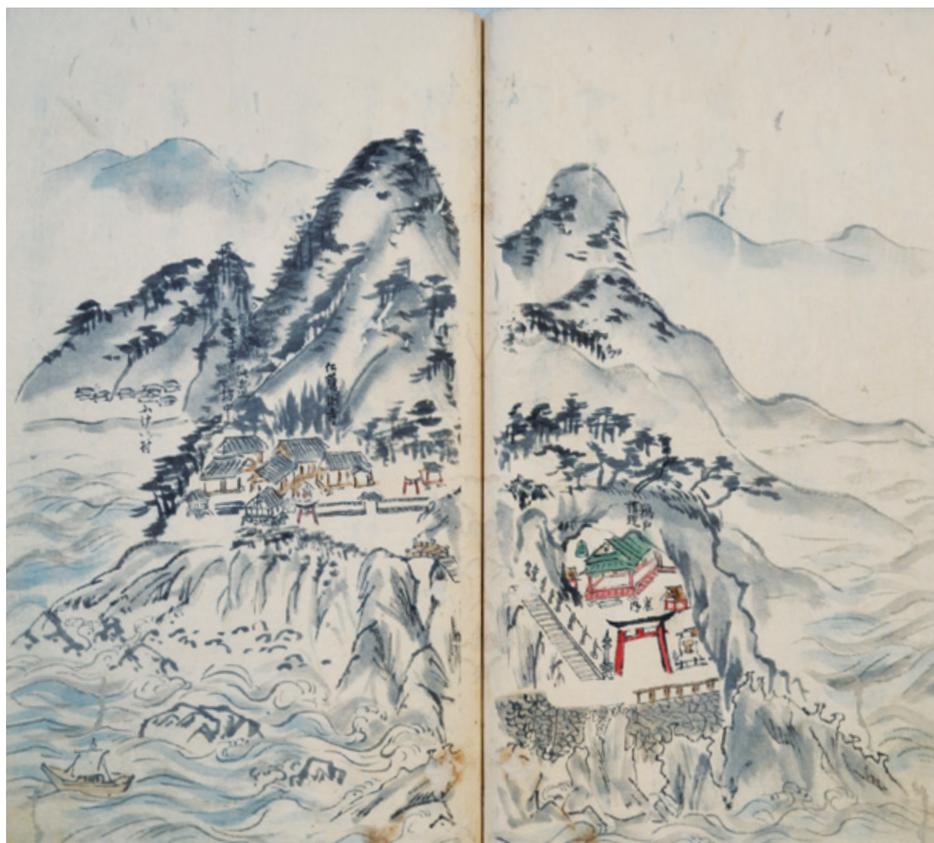
千淡の浜と淡島大明神



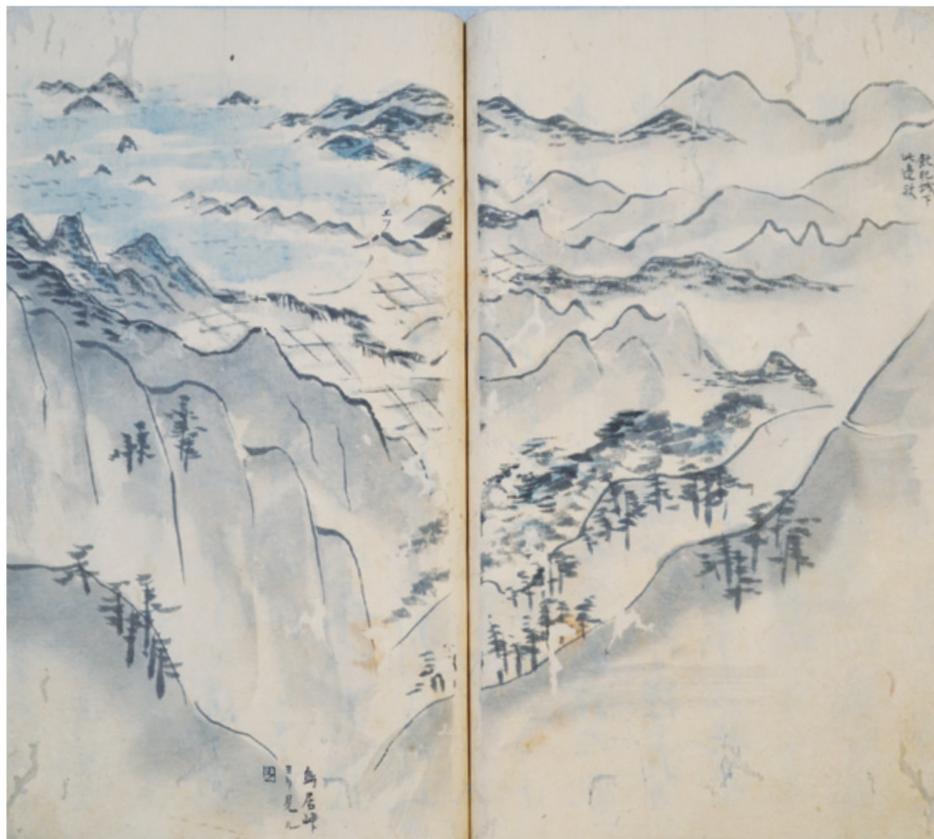
淡島大明神の飴売の乙女子ども



内海町



鵜戸六社大権現



鳥居峠より見る図